

1
2 (虚栄 1 2 3)

3
4
5
6 夏目漱石を読むという虚栄

7
8
9 はじめに

10 ～文豪伝説の終わりのために

11
12 夏目漱石の『ころ』は意味不明だ。

13 長い間、私はこのことを秘密にして生きていた。恥ずかしかつたからね。怖くもあった。
14 今でも怖い。『ころ』を理解できないと公言するのは罪みたいだからだ。「天に代って誅戮
15 を加える夜遊び」(夏目漱石『坊っちゃん』十一)の標的にされそうな気がする。

16 『ころ』に含まれた言葉の多くの意味が、私には理解できない。どうしたら理解できる
17 ようになるのか、見当もつかない。だから、努力のしようもない。

18 私が〈意味〉と言っているのは、普通の意味だ。創作の動機や作品の文学史的価値などの
19 ことではない。たとえば、書き出しの文に含まれた「先生」の意味がわからない。

20 『ころ』の意味が知りたくて、論文などを少しばかり覗いてみたが、無駄だった。『こ
21 ころ』と同様、私には意味不明だったから。辞書さえ役に立たないことがあって、『こ
22 ころ』に含まれた意味不明の語句を調べると、それそのものが引用されていて、しかもその説
23 明では納得できない、なんてことが決してまれではないのだ。

24 古典には全注釈といったものがある。『ころ』にもそんなものが必要だと私は思うのだ
25 が、ほとんどの人は思わないらしい。文豪がその言葉にこめた深遠な哲学などを理解するの
26 は無理だとしても、表面的な意味ぐらい、楽に読み取れるらしい。本当だろうか。

27 普段は漫画かライト・ノベルみたいなものしか読まない普通の中高校生が読書感想文を
28 書かねばならないことになって、有名だからというだけの理由で『ころ』を読み出したら、
29 抵抗なくすらすらと読めて、知らない言葉が出てきても前後関係から簡単に意味が推定で
30 きて、段々面白くなってきて、ちょっとばかりぐっときて、誰かに自分の気分を伝えたくな
31 って、さらさらと感想文を書きあげ、臆せず提出し、それを文学の専門家ではない教員がざ
32 っと読んでさっと採点し、生徒はその点数を見て納得する。

33 なんてことは、お芝居としか思えないのだよ！

34 なんて指摘は野暮なのであって、お芝居だってことぐらい、みんな、百も承知で、意味不
35 明の言葉に出会っても慌てず騒がず、にっこり笑い、〈一応わかります〉と爽やかにご返事
36 ができたとき、日本では一応一人前と認められることになっていて、そんな付度ごつこの演
37 技力が〈コミュ力〉などと呼ばれているのかもしれない。意味不明だからこそ、『ころ』
38 は〈コミュ力養成ギブス〉として重宝されてきたのかもしれない。

39 日本人は、なぜ、『ころ』を読むのか。いや、読めたふりをするのか。虚栄のためだろ
40 う。倫理的な人間を装うためだろう。だが、意味不明の倫理など、ありえない。

41 何時からか、私の周囲には意味ありげなだけで確かな意味のない文言が汚れた大気の一
42 ように広がっていた。このグレー・ゾーンを作り出す汚染源の一つとして、私は『ころ』を
43 再発見したのだ。二十数年前のことだ。それまでは、読み返すどころか、本屋で背表紙を目
44 にするのさえ不愉快だった。図書館ではナ行の棚を避けがちだった。

45 〈『ころ』には確かな意味がある〉とされる社会は変だ。〈『ころ』には確かな意味が
46 あるとされる社会は変だ〉と公言できない私は変だ。〈『ころ』はわかりやすい〉といった
47 類の伝説を処理しないことには、何を聞いても読んでも誤解してしまいそうだ。何を言っ
48 ても書いても誤解されそうだ。そんな気がして『ころ』批判を始めた。ところが、うまくい

1 かない。この先、何年やっても、うまくいきそうにない。

2

3

4

～略記その他について

5

作品名は『 』(二重鉤)で括る。「」(鉤)の中は引用。() (括弧)の中には出典などを記す。〈 〉(山括弧)や《 》(二重山括弧)は読みやすさを考えて用いる。

7

『ころ』のテキストには新潮文庫版を用いる。文庫は入手しやすいからだ。新潮文庫版を選んだのは、表記が最も原文に近いと思われるからだ。

8

〈原文〉とは『ころ』(岩波書店)の初版本のことだ。これは新聞発表時のものと違う。また、『漱石全集』(岩波書店)のものとも違う。

10

慶応三年に生まれて大正五年に死んだ漱石こと夏目金之助を〈N〉と記す。そして、『ころ』の作者と区別する。

11

〈作者〉は作品に付随する虚構の人格だ。たとえば、『ころ』の作者と『坊っちゃん』の作者は別人ということだ。同様に、これらの読者も作品に付随する虚構の人格であり、実在の誰彼とは質が違う。

13

『ころ』は、「上 先生と私」「中 両親と私」「下 先生と遺書」の三部に分かれている。引用箇所を示す場合、これらを「上」「中」「下」と略し、回数を添える。たとえば、冒頭の文の場合、〈上一〉と記す。

16

「上」と「中」で「先生」と呼ばれている人物を〈S〉と記す。〈sensei〉の頭文字だ。Sを「先生」と呼ぶ「私」を〈P〉と書く。〈pupil〉の頭文字であると同時に〈pet〉の頭文字でもある。

22

「上」と「中」の語り手はPだ。「上」と「中」を合わせて〈P文書〉と書く。〈P文書〉の聞き手は不明。〈聞き手〉ではなく〈読み手〉とするのが常識的だが、〈語り手〉と対応させるために〈聞き手〉と記す。この聞き手を〈Q〉と記す。空想上のQは空想上の語りの場である「此所」(上一)にいる。P文書はPとQの問答であり、この問答の聴衆を〈G〉と記す。〈gallery〉の頭文字だ。Gの原型はPの兄だろう。

27

「下」を「遺書」と略記する。「下」の語り手はSで、聞き手はPだ。言うまでもなく、このPは作中に実在するPを素材にして語り手Sが想像している人物だ。

29

「遺書」の語り手Sは、P以外に「遺書」を読むことになる人物を想像している。その人物を〈R〉と記す。「外の人」(下五十六)がRだ。

31

奇妙なことだが、RとGを区別することはできない。不合理なことだが、彼らと『ころ』発表当時に実在した人々を区別することはできない。彼らは、高学歴の男たちと思われる。

33

「魔物」(下三十七)や「黒い影」(下五十五)などを一括して〈D〉と記す。〈demon〉の頭文字だ。KはDだったのかもしれない。

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

第一部 『こころ』の普通のと違う「意味」

第一章 イタ過ぎる「傷ましい先生」

王さまは、手紙を読みなおしてみました。
「え、え——っ！」
よく読むと、こう書いてあるのです。

『王さま。あなたは、ブルー・トレインにのらなくてはなりません。たすからないかもしれ
ません。みょうなことがおこり、おもい病気にかかるでしょう……。』

三ど、読みなおしました。
「どこか、おかしいな。」

ウイパッチおばさんの、うらなったとおりになったのです。けれども王さまは、はじめ
のとき、かってに読みまちがえてしまったのです。

王さま、あなたは、ブルー・トレインにのらなくてはなりません。(もしのらないと)
たすからないかも……。と読んだのです。ウイパッチのうらないは(もしのったら)と
いうことだったのです。

王さまは、ブルー・トレインにのりたばかりに、ウイパッチの力をかりようとした。
つまり、あやしいやつは、王さまだったのです。犯人といえば、いえるかもしれません。
そのとき、おしろのラッパがなりました。

テレレッテ トロロット
ブルルップ タッタタター

(寺村輝夫『王さまうらない大あたり』)

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1110 正直な感想から始めよう
4 1111 〈意味〉の意味

5
6 日本人なら誰でも名前ぐらいは知っているはずの夏目漱石を〈N〉と書く。
7 〈Nは文豪だ〉といった類の言説を十把一絡げにして〈文豪伝説〉と書く。
8 文豪伝説の主人公であるNの代表作とされる『こころ』(*)は、私には意味不明だ。

9
10 僕もね、正直言ひまして、『こころ』ってよく理解できないんです。「文学の奥深さ」に
11 行きつく前に、「なんなんだよ、この話は？」みたいな方に行ってしまいます。あの登場
12 人物がみんな何を考えているのか、さっぱりわけがわからなくて、感動できませんでした。
13 (村上春樹『村上さんのところ』)

14
15 『こころ』が「へんな作品」(あんの秀子『マンガでわかる 日本文学』)であることは、す
16 でに専門家の間では常識になっているようだ。『夏目漱石「こころ」を読みなおす』(水川隆
17 夫)を読むと、そのことがよくわかる。この本は、専門家たちが問題にしてきた『こころ』
18 の不可解な話などを列挙して説明を加えただけのものだ。しかも、問題のすべてが取り上げ
19 られているわけではない。また、『こころ』の本文の細部の意味までは読みなおされてはい
20 ない。

21 私がわからなくて困っているのは、本文の普通の意味だ。注釈や大意や要旨などといった
22 ものを含む意味だ。それは一つに絞られる。多義的な場合でも、〈表の意味は甲だが、裏の
23 意味は乙だ〉というふうに、セットとして一個だ。そして、それは容易に共有される。
24 ちなみに、近頃の〈生きてる意味がわからない〉なんて言葉の意味がわからない。

25
26 ① ことばのわけ。例漢字(かんじ)は意味をあらわしている文字です。
27 ② ものごとを行うだけのねうち。かち。例宿題(しゅくだい)のときだけ勉強しても意味
28 がない。
29 ③ あることをするもとなった考え・わけ。例きみがふゆかいな顔をしている意味がわ
30 からない。
31 (『学研 小学国語辞典』「意味」)

32
33 私の用いる〈意味〉の意味は①だ。ただし、本文に出てくる「意味」が〈価値・理由・含
34 蓄・内容・意図・目的・原因・意義〉などと置き換えてよさそうなら、突っこまない。

35
36 気取り過ぎたと云っても、虚栄心^{たか}が祟ったと云っても同じでしょうが、私のいう気取る
37 とか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。
38 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十一)

39
40 これは、私が大嫌いな『こころ』の中で一番嫌いな文だ。
41 「同じでしょう」か? 「少し」か、〈多く〉か、どうやって知れるのだろう。この「意
42 味」は不明のまま、『こころ』は終わる。「虚栄」と並べるのなら、「気取る」は〈気取り〉
43 としてほしかった。

44
45 * 『こころ』のテキストは新潮文庫版を用いる。

46
47
48

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 1 0 0 文豪伝説
3 1 1 1 0 正直な感想から始めよう
4 1 1 1 2 SとKと静とPを紹介しよう

5
6
7

『こころ』に関する事典などの説明も、しばしば、意味不明だ。

8
9
10

主人公の孤独な倫理観を描いて広く読み継がれた漱石の代表的小説。

(『日本歴史大事典』「こころ」佐藤泉)

11
12
13
14
15
16
17
18
19

「主人公」とは、冒頭で「先生」と呼ばれている男のことだ。以下、彼を〈S〉と書く。これは〈sensei〉の「頭文字」(上一)だ。Sは教師ではない。医者や弁護士などでもない。無為徒食の中年男だ。「孤独な倫理観」は意味不明。「倫理観」は「倫理上^の考」(下二)のことか。だったら、その中身は空っぽ。「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた我々」(上十四)がどうのこうのといった意味不明の「覚悟」(上十四)とやらが、それか。「覚悟」も意味不明。「孤独な人間」(下二)を自認するSに、普通の意味での倫理が必要だろうか。「倫理観を描いて」は意味不明。〈「描いて」～「読み継がれ」〉では文が捻じれている。つまり、主語が違っている。「読み継がれた」を形容するのなら、「広く」は〈長く〉などとすべきだ。「読み継がれた」だと、過去のことみたいだ。つまり、今は読まれていないみたいだ。

20
21

『こころ』について語られている言葉も、このように、しばしば、意味不明だ。

22
23
24
25

親友を裏切ったため苦しみ自殺する主人公〈先生〉の孤独な内面を、前半は〈私〉という学生の眼をとおして間接的に、後半は〈先生〉の遺書という書簡体をとって描いている。

(『百科事典マイペディア』「こころ」)

26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41

「親友」は「K」(下十九)と呼ばれている。「親友を裏切ったため」は不可解。裏切れないのが親友だろう。友だちというゲームはとても難しいらしい。Sの言動のどれがKの何を「裏切った」ことになるのだろう。「裏切ったために苦しみ」は理解に苦しむ。苦しむのは裏切られた側だろう。Sは、Kに対する自分の言動を恥じて苦しんでいる。「孤独な内面」は意味不明。外面について、Sは「殆んど世間と交渉のない孤独な人間」(下二)と自己紹介している。ただし、妻帯者だ。妻の名は「静」(上九)という。ちなみに、二人の間に子はない。「前半」は、「上 先生と私」と「中 両親と私」だ。この「〈私〉」を〈P〉と書く。〈pupil〉の頭文字。Pが語り手である前半を〈P文書〉と書く。〈「間接的に」～「描いて」〉は意味不明。「学生の眼をとおして」は間違い。語り手Pは、「学生」ではない。すでに卒業している。ただし、語り手Pによって語られるPが「大学生」(上十一)だったことはある。「後半」は「下 先生と遺書」だ。Sは「遺書」をPに郵送した。「遺書という書簡体」や「書簡体をとって」は意味不明。なお、『こころ』の内部の世界に存在する「遺書」と「下」は、同じではない。P文書における「遺書」からの引用と思われる語句で「遺書」に見えないものがある。また、「下」は「……」で始まっているが、この記号をSが書いたとは思えない。「下」の終わり方もおかしい。Pに対する別れの挨拶がないのだ。形式的には、「下」はP文書に含まれている。だから、PがSの「遺書」を編集した可能性は否定できない。

42
43
44
45
46
47
48

『こころ』の最大の欠陥は、Kの「眼をとおして」Sの姿が描かれていないことだ。

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
- 2 1 1 0 0 文豪伝説
- 3 1 1 1 0 正直な感想から始めよう
- 4 1 1 1 3 Sはスネ夫のS

5
6 Sは「真面目な私」(下四十七)と自己紹介する。また、Kについても「真面目」(下三十
7 七)と紹介している。だが、私には、彼らが真面目とは思えない。いうなれば、糞真面目だ
8 ろう。真面目な人は信頼できる。だが、糞真面目な人は違う。危ない。自分勝手だ。SもK
9 も勝手に自殺するのだから、普通の意味で真面目であるはずがない。

10 「遺書」の物語は、(友人関係にあった青年二人が一人の少女に恋をした)みたいに誤読
11 されてきた。この設定は『浮雲』(二葉亭四迷)から借りたものだろう。『浮雲』のヒロイン
12 は正体不明だったが、静も正体不明。才色兼備という設定のようだが、その証拠は皆無。
13 主要なキャラクター三人の性格設定から全然なっていない。きちんと性格設定をしてしま
14 ったら、「花やかなロマンス」(上十二)も「恐ろしい悲劇」(上十二)も成り立たず、吉本新
15 喜劇みたいなものになっていたろう。松竹新喜劇ではない。

16 ここで、話を単純にするため、『ドラえもん』(藤子・F・不二夫)を利用する。ついでに、
17 『坊っちゃん』(N)と『虞美人草』(N)の登場人物も並べてみる。

18				
19	『ドラえもん』	『坊っちゃん』	『虞美人草』	『ころ』
20	のび太	「うらなり」	小野	Sが演じたS
21	出来杉	「赤シャツ」	甲野が演じた甲野	Kが演じたK
22	静香	「マドンナ」	藤尾	静
23	スネ夫	「五分刈り」	甲野	S
24	ジャイアン	「山嵐」	宗近	K
25	ドラえもん	清	藤尾の母で甲野の義母	静の母

26
27 「五分刈り」というのは、『坊っちゃん』の語り手で主人公のあだ名だ。これは『坊っ
28 ちゃん』の後日談として創作された小説『うらなり』(小林信彦)に由来する。
29 『ドラえもん』のスピノフでスネ夫を主人公にした物語があるとしよう。『ころ』の場
30 合、(Kの物語)が原典で、そのスピノフが「遺書」の物語に相当する。(S)は、偶然、
31 (スネ夫)の(S)でもある。音は(似非)に通じる。

32 Sの「自叙伝」(下五十六)なるものは、ジャイ子よりはましな静香を相手にしたスネ夫の
33 ナンチャッテ・ロマンスみたいなものだったろう。俗にいう妄想恋愛だ。病的な恋愛妄想で
34 はなくて、童貞が勝手気ままに恋愛を空想して苦しんで遊んでいたらしい。

35 Sは、少女静にとって、どうでもいい青年だった可能性がある。静香にとってスネ夫がど
36 うでもいい男子なのと同じことだ。一方、SやKにとっても、静の性格など、二の次だった
37 ようで、容貌すら問題でなく、身近にいた少女というだけで萌えたらしい。安直。

38 先の表で注目してもらいたいのは、静と並んで、「マドンナ」と藤尾がいることだ。「マド
39 ンナ」は箱入り娘で正体不明。「五分刈り」は彼女に一目惚れしたみたいだが、その話は立
40 ち消えになっている。一方、藤尾は男たちを手玉に取る性悪女として描かれている。静のキ
41 ャラは、清純派と肉食系のどちらのようにも思える。私には区別できない。おかしいことに、
42 Sにも区別できないようだ。Nにも区別できなかったのかもしれない。

- 43
- 44
- 45
- 46
- 47
- 48

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 1 0 0 文豪伝説
3 1 1 2 0 読むと貧弱になる『ころ』
4 1 1 2 1 超短編の羅列

5
6 『ころ』なんてものは、読まないでいいのなら、読まないに越したことはない。

7
8 谷崎 『ころ』なんぞというやつも、このごろだだいぶ言われるんだけど、あれ、半
9 分くらいでいいんで、実に長つたらしく延^{のぼ}しているように思うんだけどね。ぼくは読んで
10 て実に退屈で、たまらなくなつちやう。

11 武田 それは『明暗』に比べたら、『ころ』は実に落ちますよ、ね。ほんとの習作だも
12 のね。判^{わか}りやすいだけでね。

13 谷崎 だけど、このごろ、だいぶ……。

14 武田 いや、判^{わか}りやすいからですよ。

15 谷崎 それだけの理由か。なるほどね。

16 武田 『ころ』は短編ですよ。ああいうものが日本の精神の根本である、という考え方
17 が、非常に日本の文化を貧弱にさせてるんだ。

18 (『文藝臨時増刊 谷崎潤一郎読本』昭和三十一年*)

19
20 二人はえらくいらっている。なぜだろう。卑怯なヒッキーであるSを美化するような
21 『ころ』が、彼らには青臭いものに思われたからかもしれない。しかし、本当の理由は、
22 別にありそう。現在、武田泰淳はもののみごとくに忘れられてしまった。谷崎潤一郎でさえ、
23 とときどき思い出される程度だ。こんな近未来の「日本の文化」の有様を予感して、いらつ
24 ていたのではなからうか。彼らは、そう遠くない将来、文豪伝説が支配的になって自分たち
25 が過去の人になることを予感していたのかもしれない。

26 「このごろ」に注意。『ころ』は名作」という伝説は、戦後生まれのようだ。「半分ぐ
27 らいでいいんで」というのなら、一割ぐらいてもいいんで、逆に、三倍くらい書いても、S
28 の自殺の動機は明らかになるまい。Sに本気で死ぬつもりはなかったよだからだ。〈死に
29 たい〉と書き込みをするナルシシストのJKと一緒に、他人の同情を買おうとしていた。映
30 画の『ころ』(市川崑監督)にはSの葬式^{ためし}の場面があるが、本文にはない。「自分で死ぬ死
31 ぬって云う人に死んだ試^{ためし}はないんだから」(中二)という言葉なら、ちゃんとある。

32 『ころ』を『明暗』と比べる武田の読解力はかなり怪しい。「ほんとの習作」は意味不
33 明。「習作」のようではある。Nの作品で「判^{わか}りやすい」と思えるものなんか、一つもない。

34 「それだけの理由か」は残念。谷崎の考える「理由」が知りたかったよ。

35 「短編」は無茶。だが、「短編」の羅列のようではある。一文で一篇の超短編の羅列みた
36 いだ。いや、一文さえ、しばしば、意味不明だ。

37 「判^{わか}りやすい」といった印象を得て平気な武田の読書法が、「非常に日本の文化を貧弱に
38 させてるんだ」と、私は思う。『ころ』が「非常に日本の文化を貧弱にさせてるんだ」と
39 しても、その理由は文芸的価値などとは関係がなく、Nの奇妙な言葉遣いにあるのだ。

40 谷崎は〈なぜ、自分は『ころ』なんぞが気になるのか〉という問題を婉曲に提示してい
41 るようだ。ところが、武田はこの問題を回避しようとしてあせりまくる。こんな武田的態度
42 が「非常に日本の文化を貧弱にさせてるんだ」と、私は思うのだよ。

43

44 *小谷野敦『「ころ」は本当に名作か 正直者の名作案内』から再引用。

45

46

47

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 1 0 0 文豪伝説
3 1 1 2 0 読むと貧弱になる『ころ』
4 1 1 2 2 アララな人

5
6 『ころ』の意味がわかったように思う人でも、Sを尊敬するとは限らない。

7
8 『ころ』を読むのは、約二十年ぶりになる。
9 なつかしくページを繰っているうちに、アララという感じになってきて驚いた。見上げる
10 ような畏敬の念を含めてみていた先生が、何だろうこの人、という雰囲気なのである。
11 かつて、人間を愛しうる人、愛さずにいられない人という「私」の先生評にうなずき、そ
12 の厭世的な言動や世間の人や自分自身の命に対する愛想づかしすら先生の深い倫理感^{マフ}か
13 ら出たものと理解して、自らの心をこんなにも真剣に覗き込んで生きることに一種の
14 尊敬を覚えていたはずなのに、この度は、どうも塩梅^{あんばい}が違う。
15 いちいち、つかかりたくなるのである。そういう気持ちを、まあまあとなだめつつ読み
16 進んだというのが、正直なところなのだ。

17 (吉永みち子『鑑賞—ころを捕らえたのは誰?!』*)

18
19 「約二十年」前の吉永は文学少女で、「傷ましい先生」(上四)に同情できる自分が可愛く
20 思えたのだろう。『ころ』は、彼女にとってジュブナイル小説だったわけだ。

21 「アララという感じ」が大方の印象であるはずだ。遺産を食いつぶしながら「ごろごろば
22 かりして」(上三十三)いる中年男に対して、普通の人は嫌悪感や不潔感や警戒心などを抱
23 くはずだ。ただし、本当はもっと変なのだ。Sの日常生活がほとんど描かれていない。『オ
24 ブローモフ』(ゴンチャロフ)の主人公みたいに食って寝てばかりいるのではなさそう
25 だと、Sは「殆んど煩^{わづら}った例^{ためし}がない」(下三十四)ということだが、怪しい。Sの言
26 うことや書くことのすべてが、私には「頗る不得要領^{すこぶ}のもの」(上七)だからだ。変人とす
27 ら思えない。生きている感じがしないのだ。だから、死にそうにも思えない。Nの弟子で自
28 殺した芥川龍之介は、「誰もまだ自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない」(『或
29 旧友へ送る手記』)と書いている。彼はNに勝ちたくて自殺したのかもしれない。

30 「人間を愛しうる人」以下は、本文からの不正確な引用。本文が意味不明だから、記憶も
31 不確かになる。なお、Sのことを「人間を愛し得る人」(上六)などと評したのはPだ。

32 「いちいち、つかかりたくなる」のが普通の人だろう。

33 「そういう気持ちを、まあまあとなだめつつ」というのは、吉永が通人気取りで、もう一
34 人の自分に向かって和風のコミュ力を発揮するように強いているところだ。自分で自分を
35 なだめるのは勝手だが、「アララという感じ」になった他人に対しても「まあまあ」とやれ
36 ば、柔らかい暴力を振るっていることになるよ。

37 〈みすばらしい爺さんが実は天下の副将軍だった〉という話なら、面白そう。しかし、
38 〈アララな人が死んじゃったよ。アララ〉なんて話のどこが面白いのだろう。いや、面白い
39 とか面白くないとか、そういう問題ではない。不気味だ。

40 不気味なのは、『ころ』だけではない。私にとってNの文章の全部が「頗る不得要領^{すこぶ}
41 のもの」なのだが、そんな文章の書き手であるNを〈文豪〉と呼ぶ人たちがいる。その全員が、
42 私には不気味だ。つまり、日本人の大多数のことが不気味に思えてならない。

43
44 * 『ころ』(集英社文庫)所収。

45
46

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 1 0 0 文豪伝説
3 1 1 2 0 読むと貧弱になる『こころ』
4 1 1 2 3 『こころ』批判も意味不明

5
6 『こころ』に批判的でも、『こころ』には確かな意味がある」という前提で書かれたよう
7 な文章は、やはり意味不明であることが多い。

8
9 ……「心」「行人」「明暗」など、漱石晩年の作品に、私は、彼れの心の惑ひを見、暗さ
10 を見、悩みをこそ見るが、超脱した悟性の光りが輝いてみるとは思はない。

11 (正宗白鳥『夏目漱石論』)

12
13 「心」という表記に戸惑う人がいるかもしれないが、これは『こころ』のこと。「心」「行
14 人」「明暗」と並べる理由は不明。執筆順なら、『行人』が先にくる。また、『こころ』と『明
15 暗』の間の『道草』が省略されている。怪しい。「晩年」は『明暗』にしか当てはまらない
16 はず。〈「作品に」～「見る」〉という構えはいただけない。「惑いを見」も「暗さを見」も「悩
17 みをこそ見る」も意味不明。こういうものを「見る」からどうだと言いたいのか。〈一応認
18 めるけど〉みたいなことか。だったら、卑怯。

19 正宗は、文豪伝説の信者から〈君には漱石先生の「超脱した悟性の光り」が見えないのさ〉
20 と反論されたら、どのように応じたらう。

21 「超脱した悟性」は意味不明。

- 22
23 ① 広義には、思考の能力。
24 ② カントにおいては、感性に与えられる所与を認識へと構成する概念能力・判断能力で、
25 理性と感性の中間にあり、科学的思考の主体。
26 ③ ヘーゲルにおいては、弁証法的思考能力としての理性に対して、対象を固定的にとら
27 え、他との区別に固執する思考能力。

28 (『広辞苑』「悟性」)

29
30 〈悟性は超脱しない〉と、私は思う。だから、比喩としてすら、そんな「光り」はなく、
31 それが「輝いて」いるはずもなく、その様子を思い描くことはできない。で、結局、「思は
32 ない」というのはナンセンス。正宗は、「超脱した悟性」を〈卓越した感性〉といった、ち
33 よろい意味で用いているのかもしれない。だったら、やっちゃったね。

34
35 更に従って、一般的に云へば、直示、直観の慧解によつて、悟性を超絶する眞理に見参
36 し、ここに唯一信樂の世界を見出さんとする心的傾向が神秘説で、これを奉ずる内的人
37 が神秘家である。

38 (フランシス・グリーアスン『近代神秘説』日夏耿之介「譯者の序」)

39
40 「悟性を超絶する眞理」というのなら、私にもわからなくはない。勿論、理屈だけだ。
41 「直示、直観の慧解」は難解。「慧解」は〈ゑげ〉と読む。「眞理に見参し」は意味不明。
42 「信樂」は、新仮名では〈しんぎょう〉だ。旧仮名なら、「しんげう」(『広辞苑』)だろう。

43
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1130 わかったつもり
4 1131 浅い理由と深い理由

5
6 『こころ』は名作』という伝説が終わらない理由は二つある。浅い理由と深い理由だ。
7 浅い理由は、本文が意味不明だからだ。きちんとした意味がなければ、きちんとした批判は
8 できない。きちんとした批判がなされなかったから、伝説が終わらないのだ。

9
10 齋藤 『こころ』は何度読んでもよくわからない。わからないところを追求していくと「こ
11 うだったか!」という新しい読み方が出てくる。それが漱石にはよくあります。

12 奥泉 『こころ』をおもしろく読むにはどうしたらいいのか、というのは批評の一つの使
13 命でもあるかもしれない。「これはこうおもしろく読めるのだ」ということを提出したい
14 感じは僕にもある。少なくともそれに値するテキストではある。

15 高橋 どの作品もいまだによくわからないんだけど、『こころ』がいちばんよく売れてい
16 るんだよね。

17 (奥泉光×齋藤美奈子×高橋源一郎『鼎談 二一世紀に漱石を読む』*)

18
19 「新しい読み方」がされてしまう浅い理由は、本文の意味が「よくわからない」からだ。
20 「新しい読み方」が登場するたびに議論をして「古い「読み方」」を破棄するのなら、いい。
21 しかし、実際には、「読み方」は増え続けるばかりのようだ。「読み方」のごみ屋敷だね。『こ
22 こころ』に関するだけでなく、一般に、日本の文系の人々は議論を嫌うらしい。

23 「『こころ』をおもしろく読むにはどうしたらいいか」だってさ。『こころ』はおもしろ
24 くない」と白状したようなものだ。しかも、話題は「おもしろさ」ではないのだよ。

25 「よくわからないんだけど」～「売れているんだよね」は、ちゃちなはぐらかし。はぐ
26 らかしは高橋の得意技らしい。はぐらかすとき、幸せそうでもんね。

27
28 つまり今日の日本の文化人の世界では、^{しか}而も高尚な文化人の世界では、高級常識から云
29 うと、漱石文化が文化そのもののスタンダードになっているのである。科学でも芸術でも、
30 時には宗教さえが(但し^{ただ}邪教はいけないが)、このスタンダードに^{ママ}照して評価される。之
31 は現下の日本の、意外に強靱な、高級大常識なのである。このスタンダードは、高い文化
32 水準を意味している。だがそれは高い思想水準と一つではない。又は、(文化という言葉
33 をもっと将来のあるものとして使えば)高い技術水準を意味しているが、高い文化水準を
34 意味していない、と云ってよい。

35 現在の日本に於けるアカデミシャニズム、及び云わばアカデミコ・ジャーナリズムの、
36 最も優れた形態が殆ど^{ほとんど}総てここに帰着するように思われる。アカデミシャニズムは、往々
37 滑稽なもので風刺の対象にであるが、ここのアカデミシャニズムは、最も隙のない形のも
38 ので、決して滑稽視される心配のないものなである。にも拘らず世間からは色々と不満を
39 持たれているものだ。世間はその不満をあうまく云い表わせない。手強い相手なのだ。

40 (戸坂潤『現代に於ける漱石文化』)

41
42 きちんとした批判が難しい理由を知ることは、難しい。

43
44 * 「KAWADE 夢ムック 夏目漱石〈増補新版〉百年後に逢いましょう」所収。

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1130 わかったつもり
4 1132 「明治の精神」は時代精神ではない

5
6 『こころ』に確かな意味があるように思う人は、意味不明の作文をする。

7
8 恋のために友人を裏切り、自殺させた過去をもつ先生は、罪の意識ゆえに自己処罰の道
9 を選び、乃木（のぎ）大将の殉死に感動して自殺する。漱石文学の根本の主題である愛と
10 エゴイズムの問題が、つきつめた自己否定に到達した知識人の苦悩を通じて描かれるが、
11 先生を〈明治の精神〉に殉死させたところに、明治的倫理の体現者としての漱石の独自性
12 がみられる。時代精神と人間性に対する洞察の徹底した傑作である。

13 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「こころ」三好行雄)

14
15 〈「恋のために」～「裏切り」〉は意味不明。「自殺させた」は無茶。動機においてSは無
16 罪だ。ただし、〈出血して動かないKを長く放置した〉という行為に関して罪に問われる可
17 能性はある。Kの死後、「早く御前が殺したと白状してしまえ」(下五十一)という幻聴にS
18 は悩まされるから、〈SはKを殺した〉という妄想的な物語はある。「過去をもつ」は意味不
19 明。「罪」の実態は不明。「罪の意識ゆえに自己処罰」は意味不明。「自分で自分を殺すべき
20 だ」(下五十四)とSは考えたが、「死んだ気で生きて行こう」(下五十四)と方針を転換して
21 いる。「道を選び」は、ひどい誤読。「死の道」(下五十五)以外の「道」がなくなってしまっ
22 たのだ。ただし、「死の道」は意味不明。「殉死に感動して」なんて、嘘だよ。「漱石文学の
23 根本の主題」がある)という根拠は何か。〈「主題である」～「問題」〉も、「愛とエゴイズム
24 の問題」も、〈「問題が」～「描かれる」〉も、〈「つきつめた」～「に到達し」〉も、意味不明。
25 「自己否定」は意味不明。Sが「知識人」である証拠はない。「明治的倫理」は意味不明。
26 「独自性」は〈異常性〉と区別できるか。

27 〈明治時代〉の〈時代〉と「時代精神」の〈時代〉は違う。後者の〈時代〉は、「原始・
28 古代・中世(封建)・近代・現代」(『広辞苑』「時代区分」)などだ。三好は、意味不明の「時
29 勢の推移から来る人間の相違」(下五十六)を「時代精神」と思い込んだのかもしれない。

- 30
31 ① 整合的である限りにおいて、複数の想像・仮定、すなわち「解釈」を認めることにな
32 ります。間違っていない限り、また間違いが露わになるまで、その解釈は保持されて
33 よいのです。
34 ② ある解釈が、整合性を示しているからといって、それが唯一正しい解釈と考えること
35 はできないのです。
36 ③ しかし、ある解釈が周辺の記述や他の部分の記述と不整合である場合には、その解釈
37 は破棄されなければならないのです。

38 (西林克彦『わかったつもり 読解力がつかない本当の原因』)

39
40 「わかったつもり」になるのは不可避だ。良くないのは〈知ったかぶり〉だ。しかし、
41 両者を区別することは、自分自身にとってさえ容易ではない。「わかったつもり」の人を
42 〈知ったかぶり〉と中傷する知ったかぶりは少なくなかろう。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1130 わかったつもり
4 1133 瘦せ我慢

5
6 「明治の精神」を庶民の言葉に直すと、〈瘦せ我慢〉だろう。瘦せ我慢で、『草枕』の主人
7 公のように、鬱々としつつ飄々として見せる人もいる。
8

9 御祝儀などはほんの一例ですが、^{すべ}凡て倫理的意義を含む個人の行為が幾分か従前より
10 は自由になったため、^{きゅうくつ}窮屈の度が取れたため、即ち昔のように強いて行い、無理にも為
11 すという^{やせがまん}瘠我慢も^{せうじやく}微弱になったため、一言にしていえば徳義上の評価が何時となく
12 推移したため、自分の^{とが}弱点と認めるようなことを恐れもなく人に話すのみか、その弱点
13 を行為の上に露出して我も怪しまず、人も咎めぬという世の中になったのであります。私
14 は明治維新の^{ちやうど}丁度前の年に生れた人間でありますから、今日この聴衆諸君の^{うち}御見え
15 になる若い方とは違って、どっちかという中途半端の教育を受けた海陸両棲動物のよ
16 うな怪しげなものでありますが、私らのような年輩の過去に比べると、今の若い人はよほ
17 ど自由が利いているように見えます。また社会がそれだけの自由を許しているように見
18 えます。漢学塾^{ママ}へ二年でも三年でも通った経験のある我々には^{えら}豪くもないのに豪そうな
19 顔をして見たり、性を^{ママ}矯めて^{せい}瘠我慢を^た言い張って^{やせがまん}見たりする癖が^{ママ}能く^よあったものです。一
20 一今でも大分その気味があるかも知れませんが。

21 (夏目漱石『文芸と道徳』)

22 「^{きゅうくつ}窮屈から「意地を通せば窮屈だ」(『草枕』一)が連想されよう。

23 「^{やせがまん}瘠我慢」は、「^{むてつぽう}無鉄砲」(『坊っちゃん』一)や「意地」の類語だろう。「弱点」は〈恥〉
24 などが適当だろうが、そうした言葉を明示しないのも「明治の精神」のせいらしい。「恐れ
25 もなく」は〈恐れ気もなく〉といった意味だろうが、〈恥も外聞もなく〉が適当。

26 「^{ちゆうとはんぱん}中途半端の教育」からは、「自分の品格を重んじなければならないという教育から来た
27 自尊心」(下十六)が連想される。

28 「明治の精神」の類語らしいのをざっと挙げてみる。

29
30 「^{さび}淋しい気」(上七) 「^{あやう}どうも仕方がない」(上十三) 「^{えんせい}厭世に近い覚悟」(上十五)
31 「^{はじ}耻」(上二十五) 「^{おそろ}大変執念深い男」(上三十) 「^{せいしん}精神的に痛性」(上三十二) 「人
32 間のどうする事も出来ない持って生れた軽薄」(上三十六) 「^{ひきまう}卑怯」(下二) 「矛盾な
33 人間」(下二) 「^が我」(上一) 「^{さく}鋭敏過ぎて」(下二) 「^{りん}倫理的に暗い」(下二) 「物
34 を解きほどいて見たり、又ぐるぐる廻して眺めたりする癖」(下三) 「^{はんもん}煩悶や苦悩」(下
35 三) 「先祖から譲られた迷信の塊」(下七) 「^{びと}馬鹿気た意地」(下九) 「^{ひと}他は頼りに
36 ならないものだという観念」(下十二) 「自分で自分が^は耻ずかしい程」(下十二) 「^{さいぎ}猜疑
37 心」(下十五) 「^{こぎ}狐疑」(下十八) 「^{たか}偉くなる積り」(下十九) 「^{しん}神経衰弱」(下二十
38 二) 「^{だう}道学の余習なのか、又は一種のはにかみなのか」(下二十九) 「^{もと}元の不安」(下
39 二十九) 「^き気取るとか虚栄とかいう意味」(下三十一) 「^{かんしやくもち}癩癩持」(下三十四) 「^{こうかつ}狡猾
40 な男」(下四十七) 「^{せう}世間体」(下四十八) 「この不可思議な私というもの」(下五十六)

41
42 カタカナ語なら、〈スノビズム〉でいいか。
43

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1140 恣意的な読み込み
4 1141 文豪伝説の主題

5
6
7

『ころ』の愛読者は、素直に読解するのではなく、空想して、そして、威張る。

8 「心」は佳篇である。その全篇にみなぎっている、透徹した、^{せいひつ}静謐ともいべき調子は、
9 自らの主題を的確に、冷静に^{つか}掴んでいるものの筆から生れるものである。これほど非感傷
10 的に、人間的愛の絶望的陰影を描いた小説は少い。漱石はさながらストア派の哲人が、迫
11 り来る死を語るように、淡々と、しかも沈痛に、「愛」の不可能性を立証する。この恐る
12 べき仕事を成就させた強烈な意志の底にひそむものは、あるいは「愛」を希求すると同様に
13 強烈な願望であるかも知れぬ。そして「先生」は、この精巧な証明を、《私の過去を絵
14 巻物のやうに、あなたの前に展開して呉れと^{せま}逼った》「私」に書き残して死ぬ。
15 (江藤淳『決定版 夏目漱石』)

16
17

「心」は『ころ』のこと。

18 「みなぎって」は「透徹」や「^{せいひつ}静謐」にそぐわない。〈「透徹した」～「調子」〉や「^{せいひつ}静謐
19 ともいべき調子」は意味不明。この「主題」は、「自己の快樂を人間の主題にして生活し
20 よう」(『明暗』百四十一) なんてのと似た意味で用いられているようだ。江藤は文豪伝説の
21 「主題」をNの全作品から読み取っているつもりらしい。〈「主題を」～「^{つか}掴んで」〉は意味
22 不明。右手に「筆」を「^{つか}掴んで」いるとすれば、「主題」は左手に「^{つか}掴んで」いるのか。
23 こころの話題は『ころ』の作者のはずだが、江藤はNについて述べているつもりだろう。
24 江藤は、Nと「遺書」の語り手Sを混同しているらしい。

25 「これ」の指すものは不明。「非感傷的に」も「人間的愛」も「絶望的陰影」も意味不明。
26 「ストア派の哲人」は誰か。「死を語る」文献も不明。Sにとって、「死」は「迫り来る」
27 ものではなかった。「淡々と、しかも沈痛に」は無意味。鉤付きの「愛」は〈自分が誰かに
28 愛されているという実感〉つまり〈被愛感情〉だ。「愛」の不可能性」はインポテンツを含
29 むか。〈Sはインポテンツ〉という解釈があったように思う。「立証」は意味不明。

30 「恐るべき」は意味不明だから、「恐るべき仕事を成就させた」事実は確認しようがない。
31 「意志の底」は意味不明。「希求すると同様に強烈な」は意味不明。こうした「願望」は〈被
32 愛願望〉だろう。これは〈Nという「人間の主題」〉だったようだ。ただし、被愛願望は、
33 Nの意識の「底にひそむもの」であり、明瞭には自覚できなかった。江藤も同様だろう。被
34 愛願望は、恐れや怒りや憎しみなどと関わっている。〈可愛さ余って憎さ百倍〉という。

35 「そして」は機能していない。ここまでの話題はNだったのに、突如Sが登場する。二重
36 パーレン内は本文からの引用だが、意味不明。「死ぬ」は宙ぶらりん。

37
38
39

自己愛的に欠乏したインナーチャイルドは、愛されることや注目されること、同情され
ることへのどん欲な要求でおとなになった自分を汚染します。

40 (ジョン・ブラッドショー『インナーチャイルド 本当のあなたを取り戻す方法』)

41
42
43
44
45
46
47

江藤やNは、自身の「自己愛的障害」(『インナーチャイルド』)に思い至らなかったようだ。

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1140 恣意的な読み込み
4 1142 ありすぎる主題

5
6 Nの小説に確かな意味はない。このことは、いわば定説のようだ。

7
8 どの作品も没後長く読み継がれているが、各作品に「自己本位」「個人主義」「則天去私」、
9 または実存的主題、自他関係の問題など、時代ごとに多種多様な主題が入れ替わりに読み
10 込まれてきた。こうした多様な読み方を許容する点が「国民的作家」と呼ばれる一因にな
11 っている。

12 (『日本歴史大事典』「夏目漱石」佐藤泉)

13
14 「どの作品も」は嘘。「没後」は〈没後〉も〉の略か。ありすぎる「主題」は、どれも難
15 解。「自己本位」と「個人主義」は鉤付きだから、『私の個人主義』(N) からだろうが、この
16 講演は意味不明。「則天去私」は夏目語らしい。「非人情」(『草枕』一)を連想してしまうが、
17 「非人情」も意味不明。「実存的主題」には困る。「実存性を非主題的に前提している了解を、
18 実存的と呼び、実存の哲学的把握としての実存論的理解から区別する」(『哲学事典』「実存
19 的」とされているからだ。「自他関係」は意味不明。「主題が入れ替わりに読み込まれて」
20 は日本語になっていない。「読み込まれて」は困る。

21
22 それは、思想研究がともすれば過去の仏教思想を現代の観点から読み込み、それが戦前
23 の恣意的な国家主義的解釈の横行を許すことになったという反省から、客観性を重んじ
24 る歴史研究の方が重んじられるようになったといういきさつがある。

25 (末木文美士『日蓮入門—現世を撃つ思想』)

26
27 「思想研究」に関わる人にとって、〈読み込み〉は「恣意的な」作業で「客観性」を欠き、
28 「反省」が必要な作業らしい。一方、日本近代文学研究者の〈読み込み〉は逆で、「客観性
29 を重んじる歴史研究」をないがしろにしてまでも推進すべき作業らしい。文学研究者の「実
30 存」は、思想研究者のそれと違っているのだろうか。文学は思想の一種ではないのだろうか。
31 あるいは、文学研究者の頭は「戦前」のままで、彼らは「国家主義的解釈の横行」が許容さ
32 れた「時代」を懐かしんでいるのだろうか。猿でもできる「反省」なんか、おかしくてでき
33 るものかって。あるいは、「国家主義」と対立しないN式「個人主義」の延命を画策してい
34 るのか。そうでもなくて、「時代ごとに」はやりすたりする内外の「思想研究」の「主題」
35 を器用にコピペしちやって「現代の観点から」読み込める自分を可愛いがるのに忙しく、「自
36 他」の思想的責任に関する考察は思想研究者に丸投げか。ご謙遜も、ほどほどに。

37 「多様な読み方を許容する」権威者は、どなた？ 佐藤様？ N様？ 「時代」様？ 「作
38 品」様かな。「国民的作家」は鉤付きだが、出典不明。「呼ばれて」って、誰が呼ぶの？ 「こ
39 うした多様な読み方を許容する点が」世界的作家と呼ばれない「一因になっている」のかも
40 よ。また、「どの作品も」映画、演劇、漫画などになりにくく、なっても成功しない「一因」
41 だろうね。「一因」しか教えてくれないよ。なぜ、他の「因」を教えてくれないのだろう。
42 最大の「因」は文豪伝説だろう。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1140 恣意的な読み込み
4 1143 間違いだらけの翻訳のよう

5

6 あるテレビ局の解説委員が〈Nの言葉は意味不明〉といった不満を漏らした。すると、著
7 名な宗教学者が〈東大生ならわかる〉というようなことを呟いた。し〜ん。〈東大生しかわ
8 からない〉と言ってほしかった。東大生でなくてもいい。偏差値七〇以上というのでもいい
9 のだ。IQ一五〇以上でもいい。とにかく、〈Nの言葉はある種の優れた日本人にしか理解
10 できない〉といった定説があるのなら、私は『こころ』批判をやらない。

11 私が批判しているのは、Nの言葉遣いだ。作品の価値ではない。文学史的意義などを論じ
12 る資格も、私にはない。Nの信念や生き方などについてだと、もう、考えたくもない。

13 では、なぜ、『こころ』を選ぶのか。ファンが多そうだからだ。

14 Nの作品で有名ということなら、『吾輩は猫である』が一番だろう。だが、この晦渋なも
15 のを通読した人がどれほどいることか。先に『牡猫ムルの人生観』（ホフマン）を読みな
16 さい。

17 『坊っちゃん』を通読した人は多そうだが、意味不明の愚作。

18 『草枕』も有名だが、ほとんどの人は最初の数ページで投げ出すはずだ。

19 あと、名が知れているのは『三四郎』か。しかし、中身は空っぽ。出来事と夢想の羅列。

20 『それから』も、ちょっとは有名かもしれない。これは、主人公が私小説を書きそこねて、
21 そして、その様子を語り手が語りそこなったものだ。

22 小説好きは晩年の『明暗』をほめるようだが、これも意味不明で、何かが起きそうになっ
23 たところで、Nは死んだ。死ななかつたとしても、書き続けることはできなかつたろう。続
24 きを書きたくなくて、いわゆる創作上の壁にぶつかり、Nはわざと不摂生をし、擬死再生を
25 企てたようだ。医学的には病死だが、作家としては一種の自殺だ。

26 私の批判の対象である文豪伝説の主人公Nは、悩める日本男児を導く人生の達人ではな
27 い。バランス感覚に長けた風見鶏的モラリストでもない。人畜無害のくすぐりがお得意の淋
28 しい元教員でもない。偽善者を憎んだ佯狂でもなく、乙に澄ました謎めいた趣味人でもな
29 く、孤高の憂愁を甘受した受難者でもない。精神の根源に横たわる原生的不安とやらを果敢
30 に剔抉した未曾有の哲人でもなく、工場の煙の下の神経衰弱すれすれの労働者の味方を演
31 じようとして蘊蓄を傾けた限りなく優しい教養人でもない。ポストモダンを鋭く予見した
32 驚嘆すべき大天才でもない。妻子を容赦なく苛めぬいた家庭内暴君でもない。鬱ときどき躁
33 の病人でもない。名作家であるかどうかはさておき、〈明文の書き手N〉だ。

34 ナンセンスはいいのだ。「チツチキチー。意味はないけど楽しい言葉」と大木こだまが語
35 るのを聞いたとき、私は微笑していた。滝沢カレンの言い損ないは、かわいい。ぱみゅぱみ
36 ゅは楽しい名前。漱石は苦しい名前。石で漱いで何になりたかったの？ 超現実主義の「意
37 味のない意味」（滝口修造『詩と実在』）は、むしろ必要。ダダイストの駄々は駄目じゃない。
38 「貧弱な思想家」（上三十一）の駄々が駄目なのだ。

39 言うまでもあるまいが、作品の全頁に眼を晒したとしても読んだことにはならない。意味
40 もわからず、情景を思い浮かべることもなく、音読しただけでは、理解に程遠い。気に入っ
41 た文言を暗記しても、理解したことにならない。暗記した文言を勝手な想像の糸で縫い合わ
42 せたようなものは、梗概ではない。異本だ。手前味噌の異本について論じたものは、作品論
43 ではない。妄論だ。たわごと、寝言。他人には何の価値もない紙屑。捨てちゃう。

44

45 （付記）『カレンの台所』（滝沢カレン）参照。

46

47

48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1100 文豪伝説
3 1150 「恐ろしい影」
4 1151 もう一人の自分

5
6 先に進む前に、言葉に関する次のような俗説を検討しておかねばならない。

7
8 「もう一人の自分」は、外から自分のなかへ入って来たのではなく、現実の自分がかた
9 ちを変えて分離したのですから、現実の自分の体験や能力を生かして活動するしか方法
10 がありません。夏目漱石の小説『吾輩は猫である』を読むときには、「もう一人の自分」
11 は猫にならなければなりません、これもかたちだけの猫で、実際に猫になったのでは文
12 章を読むことさえできません。それゆえ、現実の自分が幼ければ、「もう一人の自分」が
13 大人になったとしても、それはかたちだけの大人でしかありません。現実の自分が成長す
14 るにつれて、「もう一人の自分」も成長していきます。また、与えられた作品を「もう一
15 人の自分」として体験したり知識を身につけたりした場合にも、それはつぎに現実の自分
16 にひきつがれ、現実の自分を成長させることになります。こうしてすぐれた芸術は、追体
17 験によって現実の私たちの成長に役立つのです。

18 (三浦つとむ『こころとことば』)

19
20 「もう一人の自分」とは、〈自分を客観視する意識〉を人格化したものだろう。私は、こ
21 れを〈D〉と書く。〈dareka〉の頭文字。「かたちをかえて」は意味不明。

22 「実際に猫になった」は意味不明。主人公の「猫」なら、字が読めるはずだ。『吾輩は猫
23 である』の読者は、語り手ワガハイにとっての聞き手に擬態すべきだろう。しかし、その聞
24 き手の像は不明。ワガハイが誰に向かって言葉を発しているのか、まったくわからない。

25 「もう一人の自分」は「成長して」いかないかもしれない。退行するのかもしれない。

26 何をもって「すぐれた芸術」と判定するのか。「追体験」は意味不明。「還元的感化」(N
27 『文芸の哲学的基礎』)の一種らしい。

28
29 他人の体験を、作品などを通して自分の体験として生き生きと、とらえること。

30 (『日本国語大辞典』「追体験」)

31
32 この説明も意味不明。「他人」とは誰か。作家先生か。語り手か。作中人物か。

33 作家の創作体験の「追体験」をすることが「成長」に役立つことがあるとしても、逆に退
34 行してしまうことだってあるかもしれない。危ない。

35
36 誤記憶は実際の経験が歪曲、改ざんされて、異なって追想されるもので、多くは記憶減
37 退を伴っている。偽記憶は事実としては存しなかったことが実際あったとして追想され
38 る場合をいう。

39 (『精神科ポケット辞典 新訂版』「記憶錯誤」)

40
41 『ドグラマグラ』(松本俊夫監督)や『シャッター・アイランド』(スコセッシ監督)参照。
42 ついでに『メメント』(ノーラン監督)も。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 1 0 0 文豪伝説
3 1 1 5 0 「恐ろしい影」
4 1 1 5 2 さもしき玩具

5
6

文学に関する眉唾の俗説を、教師根性の持ち主は真実のように語る。

7
8

石川啄木の短歌に

9
10

ふるさとの山に向ひて
言ふことなし

11
12

ふるさとの山はありがたきかな

13
14

というのがあります。昔、私の仕事仲間に、この歌が好きで、いつも口にしている男がおりました。自分も、少年のときに友だちと遊んだふるさとの山が、目にやきついていて忘れられないと、話していました。

15
16

(三浦つとむ『こころとことば』)

17
18

三浦は〈おれの啄木が盗まれちまったぜ〉みたいに思って悔しかったのだろう。

19
20

話されたり書かれたりしたことばの意味は、その話し手や書き手の体験から成立しているのですから、ことばの後にかくれている具体的なありかたまでふくめてとりあげなければなりません。啄木の歌ならば、岩手県岩手郡渋民村で育った石川一^{はじめ}の見た山として、具体的にとりあげなければなりません。

21
22
23
24

(三浦つとむ『こころとことば』)

25
26

「体験から成立して」の「成立」は怪しい。「体験」がないと「ことば」の「意味」は知れないのか。そんなことはない。逆だ。似たような「体験」をしたことがない人に情報を伝達することができなければ、表現は無駄。「ことばの後ろ」は〈眼光紙背に徹する〉を踏まえているつもりか。だとしたら、くだらない。「具体的なありかた」は他人に知れない。

27
28
29

「石川一^{はじめ}の見た山」が他人に見えるはずはない。特定の「ふるさと」を想像させたければ、歌人は固有名詞を使ったろう。彼は、歌の中の「ふるさとの山」と人々の「ふるさとの山」の混同を、むしろ望んでいたはずだ。この歌は、その程度のおセンチなものだ。もっとお粗末かもしれない。

30
31
32
33

ふるさとの人に向かひて言ふことなし ふるさとの人はありがたくなし

34
35
36

短歌は早熟なハジメちゃんの「具体的なありかた」を隠蔽するためのさもしき玩具だった。

37
38

ことばは、人間が心で思っていることをほかの人間に伝えるために、使われています。人間の心のはたらきについてよく理解しないと、ことばの謎は解けないはずです。

39
40
41

(三浦つとむ『こころとことば』)

42
43

「人間の心のはたらきについてよく理解し」ていたら、「ことば」なんか、要らないよ。

44
45
46
47
48

1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 1 0 0 文豪伝説
3 1 1 5 0 「恐ろしい影」
4 1 1 5 3 「自分の頭がどうかしたのではなからうか」

5
6 「もう一人の自分」つまりDが自問自答の相手として有効に働いてくれる場合はある。し
7 かし、侵入者のように錯覚されることもある。

8
9 私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃めきました。初めはそれが偶然外から襲
10 ってくるのです。私は驚ろきました。私はぞっとしました。然ししばらくしている中に、
11 私の心がその物凄^{ものすご}い閃めきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自
12 分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。私はそう
13 した心持になるたびに、自分の頭がどうかしたのではなからうかと疑^{うたぐ}って見^{ママ}ました。け
14 れども私は医者にも誰にも診て貰う気にはなりませんでした。
15 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十四)

16
17 「その時分」は、〈静とSの関係がSには修復不可能のように思われだした「時分」〉だろ
18 う。「恐ろしい影」は、「もう取り返しが付かないという黒い光」(下四十八)の再来らしい。
19 これが成長して「恐ろしい力」(下五十五)になり、やがて口を利くようになる。一方、Sの
20 気分は萎縮し、混乱する。「閃めき」は〈ちらつき〉と解釈する。「閃めきました」は、「そ
21 の時分から時々」に呼応させるには、〈「閃め」くようになり「ました」〉などが適当。
22 「初め」は〈「初め」の頃〉などが適当。「偶然」ではなく、必然かもしれない。「来るの
23 です」は、「初めは」に呼応させるのなら、〈来ていた「のです」〉などが適当。
24 「しばらく」の長さを想像することはできない。数秒か、数分か、数日か。「しばらく」
25 何を「している」のか。

26 「しまいには」の結びだから、「思われ出して来たのです」の「出し」は不適當。「如く」
27 だから、実際には「自分の胸の底に生れた時から潜んでいるもの」ではないようだ。真相は
28 一つしか考えられない。「恐ろしい影」は、「偶然外から襲ってくる」のでもなく、「生れた
29 時から潜んでいるもの」でもなく、〈ある刺激に反応して生じる「もの」〉だろう。その刺激
30 とは孤立感などだろう。淋しくて「影」を呼び出ししまうのだ。

31 「誰」に相当するのは、「診て」を考慮すれば、易者などだ。「医者」に相談する場合、「恐
32 ろしい影」は科学系の幻覚などだ。易者などに相談する場合、「恐ろしい影」は呪術系の靈
33 魂などだ。「恐ろしい影」がSの「外」に存在するのなら、『こころ』は怪談だ。「胸の底」
34 に潜んでいるのなら、『こころ』は心理小説だ。作者は何をしているのだろう。

35
36 よくみられるものに「思路弛緩(しろしかん)があります。話が徐々に別の話題へそれ
37 ていったり、唐突に別のことを言いだしたりします。重症になると、他の人にはまったく
38 話の意味が理解できない「減裂思考(めつれつしこう)」になります。
39 (『家庭医学大事典』「統合失調症」)

40
41 語られるSの心理状態がどうなっているのか、よくわからない。だが、語り手Sの思路は
42 かなり怪しくなっている。実際に怪しいのは、作者だろう。

43
44
45
46

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 2 0 0 語り手は嘘をつく
3 1 2 1 0 夏目語
4 1 2 1 1 「意味は、普通のとは少し違います」

5
6 〈意味〉は他人に通じるものだ。というか、そのように思えるのが〈意味〉だ。

7
8 意味は人類の知的な範疇（はんちゅう）のなかで基本的なものの一つであり、それを他
9 の語で定義し、代替することが不可能か、少なくとも至難であることは、次の一例からも
10 明らかである。伝統的形式論理学では、概念に「内包（ないほう）」と「外延（がいえん）」
11 を区別した。たとえば「桜」の内包はすべての桜の木に共通の性質、属性であり、外延は
12 桜の木全体の集まりをいう。現代論理では、前者に「……は……より大きい」のような「関
13 係」をも含め、後者は「集合」と割り切ることができよう。このように、関係も含めた内
14 包は「意味」の重要な一部と云うるが、意味を集合と同一視したり、集合で代替しても、
15 集合の要素が集合に属することをいう「帰属」は関係の一部であり、ここに、関係として
16 の意味は最小限度前提されざるをえない。

17 (『日本大百科全書（ニッポニカ）』「意味」杖下隆英)

18
19 語り手Sは「困難」の処理を聞き手Pに丸投げする。

20
21 気取り過ぎたと云っても、虚栄心が崇^たったと云っても同じでしょうが、私のいう気取る
22 とか虚栄とかいう意味は、普通のとは少し違います。それがあなたに通じさえすれば、私
23 は満足なのです。

24 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十一)

25
26 「気取る」や「虚栄」に似た意味の言葉として、「我を張る」（中三）や「虚勢」（上二十
27 二）などが見つかる。なぜ、作者は、ここでこうした言葉を用いないのだろうか。

28 「普通の」とは違う「意味」という言葉の意味は、「普通の」と同じだろうか。

29
30 同一言語の話者であっても、その話し方や用語には個人差があるという観点から見た、
31 究極的な個人個人の言語をいう。

32 (『日本国語大辞典』「個人語」)

33
34 「個人差」を自覚したら、通じるような「話し方や用語」に換えるべきだろう。

35 Pに、「気取るとか虚栄とかいう意味」は「通じ」たのだろうか。

36
37 こうして遠くへ来^{ママ}てまで、清の身の上を案じていてやりさえすれば、おれの真^ま心は清に
38 通じるに違^{ちが}い。通じさえすれば手紙なんぞやる必要はない。

39 (夏目漱石『坊っちゃん』一〇)

40
41 「遠くへ来^{ママ}てまで」には、〈わざと「遠くへ来^{ママ}て」〉という含意がありそうだ。
42 Nは、〈情報不足によって真意が通じる〉というふうに勘違いをしていたのではないか。

43
44
45
46
47
48

1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 2 0 0 語り手は嘘をつく
3 1 2 1 0 夏目語
4 1 2 1 2 「みんなは云えないのよ」

5
6 言葉に関するNの主張は、私には理解できない。

7
8 この故に言語の能力(狭くいへば文章の力)はこの無限の意識連鎖の^{こゝろ}うちを^{こゝろ}此所^{こゝろ}彼所と
9 意識的に、或は無意識的にたどり歩いて吾人思想の伝導器となるにあり。即ち吾人の心の
10 曲線の絶えざる流波をこれに相当する記号にて書き改むるに^{こゝろ}あらずして、この長き波の
11 一部分を断片的に縫ひ拾ふものといふが^{こゝろ}適當なるべし。

12 (夏目漱石『文学論』「第三編 文学的内容の特質」)

13
14 「言語の能力」も「文章の力」も「この無限」も「連鎖のうち」も意味不明。「^{こゝろ}此所^{こゝろ}彼所」
15 は想像できない。〈「意識連鎖のうちを」～「意識的に」〉で躓き、「無意識的に」で^{こゝろ}ずっこけ
16 たよ。〈「能力」が「たどり歩いて」〉も、〈「能力」が「伝導器となる」〉も、日本語になっ
17 ていない。私の辞書に「伝導器」はない。『通底器』(ブルトン)なら、『新和英大辞典』にある。
18 〈「心」=「意識」〉かな。「連鎖」がね、ほら、「流波」になっちゃった。私の辞書に「流
19 波」はない。「相当する」は意味不明だから、「書き改むる」は不可解で、「あらず」とやっ
20 たら無意味。「長き」は変。「縫ひ拾ふ」は意味不明。「波」はビーズで、「能力」は針か。

21 「人は表現したい感情をすでに持っているためではなく、もっぱら持ちたいと思う感情
22 を喚起するために^{こゝろ}喚情的言語を使用する」(オグデン+リチャーズ『意味の意味』)のではな
23 いか。

24
25 「みんなは云えないのよ。みんな云うと叱られるから。叱られないところだけよ」

26 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十九)

27
28 どんな事柄であれ、「みんな」を言葉にすることはできない。だが、静はそういう本質的
29 な話をしているのではない。この「みんな」は、〈「云え」そんなことの「みんな」〉だ。
30 「叱られる」のは、Sからだ。彼女は、どことどこが「叱られないところ」か、Sに教わっ
31 たのだろうか。そんなはずはない。だから、「叱られないところ」の真意は、〈「叱られ」そ
32 うに「ないところ」〉だろう。彼女は、空想と現実を混同している。危ない人だ。

33 この「ところ」は、Nのいう「一部」と同質だろう。つまり、「みんな」を「書き改むる」
34 のは可能なのに、静も、Nも、わざとそうしないのだろう。Nは、自分の隠蔽体質を正当化
35 するために心理学を悪用しているのだ。

36
37 言語は、われわれにとって、思想伝達の体系以上のものだ。言語は、われわれの精神が
38 まとっている目に見えない衣装であって、精神のすべての象徴的表現に予定された形式
39 をあたえる。その表現がなみなみならぬ意義を有する場合、それは文学と呼ばれる。

40 (エドワード・サピア『言語 言葉の研究序説』)

41
42 「なみなみならぬ意義」について詳述することは困難だろう。

43
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1210 夏目語
4 1213 自分語と個人語

5
6 あるエッセイストが、〈自分語を持ちなさい〉みたいなことを、Eテレで語っていた。〈自分語〉とは、〈自分勝手にいろんな意味で使える語句〉のことらしい。自分語をいくつか用意しておいて適当に使いまわしをすると、どんな話題を振られてももっともらしい話ができるのだそうだ。間違いを指摘されても、楽に言い訳ができる。黒を白と言いくるめることができるわけだ。あきれた。偽超能力者が手品の種をばらすようなものではないか。

7
8
9
10
11 同じくEテレで、心理学者という肩書きの人物が、高校生に向かって、〈ヤバい〉の使用を推奨していた。〈ヤバい〉には両義があるから、人として適当な話題が見つからないとき、とりあえず、〈あの子のファッション、ヤバくない?〉などと言ってみよう。相手が〈似合っていないよね〉などと受けてくれたら、〈だよね〉と話を合わせる。しかし、相手も同じ魂胆だったらどうしよう。ヤバくない? 超ヤバ。ヤバ卍。チョベリヤバ。ヤバゲバ。野蛮婆。

12
13
14
15
16 かつて、ある女性タレントが〈エグい〉という言葉をはやらせようとした。〈渋い〉と似たように仕立てたのだ。後輩たちが〈これってエグいんですよね〉などと上目遣いで尋ねると、彼女は〈うん、エグいね〉とか〈いや、それはエグくないな〉などと判定を下す。話についていけない人が、〈そのエグいって、方言か何かですか〉と恐る恐る聞いた。すると、彼女は〈エグい〉が自分語であることを白状した。悪びれる様子はまったくくない。むしろ誇らしげだった。その後、彼女を見かけない。意味不明の〈エグい〉を使う人は今もいる。

17
18
19
20
21
22 自分語と個人語の語句とは違う。自分語はトリックだが、個人語の語句は不可避だ。
23 実話に基づくらしい『ネル』(アプテッド監督)のヒロインは、密室で育った。彼女は物品を相手に話しながらネル語を作りあげる。発見されたとき、彼女は精神異常者だと思われたが、学者がネル語の翻訳に成功し、正常であることが証明される。

24
25
26 個人語は共通語に翻訳できる。いや、そうした機能を備えているのが共通語だ。
27 個人語が、いつのまにか、他人にも通じるようになって共通語が変化していくのだろう。だが、自分語は違う。話者自身さえ明確な意味を知らないのだ。いや、わざと曖昧にしている。自己欺瞞だから、翻訳はできない。

28
29
30 Sは自分の使った「虚栄」の意味を知らないのだろう。「虚栄」はSの自分語らしい。

31
32
33 私の答も無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たような心持がしたのです。

34 (夏目漱石『ころろ』「下 先生と遺書」五十六)

35
36 「古い不要な言葉」とは「殉死」(下五十六)だが、その「新しい意義」は示されない。だから、「意義」も意味不明。「盛り得たような」だから、盛れていないのだろう。つまり、「殉死」は、S自身にとってさえ意味不明の自分語なのだ。

37
38
39 「殉死」という言葉は静が先に口にしたものだが、彼女の考える「殉死」の意味が「古い不要な」意味なのかどうか、Sにはわからないはずだ。だったら、聞き手Pにもわかるまい。作者は、どうか。Sの用いる「殉死」が作者の自分語なら、読者には理解できない。

40
41
42 〈Nの自分語〉を〈夏目語〉と書く。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1220 理解について
4 1221 「私を理解してくれる貴方」

5
6 意味は理解できなければならない。しかし、〈理解〉の意味は自明ではない。

7
8 それから四時十分頃になると、甘木先生の名医という事も始めて理解する事が出来た
9 のだが、脊中^{せなか}がぞくぞくするのも、眼がぐらぐるするのも夢の様に消えて、当分立つ事も
10 出来まいと思った病気が忽ち^{たちま}全快したのは嬉しかった

11 (夏目漱石『吾輩は猫である』二)

12
13 「甘木」は〈某〉をほぐして作った名。「甘木先生」は「いえ格別の事も御座いますまい」
14 (『吾輩は猫である』二)と診断した。そして、そのとおりになった。

15 私には、この「理解する」の意味が理解できない。作者による冗談らしいが、どういう冗
16 談なのか、わからない。〈理解〉は夏目語かもしれない。

17
18 私を理解してくれる貴方^{あなた}の事だから、説明する必要もあるまいと思いますが、話すべき
19 筋だから話して置きます^{ママ}。

20 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十二)

21
22 この「理解して」も理解できない。だからだろうか、「だから、説明する必要」も「話す
23 べき筋」も意味不明。なお、この後に話されることも意味不明。

- 24
25 ① 物事の道理をさと知り知ること。意味をのみこむこと。物事がわかること。了解。「文意
26 を一する」
27 ② 人の気持や立場がよくわかること。「一のある先生」「関係者の一を求める」
28 ③ 〔哲〕→了解②に同じ。

29 (『広辞苑』「理解」)

30
31 この説明も意味不明。普通の意味での〈理解〉は理解①だろうが、ややこしくて、「わか
32 る」までがわからなくなってしまう。『こころ』の「理解」は理解②らしい。だが、理解①
33 との関係が不明。理解③は無視。

- 34
35 I 理解①ができれば、理解②はできる。理解②ができなければ、理解①はできない。
36 II 理解①ができれば、理解②はできない。理解②ができれば、理解①はできない。
37 III 理解①ができなければ、理解②はできる。理解②ができなければ、理解①はできる。
38 IV 理解①ができなければ、理解②はできない。理解②ができれば、理解①はできる。
39 V 理解①と理解②は無関係。

40
41 アインシュタイン夫人が〈私は相対性原理を理解していないが、夫を理解している〉と語
42 ったそうだ。後の〈理解〉は冗談だろう。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1220 理解について
4 1222 「解釈」と「理解」

5

6 意味不明の表現でも、説明をすれば誰にでも理解できるはずだ。勿論、その説明が理解で
7 ける場合に限る。

8

9 ことがらの意味やなかがわかるようにのべること。

10

(『学研 小学国語辞典』「説明」)

11

12 説明してもらえない場合、解釈をすることになる。

13

14 解釈は頭のある貴方に任せるとして、私はただ一言付け足して置きましょう。

15

(夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」十二)

16

17 Pの「解釈」は示されない。したがって、Pに「頭」があったかどうか、不明。

18

18 Sは、Pの「解釈」を知りたくないらしい。知りたくない理由は不明。

19

19 「解釈」が必要な文は特定できない。たとえば、次の文がそうかもしれない。

20

21 その私が其所の御嬢さんをどうして好く余裕を有っているか。

22

(夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」十二)

23

24 「そ」の指すものは不明。「どうして好く余裕を有っているのか」は、ひっかけ問題。〈そ

25

25 もそもSに人を「好く」能力があったのか〉という問題を隠蔽するためのものだ。

26

27 ① ことば・文章などの意味や内容(ないよう)をはっきりさせること。☑英語(えいご)

28

の文章を解釈する。

29

29 ② ものごとをはんだんすること。☑雨がふっていたので、遠足はないものと解釈した。

30

(『学研 小学国語辞典』「解釈」)

31

32 解釈②の場合、「遠足はないもの」とは限らない。雨天決行かもしれない。「解釈」の責任

33

33 は解釈者にある。「雨」の責任を問うのは無意味。

34

34 本文の「解釈」は②だろう。Pの「解釈」について、Sはまったく責任を負わないのだら

35

35 う。すると、P文書の信憑性が疑われる。

36

36 作者は〈Pの「解釈」は正しい〉と暗示しているのだろうか。あるいは、〈「解釈」なんて

37

37 ものは無駄だ〉と暗示しているのだろうか。前者なら、『ころ』の読者はPの「解釈」に

38

38 ついて解釈②をしなければならない。そして、それが定説とならなければならない。後者で

39

39 あれば、『ころ』に関する解釈②も無駄だろう。

40

40 「一葉落ちて天下の秋を知る」という。「遺書」は「一葉」に相当するのかもしれない。

41

41 「天下の秋」に相当するのは「明治の精神」だろう。作者の意図としては、Pが「明治の精

42

42 神」の終わりを知ることになるのだろう。本当に知るべきなのは読者だろう。私には無理だ。

43

44

45

46

47

48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1220 理解について
4 1223 『やまなし』

5
6 〈容疑者は《宇宙人に命じられた》などと意味不明のことを話しています〉と、アナウン
7 サーが告げる。しかし、〈宇宙人に命じられた〉という言葉に意味はある。宇宙人が登場す
8 る小説は意味不明か。そんなはずはない。

9 この種の〈意味不明〉は、話者の精神異常を暗示する隠語らしい。隠語を含む報道はフェ
10 イク・ニュースだ。陰險な差別でもある。差別語の使用禁止が裏目に出ている。

11 瓢箪から駒が出ることはありえない。だが、意味はわかる。だからこそ、〈ありえない〉
12 と言える。ランプの中から大きな魔人が現れることなど、ありえない。だが、わかる。わか
13 るから、動画になっても『アラジン』（マスカー+クレメゾン監督）は面白い。

14 〈語られた言葉に確かな内容が認められないこと〉と〈語られた内容が現実にはありえな
15 いこと〉とは、まったく別だ。〈よくわからない〉のと、〈わかるけど嘘っぽい〉のとは、ま
16 るで違う。俗語の〈わかる〉では、この違いがわからなくなってしまう。非常に危ない。

17 〈ありえない〉を〈ありそうにない〉や〈あってはならない〉などの誇張として用いる人
18 がいる。私の用いる〈ありえない〉は、誇張ではない。文字通りの意味だ。

19
20 近年若者が、賞賛する意で「一味（信じられないほど、すばらしい味）」などとも言う
21 が、賞賛の意は伝わりにくい。

22 (『明鏡国語辞典』「ありえない」)

23
24 「伝わりにくい」ということぐらい、「若者」は承知しているはずだ。「伝わりにくい」か
25 らこそ価値がある。相手の忍耐力を試しているわけだ。臆病なくせに生意気なのさ。

26 ちなみに、〈信じられない〉や〈耳を疑う〉なども、甘ったれた使い方がされている。

27
28 二足の蟹^{ひきかに}の子供らが青じろい水の底で話していました。

29 『クラムボン^{あわ}はわらったよ』

30 『クラムボン^{あわ}はかぶかぶわらったよ』

31 (宮沢賢治『やまなし』)

32
33 「青じろい」のは、「水」か、「底」か。

34 〈作品の内部の世界に「クラムボン」という生物もしくは妖怪などが実在する〉と誤読す

35 る人がある。しかし、これは幼児語で、「泡」(『やまなし』)のことだ。「クラムボン」は〈貝坊^{クラムボン}〉
36 つまり〈貝のように無口な幼児〉だろう。「クラムボン」とは「子供」自身のことだ。また、

37 この言葉のことである。「クラムボン」の曖昧な意味は、「二足^{ひき}」の間でしか通じない。い
38 や、彼らは〈通じる〉という遊びをしているところだ。赤ちゃん返りをしている。彼らは、

39 〈言葉には意味がある〉という考えに戸惑っているらしい。彼らがきちんと「泡^{あわ}」を吐ける
40 ようになる頃、「クラムボン」はいない。

41 『やまなし』は謎めいているが、謎はない。作者がうまく「泡^{あわ}」を吐けていないだけだ。

42 「明治の精神」は「クラムボン」のような幼児語に似ている。

43
44
45
46
47

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 2 0 0 語り手は嘘をつく
3 1 2 3 0 作者と作品と語り手
4 1 2 3 1 読者に擬態

5
6 私は、〈生きて死ぬ個体としての作家〉と〈作品に付随する虚構の作者〉を区別する。作
7 家は、自分の信念に反する文章を書くことができる。だが、作者は、できない。

8
9 作品を書いた人は、誰ひとり、作品のそばで生き、作品のそばにとどまることは出来ぬ。
10 作品とは、彼を、解雇し、除去し、彼を、生残りに、無為の人 (désœuvré) に、なすべ
11 きことなき人間に、芸術が何ら依存するところなき無力な人間にする決定そのものだ。
12 (モーリス・ブランショ『文学空間』)

13
14 個体としての作家は、自分の作品を改変したり廃棄したりすることができる。だが、虚構
15 の作者に、そんなことはできない。作品が消滅すると同時に作者も消える。逆に、バージョ
16 ンが増えると、作者も増える。

17 劇映画の作者を、たとえば監督と決めるのは無理だ。関係者が多数いるからではない。全
18 然違う。自撮りの個人映画もある。そうした楽屋の事情を、観客は知らない。何となくだが、
19 〈映像作家〉という人格があって、それが一個のように思えるわけだ。音楽でも同様。

20 たとえば、『ブレード・ランナー』(スコット監督)には、バージョンが複数ある。だから、
21 作者も複数いることになる。言うまでもなく、映画の作者は、原作の『アンドロイドは電気
22 羊の夢を見るか?』(ディック)の作者とも違う。

23
24 要するに、作者は享受者に^{完成さるべき}作品を提示する。

25 (ウンベルト・エーコ『開かれた作品 (新版)』)

26
27 「^{さるべき}」は〈されるべき〉と解釈する。

28 ある「享受者」にとっての真の作者は、個体としての「享受者」自身だ。たとえば、シュ
29 ミレーション・ゲームやRPGなどの物語の作者は「享受者」つまりプレイヤーだ。

30
31 ロマン派時代には社会に対立する孤高の〈天才〉という作者概念が登場。20世紀には
32 無意識的な衝動に左右される作者像、システムとしての言語に操作される受動的作者像
33 が登場し、〈作者の死〉が問題となる。現在では作者の存在を歴史と社会制度から再考す
34 る動きもある。

35 (『百科事典マイペディア』「作者」)

36
37 一般に、ある情報を理解するためには、〈この情報は誰に対して発信されたのか〉という
38 問題が解けていなければならない。宛先の知れない手紙を読むとき、人は受取人の姿をこし
39 らえる。童話を読むとき、大人も子供になる。少女漫画を読むとき、男も女になる。神話を
40 読むとき、無神論者も信者になる。人は、作者が想定しているらしい読者に、いわば擬態を
41 しながら読む。その作者は、勿論、個体としての読者自身の空想の産物だ。

42 「遺書」を読むとき、私はPに擬態する。P文書を読むとき、誰に擬態しよう。

43
44 (付記)『ブレードランナー ファイナル・カット』の作者はファンかもしれない。

45
46
47
48

1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 2 0 0 語り手は嘘をつく
3 1 2 3 0 作者と作品と語り手
4 1 2 3 2 鶏と卵

5
6 〈作者〉と〈作家〉を区別する理由の一つは、『こころ』を書いたのはNだ』という証拠
7 を私が握っていないからだ。

8 『坑夫』を書いたのはNか。文体がNの他の小説と違う。

9 『虞美人草』は漢文だらけで意味不明だ。

10 PがSの「遺書」を書いたのかもしれない。「遺書」の文体はP文書のそれと似ている。

11 芥川龍之介は『トロッコ』を書いたのか。『きりしとほろ上人伝』は盗作に近い。

12 太宰治は『斜陽』を書いたのか。作者が二人いるみたいだろう。

13 宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』は未完成だから、作者も未成熟だ。

14 〈作品〉と〈作者〉は、鶏と卵のような関係にある。鶏が先か、卵が先か。卵が先だ。鶏
15 ではない二羽の鳥が番ってできた卵から孵ったのが、世界で最初の鶏だ。卵を産むのは作者
16 だが、それを孵して鶏に育てるのは読者だ。

17 『ミザリー』（キング）の作中で執筆される小説の作者は確定しない。映画の『ミザリー』
18 （ライナー監督）では、作者と読者の微妙な関係が描かれていない。

19 語り手と作者は混同されることがある。

20

21 作者はさっき、「下人が雨やみを待っていた」と書いた。

22

（芥川龍之介『羅生門』）

23

24 この「作者」は、『羅生門』の作者ではなく、語り手だ。「書いた」と書いてあるから〈書
25 き手〉と書くべきだろうが、区別するのは面倒だから、〈語り手〉で通す。

26

27 作者は此所で筆を擱く事にする。実は小僧が「あの客」の本体を確かめたい要求から、
28 番頭に番地と名前を教えて貰って其処を尋ねて行く事を書こうと思った。

29

（志賀直哉『小僧の神様』）

30

31 この作品は、「此所」から先も続く。語り手である自称「作者」が擱筆を宣言しても作品
32 は終わっていない。この「作者」は、私のいう〈作者〉とは違う。語り手だ。『小僧の神様』
33 の語り手は、この後、異本を語り始める。それは「此所」までの物語の不備を補うものだ。

34

35 そう質問された時、私はただ両方とも事実であったのだから、事実として貴方に教えて
36 上げるというより外に仕方がないのです。

37

（夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十二）

38

39 語り手Sは、彼の空想する「貴方」つまり聞き手Pに「質問され」て逃げている。Sは、
40 自分にとって都合のいいはずの聞き手からも逃げるのだ。彼が空想の問答を続けられない理由
41 は不明。実際に問答から逃げているのは、語り手Sではなく、作者だろう。作者の能力不足
42 を、語り手Sが庇ってやっているわけだ。

43

44

45

46

47

48

- 1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
- 2 1 2 0 0 語り手は嘘をつく
- 3 1 2 3 0 作者と作品と語り手
- 4 1 2 3 3 作品と異本

5

6 私がまず解いておくべきなのは、〈作品とは何か〉という問題だろう。しかし、どうも解
7 けそうにない。

8 谷啓の「ガチョーン」は作品か。田原総一郎の「いや、だから」は作品かもしれない。

9 「ダンスがすんだ」が作品でないのなら、「談志が死んだ」も作品ではなかろう。作家を
10 立川談志と特定できたとしても、作品のようではない。しかし、『軽い機敏な仔猫何匹いる
11 か』（土屋耕一）や『わたしかすみそう うそみすかしたわ』（石津ちひろ）などは作品集だ
12 から、これらに収められた個々の回文は、それぞれ、作品だろう。

13 「酒のない国へ行きたい二日酔い」は、「また三日目には戻りたくなり」と続かなくても
14 作品だろうか。川柳は作品だが、余韻のある俳句は作品だろうか。余韻なるものの感じが人
15 によって違っていいとしたら、俳句は作品と呼べるのだろうか。

16 教訓のない教訓譚は作品だろうか。Sの「遺書」から抽出すべき「生きた教訓」（下二）は
17 「遺書」に含まれていない。だから、「遺書」は教訓譚として失敗しているはずだ。ただし、
18 「生きた教訓」は意味不明。『こころ』が教訓譚なら、未完だろう。つまり、尻切れ蜻蛉だ。

19 タモリは、赤塚不二夫の遺影を仰ぎ見て、「私もあなたの作品です」と語りかけた。

20 これでいいのか。

21 〈作品〉とは、文芸に限らず、あるまとまった情報のことをいう。しかし、誰がある情報
22 を〈これはまとまっている〉と見なすのだろうか。個体としての享受者だ。発信者が〈作品〉
23 として発信したものを、享受者が〈これはまとまっていないな〉と思うことがある。その場
24 合、〈まとまっていないように思う自分がおかしいのかもしれない〉と反省する。そして、
25 発信者が想定しているらしい受信者の像を思い描き、それに擬態しようとする。擬態できな
26 い場合、享受者は、〈この作品なるものには余分な情報が混じっている〉と思い、そこを削
27 る。逆に不足を感じる場合、〈ここにあれを加えるとまとまりそうだ〉と思い、〈あれ〉を加
28 えてみる。このような場合、享受者は異本の作者になっている。

29 あらゆる文章は、読み終えるまで、情報が足りていないように思えるものだ。あるいは、
30 余計な情報が混じっているように思えるものだ。享受者は〈この先、ああなるのか、こうな
31 るのか〉と考えながら読み進む。期待通りだと安心する。予想通りだと退屈する。期待外れ
32 だと不満だが、予想外の面白さがあれば楽しい。あれこれ考えながら読むとき、享受者は異
33 本の作者になっている。読後、〈余計なものもなく、不足もなかったな〉と思ったとき、つ
34 まり、入手した情報を作品として認めたとき、享受者は異本の作者でなくなる。〈作者の想
35 定する読者に擬態できた〉と思うわけだ。同時に、作者の像を思い浮かべることができるよ
36 うになっている。この作者の性格と生身の作家の性格は違っていい。

37 ところが、文豪伝説では、こうしたプロセスが逆さまになっているらしい。〈文豪N〉と
38 いう作者の像が予めどこかに用意されていて、享受者はその作者が予想しているらしい読
39 者に擬態した後、おもむろに本を開く運びとなるらしい。こうした態度は、宗教の信者が経
40 典などを読むときの態度に似ているようだ。とにかく、〈感心しよう〉という構えで読み進
41 む。〈有名だから、面白くて、ためになりそうだ〉などと期待するのは、まるで違う。後
42 者は文豪伝説の信者で安直だが、前者は硬直している。前者を〈夏目宗徒〉と呼ぶ。

43

44

45

46

47

48

1 1 0 0 0 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1 2 0 0 語り手は嘘をつく
3 1 2 4 0 怪しい語り手たち
4 1 2 4 1 「奥さんは今でもそれを知らずに」

5
6 語り手Pは怪しい。

7
8 先生は美しく^{ママ}恋愛の裏に、恐ろしい悲劇を持っていた。そうしてその悲劇のどんなに
9 先生に取^{ママ}って見^み惨^{じめ}なものであるかは相手の奥さんにまるで知れていなかった。奥さんは
10 今でもそれを知らずにいる。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。

11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十二)

12
13 「恋愛の裏」は意味不明。『こころ』のどこにも「恋愛」や「悲劇」は語られていない。
14 語り手Pは嘘をついているようなものだ。ところが、作者が〈語り手Pは嘘をついている〉
15 という表現をしている様子はない。だから、『こころ』は意味不明なのだ。

16 〈「悲劇の」～「見^み惨^{じめ}なもの」〉は意味不明。〈「悲劇」の「相手」〉は意味不明。「悲劇」が
17 ないから、「まるで知れていなかった」と、Pは断言できるわけだ。「知れていなかった」に
18 は、〈今からは「知れて」しまう〉という含意がある。この含意は次の文で否定されるが、
19 否定するぐらいなら、「いなかった」という言葉を使うべきではない。使う必要があったと
20 すれば、〈「知れていなかった」から「奥さんは」困っていたが、「先生」が活着ている間は、
21 まだ我慢できた〉などと続けるべきだ。不当に切った理由は、静の「沈んだ心」(上十六)を
22 Pが詳述できないからだ。この語りの時点において詳述したくないのではない。語り手Pに
23 「知れて」いないのだ。勿論、読者は、〈「恐ろしい悲劇」について、静は知らないが、Pは
24 知っている〉と解釈せねばならない。ところが、この解釈の正しさを証明することはできな
25 い。「遺書」の語り手Sが「恐ろしい悲劇」を語っていないからだ。静は「云えないのよ」
26 と自己規制をしているふうだが、その理由は不明。「云えない」のは、静ではなく、作者だ
27 ろう。書けない。作者の構想として、「悲劇」は「遺書」で明かす予定になっていた。だから、
28 〈「悲劇」は後に語られる〉という印象を読者に与えようとした。しかし、この企画は、
29 結局、企画倒れに終わる。語り手Pは、作者の抱く不安とは逆の暗示、虚偽の暗示をしてい
30 ることになる。つまり、作者は「虚勢」を張っている。

31 「知らずにいる」というが、Pは読心術者か。「今でもそれを知らずにいる」の含意は〈「今」
32 からは「それを知らずに」いられまい〉などだろうか。

33
34 そして、そのかみのすきまから、いっぴきのごきぶりがはいだしてきたことに、だれも
35 きがつかなかった。

36 (矢玉四郎『ぼくときどきぶた』)

37
38 これは末文だが、〈つづく〉という文字が透けて見える。続編を予感させるホラー映画の
39 終わり方に似ている。この語り手は普通の人間である「ぼく」だから、「だれも」は〈「ぼく」
40 以外の「だれも」〉と解釈したくなるが、そういう話ではない。万能の神のような語り手で
41 はない「ぼく」が「だれもきがかつかなかった」と語るのは不合理だ。作者は、〈でも、ぼう
42 はんカメラにはぼっちりうつっていた〉などと続けるべきだった。惜しい

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1240 怪しい語り手たち
4 1242 「胡魔化されて」

5

6 『ほらふき男爵の冒険』（ビュルガー）の語り手は「ほらふき」だ。彼の名に因んだ〈ミ
7 ュンヒハウゼン症候群〉という病名がある。この病気の患者は〈かわいそうな私〉を演じ続
8 ける。〈代理ミュンヒハウゼン症候群〉だと、患者は加害者になる。

9 小説の作者が語り手に嘘をつかせることは許される。典型的なのは推理小説の語り手だ。
10 彼らは真犯人を知っていながら、明かさない。『こころ』は推理小説的だ。

11 『藪の中』（芥川龍之介）には、複数の一人称の語り手が登場する。彼らの証言は一致しな
12 い。しかし、彼らの全員が少しずつ嘘をついているとしたら、あるいは事実誤認をしている
13 としたら、不思議なことはない。むしろ、ありふれたことだ。作者は読者を誑かしている。
14 勿論、無駄に深読みすることはできる。たとえば、〈なぜ、それぞれの証言者は嘘をついた
15 のか。あるいは、事実を誤認したのか〉などと考えて遊ぶことはできる。

16 『藪の中』を映画化した『羅生門』（黒沢明監督）は奇妙な東洋趣味か何かが漂い、欧米
17 人が喜んで騙されている。そして、その真似を日本人がやっている。

18

19 一人称の語り手によってしか情報の与えられない小説（『坊っちゃん』もそのひとつで
20 ある）にたいして、読者には、その情報の信憑性を疑う楽しみがある。坊っちゃんの言
21 うことをどこまで信じていいのか。思い違いはないのか。あまりに一方的な情報が多すぎ
22 るのではないか。疑問は多々ある。赤シャツの立場から書かれた『坊っちゃん』もあって
23 いいのではなからうか。

24

（『文豪ナビ 夏目漱石』編者）

25

26 形式は三人称でも実質的には一人称ということがある。Nの小説は、実質的には一人称で
27 あることが多い。語り手が主人公の自己欺瞞を正当化するように語るわけだ。視点の人物が
28 複数でも、スタイルは同じ。作中の客観的事実が想像しにくい。

29 『坊っちゃん』の語り手「五分刈り」は、冗談めかして嘘をついている。妙に自嘲的だ。
30 『坊っちゃん』を読む楽しみがあるとすれば、それは子どもの作り話を真に受けて遊んでや
31 るような楽しみぐらいだろう。

32

33 私のこせつき方は頭の中の現象で、それ程外へ出なかったようにも考えられますから、
34 或は奥さんの方で胡魔化されていたのかも解りません。

35

（夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十三）

36

37 この文には次のような含意がある。

38 〈「私のこせつき方は頭の中の現象で」はあっても、ある程度「外へ出」ていた「ように
39 も考えられますから、或は奥さんの方で胡魔化されて」くれて「いたのかも解りません」〉

40 語り手Sは、語られるSの想像力の欠如を揶揄している。同時に、語りの時点における自
41 分の想像力の欠如を隠蔽している。過去の自分をスケープ・ゴートにして、現在の自分は生
42 き延びようと企んでいるのだ。聞き手Pは、語り手Sに「胡魔化されて」いるらしい。

43

44 （付記）『バロン』（ギリウム監督）参照。ただし、原作の『ほらふき男爵の冒険』とはかなり違
45 う。

46

47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1240 怪しい語り手たち
4 1243 「解釈は頭のある貴方に任せる」

5
6 〈小説の語り手が嘘をつくはずはない〉と信じている人は少なくなさそうだ。

7
8 自分は、わざと出来るだけ厳肅な顔をして、鉄棒めがけて、えいっと叫んで飛び、その
9 まま幅飛びのように前方へ飛んでしまって、砂地にドスンと尻餅をつきました。すべて、
10 計画的な失敗でした。果して皆の大笑いになり、自分も苦笑しながら起き上ってズボンの
11 砂を払っていると、いつそこへ来ていたのか、竹一が自分の背中をつつき、低い声でこう
12 囁きました。

13 「ワザ。ワザ」

14 自分は震撼しました。ワザと失敗したという事を、人もあろうに、竹一に見破られると
15 は全く思いも掛けない事でした。

16 (太宰治『人間失格』「第二の手記」)

17
18 この「手記」そのものが「ワザ」なのだよ。

19 「自分」つまり少年葉蔵が「わざと出来るだけ厳肅な顔をして」身構えたとき、「皆」は
20 〈あいつがまた道化をしてかすぞ〉と予感した。笑う準備さえしていたことだろう。「ワザ、
21 ワザ」なんて、わざわざ指摘したのは、竹一が「白痴に似た生徒」(『人間失格』「第二の手記」)
22 だからだ。少年葉蔵は自分自身をだませただけ。この程度の反省が成人してもできないから、
23 葉蔵は大人失格なんだな。

24 「皆の大笑い」を確認するゆとりなど、少年葉蔵にはなかったはずだ。彼は〈自分の物語〉
25 の世界に入り込んでいたのにすぎない。「皆」は、この物語の登場人物であり、『人間失格』
26 という作品の内部の世界に実在した人々とは違う。葉蔵が普通の大人になっていたら、〈大
27 笑い〉をしたのは「皆」とは限らないか)と反省できるはずだ。回想のカメラをロングにす
28 ると、〈うぜえんだよ〉と呟いて砂場に唾を吐く少年の姿が見えるよね。ぺっ。

29 〈目立ちたがりの少年を憐れんで「皆」は笑ってくれた〉といった想像ができないのなら、
30 ダサいおっさんは小説家失格だろうね。ぺっ。

31 語り手としての葉蔵は怪しい。その根本的な原因は、「手記」の聞き手の像が不明だから
32 だ。同様に、P文書の語り手Pは怪しい。聞き手Qの像が不明だからだ。「遺書」の聞き手
33 はPだから、語り手Sはあまり怪しくない。ところが、不意にRが出て怪しくなる。

34
35 ところで、この日記は何かヘンだと思いませんか？ 日記のくせにタイトルがついて
36 いたり、読者を想定して語りかけるような文体だったり、未来に起こることをあらかじめ
37 予想して、すでに全体の構成が考えられているかのようだったり。これはつまり、一つに
38 は僕のクサイ文学趣味のなせるワザでして。もう一つは、要するに僕は飽きっぽいので日
39 記をつけることに向いていない、ということだ。

40 (会田誠『青春と変態』)

41
42 この「読者」は〈聞き手〉だ。

43
44
45
46
47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1250 自己完結的
4 1251 二重思考

5
6 次の作品の語り手は怪しい。作者は、この語り手を軽蔑している。だから、読者は笑おう。

7
8 最初の到着地がゼラ星。この星は清潔を主義としているだけあって、すがすがしいきれ
9 いな印象です。地球の多くの家庭で使われている室内用の小型自動掃除消毒装置は、この
10 星の製品なんですよ。

11 つぎに訪れたロブ星は、ご存じのように芸術の星。心が洗われるような気分でしたね。
12 すべてが静かなメロディーにのって動いているんです。気品のある曲線、調和のある色彩。
13 すばらしい町で、ため息が出つづけでした。

14 (星新一『幸運の副産物』)

15
16 次の語り手も怪しい。ところが、作者は気障な語り手に加担している。読者は笑えない。

17
18 するとどこかで、ふしぎな声が、銀河ステーション、銀河ステーションと言う声でした
19 と思うと、いきなり眼の前が、ぱっと明るくなって、まるで億万の^{ほたるい}か^かの火を一ぺん
20 に化石させて、そらじゅうに沈めたというぐあい、またダイヤモンド会社で、ねだんがや
21 すくならないために、わざと獲れないふりをして、かくしておいた金剛石を、誰かがいき
22 なりひっくりかえして、ばらまいたというふうに、眼の前がさあっと明るくなって、ジョ
23 バニは、思わず何べんも眼をこすってしまいました。

24 (宮沢賢治『銀河鉄道の夜』)

25
26 「科学において、人は誰にでもわかる方法で、誰も知らなかった内容を語ろうとする。だ
27 が、詩において、人はその正反対をおこなう」(オッタヴィアニ『マンガ 現代物理学を築い
28 た巨人 ニールス・ボーアの量子論』)という。理系の詩人は「正反対」のことを同時にやっ
29 てしまう。

30
31 知っていて、かつ知らないでいること——入念に組み立てられた嘘を告げながら、どこ
32 までも真実であると認めること——打ち消し合う二つの意見を同時に奉じ、その二つが
33 矛盾することを知りながら、両方とも正しいと信ずること——論理に反する論理を用い
34 る——道徳性を否認する一方で、自分には道徳性があると主張すること——民主主義は
35 存在し得ないと信じつつ、党は民主主義の守護者であると信じていること——忘れなければ
36 いけないことは何であれ忘れ、そのうえで必要になればそれを記憶に引き戻し、そしてま
37 た^{ただ}直ちにそれを忘れること、とりわけこの忘却・想起・忘却というプロセスをこのプロセ
38 ス自体に適用すること(これこそ究極の^{いわ}い^い言いがたいデリケートな操作)——意識的に
39 無意識状態になり、それから、自ら行なったばかりのその催眠行為を意識しなくなるこ
40 と。〈二重思考〉という用語を理解するのにさえ、〈二重思考〉が必要だった。

41 (ジョージ・オーウェル『一九八四年』)

42
43 『1984』(ラドフォード監督) 参照。
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1250 自己完結的
4 1252 丸投げ

5
6 Sは一方向的に語り、一方向的に話を打ち切るタイプだった。Kもそうだった、Pもそうだ。
7 相手に話を丸投げするタイプだ。常に傲慢というのではない。ソフトに装うときもある。

8
9 相手に情報や意思を伝え、これに了解を求めるといふより、発信人ないし発信集団がこ
10 れを表現すること自体を目的とし、そのことによって自己（発信人）の心理的緊張を解消
11 し満足させるようなコミュニケーションをさす。

12 (『ブリタニカ国際大百科事典』「自己完結的コミュニケーション」)

13
14 『文学論』で、Nは自己完結的以心伝心みたいなことをややこしく述べている。

15
16 乙を意識している瞬間にはすでに甲は意識されていない。にもかかわらず、甲と乙とを
17 区別（分化）することができるのはなぜか。この矛盾を解決するために漱石が用意したの
18 は、すでに『文学論』の冒頭で紹介されていた「意識の波」の理論である。ただし、「文
19 芸の哲学的基礎」では、上層にある明瞭な乙の意識と下層に残像として遺された不明瞭な
20 甲の意識という二分法に組みかえられる。各瞬間の意識は実体としてあるのではなく、一
21 瞬前の意識を差異化する作用ないしは関係性として把握されなければならないというの
22 だ。こうした言説から、「差延〔すなわち差異・差異化・遅延〕としての時間から出発し
23 て、それとの関係で現在を考えなければならない」（『グラマトロジーについて』）とい
24 うJ・デリダの「差延（différance）」の概念を連想したとしても、それほど不自然ではな
25 いだろう。

26 (前田愛『増補 文学テキスト入門』)

27
28 「意識の波」は私の辞書にない。「意識の流れ」はジェームズの用語。

29 あなたがナニからアレを連想したとしても、それほど不自然ではなからう。ナニって……、
30 アレだよ。いや、それじゃなくてさ。そう、ソレ、ソレ。意味ありげで、なさげで、うっふ
31 ん。ほら、ほら、『黄色いさくらんぼ』（浜口庫之助作詞・作曲）だよ。だべさ。

32
33 デリダが主張するのは、著者の純粋な思考という唯一無二の起源はないこと、ましてや
34 その起源なるものが自分自身といささかのずれもなく自己現前することはないというこ
35 とである。エクリチュールは、常に起源としての著者の純粋な思考をよみがえらせること
36 に失敗するが、むしろそのことによってその起源について考えることを可能にする。その
37 結果明らかになるのは、起源には自己に対する隔たりと遅れを生む働きしかないこと
38 である。そしてデリダは、この差異と遅延を生じる働きを、原（アルシ）エクリチュール、
39 痕跡（トラス）、あるいは差延（différance）と呼んだ。

40 (『日本大百科全書（ニッポニカ）』「エクリチュール」松葉祥一)

41
42 ジェームズがデリダへ発展するきっかけをNがこしらえてやったのだろうか。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1200 語り手は嘘をつく
3 1250 自己完結的
4 1253 「殉死」の「意義」

5
6 静が「殉死」という言葉を口にしたのは、乃木夫妻の自殺よりも前だった。

7
8 妻の笑談さい しょうたんを聞いて始めてそれを思い出した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するな
9 らば、明治の精神に殉死する積りだと答えました。私の答も無論笑談に過ぎなかったの
10 すが、私はその時何だか古い不要な言葉に新らしい意義ママを盛り得たような心持がしたの
11 です。

12 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十六)

13
14 「それ」は〈「殉死」という言葉〉だ。「もし」を読み落としてはならない。〈「始めて」～
15 「思い出し」〉は日本語になっていない。「もし」があるから、「殉死する積りだ」は、〈殉死
16 する積り〉になっていること「だ」ろう〉などの不当な略だろう。

17 「古い不要な言葉」は「殉死」だ。「意義」は意味不明。〈古い「意義」〉から意味不明。
18 「盛り得たような」とあるから、盛り得ていないわけだ。

19
20 ここで主人公にとって「殉死」という言葉は、それまでその言葉が持っていた一般的指
21 示性(ニ意味)を突き破るような新しい響きを持って現われる。「明治の精神に殉死する」
22 といった言葉のアヤによって漱石が表現しようとした問題の芯を、もし心の深い場所で
23 共有するようなひとびとが多くいたならば、その度合いに応じてこの発語(表現)は、「殉
24 死」という語の一般的指示性を動かすことになるだろう。つまりラングは、そういった自
25 己表出性を動機とするパロールによってのみ変化の要因を受けとるのだが、またこの自
26 己表出性(固有の関係の意識)は、そもそも人間がラングの海の中に投げ入れられている
27 のでなければ、はじめから存在のしようがないのである。

28 (竹田青嗣『世界という背理』)

29
30 「殉死」が意味ありげなのは、その対象である「明治の精神」が意味不明だからだ。

31 「自己表出性」は「思想・感情などが意図せずに表されること」(『ジーニアス英和大辞典』
32 「self-revelation」)とは違うようだ。「一般的指示性」の「殉死」の対象は人間だから、「明
33 治の精神」は擬人化されていることになる。「明治の精神」氏は、SのDに他ならない。よ
34 って、「明治の精神に殉死する」のS的含意は、〈自分で自分を殺して自分はその後を追う〉
35 といった不合理なものになる。「殉死」の「自己表出性」は「無論笑談」なのだよ。

36
37 さくらんぼの種を食べた男の頭に桜が育ち、花が咲く。花見客がうるさいので木を抜
38 くと、その跡が池となり、今度は魚釣り客でにぎわう。悲観した男は、自分の頭の池に身
39 を投げる。

40 (『広辞苑』「頭山あたまやま」)

41
42 『マルコビッチの穴』(ジョーンズ監督) 参照。
43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすらと読めない
3 1310 「上 先生と私」のあらすじ
4 1311 解けない謎はない

5
6 小説に限らず、Nの文章は意味不明だ。だから、人々はつまみ食いをし、パッチワークを
7 し、異本を拵え、それに対する印象を述べてきた。『田園交響曲』(ベートーヴェン)を聞いて
8 てカッコウしか耳に残らないようなものだ。断章取義。牽強付会。お手盛り。
9 異本を作るのは個人の自由だ。換骨奪胎。だが、その異本がまた原典と同様に意味不明な
10 ので困る。Nの言葉遣いに違和感を抱かない人の作文は、私には意味不明であることが多い。

11
12 漱石の『こころ』も、かなり謎の多い小説として知られていますね。若い学生の「私」
13 があるとき、「先生」を見かけ、関心を抱き、知りあいます。彼はやがて先生の秘密にひ
14 かれ、それを知りたいと言う。先生はいまはダメだと言ひ、その後、帰省している彼のと
15 ころに告白の手紙を送ります。でも、それは遺書で、それを私が読むときにはもう先生は
16 死んでいる。そして、小説も、驚いて先生のところに急ぐ彼が車中でその先生の遺書を読
17 む、その先生の遺書が読者に示されるだけで、終わっています。

18 この小説の謎の一つは、私が鎌倉の海水浴場ではじめて先生を見かけ、関心を抱く場
19 面に、「どうも何処かで見た事のある顔の様に思われてならぬ」、
20 「然し何うしても何時何処で会った人か想い出せ」ない、
21 というくだりがさしはさまれていることです。私は、その
22 ことを先生に会ってからほどない時期に口に出して確かめます。でも先生は、「人違
23 じゃないですか」と答える。私は「変に一種の失望を感じ」るのです。

(加藤典洋『小説の未来』)

24
25 「謎」は不適切。謎は解けるものだ。ところが、この「謎」は解けていない。謎が解ける
26 まで、謎と謎めいた表現を区別することはできない。『なぞ』(デ・ラ・メア)に謎はない。
27 〈解けない謎〉や〈永遠の謎〉などというのは文芸的表現だ。「知られていますね」の「ね」
28 が念押しなら、〈『こころ』が意味不明であることは常識だ〉ということになる。

29 「若い学生」は変。「学生」は、普通、「若い」ものだろう。「その時私はまだ若々しい書
30 生であった」(上一)という文を誤読したか。「若い」は「若々しい」の含意を不当に無視し
31 たものだ。「学生」も、「書生」の含意を不当に無視したものだ。なお、この時点で語られる
32 Pは、まだ「大学生」(上十一)になっていなかったろう。

33 「秘密」は「不思議」(上七)の記憶違いか。Pが「ひかれ」たのなら、Sがひいたか。

34 「でも」は、機能していない。「それを私が」は〈それを〉彼「が」と、ちゃんと書き
35 なさい。「もう先生は死んでいる」は誤読。Sの死期は不明なのだ。ちゃんと読みなさい。

36 次の段落の「私」は、すべてPだ。「謎」が何なのか、不明。

37 「そのこと」がどのことか、不明。したがって、「確かめます」は意味不明。

38 「でも」は不可解。Pの質問に対するSの返事は、筋違い。

39 「変に」は〈「変」な〉が適当。「一種の失望」は〈「失望」の「一種」〉か。〈一種の人災〉
40 は〈天災の一種〉だろう。「一種の失望」は、普通の意味での「失望」とは違うようだ。ど
41 んな返事だったら、Pは「一種の失望」を感じなかったのだろう。

42 加藤は、この後、謎解きを始めてくれるが、奇妙奇天烈、てけれっつのば。

43
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすらと読めない
3 1310 「上 先生と私」のあらすじ
4 1312 「恋に上る階段」
5

6 青年Pは、Sを〈理想の父〉と重ねていたはずだ。

7
8 ところで「私」がしばしば父と「先生」を一緒に連想し、両者を比較したという事実は、
9 この両者がその表面的な相違にも拘らず、彼の心理の深い所でつながっていることを暗
10 示している。すなわち精神分析の言葉でいえば、彼の「先生」に対する感情は父転移であ
11 る。という意味は、彼がかつて幼い時に父に向け、その後父に幻滅して吐け口を失っていた
12 感情が、「先生」に新たな対象を見出して向けられたということである。彼が最初「先
13 生」に会った時 *déjà vu* の体験を持ったのは、この父転移のいわば前兆であった。

14 (土居健郎『漱石の心的世界』)

15
16 作品論としての「父転移」説は危ない。「父転移」はNの混乱の露呈だろう。

17
18 しかし「先生」には私の感情が何か深い個人的な心理に発していることがわかっていた。
19 それは一種の恋愛に類したものであり、すべての恋愛がそうであるように、遂には幻滅に
20 至る運命にあると「先生」は信じていた。であればこそ「先生」はあんなに執拗に「私」
21 に対し警告を繰り返したのである。

22 (土居健郎『漱石の心的世界』)

23
24 「しかし」は無視。「私の感情」の「私」に鉤がない。校閲、起きているか？
25 「一種の恋愛に類したものは「すべての恋愛」に含まれるらしいが、なぜだろう。「幻
26 滅に至る」は笑える。「運命」は意味不明。Sが「信じていた」という証拠はない。
27 「私の感情」について、次の部分が参考になるか。

28
29 「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」
30 「それはそうかも知れません。然しそれは恋とは違います」
31 「恋に上る階段なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たの
32 です」

33 (夏目漱石『こころ』「上 先生と遺書」十三)

34
35 SとPの会話。

36 「恋に上る階段」は「恋」ではない。〈二階「に上る階段」〉は〈二階〉かな。

37
38 かいだんをはんぶんのぼったところに
39 二かいでもない 一かいでもないところがある

40 (A・A・ミルン『クリストファー・ロビンのうた』「はんぶんおりたところ」)

41
42 〈Pは同性愛者から異性愛者に変わりつつあった〉と推定するのさえ無理。

43
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすらと読めない
3 1310 「上 先生と私」のあらすじ
4 1313 仮面夫婦

5
6
7

Pは、Sと知り合いになってから、その妻の静とも親しくなる。

8 先生は奥さんに対してやさしく、仲の好い夫婦の一对に見えるが、どこことなく淋しいか
9 げりがあるように思われる。先生は大学を出て、深い学識もありながら、何もしないで遊
10 んでいるので、世間に知られていない。先生を尊敬する私がそのことを残念がると、先生
11 は沈んだ調子で、「何うしても私は世間に向って働らき掛ける資格のない男だから仕方が
12 ありません」というばかりである。奥さんに聞いてみても、その理由はわからない。その
13 ことで、奥さん自身も苦しい悲しい思いをして来ているという。

14 (『明治・大正・昭和の名著●総解説』「こころ」木村幸雄)

15

16 「やさしく、」は〈「やさしく」してやっているので、「二人は」の不当な略。「見えるが」
17 の「が」は接続詞として機能していない。「夫婦の一对」は「幸福な一对」(上二十) からだ
18 ろう。ただし、Sは「私達は最も幸福に生れた人間の一对であるべき筈です」(上十) と語
19 り、Pは「あるべき筈」という言葉に拘って、「不審」(上十) を抱いた。「思われる」の主語
20 はPだ。S夫妻は仮面夫婦で、「仲の好い夫婦」を演じていた。その芝居の観客として、世
21 間知らずのPが招待された。「どこことなく」は不要。本文のさびしい系の言葉は意味不明で
22 あることが多い。「かげり」が「変な曇り」(上六) のことなら、「それは単に一時の結滞に
23 過ぎなかった」(上六) とされている。「結滞」は意味不明。

24
25
26

Sの「深い学識」について、どこにも示されていない。Pの買い被りだろうが、作者の意
図は不明。「遊んで」は「生業をもたずにぶらぶら暮らす」(『広辞苑』「遊ぶ」) という意味だ
ろう。「世間」(上十一) は意味不明。

27
28
29
30
31

「残念がる」のはPだ。本文では「惜い事」(上十一) となっている。Pが何を惜しがって
いるのか、不明。「沈んだ調子」(上十一) について、Pは「何しろ二の句の継げない程に強
いものだった」(上十一) と語る。不可解。「世間に向って働き掛ける」は意味不明だから、
その「資格」も不明だし、「資格」の取得の「仕方」も不明で、それを失った理由も不明。
作者は、〈Sは社会的不適応者だ〉という真相を隠蔽しているようだ。

32
33

『こころ』に謎らしいものがあるとすると、「その理由」だろうが、「その理由」は最後まで
明らかにならない。明らかになったような気がする人は異本を創作しているはずだ。

34
35
36
37
38
39
40

「そのことで」の「その」が指す言葉は不明。「奥さん自身」の「自身」は不要。本文の
「奥さん自身」(上二十) も変。「苦しい悲しい思い」は、「そう思われるのは身を切られるよ
り辛いんだから」(上十八) という静の発言からか。「そう思われる」を詳述すると、〈結婚
後、Sが引きこもりがちになってしまった「責任」(上十八) は、妻である自分にあると「思
われる」〉などだ。つまり、妻としての「責任」を問われることが「辛い」のであって、S
の苦しみが移ってくるように感じて「苦しい悲しい思いをして来て」いるのではない。「身
を切られるより」って、「切られ」たことがあるのか。なければ、静は嘘つき。

41
42

Pは、S夫妻の仲を疑い、彼らに真情を問う。静ははっきりと答えない。Sは、口頭で答
えず、「遺書」をPに送りつける。「遺書」に関するPの感想文はない。

43
44
45
46
47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1320 「中 両親と私」のあらすじ
4 1321 「本当の父」

5
6 「上」において、語り手Pは、彼の聞き手に対して、Sをうまく紹介できなかった。語り
7 手PがSに対する青年Pの関心その他を隠蔽しているからだ。
8 語り手Pにとって都合のいい聞き手を〈Q〉と書く。Pの次だからだが、〈questioner〉の
9 頭文字ということにしておく。Qは作中に登場しない。だが、仮想の語りの場である「此所」
10 (上一)にいるのは確かだ。P文書は、PとQの架空対談だ。この対談の聴衆を〈G〉と書
11 く。〈gallery〉の頭文字。Pは、自分とQの馴れあいをGに見せつけて楽しんでいる。Gの
12 原型はPの「兄」(上二十二)だろう。「中」では、語り手Pの代理として、過去の語られる
13 Pが「兄」と対決してみせる。こうした展開は、勿論、不合理だ。

14
15 かつて遊興のために往来をした^{ゆきき}覚^{おぼえ}のない先生は、歓楽の交際から出る親しみ以上に、
16 何時か私の頭に影響を与えていた。ただ頭というのはあまりに冷^{ひや}か過ぎるから、私は胸
17 と云い直したい。肉のなかに先生の力が喰い込んでいると云っても、血のなかに先生の命
18 が流れていると云っても、その時の私には少しも誇張ではないように思われた。私は父が
19 私の本当の父であり、先生は又いうまでもなく、あかの他人であるという明白な事実を、
20 ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな真理でも発見したかの如くに驚^{こと}ろいた。
21 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」二十三)

22
23 ものすごい悪文。
24 「かつて」は〈一度も〉と解釈する。「遊興」の具体例は不明だが、どうでもいいのか。
25 「往来」は後出の「交際」の同義語だろう。このあたりの話に中身の無いのを隠蔽するため
26 に、言葉を取り換えているのだろう。「覚^{おぼえ}のない」のはPだ。「覚^{おぼえ}のない」には〈実際には
27 あったかもしれない〉という含意があるが、これは無視すべきなのだろう。「出る親しみ」
28 は意味不明。「歓楽の交際」がないから、それから「出る親しみ」はなく、よって「親しみ
29 以上」は無意味。「頭に影響」は意味不明。

30 「ただ」は変。〈頭というのは〉～「冷^{ひや}か」というのは意味不明で、だから、「冷^{ひや}か過
31 ぎる」は、もっとわからない。「云い直したい」は変。言い直すぐらいなら書き直せばよか
32 ろう。言い直すこと自体に何らかの意味合いがあり、それを聞き手Qは読み取らねばならな
33 いらしい。Qが何かを読み取ったことにして、PはGをいたぶっているのだろう。

34 「肉のなか」も、「力が喰い込んで」も、「血のなか」も、「先生の命」も、「命が流れて」
35 も、意味不明。誰に向かって「云っても」だろう。「その時の」ではなく、今の「私」つまり
36 語り手Pは、どう思うのか。「思われた」は不可解。〈「少し」は「誇張」だろう〉と、「その
37 時」か、語りの現時点か、どちらかで、PのDが囁く。「誇張」どころか、意味不明。

38 〈「事実を」～「眼の前に並べて見て」〉は意味不明。「事実」というカードがあるのか。
39 カードは、並べ方次第でその意味が違ってくるものだ。

40 「大きな真理」と「明白な事実」は裏腹の関係にある。「発見したかの如くに」だから発
41 見していないわけだ。Pが「発見した」のは、〈SはPの「本当の父」だ〉という物語だ。
42 この場合の「本当」は、「あるべき姿であること」(『広辞苑』「本当」といった意味。

43
44
45
46

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1320 「中 両親と私」のあらすじ
4 1322 「立場」
5

6 Pは、S夫妻の疑似的「貰^{もら}ッ子^こ」(上八)になった。そのせいで、実父に対して親孝行の
7 真似事ができるようになる。おかしい話だろう。

8

9 折角丹精した息子が、自分の居なくなった後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに学
10 校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだろうじゃないか。大きな考^まを有^もっている御
11 前から見たら、高が大学を卒業した位で、結構だ結構だと云われるのは余り面白くもない
12 だろう。然しおれの方から見て御覧、立場が少し違っているよ。つまり卒業は御前に取^{ママ}
13 てより、このおれに取って結構なんだ。

14

(夏目漱石『こころ』「中 両親と私」一)

15

16 Pの「父」がPに語っている。

17

18 「息子」はPのこと。「自分」は「父」自身。「居なくなった」は〈死んだ〉だ。Pの卒業
19 を喜び過ぎる父に、Pは不満。「大きな考」がないから、「結構」と言われて面映ゆかったら
20 しい。父は「そりゃ卒業は結構に違いないが、おれの云うのはもう少し意味があるんだ」(中
21 一)と前置きし、「結構」という言葉に彼がこめた「意味」を説明した。なお、この「意味」
22 について、「父は話したくなさそうであった」(中一)という。その理由は不明。

22

23 「父」の「立場」は、「その人が置かれている地位や状況。また、その人の面目」(『広辞
24 苑』「立場」②)のことらしい。この「立場」は受身的だ。「観点」(『広辞苑』「立場」③)
25 といった意味の〈立場〉なら、自分で決められる。自分で決められないような「立場」から
26 発せられた言葉の「意味」は、本音とは限らない。だが、このときのPは、真似事で「父」
27 の「立場」を尊重してやることによって、親子の疎隔を自他に対して隠蔽したようだ。

27

28 漱石は、明治という時代の展開に従って徐々に強まっていく、江戸時代とは異なった抑
29 圧のシステムを見つめながら、その正体を「立場」として鋭く抉りだした、というように
30 解釈すべきかもしれません。

31

32 しかし同時に漱石には、「立場」に拘束されることに嫌悪感を覚えながらも、それを守
33 らねばならぬという義務感をも覚え、いつまでも果てることのない悩みの中で胃潰瘍に
34 なる、という側面があったようにも思います。もしそうだとすれば、それは現代日本人の
35 あり方の、典型であり先駆であるようにも見えます。彼の作品がこれほどまで広く長く読
36 まれ続けている理由は、あるいはこのあたりにあるのかもしれません。

36

(安富歩『原発危機と「東大話法」 傍観者の論理 欺瞞の言語』)

37

38 「鋭く抉りだした」みたいなのは、文豪伝説。

39

40 「義務感」が「嫌悪感」に直結するとは思えない。「いつまでも果てることのない悩み」
41 は、自分の立場③が原因ではなく、与えられた立場②が原因で生じるのだろう。つまり、立
42 場②に「拘束されること」を拒否できないから「悩み」が生じる。拒否できないのは、独自
43 の立場③を確立できていないからだろう。つまり、基本的に無責任だからだろう。

43

44

45

46

47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらと読めない
3 1320 「中 両親と私」のあらすじ
4 1323 看取りと読み取り

5
6 「中」に、Sは登場しない。Pとの手紙などのやりとりが少しあるだけだ。

7
8 「私」が手紙を読むころ「先生」は死んでいる、という意味の言葉が目を射た。心臓が
9 一瞬にして凍りついたような気がした。慌てて、「先生」の安否を探るため手紙を繰った
10 が、手掛かりを見つかる余裕もなかった。そして上京を決断する。「私」は父の最期を見
11 取るよりも、「先生」の最期を確かめることを選んだ。

12 (角川書店編『漱石の「こころ」』)

13
14 Pの「父」は、「乃木大将の死んだ時」(中十二)から、死を夢見るようになる。

15
16 父は時々嘸語を云う様になった。

17 「乃木大将に濟まない。実に面目次第がない。いえ私もすぐ御後から」
18 こんな言葉をひょいひょい出した。

19 (夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十六)

20
21 Sの「遺書」は、一種の「嘸語」だろう。

22
23 これでも私はこの長い手紙を書くのに、私と同じ地位に置かれた他の人と比べたら、或
24 は多少落ち付いていやしいかと思っているのです。

25 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三)

26
27 「これ」がどれだか、不明。「この長い手紙」は変。「手紙」は始まったばかりだ。〈地位〉
28 には、「社会や集団において、目標、規範、価値基準などによって、一定の形に配列されて
29 いる人々の位置のこと」(『ブリタニカ』「地位」)といった意味がある。そんな「地位」に誰
30 がSを置いたのだろう。「他の人」の具体例は不明だが、作中で探せばPの「父」しか見つ
31 からない。勿論、SはPの「父」の「地位」や「立場」など、ほとんど知らない。

32 〈「父」を看取ること〉と〈「父」の意を汲み取ること〉と〈「遺書」から「生きた教訓」
33 を読み取ること〉を同質とみなせば、Pは親不孝ではないことになる。Pが「父」を見捨
34 てるのは、「父」の希望だったのかもしれない。孟母断機の故事が連想される。

35
36 父ははっきり「有難う」と云った。父の精神は存外朦朧としていなかった。

37 (夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十八)

38
39 「有難う」は、Pの耳に〈おれの「精神」を受け継いでくれて「有難う」〉と聞こえたの
40 かもしれない。

41 「存外」ではないが、「朦朧として」いたのだ。そのせいで本音が漏れたらしい。語り手
42 Pあるいは作者は、そうした夢想あるいは虚偽を暗示しているのかもしれない。

43
44
45
46

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1330 「下 先生と遺書」のあらすじ
4 1331 自殺の動機は不明

5
6 「遺書」の間違ったあらすじが専門の事典に載っている。

7
8 先生は新潟の素封家の一人息子で、二〇歳で両親を一度に失い、叔父が財産を管理して
9 いたが、信頼していた叔父に遺産を詐取されてしまった。
10 (『日本近代文学大事典』「夏目漱石」瀬沼茂樹)

11
12 「先生」に鉤がない。「二〇歳で」は間違い。「両親を亡くしたのは、まだ私の二十歳にな
13 らない時分」(下三)だ。「ならない」は方言か。「一度に」も間違い。時間差がある。「詐取」
14 の証拠は皆無。被害妄想かもしれないのだ。

15 この後、Sは二度と故郷に帰らない。両親の墓参りさえしない。変だろう。

16
17 しかし下宿の娘に対する愛で、親友のKと争い、これを裏切り、死にいたらしめた。
18 (『日本近代文学大事典』「夏目漱石」瀬沼茂樹)

19
20 「しかし」は無視。「下宿の娘」は〈「下宿の」女主人の「娘」〉の略で、静のこと。静の
21 母は「未亡人」(下十)だった。〈「愛で」～「争い」〉は意味不明。二人が静を奪いあうわけ
22 はない。なぜなら、Kは〈Sは静を愛する〉という物語をSから聞かされていなかったから
23 だ。しかも、〈静とKは愛しあう〉という物語は、まだ始まってもしなかった。「これ」はK
24 か。「裏切り」は意味不明。「死にいたらしめた」なんて、とんでもない。「Kは正しく失恋
25 のために死んだもの」(下五十三)ですらない。「Kが私のようにたった一人で淋しくって仕
26 方がなくなった結果」(下五十三)というのが真相のようだが、「私のように」がどのよう
27 だか不明で、しかも、「結果、急に所決したのではなかるうかと疑がい出しました」(下五
28 三)と続くから、Kの自殺の動機は確定していないことになる。

29
30 先生は娘と結婚し、遺産でつつましい生活をつづけながら、罪の意識にさいなまれてい
31 た。

32 (『日本近代文学大事典』「夏目漱石」瀬沼茂樹)

33
34 「娘」は〈静の母の「娘」〉だ。Sは静母子と暮らす。マスオさんだ。妻方居住婚。「遺産
35 で」は舌足らず。「遺産」と「つつましい」は無関係。金の話なら、〈つつましい〉が適当。「つ
36 つましい」はつつまし過ぎる表現。〈引きこもりがちな〉などが適当。「ながら」は機能して
37 いない。機能させれば、〈「罪の意識にさいなまれ」「ながら」「つつましい生活を続けて」

38 「いた」〉が適当。「罪の意識」があるのなら、「罪滅し」(下五十四)を続けながら生きて
39 いけない理由が不明。Sの語る「私の罪」(下五十二)の物語は空っぽ。Pの語る「一人の
40 罪人」(上三十一)も意味不明だ。

41 『こころ』は意味不明だから、あらすじは作り話になりがちだ。その作り話が日本語とし
42 てなっていない。惨め。

43
44
45
46
47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすらと読めない
3 1330 「下 先生と遺書」のあらすじ
4 1332 詐取は被害妄想

5
6
7

Sの叔父による財産詐取事件は、怪しい。被害妄想みたいだ。

8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28

ここでしかしほぼ確実にいえることは、叔父が自分を欺いていると疑うようになった彼の心の動き自体は病的であったであろうということである。というのは彼は叔父の態度の変化にある日「俄然として」「何の予感も準備もなく、不意に」気付いている。彼は叔父の態度が変化したのは、自分が変化したためであるとは考えなかった。彼は自分のことは全く棚に上げた。だからこそ叔父の態度が「不図変に思い出した」のである。このようにふと周囲の様子が変わったということは、よく分裂病の患者が病の初期に述べることである。恐らく彼の場合もそれに似たことが起こっていたのではなからうか。このように考えることが正しいとすると、彼が叔父に欺かれたという話は一種の妄想体験であったということになるのである。

(土居健郎『漱石の心的世界』)

不図系の言葉は、他にもいろいろ出てくる。

29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

土居さんの解釈は『こゝろ』という作品から想定される事実とは合致するけれども、漱石という小説家が『こゝろ』をこのように書いたという事実とは合致しないのです。或いは同じことですが、読者が作品に読み取るものと合致しない——というのは、作者は、殊に漱石のようなすぐれた作者は、常に自分が書いていることと、読者が読み取るものの両方を意識しながら、筆を進めて行くからです。すぐれた作家では、彼が書こうとしているものと、読者の読むものは一つなのです。これがうまく行っているのが傑作なのです。

(大岡昇平『小説家夏目漱石』)

「還元的一致」(N『文芸の哲学的基礎』)みたいなことを、大岡はへたくそに述べている。しどろもどろ。「還元的一致」も意味不明だが、大岡の「合致」はもっとひどい。

「作品から想定される事実」は意味不明。「という小説家」は意味不明。「このように書いたという事実」は意味不明。二つの「合致」の実態は不明。ひどい悪文だ。

「同じ」かどうか、私にはわからない。「読者が作品に読み取るもの」は意味不明。〈N＝「すぐれた作者」〉という前提を、私は信じていない。「常に」は力み過ぎ。「自分が書いていること」と、自分の想像する「読者が読み取るものの両方を意識しながら、筆を進めて行く」のは、ごく普通の気配りだ。小説家の仕事に限らない。ただし、小説などの場合、この「読者」は、実在する誰彼ではない。書き手が想定するところの架空の読み手だ。

「書こうとしているもの」は、「このように書いたという事実」と同じか。「彼が書こうとしているもの」つまり〈「彼」がまだ書いていない「もの」〉が、どうして、「読者が読むもの」と並べられるのか。妄想としてさえ無意味だ。

「これ」の指す言葉がない。「うまく行っている」という証拠がどうやって得られようか。「うまく行っている」という印象は大岡の自己暗示によるものでしかない。錯覚。

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすらと読めない
3 1330 「下 先生と遺書」のあらすじ
4 1333 三角関係はなかった

5
6 ほとんどの人が〈「遺書」では三角関係が描かれている〉と誤読するらしい。

7
8 下宿先の娘をめぐって親友の「K」と三角関係になった「先生」は、親友を出し抜いて
9 先に求婚し恋人を得るが、親友が自殺したために終始罪悪感に苦しみ続け、明治天皇の死
10 に次ぐ乃木大将殉死事件を機に、ついに自殺するという内容。

11 (『日本歴史大事典』「ころ」佐藤泉)

12
13 「三角関係」は意味不明。一人の女を二人の男が同時に好きになっただけで〈三角関係〉
14 という言葉を使っていいのなら、ストーカーは大喜びだろう。

15 『冬のソナタ』(韓国KBSテレビ)の場合、ユジンとミニョンとサンヒョクの関係は〈三
16 角関係〉と呼べる。ユジンはサンヒョクと婚約しているのに、ミニョンと愛しあうようにな
17 ったからだ。しかし、高校時代のユジンとチュンサンとサンヒョクは三角関係になっていな
18 い。この頃のユジンは、サンヒョクを幼馴染としか思っていなかったからだ。なお、チュン
19 サンは、恋愛感情とは別の理由でサンヒョクを敵視していた。

20 『ころ』と似たような設定の『友情』(武者小路実篤)でも、杉子と大宮と野島の間に三
21 角関係は成り立っていない。大宮に対する杉子の恋心は一度もぶれたことがないからだ。

22 『坊っちゃん』の場合、「マドンナ」の気持ちがまったく描かれていないので、三角関係
23 について考えることはできない。『ころ』でも同様だ。少女静の気持ちはまったく描かれ
24 ていない。このことに気づかない人は、小説を読む能力が悲惨なほど不足しているばかりか、
25 言葉による一般の情報を処理する能力が決定的に不足しているはずだ。

26 そもそも、〈明治の普通の少女が恋をする〉などということは、ありそうにない。静は普
27 通の少女ではなかったのかもしれないが、そんなふうには語られていない。

28 「出し抜いて」は誤読。立場を反対にして考えてみよう。KがSを「出し抜いて先に求婚
29 し」ていたら、どうなっていたらう。〈Kは「恋人を得る」〉という展開になったのか。いや、
30 こんな問題は無意味だ。「恋人を得る」という言葉が意味不明だからだ。Sは、静と自分の
31 関係について「最も幸福に生れた人間の^{はず}一対であるべき筈」と語った。静とKが結婚してい
32 たら静は不幸になっていた「筈」だ。だったら、SがKを排除したことは正しい。

33 「罪悪感」は意味不明。近頃の〈炭水化物を食べると罪悪感に襲われる〉のそれと同じで、
34 自傷の罪が原因か。「人間の罪というもの」(下五十四)という言葉は出てくるが、言葉だけ。

35 「終始罪悪感に苦しみ続け」の「終始」と「続け」は重複。「乃木大将殉死事件」が「機」
36 になったのなら、乃木も死に値する罪を犯したのだろうか。いや、そういうことが問題なの
37 ではないのだ。乃木の自殺とSの自殺に共通する動機は「罪悪感」ではない。彼らが「罪悪
38 感」を抱いていたとしても、「苦しみ続け」た理由は別にある。それは「明治の精神」に関
39 わる何かだ。羞恥心だろう。

40 「遺書」はSとPの架空対談であり、その聴衆がいる。彼らを、Sは「外の人」(下五十
41 六)や「他」(下五十六)と呼んでいる。彼らを〈R〉と書く。Qの次だからだが、〈reader〉
42 の頭文字ということにしておく。Rは二十歳前後の男で、朝日新聞の購読者だろう。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1340 異本のあらすじ
4 1341 「これが先生であった」

5
6 Sの「遺書」を読んだ後のPは、次のような感想を抱く。

7
8 人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて自分の^{ふところ}懐に入ろうとするも
9 のを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——これが先生であった。
10 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」六)

11
12 「人間」と「人」は別らしい。「人間」は〈人類〉などの類義語だろう。いわゆる人間嫌
13 いだって、特定の誰かを「愛し得る人」だろう。「愛せずにはいられない人」は〈愛せる人〉
14 ではない。〈愛せない人〉なのだ。愛したいという欲求はあるが、愛する能力が欠如してい
15 る。そうした真相を隠蔽しつつ伝達しようとして変になった言葉だ。「手をひろげて抱き締
16 める事」は、抱き締める対象が何であれ、誰にもできない。「これ」は雑。

17 Pは、〈自分を愛してくれる「人間を愛し得る人、愛せずにはいられない人、それでいて」
18 自分に愛されたがって「自分の懐に入ろうとするものを、手をひろげて」招き入れてから「抱
19 き締める事の出来ない人、——これが先生であった」〉という真意を隠蔽している。隠蔽し
20 ながら、その気分をQに伝達しようとしている。ただし、そういう文芸的表現になっている
21 わけではない。したがって、虚偽の暗示を試みているのは作者だということになる。

22 Sは〈愛されたい〉という強烈な願い、被愛願望を抱いていた。ププッピドゥー。

23
24 定理三 受動の感情は、われわれがその感情についての明瞭・判明な観念を形成すれば、
25 ただちに受動の感情でなくなる。

26 (スピノザ『エティカ』「第五部 知性の能力あるいは自由について」)

27
28 〈甘える〉は能動で、〈好かれる〉は受動。Sは、誰かに甘えたかったのではない。好か
29 れたかったのだ。『こころ』の作者は、「受動の感情」に関して「明瞭・判明な観念」を文芸
30 的に表現することができず、個人的な「混乱した観念」(『エティカ』)を露呈した。

31
32 傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、近づく程の価値のないものだから^よ止せ
33 という警告を与えたのである。他の^{ひと}懐かしみに^{なつ}応じない先生は、^{ひと}他を^{けいべつ}軽蔑する前に、まず
34 自分を^{ママ}軽蔑していたものと見える。

35 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」四)

36
37 「傷ましい」は、〈イタすぎる〉みたいだ。「近づこう」の実態は不明。「価値」は「近づ
38 こうとする人間」が決めることだろう。「警告を与えた」という事実はない。「警告」は勧誘
39 の裏返しだろう。「である」は〈であろう〉が妥当。

40 「^{ひと}他の^{なつ}懐かしみに」の一文は、〈「先生」は「応じない」と、〈「先生」が「応じない」わ
41 け〉と〈語り手Pには「先生」が「自分を軽蔑していたものと見える」〉の混交だ。語り手
42 Pは、〈SはPを「軽蔑していた」のではない〉という虚偽の暗示に失敗した。

43
44
45
46
47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1340 異本のあらすじ
4 1342 常識としての美談

5

6 Pは、危篤の「父」を捨てて上京する。その非常識な行為を正当化するのは難しい。だが、
7 〈親は息子が師父の傍に居ることを望むものだ〉という前提があれば、どうだろう。
8 国定教科書に、次のような物語が載っていたようだ。

9

10 藤樹のいる伊予とは違い、母の住む近江は冬はことのほか寒い。井戸端での水仕事で老
11 母の手にひびやあかぎれができていはいかないかと心配した藤樹は、冬のある日とうとう、
12 思い余って母を訪ねるのである。母のためにあかぎれの薬を買って急ぎ故郷へ帰った藤
13 樹は、雪の降りしきる戸外でつるべ仕事をしていた母にその薬を差し出していたわり、肩
14 を抱いて家の中へ入ろうとする。ところが、母は、

15 「あなたは学問をするために生まれて来た人だ。母を訪ねる暇などないはずだ。すぐに帰
16 りなさい」

17 と、薬も受け取らず、家にもいれてくれずに藤樹を追い返してしまうのだ。

18 母に諭され、雪深い道をとぼとぼと帰っていく藤樹の後ろ姿を、老母は涙しながら見送る
19 のである。

20 (渡部昇一『自分の品格』)

21

22 「藤樹」は中江藤樹。

23 太平洋戦争中の映画『君こそ次の荒鷲だ』(保積利昌監督)では、重病の父を見舞うため
24 に帰省した少年が父に追い返される。『大空のサムライ』(坂井三郎)にも、父が危篤なのに
25 「カエルニオヨバズ」と息子に打電する軍国の母の話が出てくる。

26

27 無遠慮に云うと、第一、信用していた叔父に財産を横奪されただけで、あらゆる人間に
28 対する信用を喪うて終うというのも極端であるし、また、自己に対する信用の喪失が、自
29 己の愛する妻をも見棄てて終わらせるほど絶望的だということも極端である。——思うに、リ
30 アリストたる漱石先生も、未だ『心』にあっては、全然観念的な殻を破りえなかったので
31 だろう。

32 (赤木桁平『夏目漱石』)

33

34 「極端」とは違う。「自分が信用出来ないから、人も信用できない」(上十四)というのは
35 意味不明なのだ。意味不明だから、赤木は本文を作り変えてしまったのだろう。

36

37 潔癖家のアルセストが世間から嘲笑(ちやうしやう)され、訴訟事件にも敗れ、人間嫌いとな
38 り、砂漠へのがれようとするまでの話に、社交界の花形セリメーヌ、処世術にたけたフィ
39 ラントらがからむ。

40 (『百科事典マイペディア』「人間嫌い」)

41

42 〈「遺書」の物語〉は『人間嫌い』のパクリだろう。ただし、原典は喜劇だ。

43

44

45

46

47

48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1340 異本のあらすじ
4 1343 「自叙伝」の真相

5
6 『こころ』の作者は、次のような真相を隠蔽しているのかもしれない。

7
8 変な両親によって変な育てられ方をしたSは、変な少年に育った。両親の死後、同居した
9 普通の叔父一家に甘え過ぎて、もてあまされ、故郷から追放される。

10 Sの叔父一家に対する失望は、両親によるネグレクトの体験の反復だろう。だが、Sにそ
11 の自覚はない。あるいは、ネグレクトされたことを自分の恥のように錯覚していて、自他
12 に対してその奇妙な羞恥心を隠蔽しようとしているのかもしれない。Sは、他の親戚にも疎ま
13 れる。なぜだろう。Sの父は精神を病んでおり、〈精神病は遺伝する〉と信じられていたか
14 らかもしれない。あるいは、病弱な父に子種がなく、Sが養子だったからかもしれない。

15 東京のSは、ルーム・シェアをしていて同じ大学に通う同郷の変なKをそそのかし、Kの
16 普通の養親らに反抗させる。Kは復籍した実家からも嫌われて、孤立無援になる。仕送りは
17 途絶え、苦学生になり、心身の健康を損なう。Sは金銭的援助を申し出ようとするが、ど
18 うせ断られるものと思って、何もしない。SにはKを孤立させた責任があるのだが、どう
19 も対処のしようがない。Kを避けるために、Sは下宿を移る。

20 下宿先の主は未亡人で、娘に良縁は望めない。世間知らずで一流大学の学生であるSが現
21 れたから、いいカモだ。Sは彼女の魂胆に気づいていながら、婿になりたがる。仲人の心当
22 たりがないので、Kを仲介役に仕立てようと企む。この企みは、S自身の女性恐怖を克服す
23 るための儀式でもあった。KはSのダミーだった。ところが、Sは、〈自分がやりたいこと〉
24 と〈Kがやりそうなこと〉の区別ができなくなる。

25 静とSは婚約したのも同然の間柄だった。ところが、KYのKは、Sの友人である自分
26 に対する静の親切を自分に対する恋慕と誤解し、舞い上がる。Sによって軟化させられていた
27 せいもあろう。このままだと、Kは静の母から静を略奪するかもしれない。男性的魅力にお
28 いて、SはKに負けている。Sが唯一Kに勝っているのは財産だ。

29 普通に計算高い静の母は、貧乏なKを婿にしたくない。その点で彼女とSの利害は一致し、
30 静とSの婚約が成立する。ただし、SあるいはKに対する静の思いは不明。静とSの婚約を
31 知った後、KはSを辱めるために自殺する。「不満の意思表示としての無念腹」(千葉徳爾『切
32 腹の話』)の変形だ。ただし、Sが無念腹の動機を推量したわけではない。作者が文芸的に
33 暗示しているのでもない。ところが、日本人なら、何となく察せられることだ。罪は贖えて
34 も、死者を相手に恥を雪ぐことはできない。Sの自殺の動機も、何者かに対する無念腹だ。

35 Kの死後、静とSは結婚する。やがて、二人の結婚にまつわる真相を知る母が死ぬ。

36 暇そうなSに暇なPが寄りつき、ティーチャーズ・ペットになる。〈P〉は〈pet〉の頭文
37 字。Sは誰かにオルター・ファクトの「自叙伝」を聞いてもらいたいと願っていたので、P
38 を都合のいい生徒として教育する。教育が終わり、「適当の時機」(上三十一)が来たので、
39 「遺書」を書いた。この「時機」は、乃木の死と直接の関係はない。

40
41 推理小説なら、〈Kは子供のころからSを「馬鹿」(上三十)と呼んでいた。静はKを「馬
42 鹿」と呼ぶ。Kは静を強姦する。SはKを殺し、自殺に見せかける。学生探偵Pは挙動不審
43 のSの「過去を許^{あほ}いて」(上三十一)みたくなる。SはPを欺くために不備な「遺書」を記
44 し、自殺に見せかけて隠れる)となる。『アクロイド殺人事件』(クリスティ)参照。

45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1350 不図系
4 1351 「思い出した序に」

5
6 『こころ』に、どういうことがどういう順番で書いてあったか、なかなか思い出せない。
7 ある出来事とその前後で語られる出来事に合理的な関係がないからだ。
8 記憶は、語ることによって変化する。一方、物語は、事件や事故が過去から現在に向かって
9 数珠繋ぎに起きたように語られる。『こころ』の語り手たちは、物語の語り手とは異なり、
10 語るによって出来事を思い出す。記憶を偽造しているみたいだ。

11
12 然しこれはただ思い出した^{ついで}序に書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其
13 所にどうでも^よ可くない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければ御嬢さんの^{へやママ}室で、
14 突然男の声が聞こえるのです。

15 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十六)

16
17 「これ」の指すものは、不明。この前(下十六)には、いくつかの物語が羅列してある。

18
19 1 静母子の家は「人出入^{ひとでいり}の少ない家^{うち}」だった。
20 2 静の「学校友達」が「ときたま遊びに来る事」があった。
21 3 静の「学校友達」は「極めて小さな声」で話した。
22 4 Sにとって、静の「学校友達」は「居^いるのだから居^いないのだから分らない」ようだった。
23 5 静の「学校友達」は、いつの間にか「帰ってしまうのが常」だった。
24 6 静の「学校友達」がSに「遠慮^{えんりょ}」をしているということに、Sは気が付かなかった。
25 7 Sの学友が「宅^{うち}の人に気兼ねをする」ことはなかった。
26 8 学友の態度が原因で、Sは「主人^{あるじ}」で、静は「食客^{いそうろう}」(下十六)のようになった。
27 9 「突然男の声」がSに聞こえる。

28
29 ばらばら。1の情報の価値は不明。2の少女たちは登場しない。3の情報は疑わしい。「極
30 めて小さな声」は聞こえまい。4の情報の価値は不明。「居ない」としたら、5はなかった
31 ことになる。6は変。Sは他人の「遠慮」に、いつ、どうやって、気が付いたのか。7も同
32 じく怪しい。学友の気持ち、Sにどうしてわかるのか。8は無茶。冗談にもならない。9
33 になると、「突然」どころではない。

34 下宿では、襖を隔てた合コンが催されていた。「主人^{あるじ}」は、Sでも静でもない。静の母だ。
35 彼女がホステスとなり、若いカップルを次々に誕生させる。静とSは未来の夫婦になった。
36 学友たちは、二人の仲を認めると同時に、黙って帰る。ところが、得体の知れない「男」が
37 「突然」飛びこんで来て、異議を唱える。「男の声」に対して、Sは無力だ。なぜだろう。
38 『冬ソナ』で、ユジンとミニョンの二人きりの結婚式にサンヒョクが「突然」飛びこんで
39 来て、いやがるユジンを連れ出す。ミニョンは抗わない。なぜだろう。

40 「遺書」を含む「自叙伝」は、「どうでも構わない点」と「どうでも^よ可くない事」を「一
41 つ」に結ぶ物語だったろう。その物語では、正体不明の「男」がSを苦しめ続けている。「突
42 然男」は「一種の魔物」(下三十七)であり、SのDだ。

43
44
45
46

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらと読めない
3 1350 不図系
4 1352 複数の〈自分の物語〉

5
6 Sの人生における最重要人物はDだったはずだ。ところが、「遺書」では、Dは「黒い影」
7 (下五十五)のような比喻によってその存在が暗示されているのにすぎない。

8 「黒い影」を〈Kの亡霊〉と誤読する人がいそうだ。しかし、作中に亡霊が実在するのな
9 ら、『こころ』は怪談ということになる。勿論、『こころ』は怪談ではない。

10 「遺書」を語るにつれ、Sの記憶が蘇り、物語の異本が生まれる。勿論、こんなことはあ
11 りふれている。だが、ありふれた眩きを〈作品〉と呼ぶことはできない。

12 「遺書」は「この長い自叙伝の一節」(下五十六)だ。ところが、「自叙伝」は未完だから、
13 語り手Sが「遺書」を語ることによって、「自叙伝」が変化することになる。この場合、語
14 り手Sは継続中の「自叙伝」の登場人物でもあり、「遺書」において語られつつあるSと区
15 別できない。ただし、こんなことは、ありふれた混乱だ。

16 ありふれた混乱のないものを〈作品〉と呼ぶとすれば、作者はSの混乱を補整できていな
17 いから、『こころ』を〈作品〉と呼ぶことはできない。

18 「自叙伝」を一般化して〈自分の物語〉と呼ぶ。〈自分の物語〉の語り手は自分であり、
19 主人公も自分だ。その聞き手は特定できない。〈もう一人の自分〉とでも呼ぶしかない。こ
20 れがDだ。Dは、〈自分の物語〉の登場人物でもある。〈自分の物語〉は物語として不安定だ
21 からだ。自分は、語り手になったり、主人公になったり、Dになったりする。

22 普通、記憶は上書き保存される。つまり、書き換え前の原本は廃棄される。重要でない情
23 報や恥ずべき体験などを、本人は都合よく忘れてしまうものだ。

24 ところが、Sは、「自叙伝」の語り手として限界を感じると、上書きされていない過去の
25 原本を「突然」呼び出してしまいうらしい。そして、そこから語句を引用する。原本における
26 自分の考えを、正体不明の「男の声」として引用してしまうわけだ。

27 自分の考えであっても、過去の考えは、現在の自分が置かれている状況では有効に機能し
28 ない。たとえば、ある文書における「虚栄」という言葉の意味は、別の文書では意味が違っ
29 てしまう。ずれが生じる。ただし、そうしたずれを、普通は自覚しない。自覚したら、言い
30 換える。ところが、Sは言い換ええない。「意味は、普通のとは少し違います」と押し切っ
31 てしまう。実際に違っているのは、「意味」ではなく、文脈なのだ。

32
33 ある単語や句や文に対して、その前後の単語や句や文が及ぼす意味的規定力。「チョウ
34 をこわして入院した」と「チョウが飛んで行く」とを聞いたとき、腸と蝶とがまちがいな
35 く理解されるのは文脈の力による。具体的レファレントをもたない単語ほど、その意味が
36 決るために文脈に依存する度合いが大きい。

37 (『ブリタニカ国際大百科事典』「文脈」)

38
39 「レファレント」は「指示物」(『ブリタニカ』「レファレント」)と訳される。
40 Sの言葉の意味を規定する文脈つまり〈自分の物語〉は複数ある。それらのどれも作品と
41 して完成していない。だから、Sの頭の中では、不十分な複数の文脈が錯綜してしまう。た
42 とえば、語られるSは、Dを他人のように感じたり、他人をDのように感じたりする。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1300 あらすじすらすらすと読めない
3 1350 不図系
4 1353 「不図した^{ふと}機会^{はずみ}」

5
6 普通の小説なら、「突然」何か起きたとしても、後から〈実は〜〉と理由付けなどがな
7 されるものだ。ところが、『こころ』ではそうした展開にならない。問答無用という感じだ。

8
9 私は不図した^{ふと}機会^{はずみ}からその一軒の方に行き慣れていた。

10 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

11
12 Nは、「不図した^{ふと}機会^{はずみ}」に「慣れて」いたようだ。

13
14 私は時折、私の友達やら色々の知人から、私の父に就いての感想を聞かれる事があるが、
15 私はそんな時、よく妙に淋しい気のする事がある。それは恐らく、私が父に対して殆ど愛
16 情らしい愛情も抱いていなかった——今も同様依然として抱いていない——そうした気
17 持から来る感情かも知れない。

18 (夏目伸六『父夏目漱石』)

19
20 伸六がNを疎んだのは、Nの「不図した^{ふと}機会^{はずみ}」に対応できなかったからだろう。

21
22 この純一君と話をしてみよううちに、漱石の話が度々出たが、純一君は漱石を癩癩持ちの
23 気ちがひじみた男としてしか記憶してみなかった。いくら私が、さうではない、漱石は良
24 識に富んだ、穏やかな、円熟した紳士であつたと説明しても、純一君は承知しなかった。
25 子供の頃、まるで理由なしになぐられたり、怒鳴られたりした話を、いくつでも持ち出し
26 て、反駁するばかりであつた。そこにはむしろ父親に対する憎悪さへも感じられた。そこ
27 で私ははつと気づいたのである。十歳にならない子供に、作家たる父親の癩癩の起るわ
28 けが解る筈はない。作家でなくとも父親は、しば／＼子供に折檻を加へる。子供のしつ
29 けの上で折檻は必要だと考へてゐる人さへある。それは愛の行為であるから、子供の心に
30 憎悪を植ゑつける筈のものではない。作家の場合には、精神的疲労のために、さういふ
31 折檻が癩癩の爆発の形で現はれ易いであらう。しかしその欠点は母親が適当に補ふこと
32 が出来る。純一君の場合は、母親がこの緩和につとめないで、むしろ父親の癩癩に対する
33 反感を煽つたのではなからうか。そのために、年と共に消えて行く筈の折檻の記憶が、逆
34 に固まつて、憎悪の形をとるに至つたのではなからうか。

35 (和辻哲郎『漱石の人物』)

36
37 『魂の殺人 親は子どもに何をしたか』(ミラー) 参照。特に「闇教育」関連。

38 和辻は、父親から精神的に遺棄されて育つたのだろう。彼は見捨てられた自分を恥じて、
39 〈自分は父親に愛されていた〉という記憶を偽造して生きてきたようだ。だから、純一にも、
40 記憶を偽造するよう、勧めた。ところが、無礼にも純一は拒んだ。和辻は、むっとする。思
41 考が途切れる。「はつと」は、不図系の言葉だ。和辻の妄想が始まる。

42 むっとして、はつとして、ぺらぺらとまくしたてる人には要注意！

43
44
45
46
47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1410 支離滅裂
4 1411 統合失調症あるいは精神分裂病

5

6 Sは、Pの「兄」のような普通の人に尊敬されない。だからこそ素敵らしい。(超人だから凡人に嫌われる) じゃなくて、(凡人に嫌われるから超人だ) という暗示らしい。

7

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

天才というものはこのような異常性の上に生まれる。漱石が精神病であったことを否定して、英国へ留学して「神経衰弱」になったり、妻のヒステリーのため「神経衰弱」になったりするなら、そのへんにざらにある気の弱いいくじのない男性とちがうところはなくなってしまふ。我々から見ると、そんなことをいって漱石を弁解する人の方が漱石をけなしていることになる。漱石は分裂病の傾向のある躁うつ病であったのだ。大ざっぱにいうと、むしろ躁うつ病的・循環的である。

(西丸四方『異常性格の世界』)

19

20

21

22

23

24

精神病、そしてその他の精神病は、ただの病気にすぎない。だから侮りの対象にも、その神秘化の対象にもするべきではない。卑しむべきでも崇めるべきでもない。これは当然のことだ。まして、この病気を扱う医者が人間の精神活動について何か特別の知識や指導性を持つかのように錯覚するのは大いなる過ちである。

(計見一雄『統合失調症あるいは精神分裂病』)

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

「統合失調症」あるいは「精神分裂病」のどちらも意味不明。

2002年、日本精神神経学会は1937年以来使ってきた精神分裂病のことばには人格否定的なニュアンスがあるとして「統合失調症」と名称を変更した。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「統合失調症」)

36

37

38

39

40

41

「人格否定的」は意味不明。名称の変更に関しては〈分裂が多重人格と混同されるから〉という説を読んだか聞いたかした記憶がある。「ニュアンス」のせいで「名称」を変更するのなら、「統合失調症」が差別的に使われるようになったら、また変更するの? 『精神科は、やりたい放題』(内海聡) 参照。〈スキゾ〉じゃ、駄目かな。

本書には、今日では差別表現として好ましくない用語が使用されています。しかし作品が書かれた時代背景やその文学的価値、著者が差別の助長を意図していないことを考慮し、当時の表現のまま収録いたしました。その点をご理解いただきますよう、お願い申し上げます。

(フレドリック・ブラウン著・星新一訳『さあ、気ちがいになりなさい』編集部)

42

43

44

45

46

47

48

「著者」は〈訳者〉が適当。この小説を読んで、中学生だった私はびっくりした。

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1410 支離滅裂
4 1412 二種の隠喩

5
6 PやSの言葉の意味は、普通のとは違う。

7
8 「感じは言葉で説明できないんです」彼女は〈Yr〉語の^{イア}隠喩^{メタフォ}のことを考えながらそう言っ
9 た。自分の心で考える時、また〈Yr〉の住人に望みを打明ける時はいつも〈Yr〉語の^{イア}隠喩^{メタフォ}
10 であるのだった。最近はことにいろいろなできごとや考えがおこったが、それはこの地上
11 世界の住人とはまるで関係のないことだったので、自然〈Yr〉の平原や穴や頂上は、〈Yr〉
12 特有の苦悩と壮大さをとらえることのできる一つの言語の語彙がだんだんふえていくの
13 をこだまさせていた。

14 「何か言葉があるはずよ、なんとかその言葉を探してくださいな、そうすればお互いに理
15 解しあえるわ」

16 「^{メタフォ}隠喩だから、とてもわからないと思うけど……」

17 「解説してもらえないかしら？」

18 「一つの言葉があるの、その意味は『鍵のかかった眼』だけど、本当はもっと別の意味も
19 あるの」

20 「どんな？」

21 「石棺をあらわしてるの」それは彼女にとって、自分の視界は石棺の蓋のところまでしか
22 届かないことがある、という意味だった。棺の中の死体と同様、彼女にとってもその住む
23 世界は自分自身の棺の内部のサイズだった。

24 「その“鍵のかかった眼”で、私が見えますか？」

25 「一枚の絵のようにみえるわ。本物を描いた絵のようよ」

26 しかしこの問答はとても彼女をこわがらせた。彼女の住む世界の壁は、まるで大きな心
27 臓が鼓動するように、震動しはじめた。〈アンテラピー〉は〈Yr〉語で呪文を誦えはじめ
28 たが、デボラにはその意味がわからなかった。

29 「ひとのこと、そんなふうに詮索して、さぞうれしいでしょうね」とデボラは、だんだん
30 うすれていく博士に言った。

31 (ハナ・グリーン『デボラの世界』)

32

33 Nの用いる意味不明の語句は、「鍵のかかった眼」のような^{メタフォ}「隠喩」と思われる。Nは「〈Yr〉」
34 のような「世界」を隠蔽していたはずなのだ。だから、生きているNに彼の用いた語句など
35 の意味を質問しても「解説して」もらえなかったろう。

36

37 この件について、話し易くするために、それらが密かな見知らぬ意味を仄めかしている
38 ことから、われわれの間ではそれを^{クリプトニム}埋葬語(cryptonyme) (隠す語)と呼んでいた。

39 (ニコラ・アブラハム／マリア・トローク『狼男の言語標本 埋葬語法と精神分析』)

40

41 夏目語は「埋葬語」かもしれない。「埋葬語」は、ありふれた隠語とは違う。発語する本
42 人にさえ、その意味を説明することはできない。

43

44

45

46

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1410 支離滅裂
4 1413 「矛盾な人間」

5
6 Sは「矛盾な人間」と自己紹介する。「矛盾な」は、問題な日本語。

7
8 思考行動に矛盾の多い人間。漱石の作品にしばしば出てくる表現で、漱石の基本的な人
9 間観のひとつ。
10 (夏目漱石『こころ』ちくま文庫・解説「矛盾な人間」)

11 「人間観」は意味不明。

12
13
14 然し俗人の考うる全智全能は、時によると無智無能とも解釈が出来る。こう云うのは明
15 らかにパラドックスである、
16 (夏目漱石『吾輩は猫である』五)

17
18 普通の意味の〈矛盾〉は「現実のうちにある両立しがたい、相互に排斥しあうような事物・
19 傾向・力などの関係」(『広辞苑』「矛盾」)だろう。普通の人、二者択一で判断に窮したら、
20 思考を停止し、運を天に任せ、賭ける。どれにしようかな、天の神様の言うとおりに。さら
21 は、祈る。「矛盾な人間」は、こうした賭けができない。祈れもしない。

22
23 アントナン・アルトーは、子どもを、身体的受動と身体的能動とい深層での二つの言葉
24 に合わせて、極端に暴力的な二者択一に追い込む。すなわち、子どもは生まれ出ない、言
25 いかえるなら、子どもは、両親が姦淫する場所の下にとどまり、やがて脊柱になる箱から
26 出て来ない(逆向きの自殺)か、あるいは、子どもは、器官も両親もない、燃え上がる栄
27 光の流動体的身体へと自己を作る(アルトーの言う、自分の生まれるべき「娘たち」)か
28 という二者択一である。反対に、キャロルは、自分の非物体的な意味の言葉に相応しく、
29 子どもを待ち望む。キャロルが待ち望むのは、母の身体の深層を離れて、まだ自己自身の
30 身体の深層を発見してはいない時点と時期の子ども、また、自分自身の涙の池の中のアリ
31 スのように、水面にちらっと現われる短い時期の少女である。両者は、別の国、何の関係
32 もない別の次元である。

33 (G・ドゥルーズ『意味の論理学』「第13セリー 分裂病者と少女」)

34
35 『吾輩は猫である』は、「キャロル」的な作品のように誤読されている。しかし、これは
36 『こころ』と同様、「アルトー」的表出なのだ。

37 なぜ、このことに多くの日本人は思い当たらないのだろうか。日本では「分裂病者」的表現
38 が英知や雅趣の表現と区別されてこなかったからだ。支離滅裂の表出を全知全能の表現に
39 偽装しやすい。たとえば、〈矛盾〉という言葉は、言うまでもなく、中国の故事に由来する。
40 しかし、〈パラドックス〉の訳語としても用いられる。〈パラドックス〉は〈逆説〉が適当だ
41 が、〈逆説〉は「真理に反対しているようであるが、よく吟味すれば真理である説」(『広辞
42 苑』「逆説」)でもある。

43
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1420 作家ファーストで何四天王
4 1421 何四天王を紹介しよう

5
6 Nの小説だけが私に理解できないのではない。ある種の日本の小説が理解できない。

7 『ドラえものの小学校の勉強おもしろ攻略 必ず身につく学習法』(浜学園)に、「日本の
8 名作」として、『坊っちゃん』、『蜘蛛の糸』(芥川龍之介)、『ゼロ弾きのゴーシュ』(宮沢賢
9 治)、『走れメロス』の四作が紹介されている。これらの作者が創作によって何をしているつ
10 もりなのか、私には推量できない。以下、これら四作の作家を〈何四天王〉と呼ぶ。

11 彼らは、〈自分の物語〉を隠蔽したまま、その異本のような作品をものし、その雰囲気
12 みを伝達しようと頑張っている。彼らが頑張れば頑張るほど、作品の表面的な意味はわかり
13 にくくなる。ただし、同種の〈自分の物語〉を演じる人々は有難がるらしい。

14 私が批判したいのは、何四天王とその亜流の作品だ。作家の人生観などとは無関係。

15 芥川の『蜘蛛の糸』を読んだ小学生が〈お釈迦様は意地悪だ〉と書いてきたそう。仏の
16 顔は一度きりか。三度目があれば、亡者だって学習しよう。必死の上昇志向で下を見ず、極
17 楽へ亡者の大移動。釈迦が地獄に落とされる。そんなパロディーを読んだ。〈地獄で仏〉の
18 語源か。衣食足って礼節を知った元亡者が仏心を起し、地獄に糸を垂らしてやると釈迦は上
19 りだすが……。実話かな。『羅生門』では、泥棒から泥棒する理屈が理屈になっていない。
20 『藪の中』は藪の中。『蜜柑』は未完。『ガリヴァー旅行記』(スウィフト)からかっばらった
21 のが『河童』だ。『ライネケ狐』(ゲーテ)ではない。「巧緻で洗練された文体」(『日本史事
22 典』「芥川龍之介」というのは伝説。作品ごとに変化する「文体」は「ゴム印」(『玄鶴山房』
23 のようなもので、パクッタが亜流之介。『歯車』は『夢奇譚』(シュニッツラー)からか。こ
24 れは『アイズ・ワイド・シャット』(キューブリック監督)の原作だが、映画は失敗だ。

25 宮沢の『ゼロ弾きのゴーシュ』のゴーシュは動物たちと仲直りをしないのか。『雨ニモマ
26 ケズ』は、一億総かつかつ社会の正当化にもってこい。『よだかの星』ってさ、〈ブスは死な
27 なきゃ治らない〉って話だよ。『みにくいアヒルの子』(アンデルセン)と『人魚姫』(ア
28 ンデルセン)の読みにくい緋交ぜ。『グスコブドリ』の伝説は環境破壊の美化。「なめと
29 こ山の熊」たちは絶滅だな。『銀河鉄道の夜』のジョバンニは、素敵なパパのいるカンパネ
30 ルラが妬ましくて死なせた。隠された主題はBLだ。元彼への呪詛。ミーハー逃亡者を個人
31 攻撃したい人には『宮澤賢治殺人事件』(吉田司)がお奨め。

32 太宰はダサイおっさん。『ヴィヨンの妻』は羊頭狗肉。『富嶽百景』や『女生徒』や『津軽』
33 などの見え透いた嘘には舌打ちしながらも苦笑してしまったが、『人間失格』には白けるば
34 かり。太宰ファン込みで、グッドバイだよ。

35 比較のための比較をしてみよう。

- 36
37 夏目漱石『明暗』×有島武郎『或る女』
38 芥川龍之介『地獄変』×菊池寛『藤十郎の恋』
39 宮沢賢治『銀河鉄道の夜』×武井武雄『ラムラム王』
40 太宰治『人間失格』×三島由紀夫『仮面の告白』

41
42 軍配は対抗馬に上がる。ただし、推奨しているのではない。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1420 作家ファーストで何四天王
4 1422 太宰治

5
6 何四天王の作品は、作家論に収束するような作家ファーストの読み方がされてきた。

7
8 私が一番びっくりしたのは、中学生が書いた太宰治の『人間失格』の読書感想文です。
9 それは、「だから私も主人公のように頑張ろうと思います」と結んでありました。本当に
10 この本を読んだのでしょうか？ どう考えても違うと思います。

11 これでは国際競争力がつくわけありません。
12 (有元秀文『文部科学省は解体せよ』)

13
14 いや、この「中学生」は「本当にこの本を読んだ」のだろう。そして、「主人公のように
15 頑張ろう」と書かないと、先生に叱られる」と「本当に」思ったのだろう。

16
17 葉蔵は人間の生活の営みが理解できず、逆に互いに欺き合って少しも傷つかずに生き
18 ている人間を恐怖する。道化によってかろうじて人間と交わっている葉蔵は、世間とは個
19 人のことだとわかりかけて少し自信をもつが、疑いを知らぬ純心な妻が犯されて決定的
20 な打撃を受け、ついに人間失格者となる。太宰自身の体験を大胆にデフォルメして使いな
21 がら世俗への反感を表出し、大人の世界の入口でためらう年齢の若者を魅了した。

22 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「人間失格」鳥居邦朗)

23
24 ほとんど、意味不明。太宰ファンこそ「少しも傷つかずに生きて」いたくて仲間内で「欺
25 き合って」いるのだろう。彼らは「世俗」の中核をなす。

26
27 「あの人のお父さんが悪いのですよ」
28 何気なさそうに、そう言った。

29 (太宰治『人間失格』「あとがき」)

30
31 「あの人」は葉蔵。「お父さん」のどこがどう「悪い」のか、不明。

32 「言った」とされるのは「美人というよりは、美青年といったほうがいくらかの固い感
33 じのひと」(『人間失格』「あとがき」)だ。彼女は女装した作者、つまり作者の代弁者だ。こ
34 の「手記」が「お父さん」にとって無効だったから、彼女が登場したわけだ。「何気なさそ
35 うに」だから、何らかの「気」があるらしいが、「気」が知れない。

36 葉蔵の〈自分の物語〉の原典は、『ルカによる福音書』の「放蕩息子^{ほうとうむすこ}」のたとえだ。語
37 り手の葉蔵は、これを和風に「デフォルメして」使っている。『人間失格』は、〈父親のせい
38 で息子が駄目になった〉という話ではない。〈「あの人」が「人間失格」になってやったのに、
39 愛してやらない「お父さんが悪いのですよ」〉という話だ。葉蔵は、父親を恐れるあまり、
40 父親に愛されようと企み、混乱してしまった。滑稽なことに、作者はそのことを知らない。

41 葉蔵は他人の悪口を書きまくる。強気の人なら、面と向って非難するものだ。弱気の人な
42 ら、仲間内で陰口をきくものだ。彼はどちらでもない。だから、「人間失格」なのだ。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1420 作家ファーストで何四天王
4 1423 芥川龍之介

5
6 太宰は芥川に憧れた。その芥川は、パクリ屋であり、彼の苦悩もパクリだ。
7 『蜘蛛の糸』は不合理。この原典は、『カラマーゾフの兄弟』（ドストエフスキー）に出て
8 いる「一本の葱」とされる。類似の民話はヨーロッパに数あるようだ。何が原典であれ、葱
9 に掴まることはできる。一方、蜘蛛の糸のように細いものに掴まるのは不可能だろう。作家
10 に独創性が足りないのは、欠点ではない。重要なのは、原典より出来が良いかどうかだ。キ
11 リスト教の神が人を試みに会わせるのは納得できる。だが、『蜘蛛の糸』で主人公を試すの
12 は釈迦だ。違和感がある。また、「一本の葱」が原典だとすれば、この主人公は「意地の悪
13 いお婆さん」だが、芥川はこれを男に変えてしまった。怪しい操作だ。

14 芥川は処女作の『鼻』がNに褒められて、デビューしたそう。Nは、原典を読んでいな
15 かったのだろう。原典は説話だが、これはただの笑い話であり、弄る必要のないものだ。〈偉
16 い坊さんでもドジを踏むよ〉ということで、笑える。一方、『鼻』の主人公は、ちっとも偉
17 くない。虚栄心が強いばかりか、彼を導く善知識にも出会えない。偽坊主みたいだから、彼
18 に同情できない。勿論、作品に感動もしない。作者は何をしているのだろう。

19 『杜子春』の主人公が「仙人」になりたがる動機は薄弱だ。動機が弱いから、結局、失敗
20 した。ただし、そこまでは、いいとしよう。驚くべきことに、彼が失敗することを「老人」
21 は期待していたようなのだ。「老人」は、何がしてみたかったのだろう。

22
23 六朝時代末の杜子春が家財を使い果して道士からしばしば金を与えられ、その恩返し
24 に山中に入って仙薬を練る手伝いをする。そのためにさまざまな試練にあうが、最後に女
25 に生れ変わり、自分の産んだ子が頭を石にたたきつけられるのを見て禁じられていた声
26 を立て、ついに仙人になれずに終わった物語。

27 (『ブリタニカ国際大百科事典』「杜子春伝」)

28
29 原典の「道士」が杜子春を引き込む目的は明白だ。また、子春がしくじる理由も明白だ。
30 原典の主題は〈主人公である母は子を愛する〉だが、芥川版は〈母は主人公である子を愛す
31 る〉というものだ。つまり、芥川版の主題は被愛妄想だ。

32 芥川の子春は幻の母を本物と思い込み、修行にしくじり、普通の人になろうとする。しか
33 し、彼が怠けものに戻らない保証はなかろう。なぜなら、慈母は彼の妄想の産物だからだ。
34 そうでないのなら、〈子春は死んだ母を救うために努力する〉といった物語が必要だ。

35
36 ふ~~~~っ だめだ すっかり忘れてる どうすればいいんだ
37 おしろこのまま一緒に死んだ方が あの子は幸福かな？

38 (花輪和一『天水 完全版』)

39
40 「忘れてる」のは「あの子」だ。「一緒に」は〈母と誤認した化け物と「一緒に」〉の略。
41 『白』(芥川)の主人公は友を見捨てる。原典と思われる『星の童子』(ワイルド)の主人公
42 は母を見捨てる。芥川は、原典の記憶を自分の頭の中から消去したかったのだろう。

43
44
45
46
47
48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1420 作家ファーストで何四天王
4 1424 宮沢賢治

5
6 何四天王に共通するのは、理屈っぽい意味不明の言葉と負け惜しみの強さだ。

7
8 負け惜しみが強く、自分の誤りに屁理屈(へりくつ)をこねて言い逃れることのたとえ。 漱
9 石枕流(そうせきあんりゅう)。

10 **語源**「石に枕し流れに漱ぐ(=俗世間を離れて山林などで自由に暮らす。枕石漱流)」と
11 いうべきところを逆に言ってからかわれた晋の孫楚(そんそ)が、「流れに枕するのは耳を洗う
12 ため、石に漱ぐのは歯を磨くためである」とすかさず言い返したという『晋書』の故事
13 に基づく。

14 (『明鏡国語辞典』「石に漱(くちすす)ぎ流れに枕(まくら)す」)

15
16 孫楚は、かくれんぼがしたかったらしい。本当に俗世を厭うたのではなく、また、エコ派
17 だったのでもなく、見いだされるために隠れた。隠者ハッター君だ。その取り巻きは信者ウ
18 ッカリさんで、そのリーダーを気取るのが宗徒ウツトリ先生。

19
20 都人よ 来てわれらに交れ 世界よ 他意なきわれらを容れよ

21 (宮沢賢治『農民芸術概論綱要』)

22
23 田舎で浮いていたKYが都会に出てみたが、やはり「都人」と「交れ」なくて仲間に「容
24 れ」てもらえなかったので、帰省してロマンチストを気取り、「都人」に注目されようと企
25 む。うまく行って上京できたのが『ポラーノの広場』のキューストだ。

26 「世界」は〈父〉の美称だろう。勧誘なら、「われらを容れよ」は〈われら〉はきみら「を
27 容れ」てやる「よ」などでないと意味がない。「他意」はあるのさ。〈都会では埋没するから、
28 とりあえず地方で目立って父に褒められよう〉という魂胆だ。

29
30 裕福な質屋の長男に生まれ、盛岡高等農林に学んだ。在学中から日蓮宗の熱烈な信者と
31 なり、真宗信者の父母にも改宗を迫ったが拒絶され、1921年(大正10)上京して自活。
32 布教に従事し、童話の創作にも励んだが、妹トシの病気により帰郷。

33 (『山川 日本史小辞典』「宮沢賢治」)

34
35 「日蓮宗」は当時の流行。「父母」を操りたくて、宮沢は「熱烈な信者」を装ったのだろ
36 う。Kも、似たり寄ったりのことを企んでいたはずだ。

37 ちなみに、『オッペルと象』は、〈オッペルが資本家で、「白象」は労働者の象徴〉という
38 ふうに誤読できる。だが、オッペルは父親で、「白象」は息子だろう。『オッペルと象』の隠
39 蔽された主題は、〈父親と息子の葛藤〉なのだ。この父親は、息子のために良かれと思って
40 教育を施しているのだが、息子は自分が家畜扱いされているように思いたがる。息子は、父
41 殺しの罪を回避するために、Dの力を借りる。他の象は、労働者の象徴ではなく、自由人の
42 象徴だ。したがって、労使関係の主題は適用できない。

43
44
45
46
47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1430 慢語三兄弟
4 1431 小林秀雄

5
6 『こころ』は誰にとっても意味不明であるはずなのに、『こころ』は意味不明だ」と公言
7 する人は少ない。なぜだろう。理由は三つ考えられる。

8 第一の理由は単純なものだ。著名な評論家たちが文豪伝説を流布してくれたせいだ。

9
10 鷗外と漱石とは、私小説運動と運命をともにしなかつた。彼等の抜群の教養は、恐らく
11 わが国の自然主義小説の不具を洞察してみたのである。彼等の洞察は最も正しく芥川龍
12 之介によつて継承されたが、彼の肉体がこの洞察に堪へなかつた事は悲しむべき事であ
13 る。

14 (小林秀雄『私小説論』)

15
16 「鷗外と漱石と」他に誰もいないのか。二人しか並べないのは怪しい。「私小説運動」お
17 よび「運動と運命をともに」は意味不明。「教養」と〈表現〉の関係はどうなっているのか。
18 『道草』は「わが国の自然主義小説」の一種ではないのか。「洞察」は意味不明。

19 第二の理由は深刻なものだ。小林の文章みたいな意味不明なのが流通しているからだ。

20 巷には、「^{すこぶ}頗る不得要領」(上七)で、「意味は^{もうろう}朦朧」(上十三)とした「^{から}空っぽな理窟」(上
21 十六)や「^{センチメント}感傷を^{もてあそ}弄ぶ」(上二十)のような「^{うわごと}感傷的な文句」(上三十六)や「^{りくつ}嚙言」(中十
22 六)同然の「^{ロジック}論理」(下九)や「^{あいまい}漠然とした言葉」(下十九)や「^{こりくつ}空虚な言葉」(下二十二)や
23 「^{こりくつ}小理窟」(下三十一)や「^{あいまい}曖昧な返事」(下五十四)などが大量に出回っている。これらに
24 いちいち突っ込んでいたら、疲れる。だから、棚上げにする。

25 第三の理由は滑稽かつ悲惨なものだ。わかったふりをしないと恥ずかしいからだ。

26 童話の世界の裸の王様が着ているふりをした着物は、「だれが利口かばかか、区別する」
27 (アンデルセン『皇帝の新しい着物』)ための小道具だった。『こころ』も同様の小道具とし
28 て悪用されているようだ。〈『こころ』がわからないものは向上心のない馬鹿だ)みたいな風
29 潮がありはしないか。

30 童話の世界では、「^{あいまい}だけど、なんにも着てやしないじゃないの！」(『皇帝の新しい着物』)
31 という子どもの声で化けの皮が剥がれた。そんなふうに記憶している人が多そうだ。

32
33 「なんにも着ていらっしゃらない！」とうとうしまい、ひとり残らずこう叫びました。
34 これには皇帝もお困りになりました。なぜなら、みんなの言うことがほんとうのように思
35 われたからです。けれども、「いまさら行列をやめるわけにはいかんわい。」とお考えにな
36 りました。そこでなのおさらもったいぶってお歩きになりました。そして、侍従たちは、あ
37 りもしない^{もすそ}裳裾をささげて進みましたとき。

38 (ハンス・クリスチャン・アンデルセン『皇帝の新しい着物』)

39
40 結局、「みんな」の声は無視されたのだ。王家は揺るがない。

41 日本でも「行列」は続くことだろう。私の仕事が成功したとしても、「侍従たち」は肅々
42 と「ありもしない」意味を「ささげて進み」続けることだろう。

43
44
45
46
47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1430 慢語三兄弟
4 1432 江藤淳

5

6 Nの作品は、文豪伝説のスピノフみたいなものだ。ネタの使いまわし。マンネリ。Sに
7 は完成できない「自叙伝」の異本が「遺書」であるように、Nにはうまく語れない文豪伝説
8 の異本が『こころ』を含む全作品だ。

9 Nは文豪伝説の主人公になるために小説を書いたようだ。

10

11 ところで夏目漱石として知られる小説家は、漱石的「作品」に自分をなぞらえることの
12 できたほとんど例外的な存在であり、それ故にこそ「作家」と呼ばれるにふさわしい人間
13 なのだ。この際、たまたま彼が夏目漱石の名で幾篇かの小説を書いていたという事実は、
14 ほとんど無視するにたる些細な条件にすぎない。だから、文学的な贖罪の物語が漱石によ
15 って書かれなかったのは当然というべきだろう。物語は、彼が「作品」を模倣し反復する
16 過程で消費されつくしてしまったのだ。その意味で、夏目漱石は、漱石的「作品」の特権
17 的な読み手だというべきかもしれない。「作品」に似ることができるのは、小説家ではな
18 く、読者だからである。それ故、漱石的「作品」が夏目漱石に似ていないのは、いささか
19 も驚くべきことがらではない。「則天去私」だの「自己本位」だのがほどよく漱石に似て
20 いたというような意味でなら、漱石的「作品」は漱石にほとんど似ていないとすらいえる
21 だろう。だが逆に、夏目漱石は漱石的「作品」に恥しいまでに酷似しているのだ。

22

(蓮實重彦『夏目漱石論』「終章 漱石的「作品」」)

23

24 『こころ』を理解するには、どこにもないNの〈自分の物語〉を想像する必要がある。N
25 の小説は陰画であり、特定できない文豪伝説が陽画なのだ。逆ではない。夏目宗徒はNの〈自
26 分の物語〉を捏造するためにその作品を利用する。

27

蓮實の論は、次の江藤の論を裏返そうとしたものだろう。

28

29 ぼくらは「高慢と偏見」や「マンスフィールド・パーク」を思い浮かべることなしに、
30 ジェイン・オーステンを考えることは出来ない。しかし、「猫」や「それから」や「明暗」
31 は喪章をつけてうなだれた漱石の影にかくされていて、ぼくらは作品より、むしろ明治の
32 時代を生きた代表的な日本の知識人としての彼自身に興味を感ずるのだ。漱石のような
33 大作家をこのようにしか見ることの出来ないのは不幸なことである。しかし、ぼくらと芸
34 術の関係はそれ程不幸なものなのだ。仮りに百年の後に漱石が残るとしても、彼は「草枕」
35 や「坊っちゃん」の作家として残るのではさらさない。彼は、作家でもあった文明批評家
36 として残るのであって、偽物でない文学を志す日本人はこのことを肝に銘じておかな
37 ければならない。

38

(江藤淳『決定版 夏目漱石』「第五章 漱石の深淵」)

39

40 「作家でもあった」江藤は、〈N的でない「知識人」＝「偽物」〉と宣言するために文豪伝
41 説を利用し、自らも捏造した。「ぼくら」は「不幸」なのだそうだ。しかし、私は、Nや江
42 藤やその仲間たちの悪文のせいで「不幸」なのだ。

43

44

45

46

47

48

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1430 慢語三兄弟
4 1433 吉本隆明

5
6 意味不明であることを知りつつ、ありもしない意味を読み取ってくれる人がいる。

7
8 『こころ』という作品は、今でもいちばん読まれているそうですが、この作品を読んだ
9 印象を一言でいえば、何か先生という人物の罪の意識だけがまっ暗闇のなかでちょっと
10 光っているという画像が強烈にのこります。それ以外の具象性は、あまり造形的に成功し
11 ているとはおもえないのです。それほど具象性がある作品とはおもえないんですが、た
12 だ人間の罪の意識みたいなものがぼーっと闇のなかに浮かびあがっているイメージが読
13 後の印象としてのこります。

14 (吉本隆明『夏目漱石を読む』「資質をめぐる漱石」)

15
16 「光っている」のに「まっ暗闇」なんて変。「罪」とは、「じぶんと親友のあいだで一人の
17 女性をめぐって葛藤を演じ、その親友を出し抜いてしまったという、まったく私的なこと」
18 (『夏目漱石を読む』)だそうだが、吉本は自身の「私的なこと」をSのそれに重ねたらしい。
19 〈「意識」が「光って」〉は意味不明。「具象性」云々は「抽象的な言葉」(下三十一)だらけ
20 ということか。「先生という人物の罪の意識」が「人間の罪の意識みたいなもの」に変わっ
21 ている。本文でも「私の罪」(下五十二)が「人間の罪というもの」(下五十四)に変わる。
22 〈「イメージが」～「印象として」〉はナンセンス。

23
24 もう取り返しが付かないという黒い光が、私の未来を貫ぬいて、一瞬間に私の前に横
25 わる全生涯を物凄く照らしました。

26 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十八)

27
28 「取り返しが付かない」のは「世間体」だろう。「黒い光」は〈ブラック・ライト〉の直
29 訳か。「暗くなる電球」(藤子・F・不二雄『ドラえもん最新ひみつ道具大事典』)の光か。
30 「輝く光は深い闇よ、深い闇は輝く光よ」(シェイクスピア『マクベス』)を連想すべきか。
31 〈「光が」～「未来を貫ぬいて」〉は意味不明。「一瞬間に」の被修飾語が不明。「私の前に横
32 わる全生涯」が〈「私の」「全生涯」〉なら、幽体離脱が起きている。「物凄く」は意味不明。

33
34 神秘体験を当事者が自覚的に反省して、ことばによって表現し、解釈説明しようとする
35 努力から「神秘思想」が形成されてくる。これはもともと言語を絶する体験であるが、こ
36 れをなんとか言い表そうとするために、神秘主義に特徴的な表現形式が用いられること
37 になる。古代インドの聖典『ウパニシャッド』の「然(しか)らず、然らず」に代表され
38 るような否定的表現、「光り輝く闇(やみ)」「いっさいを含んだ無」などの矛盾逆説によ
39 る表現、「魂の火花」「霊の水晶宮」といった詩的象徴的表現などである。

40 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「神秘主義」脇本平也)

41
42 「光り輝く闇(やみ)」と「もう取り返しが付かないという黒い光」は、関係ないよな。

43
44
45
46
47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1440 付度ごっこ
4 1441 昭和のいる

5
6 へえへえ、わかった、わかった。昭和のいるの口癖。そして、吉本のスタイル。

7
8 一体、吉本隆明って、どこが偉いんだろう。吉本が戦後最大の思想家だって、本当だろ
9 うか。本当かもしれない。本当だとすれば、吉本がその住人の一人である戦後思想界がど
10 の程度のものであるか、逆にはっきり見えてくるだろう。

11 大思想家の条件は、第一に、常人にはよく分からないことを書くことであるらしい。花田
12 清輝もそうだし、小林秀雄もそう。よく分からないことを書けば、読者は必死になって
13 読んでくれる。そして、俺をこれだけ必死にさせるのだから大思想家だと思ってくれる。
14 読んでいる途中で挫折することもあるだろうが、結果は同じである。さすがに大思想家だ、
15 俺には読み通せないと思ってくれる。

16 (呉智英『吉本隆明という「共同幻想」』)

17
18 タイトルは〈「吉本隆明」は大思想家だ「という「共同幻想」〉などの略。

19 『日本衆愚社会』(呉智英)では「吉本語」の「日本語訳」が試みられている。翻訳可能
20 なら、支障はなかろう。

21
22 吉本隆明の『共同幻想論』(1968)によって現代日本思想界に定着した概念。

23 (『ブリタニカ国際大百科事典』「共同幻想」)

24
25 「共同幻想」と〈付和雷同〉の区別は可能か。区別は不要か。

26
27 斎藤緑雨を気取った、ひどく屈折した文体が指し示しているのは、小林秀雄、江藤淳、
28 吉本隆明のことである。由良君美はこの3人を、方法論を欠いた印象批評の輩として嫌っ
29 ていた。

30 (四方田犬彦『先生とわたし』)

31
32 私は「この3人」を〈慢語三兄弟〉と呼ぶ。何四天王と合わせて〈売れてらセブン〉だ。

33 「方法論」は昭和の流行語で、多くの場合、〈方法〉のことだった。

34
35 歴史的あるいは心理学的な方法によって、科学的、実証主義的な批評基準の確立を目指
36 すテーヌ、ブリュンチエール、プーリジェらに対して、ゴンクール兄弟やルナンの流れを
37 くむA.フランスやJ.ルメートルらは、芸術の世界における客観主義は疑似科学にすぎぬ
38 とし、批評家の任務は鋭敏で幅広い感性に刻みつけられた印象の忠実な記録にあると主
39 張した。

40 (『ブリタニカ国際大百科事典』「印象批評」)

41
42 私は、こういう専門的な話をしているのではない。普通の読み方について考えている。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1440 付度ごっこ
4 1442 野口さん

5
6 付度は日本の惨めな悪習だ。自分の考えを他人の考えと混同して威張る。

7
8 で、それから、もう一つは、今言われた日本近代文学の『こゝろ』論の歴史みたいなも
9 ので、最も浅薄と思われてることが深い意味があるような解釈として、この小説が読まれ
10 ていったという歴史があり、それはことによると、今日われわれが読んでいる現代小説に
11 も、これに似た、虚構の散文の論理として成立していないものを、われわれがあまりに多
12 くのことを考え過ぎて読んでやっているとということにもつながりませんか。例えば、誰の
13 小説でもいいわけなんだけれども、ことによると、『こゝろ』はそれよりも出来としては
14 惨めなものかもしれない。

15 (「[鼎談]『こゝろ』のかたち」における蓮實重彦の発言*)

16
17 「われわれ」は「あまりに多くのことを考え過ぎて読んで」やらなければならないような
18 日本社会に生きている。とにかく、〈目上の人が発信した情報には「深い意味」(下三十)が
19 ある〉と思ってやらなければならないのだ。

20
21 戦前、インテリ青年必読の書だった、西田幾多郎の哲学書は「絶対矛盾的自己同一」と
22 いったような難解語句が満載されているところから、いかにも深遠なような気がしてあ
23 りがたがった人が多い。私たちの旧制高校時代には、ベストセラーの筆頭は河上肇の『第
24 二貧乏物語』であった。そしてこれは、小学校へもろくにいかなかったような日傭い労務
25 者を含めた勤労階級を読者に予想したものであるにもかかわらず、これまたはなはだし
26 く難しい本だった。戦後では、^{はにやゆたか}埴谷雄高氏が難解ホークスの異名をとっている(東京新聞
27 昭和50年2月4日)。鶴見俊輔氏によると「進歩的学者の書くものは腹ごたえがしない」
28 という人がまだかなりいるという。しかし、教室でわかりいい講義をしていた教授に「も
29 っと難しい講義をしてくれ」とたのお学生はだんだんへっていきうよう(平井昌夫『言葉
30 の教室』II)、結構である。

31 (金田一晴彦『日本人の言語表現』)

32
33 この本で、金田一は『枕草子』の次の文を批判している。

34
35 少し日たけぬれば、萩^{はぎ}などのいと重^{おも}げなりつるに、露の落つるに枝のうち動きて、人も
36 手触^ふれぬに、ふとかみざまへあがりたる、「いとをかし」「いみじうをかし」といひたるこ
37 と、人のここちにはつゆをかしからじと思ふこそまたをかしけれ。

38 (清少納言『枕草子』「九月ばかり夜一夜降り明かしたる雨の」)

39
40 ククク……。野口さんだね。『ちびまる子ちゃん』(さくらももこ)の、あの暗い少女。
41 〈だよね。そういうの、「をかし」って、私もよく思うもん。友達になろうよ〉と言われ
42 たら、ナゴンはどうしたろう。ククク……。

43
44 *「漱石研究」第6号所収。

45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1440 付度ごっこ
4 1443 井戸茶碗

5

6 「純日本風の家屋」(谷崎潤一郎『陰翳礼讃』)など、ありえない。「純」と「風」は矛盾
7 するからだ。(独創かつ模倣)はナンセンス。朝鮮の「日常雑器」(『日本歴史大事典』「井戸
8 茶碗」)などを〈純東洋風〉と勘違いするのが「純日本風」の倭人の習性らしい。

9

10 日本人は、昔から「行間を読む」などという感覚があった。そして人の気持ちは”
11 以心伝心”で伝わるものだと思っている部分がある。心の細かいヒダの部分は「いわなく
12 ても察しなさい」ということである。

13 こうしたニュアンスは、欧米人には理解しがたいものである。彼らは奥ゆかしさとか心
14 の機微というようなものには価値を置かないのである。強烈な色彩の油絵を好む欧米人
15 と、墨絵のような淡くほのかな濃淡の絵を好む日本人の違いである。

16 この根底のひとつには、宗教の違い、そしてその宗教を受け入れた体質的な違いが影響
17 しているのではないか。

18 欧米には神はひとつとするキリスト教が根づいて、それに影響された西洋的な論理で
19 は、正しいものをひとつとする考え方がある。そこには中間的な曖昧な答えは存在しない。
20 イエスカノーか、ひとつの答えのみが要求されるという論理が植えつけられてきた。

21 しかし、日本においては絶対的な宗教は根づかなかった。そして神道や仏教が混在し、
22 神もあれば仏もある。あれもよし、これもありという考え方が存在しているのである。

23 (斎藤巫香里『道歌から知る美しい生き方』)

24

25 「行間を読む」という習慣は、漢文の訓読法がもとになっているのではなからうか。

26 「以心伝心」は「唐の禅僧、慧能に始る言葉」(『ブリタニカ』「以心伝心」)だそうだ。

27 「欧米人」はさておき、アフリカ人はどうか。「墨絵」は東洋画。白隠や蕭白は見た？

28 漆器つまり小文字のjapanは地味か。鉦太鼓の音は地味か。花火、旗印、武具、馬具、陣
29 羽織、金閣寺、九谷焼、日光東照宮、象嵌、歌麿、若冲、光琳、ねぶた、錦鯉、宗達、絵金、
30 団十郎、光悦、赤門、大文字焼きは地味か？ 桜も紅葉も地味か？

31 天使や聖母を小文字の〈神〉と考えれば、キリスト教も多神教だ。「イエスカノーか」は
32 山下奉文(『ブリタニカ』)の言葉。「ひとつの答えのみが要求されるという論理」は意味不明。

33 「あれもよし、これもあり」の真意は、〈それだけは無理〉だろう。初めは、何でもかん
34 でも無差別に受け入れるふりをする。だが、自分の願うような「美しい生き方」が続けられ
35 なくなりそうだと、不意に異物を排除する。「論理」がないからできるわけだ。

36

37 考えて見ると、私なぞは古代日本と朝鮮、シナ、南洋、或は阿蘭陀文化の雑種のような
38 ものである。そうした混淆した土俗・伝説・言語の間に育てられて、かえって同じ日本の
39 東北地方とは縁の遠い私たち児童であった。

40

(北原白秋『一握の花束』)

41

42 北原白秋は福岡県出身。彼は「国民詩人」(『ニッポニカ』「北原白秋」)とされる。

43

44

45

46

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1450 夏目宗徒
4 1451 読めない「人間の心」

5
6 『『こころ』の読めない部分』を書いていた頃、私には次の文が読めなかった。

7
8 後姿だけで人間の心が読める筈はありません。

9 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十八)

10
11 「後姿」は少女静のものだ。「人間の心」が読めなくて困っているのは、青年Sだ。

12 Sの想像する静は、「後姿」によってSに謎をかけている。その謎の「心」つまり女心
13 なら、Sにも想像できた。私にもできた。ほとんどの人にできるはずだ。それは〈あすな
14 ろ抱きする度胸ある?〉みたいものだ。ツンデレのツン。Sは、「あなたは余っ程度胸の
15 ない方ですね」(『三四郎』一)と言われたくなかった。伊東ゆかりが「いきなり肩を抱い
16 てほしくて ふりむかないの」(有馬三恵子 作詞・鈴木淳 作曲『あの人の足音』)と歌っ
17 ている。「御嬢さんの態度になると、知ってわざと遣るのか、知らないで無邪気に遣るの
18 か」(下三十四)と悩んだ。「わざと遣る」のは「技巧」(下三十四)で、「技巧なら戦争
19 だ」(『彼岸過迄』「須永の話」三十一)という展開になるのを避けたかった。ただし、須永
20 と違って、Sは〈信実のない「技巧」か〉とまでは疑わなかった。だから、女心とは別の
21 「人間の心」を仮定したわけだ。

22
23 然し私は^{おび}誘き寄せられるのが^{いや}厭でした。他の手に載るのは何よりも^{ごうはら}業腹でした。叔父
24 に^た欺まされた私は、これから先どんな事があっても、人には欺まされまいと決心したの
25 です。

26 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十六)

27
28 Sの警戒心は、「金に対して」(下十二)だけでなく、「愛に対して」(下十二)も働き始め
29 ていた。〈静はプロポーズをされたくて男に「技巧」を用いるのか〉という疑問を、Sは抱
30 いたわけだ。静がSを愛していたとしても、Sは「技巧」を許せない。だから、「もう一人
31 男が入り込まなければならない事」(下十八)になる。「もう一人男」はKだ。Sは〈「嫉妬」
32 (下三十四)か、「技巧」か〉という不合理な二者択一問題を拵え、〈「嫉妬」だから「技巧」
33 ではない〉と自己欺瞞するために、Kを引き入れた。

34
35 つまり、先生は実は^{ママ}お嬢さんの気持ちを^{ママ}後ろ姿から読み取ったにもかかわらず、その
36 「読み取った」という一言を書かなかったのです。だから、読者はあたかも先生が「見当
37 が付」かなかったまま、この場面を終えたかのような印象を持ってしまうのです。そのこ
38 とを含めて、この語り方を見破れるのは、先に言った「文学的想像力」を持った読者だけ
39 だと言うことができます。漱石は読者を信じていたのです。

40 (石原千秋『理想の教室 『こころ』大人になれなかった先生』)

41
42 意味不明の「文学的想像力」が自慢の連中を、私は私の読者として想定しない。邪魔。

43
44
45
46
47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1450 夏目宗徒
4 1452 読めない『Kの手記』

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

Sの自殺の動機は不明なのだが、あえて言えば、絶望に対する危惧だ。ただし、『こころ』の作者がこの危惧を文芸的に表現しているのではない。Nがこの危惧を人々に伝染させようと企んだだけだ。危惧を主題とする物語はない。物語のない危惧は〈不安〉と言うべきだが、『こころ』の作者が不安を描いているわけではない。

しかし、先生のもっとも痛切に感じたのは、最後に墨の余りで書き添えたものらしい、もっと早く死ぬべきだったのに、なぜいままで生きていたのだろうかという意味の言葉だった。

漱石がここでKに乗り移っているとしか思えないのは、Kの無意識にいたるまでを全身で知っているとしか思えないからです。Kならこうするに決まっている。決まっているそのことが、作者が決めるというよりも登場人物のKのほうからやってくる。むしろそれは読者にも分かる。だから、たとえば『Kの手記』といった小説が、漱石でなくともいくらでも書ける、そういうふうになっているということです。

(三浦雅士『漱石 母に愛されなかった子』)

「漱石がここで」三浦に「乗り移っているとしか思えないのは」漱石の「無意識にいたるまでを」自分は「全身で知っている」と三浦が思っていると「しか思えないから」だ。

こうした妄想を抱く人々が夏目宗徒だ。彼らは手前味噌の夏目宗を信じている。そして、Nの小説を聖典のように読む。そのとき、彼らは自分とNを混同する。かわいそうなKに乗り移る自分と、Kに乗り移るかわいそうなNを混同するわけだ。

「漱石が」は〈「漱石」の霊魂「が」〉などが適当。〈K〉は〈金之助〉の「^{かしらもんじ}頭文字」だから、「むしろ」KはNの分身だ。小説家が自分の心情を登場人物に仮託するのは、ありふれたことだろう。ところが、宗徒は神秘的なことが起きているように錯覚する。Nが〈KはNの分身だ〉という事実を隠蔽しているからだ。「むしろ」三浦に隠蔽の事実は知れない。彼は、Nの魂胆を「全身で知って」しまい、隠蔽された事柄を隠蔽されたまま感知し、そして、自分の感知した事柄を、やはり隠蔽したまま語る。口寄せのようなものだ。

「Kならこうするに決まっている」と作者が思うのは、普通のことだ。普通でないのは語り手Sだ。彼はかつての自分が「痛切に感じた」理由を隠蔽している。〈「そエのことが」～「Kのほうからやってくる」〉は日本語になっていない。「それ」は、どれ？

「だから」は無理。「いくらでも書ける」という気になってしまうのが夏目宗徒の、いわば症状。実際には、『Kの手記』を読んだような気に「なっている」だけのことだ。

『Kの手記』は読めない。それは「もっと早く」に起きた出来事から成るはずだ。物語を隠蔽したまま、その気分だけを伝達すること。これがNの企図だった。それは「一代の才人ウエルテル君がヴァイオリンを習い出した逸話」(『吾輩は猫である』十一)のような奇談であり、Nが思い出したくない体験だろう。の作者はそれを想像したくなかった。だから、Kを死なせ、Sを死なせた。口封じのためだ。P文書が再開しないのも、そのためだ。

Nは自分の記憶を自ら隠蔽するために、同種の記憶の持ち主を作品の中で黙らせた。

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1400 ありもしない「意味」を捧げて
3 1450 夏目宗徒
4 1453 読めない聖典

5
6
7

『こころ』は夏目宗の聖典だ。

8 夏目漱石自身が装幀した『^{こころ}』という書物（初版本）を、テキストとして読むために
9 は、私たち読者は、まず「心」という漢字（視覚文字）が大書されている箱から、書物を
10 とり出し、異なる書体で「心」と書かれた表紙、そして扉を開き、「上—先生と私」の最
11 初の言葉と出会うのである。固い箱の中に閉ざされた「心」を、テキストとして再生させ
12 るためには、私たちは、それを自らの行為、読むという行為によって開き、各頁の上にふ
13 っつてある「こころ」と出会うために、一つ一つの言葉を、自らの「こころ」の中に、血液
14 のように流しはじめねばならない。

15 (小森陽一『『こころ』を生成する^{ハート}心臓』*)

16

「テキスト」は、ノウかった文芸用語のふり。真意は〈聖典〉だろう。

17
18 小森はPに擬態し、SとNを混同している。「血のなかに先生の命が流れている」という
19 意味不明のPの言葉や、「その血をあなたの顔に浴びせかけよう」という意味不明のSの言
20 葉などを弄って、作品の解説をしたつもりになっている。楽な商売だ。

21

22 私はその時心のうちで、始めて貴方を尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から、或
23 生きたものを^{つか}捕まえようという決心を見せたからです。私の心臓^{マツ}を立ち割って、温かく流
24 れる血潮^{スサ}を^す啜ろうとしたからです。

25 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二)

26

27 「或生きたもの」って、結局、何だったのだろうか。Sが予想する「もの」とPが予想する
28 「もの」は、同じだろうか。あるいは、違っていてもいいのだろうか。Sが〈違っていても
29 いい〉と考えていたとしても、その「もの」がどんなだか知れないことには、〈違う〉とさ
30 え言えまい。Pは、その「もの」を^{つか}「捕まえ」たのだろうか。それはどんな「もの」だろう。
31 また、読者は、Pと同じ「もの」を^{つか}「捕まえ」ることができるのだろうか。あるいは、違う
32 「もの」でも構わないのだろうか。小森は、Pまたは読者と同じ「もの」を^{つか}「捕まえ」たの
33 だろうか。Pとは違うが、読者とは同じか。しかし、〈みんな違って、みんな素敵〉なら、
34 「受け入れる事の出来ない人」は皆無だろう。

35 ちなみに、この解説では、〈Sの死後、Pと静は「家族の領土の一員には決してなること
36 のない、自由な人と人との組み合わせを生きること」になる〉という異本が提示されている。
37 意味不明なので、〈貧乏なPは美魔女でセレブの静のセフレになる〉といったママ活を想像
38 して怒った人がいたようだ。私の異本では、『坊っちゃん』が原典になる。〈P＝「五分刈り」
39 ／静＝清〉だ。ただし、〈「五分刈り」と清は結婚した〉という異本もあるようで、この場合、
40 「五分刈り」は父の妾だったかもしれない清を娶ったことになる。親子井。この異本を利用
41 すると、〈Pは養母の静を娶るために養父のSを脅迫して自殺させた〉という話になりそう
42 だ。ただし、脅迫したのが無意識なら、このPに罪悪感はなかろう。

43

44 *『こころ』ちくま文庫所収。

45

46

47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1510 尻切れ蜻蛉
4 1511 自殺の美化

5

6 『こころ』は、現実逃避の身勝手な自殺を美化したものだろう。誰のためにも、何のため
7 にもならない自殺だ。では、なぜ、『こころ』は教科書などで推奨されてきたのだろう。日
8 本の教育関係者は、〈「向上心がないもの」は死ね）みたいなメッセージをひそかに送り続け
9 てきたのではないか。自殺大国と呼ばれる日本の現状と、意味不明の『こころ』が名作とさ
10 されてきたことの間、何の関係もないのだろうか。あるさ。

11

12 自己本位主義は、たんなる自殺の副次的な要因ではなく、その発生原因である。このば
13 あい、人びとを生におすびつけていた絆が弛緩するのは、かれらを社会におすびつけてい
14 た絆そのものが弛緩してしまったためである。では、直接に自殺を思いたたせる、決定的
15 条件のようにみえる私生活上の出来事はどうかといえば、それらは、じつは偶然的な原因
16 にすぎない。個人が環境の与えるごく軽微な打撃にも負けてしまうとすれば、それは、社
17 会の状態が個人を自殺のまったく格好の餌食に仕立てあげていたからにほかならない。
18 (エミール・デュルケーム『自殺論』)

19

20 Kの受けた「勘当」(下二十一)も、静が相手の「失恋」も、Kの自殺の「偶然的な原因」
21 だったのだろう。Kの自殺の真因は、彼が生きた「社会の状態」に求めるべきだろう。とこ
22 ろが、Kは「社会の状態」から目を背けて内向きになり、「精進という言葉」にすがって生
23 きていた。このように推測される。だが、作者の意図は不明。

24 『こころ』を和風『生ける屍』(トルストイ)つまり「偽善的な社会制度に適応できない主
25 人公プロターソフが、潔癖さのゆえに自殺する話」(『日本国語大辞典』「生ける屍」)みたい
26 に総括するのは無理だ。「偽善的な社会制度」について過不足なく表現されていないからだ。
27 Sは、「彼等が代表している人間というものを、一般に憎む事を覚えたのだ」(上三十)と意
28 味不明の啖呵を切っているが、実際には「彼等」つまり叔父一家との闘争からの逃走を美化
29 しているだけだ。〈人間を憎む〉などという台詞は、無差別殺人などをやった経験のある人
30 間吐くときにしか、真実味はない。Sは、ふざけた男だ。いや、作者が軽薄なのだ。

31 Kの耳元で、誰かが「もっと早く死ぬべきなのに」(下四十八)と囁いた。Kはこの誰かに
32 殺されたわけだ。その誰かは「社会の状態」を擬人化した架空の人格Dだ。Kは自分のこし
33 らえたDに殺された。Sも、S自身のDに殺されかけている。「私もKの歩いた路を、Kと
34 同じように辿っているのだ」(下五十三)という根拠のない思いは、〈KのDがKに作用した
35 の「と同じように」SのDがSに作用する〉といった妄想を少しだけ露呈した言葉だ。〈S
36 の物語〉の原典は〈Kの物語〉だ。ただし、Sの空想する〈Kの物語〉だ。この物語の主題
37 は、Nの〈自分の物語〉の主題と同じだろう。作者はこの主題を伝達しようと足掻いた。

38 ただし、作者がこのように表現しているのではない。むしろ、こうした真相を隠蔽してい
39 る。だから、皮肉にも、〈『こころ』は名作〉ということになっているのだ。Dの存在を隠蔽
40 することに成功しているから、名作なのだ。めげて自殺したくなるような「社会の状態」か
41 ら目を逸らし、じたばたするのを美化してくれるから、つまり、「煩悶や苦悩」を美化して
42 くれるから、『こころ』は名作なのだ。だろ？

43

44

45

46

47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1510 尻切れ蜻蛉
4 1512 小説のような夢

5

6 Nの小説は、どれも尻切れ蜻蛉だ。物語として終わっていない。このことに気づかない人
7 は、小説に限らず、どんな文章を読んでも、結論や結末があるのかないのか、あるとしたら
8 どんな結論や結末なのか、こうした問題に自信をもって答えることができないはずだ。

9 『吾輩は猫である』や『草枕』の終わり方は唐突だ。『坊っちゃん』は、〈「五分刈り」と
10 清の物語〉と〈「うらなり」と「マドンナ」の物語〉に分裂していて、そのどちらにも結末
11 がない。『三四郎』の終わり方もおかしい。次作の『それから』は、三四郎のそれからを描
12 いたものではない。また、『それから』の次作の『門』は、代助のそれからを描いたもので
13 はない。この三作は〈前期三部作〉と呼ばれているが、『門』も終わっていない。終わり方
14 が『門』に似た『道草』も終わっていない。『門』と『道草』の間に発表された『彼岸過迄』
15 と『行人』と『ころ』は〈後期三部作〉と呼ばれているが、それぞれが終わっていない。
16 『ころ』は『道草』と密接な関係がある。後者は前者の真相を暴露したものだ。つまり、
17 『ころ』の夫婦の実態が『道草』で描かれることになる。『明暗』は〈Nの死による中絶〉
18 ということになっているが、長生きしてもNには完成させられなかったろう。

19 『ころ』が現在の形で終わっているのは、新聞社との契約が主な原因だろう。〈『ころ』
20 の続きを書け〉と命じられたら、Nは平然としてP文書を再開したろう。

21 Nの作品は夢のようだ。夢のような小説ではない。〈小説のような夢〉の叙述だ。

22 物語としての終わり、作品としての終わりは違う。落語など、ほとんどが物語として終
23 わっていない。だが、落ちはある。むしろ、物語が終わっていない方が落語らしい。『芝浜』
24 (三遊亭円朝)などは物語が終わっているので、落ちが利かない。

25 小説や映画などで、わざと尻切れ蜻蛉になっているものはある。その典型が『女か虎か』
26 (ストックトン)だ。『タバコ・ロード』(フォード監督)や『モダンタイムズ』(チャップリ
27 ン監督)や『アパートの鍵貸します』(ワイルダー監督)や『卒業』(ニコラス監督)なども同
28 様。『四月の雪』(ホ監督)の劇場公開版も曖昧な終わり方をしていて、ディレクターズ・カ
29 ットには結末がある。こっちはつまらない。『13日の金曜日』(カニンガム監督)は終わり
30 切っていない。続編を期待させるような終わり方をしていて、当然のように続編が次々に作
31 られるが、どうにも終り切れず、凄惨ことになる。『ローマの休日』(ワイラー監督)にだ
32 って続編があってよさそうなものだが、誰がそれを期待しよう。『蒼のピアニスト』(SBS)
33 は、重要な出来事が隠されたまま、終わる。それは、韓ドラでしばしば描かれてきたような
34 出来事だろう。『5時から7時までのクレオ』(ヴェルタ監督)や『ロシュフォールの恋人た
35 ち』(ドゥミ監督)にも結末がない。ただし、結末は自明だろう。『硝子の微笑』(バーホベ
36 ン監督)の劇場公開版は、謎が解けていない。そのことは、ディレクターズ・カットを観る
37 と、はっきりする。

38 『ロンバケ』の終わり方やそれに似た『冬ソナ』の終わり方もおかしい。結婚式の場面が
39 ないからだ、どちらの作品でも結婚式が重んじられているのに。総集編の『ロンバケ』だと、
40 結婚式が始まりそうところで作品が終わってしまう。でも、いい。

41 『たけくらべ』(樋口一葉)のあの二人は再会すべきだ。『言の葉の庭』(新海誠監督)のあ
42 の二人は再会すべきだ。『小説 言の葉の庭』(新海誠)の二人は再会する。ほっ。

43

44

45

46

47

48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」

2 1500 さもしい「淋しい人間」

3 1510 尻切れ蜻蛉

4 1513 『壺坂靈驗記』

5

6 『こころ』には結末がない。結末とは、Sの死の有様とその後のPと静の物語だ。

7

8 「然しもしおれの方が先へ行くとするね。そうしたら御前どうする」

9 「どうするって……」

10 奥さんは其所で口籠った。先生の死に対する想像的な悲哀が、ちょっと奥さんの胸を襲
11 ったらしかった。けれども再び顔をあげた時は、もう気分を更えていた。

12 「どうするって、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定っていう位だから」

13 奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしくこう云った。

14 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三十四)

15

16 こんな話は夫婦だけでするものだ。しかし、Pという観客がいるからこそ上演できた仮面
17 夫婦の芝居だろう。ただし、作者の企画ではない。だから、読者は芝居と疑ってはいけない。

18 「笑談らしく」は〈本音を「笑談らしく」装って〉と解釈できる。困ったことだ。

19 Sは「もしあなたが生きてゐなけりやあ、わたくしも生きてはゐないわ」(シュニッツラ
20 ー『みれん』)と妻に言われたかったらしい。ただし、この甘い台詞はドラマティック・ア
21 イロニーだ。つまり、彼女自身には自覚できない嘘だ。

22

23 元来、夫は死んだのに死におくれている意の自称の語であったが、後、他人からいう語
24 となった。

25 (『日本国語大辞典』「びぼうじん【未亡人】」)

26

27 「寡婦殉死。語義は「貞節な妻」(『山川 世界史小辞典』「サティール」)という習俗を、
28 作者は暗示しているらしい。いや、Sが静に暗示し損ねているのだろう。

29 乃木夫妻は心中した。

30

31 私の眼は長い間、軍服を着た乃木大将と、それから官女みたような服装をしたその夫人
32 の姿を忘れる事が出来なかった。

33 (夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十二)

34

35 Sの空想する「殉死」の物語の原典は『壺坂靈驗記』だろう。

36

37 盲人の沢市は、女房お里が夫の目が見えるようにと壺坂寺観世音へ夜参りしているの
38 を知ってふびんがり、谷底に投身する。お里もあとを追うが、靈驗によって二人とも生き
39 返り沢市の目も開くという筋。

40 (『百科事典マイペディア』「壺坂靈驗記」)

41

42 これは「明治期新作浄瑠璃の代表作」(『ブリタニカ』「壺坂靈驗記」)とされる。

43

44

45

46

47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋^{きび}しい人間」
3 1520 Sの「死因」
4 1521 主人公はK

5

6 『こころ』の原典は『浮雲』だろう。『浮雲』の物語は終わっていない。

7

8 静岡県士族出身の内海文三は父の死後、東京の叔父園田孫兵衛の家に寄宿し、学問に励
9 み、優秀な成績で学校を卒業して下級の官吏になるが、それもつかのま、人員整理のため
10 失職する。話は、この文三免職の日から始まる。以降それまで半ば結婚を公認されていた
11 園田家の娘お勢との関係も冷えきり、社会的にも個人的にも自分の居場所を失い、2階の
12 自室に閉じ籠（こも）っていく。

13

(『日本歴史事典』「浮雲」高橋修)

14

15 「昇はお勢を弄んで捨て、文三は失望と身の不幸が重なって身を持ちくずし、発狂する
16 ことが予定されていた」(『日本近代文学大事典』「二葉亭四迷」)という。なぜ、この物語が
17 実現しなかったのか。理由は簡単だ。文体がばらばらだからだ。

18

19 高等中学生間貫一（はざまかんいち）と寄食先の娘鳴沢宮（しぎさわみや）の婚約が
20 資産家富山唯継（とみやただつぐ）の出現で破れ、のちに高利貸となった貫一は別離
21 を悔やお宮を容易に許さない。彼にあてた宮の悲痛な手紙が示されるところで終わって
22 いる。

23

(『日本歴史大事典』「金色夜叉」吉田昌志)

24

25 『金色夜叉』も未完。『モンテクリスト伯』（デュマ）のような終わりにならないのは、女
26 性蔑視の風潮が理由だろう。女性蔑視が悪いのではない。女性蔑視と恋愛が矛盾するからだ。
27 『受験生の手記』（久米正雄）は、ちゃんと終わっている。ただし、駄作。

28

29 一高入試に再度失敗した兄健吉が、弟健次に先を越され、恋人澄子との恋にも弟に破
30 れて、猪苗代湖に身を投げ自殺するまでの苦悩を描いたもの。

31

(『日本近代文学大事典』「久米正雄」関口安義)

32

33 『こころ』は、『浮雲』と『受験生の手記』の中間に位置する。『こころ』が中断したのは、
34 『金色夜叉』のような思想的限界のせいではない。『浮雲』とは別種の混乱のせいだ。複数の
35 の文体の混交のせいではなく、複数の物語の混交のせいだ。

36

	『浮雲』	『金色夜叉』	『こころ』	『受験生の手記』
37 敗者	文三	貫一	K	健吉
38 恋人	お勢	お宮	静	澄子
39 勝者	昇	富山	S	健次

41

42 『こころ』の主人公はKが適当なのだ。

43

44

45

46

47

48

49

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」

2 1500 さもしい「淋しい人間」

3 1520 Sの「死因」

4 1522 「寂寞」

5

6 Sの自殺の動機は不可解だ。

7

8 酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。然
9 し読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何の為に勉強するののかという質
10 問を度々受けました。私はただ苦笑していました。然し腹の底では、世の中で自分が最も
11 信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったの
12 です。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲し
13 かったです。私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるよう
14 な気のしたことも能くありました。

15 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十三)

16

17 「酒は止めたけれども、何もする気にはなりません」は〈酒を止めたので、あることをする
18 気になりました〉の逆だ。本文は〈あること〉を隠蔽している。主文は〈あることを「する
19 気にはなりません〉と〈何もするに気に「なりません〉の混交。

20 「仕方がないから書物を読みます」は意味不明。「仕方がない」は〈あることをするため
21 の「仕方がない〉の不当な略だろう。

22 「打ち遣って」おかないとすると、どうするのか。〈書物〉を使ってあることをすべきな
23 のに、しない〉という物語が暴露されている。

24 「何の為に勉強するののか」という問いに対する答えを語り手Sは隠蔽している。

25 「腹の底」は、普通、他人のもの。「世の中で」は不要。「最も」は「たった一人」と合わ
26 ない。「信愛」する対象は、異性ではなく、「人間」だ。不可解。「自分を理解し」は意味不
27 明。「悲し」は意味不明。つまり、無「理解」と悲哀の関係が不明。「悲しかった」は、形式
28 的には〈悲しくなった〉が適当。「自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を
29 理解していないのか」は、次の二文の混交だ。

30

31 I 〈「自分」を「最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのか〉

32 II 〈「自分が最も信愛しているたった一人の人間」に「すら、自分を理解」させられ「な
33 いのか〉

34

35 Sは、この二つの物語を不十分に表現している。あるいは、二つの物語のどちらもが真実
36 であるように暗示している。その場合、虚偽の暗示を試みていることになる。

37 「理解」が意味不明なので、「理解させる手段」がどのようなものか、「益」わからなく
38 なる。「勇気が出せる」ための「手段」はないのか。

39 「寂寞」は誤用に近い。〈不安〉などが適当。Sは不安の物語を隠蔽しているようだ。

40 「何処」って、たとえば？ Sは静から見捨てられたられたような気がしたのだろう。少
41 年Sは保護者に遺棄されたはずだ。その体験を、Sは自己自身に対して隠蔽している。「た
42 った一人住んでいるような気」がしたら、普通は呆けるはず。

43

44

45

46

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1520 Sの「死因」
4 1523 「失恋」と「死因」

5
6 「何処からも切り離されて」云々の続き。

7
8 同時に私はKの死因を繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配さ
9 れていた所為でもありましようが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Kは正し
10 く失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、
11 同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と
12 理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のようにたった一人で淋
13 しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなからうかと疑がい出しました。そ
14 うして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予
15 覚が、折々風のように私の胸を横過り始めたからです。

16 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十三)

17
18 「死因」は〈自殺の動機〉が適當。語り手Sは原因と動機を混同している。

19 一般には生命維持に必要な神経装置、心臓の拍動、外呼吸を停止させた変化をさす。

20 (『日本国語大辞典』「死因」)

21
22
23 〈「死因を」～「考えた」〉は意味不明。

24 〈「頭が」～「支配されて」〉は意味不明。実は、「恋の一字」という言葉によって、作者
25 は〈Kの「恋」の物語〉が空っぽであることを隠蔽している。

26 「直線的」は意味不明。

27 「失恋のために死んだ」という〈Kの物語〉は、まったく語られていない。

28 「現実と理想の衝突」を主題とする〈Kの物語〉は、十分に語られていない。

29 「淋って仕方がなくなった」は意味不明。

30 「辿っているのだ」は〈以前から辿っていたのだ〉という物語の暴露。

31 Sこそが「失恋のために」死にたくなつたのだ。この「失恋」とは、〈静の気持ちがSか
32 ら離れる〉ということ。Sは「恋」の敗者だ。Kは逆説的な「恋」の勝者かもしれない。

33 静は次のように語った。

34
35 先生は私を離れれば不幸になるだけです。或は生きていられないかも知れませんよ。

36 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十七)

37
38 Sが死にたくなつたのは、静の心がSから離れたからだ。そのように推測できる。ただし、
39 Sがそのように語るわけではない。だが、作者は暗示している。あるいは、暴露している。

40 Sの「死因」は「風」だろう。魔風だ。〈自殺の動機〉は、静による遺棄つまり「失恋」
41 だろう。『こころ』の作者は、神秘的な〈「風」の物語〉と通俗的な〈「失恋」の物語〉に二
42 股を掛けたが、どちらの物語も未完あるいは不発。虻蜂取らず。

43
44
45
46

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1530 隠者ハッター君
4 1531 窮状の露呈

5
6 Sはわりとよくあるタイプの根暗みみたいだが、断定はできない。彼の言葉が意味不明である
7 だけでなく、彼に関するPの「記憶」を語る言葉も意味不明だからだ。
8 『こころ』が私にわかりづらいのは、作者が前提にしている事柄と私が常識だと思っている
9 事柄が違うからかもしれない。ただし、どのように違うのか、よくわからない。

10
11 チョロのように、
12 ばかのふりしちゃだめだ。
13 ペロのように、
14 びくびくしてちゃだめだ。
15 チコのように、
16 ぶつぶついっちゃだめだ。
17 パッシーのように、
18 べらべらおしゃべりだめだ。
19 トラキチのように、
20 ぼやぼやしてちゃだめだ。

21
22 これは、きみが、きみで、いるための、しっかりまもる、

23
24 ば・び・ぶ・べ・ぼ・だぞ。
25 (ひがし くんぺい『ばびぶべぼだぞ、わすれるな。』)

26
27 これが常識。勿論、常識が真実とは限らない。だが、常識を無視したら、話は通じない。

- 28
29 ば 「彼の前に^{ひざ}跪まずくことを^{あえ}敢てしたのです」(下二十二)
30 び 「物足りるまで追窮する^も勇気を有っていなかったのです」(下十六)
31 ぶ 「馬鹿にされたんじゃないかならうかと、何遍も心のうちで繰り返すのです」(下十六)
32 べ 「私はしきりに人間らしいという言葉を使いました」(下三十一)
33 ぼ 「私はどちらの方面へ向っても進む事が出来ずに立ち^{すく}竦んでいました」(下三十五)

34
35 Sは、自分の駄目な部分を必死で正当化し続ける。正当化の究極が自殺だ。Sは「自分で
36 自分を殺すべきだ」と考えるが、この言葉に確かな意味はない。言うまでもなからうが、こ
37 れは〈誰かが「自分を殺すべきだ」〉と〈誰かを「自分で殺すべきだ」〉という文が混交した
38 ものだ。Sは、この言葉によって自分の窮状を語っているのではない。この言葉そのものが
39 Sの精神的窮状の露呈なのだ。

40 意味のある二つの文から本文の言葉を差し引くと、〈誰かが誰かを「殺すべきだ」〉となる。
41 「べき」があやしい。Sは、〈誰かを殺したい欲望〉と〈誰かに殺される義務〉を混同して
42 いるらしい。このことに作者が気づいていないのなら、読者も気づきようがない。

43
44
45
46
47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1530 隠者ハッター君
4 1532 中途半端な人

5

6 教育者としての隠者はよく知られていよう。好例は『スター・ウォーズ』（ルーカス監督）
7 のヨーダや『ベスト・キッド』（アヴェルドセン監督）のミヤギなど。太公望、諸葛孔明、
8 『モンテ・クリスト伯』（デュマ父）のフェアリア司祭、射手座になったケンタウロス族のケ
9 イロン、『宮本武蔵』（吉川英治）の沢庵、『レ・ミゼラブル』（ユーゴー）のミリエル司教な
10 ども思いだされる。

11

12 人はただおのれ自身だけを、自分の運命だけを望むことしか、ゆるされていない。そこ
13 へ行くのに、ピストリウスはある距離だけ役立ってくれたのである。

14

（ヘルマン・ヘッセ『デミアン』）

15

16 Pはどんな人物になったのか。そのために、Sはどんな役に立ったのか。不明。

17

18 亭主のテナルディエの方は、背の低い、やせた、色の青い、角張った、骨張った、微弱
19 な、見たところ病氣らしいが実はすこぶる頑健な男であった。彼のまやかしはまず第一に
20 そういう身体つきから初まっていた。いつも用心深くにやにやして、ほとんどだれに
21 でも丁寧であり、一文の銭をもくれてやらぬ食にさえ丁寧であった。目つきは鼯のよ
22 うでいて、顔つきは文人のようなふうをしていた。ドリーユ師の描いた人物などに似通っ
23 たところが多かった。よく馬方などといっしょに酒を飲んで気取っていた。だれも彼を酔
24 わせることはできなかつた。いつも大きな煙管で煙草をふかしていた。広い仕事着をつ
25 けて、その下に古い黒服を着込んでいた。文学に興味があり、また唯物主義の味方である、
26 と自称していた。何でも自分の説をささえるためにしばしば口にすると、三の名前があ
27 った。それはヴォルテールとレーナルとパルニーと、それから妙なことだが、聖アウグスチ
28 ヌスとであった。自分は「一つの哲学」を持っていると断言していた。が少なくとも、非
29 常なまやかし者で、尻学者であった。哲学者をもじって尻学者と称し得らるるくらいの男
30 はざらにあるものである。

31

（ビクトル・ユーゴー『レ・ミゼラブル』）

32

33 Sはテナルディエの同類みたいだ。ただし、断定はできない。本文が意味不明だからだ。

34

35 悟った人は、胸中に何の思い患うこともないし、愚かな人は、何も知らず何を考えるこ
36 ともない。この人達とは、ともに学問を論じ、また、協力して仕事をする事ができる。
37 ただ中途半端な知識人だけは、一通りの思慮知識がよけいにあり、それだけにあて推量し
38 疑い深いものが多い。こういう人とは、何事につけても共同して仕事をする事は難しい。

39

（洪自誠『菜根譚』前集二一六）

40

41 馬鹿と鉄は使いよう。切れない鉄は無用の長物。「淋しい人間」は、さもしい。

42

『菜根譚』は「こんな妙な本だ」（N『門』十八）と紹介されている。理由は不明。

43

44

45

46

47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1530 隠者ハッター君
4 1533 逆さまの隠者

5

6 Kは隠者になりたがっていたみたいだ。中年Sは一種の隠者だろう。

7 さて、隠者とは、どういう人だろう。「玄賓（げんびん）や増賀（ぞうが）、明遍（みょう
8 へん）など」（『ニッポニカ』「隠者」）といった名前が挙げられているが、同じ事典の項目と
9 して出ているのは雑賀だけだ。しかも、そこを読んでも彼の偉さは、わからない。

10 日本では、隠者とは「仏教的諦観に立って俗世間との交渉を断ち、和歌などを詠んだのが
11 特徴」（『ブリタニカ』「隠者」）なのだそう。だったら、〈隠者〉とは、〈隠者文学の作者を
12 気取る人〉ということになる。隠者ハッター君だ。彼らは、実際に俗世間と切れていたのだ
13 ろうか。鴨長明は「住まずして、誰かさとらん」（『方丈記』）と見得を切るために隠棲したみ
14 たいだ。隠遁は流行だったらしい。西行の「よしの山 やがて出でじ」（『新古今和歌集』1617）
15 というのはポーズで、彼の本業は政治工作員だったのかもしれない。松尾芭蕉は忍者かも。
16 隠者の典型について確認しておこう。

17

18 ある意味で、このカードは“愚者”に似ています。隠者はただひとり、道案内もなく旅
19 に出ているのです。

20 あたりは闇です。

21 彼の手にするランタンは内にひそむ光、すなわち良心を表わします。そのかすかな光明
22 が、おのが影を地上に投じ、行手を照らすのです。おかげで足もとの小石も、土地の割れ
23 目も避けて通ることが出来ます。

24 “人生は刺繍のようなものだ。作業の前半では正しいところだけが見え、後半では間違
25 ったところが見える”とは哲学者ショーペンハウエルの言葉です。

26 取りようによっては、このカードは次のことを意味します。

27 “隠者”はかたくなに過去の信念に固執し、新しい考えに理解を示しません。

28 その外套は無知を表わし、叡智は風のために遠ざけられます。ふとい杖は彼が固執する
29 ぶるい考えを示します。

30

（中井勲『タロット』「IX隠者」）

31

32 Sの「良心」（下四十二）は「行手」を照らさなかった。

33

34 カードが逆さまの場合—忠告に耳をかさず、自己の誤った判断を固執する人間を意味
35 します。援助を断わり、叡智をしりぞけ、必要以上に人を疑う人間をも意味します。

36

（中井勲『タロット』「IX隠者」）

37

38 逆さまの隠者は、愚者よりもまずい。愚者の場合、「急転直下問題が解決する可能性」（『タ
39 ロット』「0愚者」）があるから、まだ希望が持てる。なお、逆さまの愚者は、逆さまの隠者
40 によく似ていて、「無謀な衝動的行為から、大きな問題が生じます」（『タロット』「0愚者」）
41 と警告されている。Sは「衝動的行為」を繰り返した。「自殺」もその一種だ。

42 Sは逆さまの隠者だった。だから、当然、自滅した。何の「不思議」（上六）もないのだ。

43

44

45

46

47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1540 「覚悟」とか「主義」とか「人生観」とか
4 1541 「私の眼に映ずる先生」

5
6 Sについて、Pは何の根拠も示さず、次のように断言する。

7
8 私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。

9 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十五)

10
11 「眼」は怪しい。「たしかに」を受ける言葉がない。この文には、「私」以外の「眼に映
12 ずる先生はたしかに思想家」には見えないの「であった」という含意がある。

13 この文は、次のような循環論法を隠蔽しているはずだ。

14
15 〈Sが思想家であることはたしかだから、そのことを察したPの鑑定眼はたしかだ〉の
16 〈Pの鑑定眼はたしかだから、Sが思想家であることはたしかだ〉

17
18 青年Pは、自分自身を偉そうに見せかけるために、Sを担いでいたようだ。担ぎやすそう
19 な「年長者」のことを、ある種の青年は「先生」と呼んで神秘化するらしい。

20
21 私は一高の生徒としてその講演を聴きに行った。このとき初めて私は西田先生の^{けいがい}警咳
22 に接したのである。講演はよく理解できなかつたが、極めて印象の深いものであった。先
23 生は和服で出てこられた。そしてうつむいて演壇をあちこち歩きながら、ぼつりぼつりと
24 話された。それはひとに話すというよりも、自分で考えをまとめることに心を砕いていら
25 れるといったふうに見えた。時々立ち停って黒板に円を描いたり線を引いたりされるが、
26 それとてもひとに説明するというよりも、自分で思想を表現する適切な方法を模索して
27 いられるとといったふうに見えた。私は一人の大学教授をでなく、「思索する人」そのもの
28 を見たのである。私は思索する人の苦悩をさえそこに見たように思った。

29 (三木清『読書と人生』「西田先生のことども」)

30
31 「^{けいがい}警咳に接し」は「直接お目にかかる」(『広辞苑』「警咳に接する」という意味だ。
32 「ひとに話す」や「ひとに説明する」には、「人に媚びる」といった含意がありそうだ。
33 「西田先生」が何者であれ、青年三木に「思索する人」そのものと「思索する人」の
34 なりすましを区別することができたろうか。〈できた〉と思わせたいんだらうね。

35
36 思索などする奴は緑の野にあって枯れ草を食う動物の如しとメフィストに^{あさけ}嘲らるるか
37 も知らぬが、我は哲理を考えるように罰せられているといった哲学者(ヘーゲル)もある
38 ように、一たび禁断の果を食った人間には、かかる苦悩のあるのも已むを得ぬことであろ
39 う。

40 (西田幾多郎『善の研究』)

41
42 「思索などする奴」を見たら、悪魔は笑う。笑わない青年は天使か。

43
44
45
46
47
48

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1540 「覚悟」とか「主義」とか「人生観」とか
4 1542 「強い事実」

5
6
7

「私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった」という文の前後を読もう。

8 先生の覚悟は生きた覚悟らしかった。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪郭とは違
9 っていた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であった。けれどもその思想家の纏め上
10 げた主義の裏には、強い事実が織り込まれているらしかった。自分と切り離された他人の
11 事実でなくて、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりす
12 る程の事実が、畳み込まれているらしかった。

13 これは私の胸で推測するがものはない。先生自身既にそうだと告白していた。ただその
14 告白が雲の峯のようにであった。私の頭の上に正体の知れない恐ろしいものを蔽い被せた。
15 そうして何故それが恐ろしいか私にも解らなかった。告白はぼうとしていた。それでいて
16 明らかに私の神経を震わせた。

17 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十五)

18

19 「先生の覚悟」とは、「自由と独立と己れ」云々の意味不明の文を含む長たらしいだけで
20 具体性のない独白を指す。それが「覚悟」のように聞こえたPの耳を、私は疑う。「生きた
21 覚悟」は意味不明。「らしかった」だと、語り手Pの感想になる。語られるPの感想なら、
22 〈らしいと思った〉などが適当。以下の二文でも同様。

23 「火」は意味不明。「火に焼けて冷却し」は焼きなまし？ だったら、くにやくにゃ。「冷
24 却し切った石造家屋」や「家屋の輪郭」は意味不明。だから、「違っていた」は無駄。

25 「主義」が「覚悟」のことなら、言い換えた理由が不明。「主義の裏」も、「強い事実」も、
26 「事実が織り込まれて」も、〈裏には〉～「織り込まれて」も全部、意味不明。

27 「切り離された」の被修飾語が不明。「味わった事実」は意味不明。「血が熱くなったり脈
28 が止まったりする程の事実」は意味不明。「事実が、畳み込まれて」は意味不明。

29 「これ」の指すものが不明。「胸で推測する」は意味不明。

30 「そうだ」に相当するSの発言を、私は特定できない。

31 「雲の峯」が「入道雲」(『広辞苑』「くものみね」)なら、意味不明。

32 「頭の上」は意味不明。「正体」は、「遺書」において明らかになったのだろうか。「正体
33 の知れない恐ろしいもの」は意味不明。「おそろしい」は、「竹取」例などに見られるよう
34 に対象に対する主観的な恐怖を表わしたが、中世以降、対象が客観的に見ても恐怖の対象と
35 なる状態であることをも示すようになっている(『日本国語大辞典』「おそろしい」という。

36 「恐ろしい」が意味不明なので、「何故それが恐ろしいのか」という問題も意味不明。こ
37 の「私」つまり語られるPには、わからなかったとして、では、語り手Pには、わかっ
38 てるのか。『こころ』を読み終えても、この私には、わからない。

39 「ぼうとして」は、「自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったり
40 する程の事実」という言葉の雰囲気、そぐわない。

41 「それでいて」という展開は奇妙。〈明らかに〉～「震わせた」は意味不明。〈告白
42 が「神経を震わせた」〉は意味不明。

43
44
45

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1540 「覚悟」とか「主義」とか「人生観」とか
4 1543 「人世観とか何とか」

5
6 Sの意味不明の「覚悟」発言にPは衝撃を受けたらしいが、その心境や理由などは不明。
7 「それでいて明らかに私の神経を震わせた」の続き。

8
9 私は先生のこの人生観の基点に、或強烈な恋愛事件を仮定して見た。(無論先生と奥さんとの間に起った)。

10
11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十五)

12
13 「人生観」の中身は空っぽ。Pは「自分を大衆よりはすぐれていると感じ、その優越感を
14 絆(きずな)に同類の人間だけでグループを結成し、また結成しようと欲する人物」(『ブリ
15 タニカ』「スノップ」)と疑われる。『こころ』は「その作中に現れたある一人物ばかりが、
16 自分こそ物事を考えていると人々に思わす小説」(横光利一『純粹小説論』)だろう。

17
18 しかしながら、個人の大幅な自由と完成の可能性を前提とするこのような見解、そして
19 また、それと表裏一体といってもよい関係を持つ人生観という用語は、いずれも大正デモ
20 クラシーと大正教養主義という背景と密接な関連をもって初めて可能となったものである。
21 このことが、このことばを、その後社会科学的イデオロギー批判や精神分析といった
22 人間の思考の集団的、そしてときに無意識的な決定要因を強調する考えの洗礼を受けた
23 今日のわれわれに、いささか古めかしいものと感じさせるおもな要因になっていると考
24 えられる。

25 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「人生観」坂部恵)

26
27 静は、Pに向って、「あなたのいう人世観とか何とかいうもの」(上十九)と言っている。
28 人生観系の言葉は、明治の女子に通じなかったようだ。私にも通じない。

29 まだ意味が共有されていなかったのかもしれない「人生観」という言葉を、大正以降の日
30 本人は「古めかしいもの」として受け取る。そのとき、この言葉の意味が共有されていた時
31 代を無根拠に設定してしまうことになる。その時代を、漠然とした過去に設定するわけだ。
32 一方、『こころ』の読者は、明治後期から大正三年までに設定するはずだ。そのわずかな期
33 間が「自由と独立と己れとに充ちた現代」だろう。

34 語り手Pは「基点」という言葉によって、「この人生観」の内容が確固としたものである
35 ように見せかけている。だが、実際には意味不明なのだ。「或」は不可解。「強烈な」の被修
36 飾語が決まらない。『こころ』における「恋愛」が不鮮明なのをごまかすためだろう。「事件」
37 も同様に悪用されている。「恋愛」は「或強烈な」と「事件」のサンドイッチになっている
38 が、具になるべき〈「恋愛」の物語〉はない。「仮定して」みる動機は不明。

39 P文書で語られるSは、Pが「恋愛」を「仮定して」みたくなるように誘導していたか。
40 あるいは、語り手Pが聞き手Qを誘導しているのかもしれない。ただし、そのことに作者が
41 気づいていないのなら、読者も気づくべきではなからう。

42 「無論」じゃなくて、曲論だよ。物語の欠如を隠蔽するためのモザイクだろう。

43
44
45
46
47

1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1550 淋しい夏目語
4 1551 「貴方も淋しい人間じゃないですか」

5
6 浅薄な誤読を始末してしまおう。

7
8 「私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間じゃないですか」

9 これを読ませる、いや、聞かせる、いや、泣かせる科白というのではないか。大抵の人はこんな言葉に接すると、漱石先生から「貴方も淋しい人なんじゃないですか」と、直接
10 に語りかけられたような気持ちになってしまう。そしてわれとわが心を小説に没入させて
11 いく。ほとんどの現代人は自分を疎外された孤独な寂しい人間と思っているからであ
12 る。その意味からも、『こころ』は多くの人に読まれる作品であるといえようか……。

13
14 (半藤一利『漱石先生 お久しぶりです』)

15
16 Pは泣かされなかった。「私はちっとも淋しくはありません」(上七)と否定している。

17
18 「君も寂しがる性だね」と云って、大村は胡坐を搔いて、また紙巻を吸い附けた。「寂し
19 がらない奴は、神経の鈍い奴か、そうでなければ、神経をぼかして世を渡っている奴だ。

20 酒、骨牌、女。Haschisch」

21 二人は顔を見合せて笑った。

22 (森鷗外『青年』二十一)

23
24 Pは「神経の鈍い奴か、そうでなければ、神経をぼかして世を渡っている奴」なのか。

25 Sには「酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期」(下五十三)があった。では、
26 「Haschisch」は試したろうか。試さなかったとしたら、なぜか。

27
28 現代の人は 誰もが 何かココロのサビシサを 持っています

29 (藤子不二雄[Ⓐ]『笑ウせえるすまん』「瑞雲の杖」)

30
31 『青年』の大村は疎外感について下手に語っているらしい。

32
33 人間の社会活動による産物、たとえば、労働活動による生産物や社会関係、あるいは頭
34 脳活動による観念、思想、芸術などが、それ自身あたかも生命を与えられたように自己活
35 動し、それによって独自の力をもつかのように現れ、それらを生み出した人間自身に対し
36 て、逆に彼を支配してしまう疎遠な力として現れるようなことをいう。この状態では、人
37 間の活動は当の人間に属さない外的な、疎遠なものとなり、そのことによって、人間の本
38 質は取り除かれ、また他の人間との社会関係もゆがめられてくる。

39 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「疎外」似田貝香門)

40
41 「当の人間に属さない外的な、疎遠なもの」は、「不可思議な恐ろしい力」(下五十五)な
42 ど呼ばれている何かと同じだろう。ただし、『こころ』の主題は疎外ではなからう。

43
44
45
46

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1550 淋しい夏目語
4 1552 「淋しい笑い方」

5

6 Pが「淋しい人間」というSの言葉に泣かされていたら、あるいは、泣く真似をしていたら、『こころ』は喜劇だろう。

7

8

9 ジューリイの顔をださぬ舞踏会や、ピクニックや、芝居は一つもなかった。彼女の衣装
10 はいつも流行そのものであった。しかし、それにもかかわらずジューリイは、いっさいの
11 ことに幻滅した人のように見えて、だれに向かっても、自分はもはや友情も、恋も、人生
12 のどんな喜びをも信じない、ただ、あの世での心の平静を待つばかりだと言うのであった。
13 こうして、彼女はいつか、ひじょうに大きな幻滅を経験した娘——恋人を失うか、あるいは
14 恋人に手いたく欺かれるかした娘という調子を、わがものとしてしまったのである。彼女
15 には、そんなふうなことは何もなかったのだけれど、人々も彼女をそうした女として見て
16 いたし、彼女自身も、人生で多くの苦痛をなめてきたように思いこんでいた。この憂鬱
17 はしかし、彼女の陽気に楽しむことをさまたげなかったし、彼女のもとへ出入りする若人
18 たちの、愉快に時をすごす邪魔もしなかった。この家へ集まるほどの客はみな、いちおう
19 それぞれに、まず女主人の憂鬱な気分を義務をささげてから、あらためて世間話や、ダン
20 スや、知的遊戯や、カラーギン家ではやっていた作詩競技などにとりかかるのだった。た
21 だ、二、三の若い連中だけが、ボリースもその一人だったが、ジューリイの憂鬱な気分
22 に比較的深入りし、彼女のほうでもこれらの青年を相手に、浮世のはかなさなどについて、
23 人ませしない、やや長い語らいを持ったり、悲しい絵や、格言や、詩で埋められた自分の
24 アルバムを、ひらいて見せたりするのだった。

25 (レフ・ニコラエヴィチ・トルストイ『戦争と平和』)

26

27 夏目語の淋しい系の言葉の意味は混乱しているようだ。

28

29 「寂しい人だ」「寂しい顔」「寂しい表情」「寂しい笑いを漏らす」「試合に敗れ、寂しく
30 控え室に消えていく」など、それを、見る側が寂しさを感じるような様子とも（客観的な
31 属性）、相手自身が寂しく感じているとも（主観的な感情）二様の解釈が成り立つ。

32 前者は「寂淋しい感じの……」で言い換えられる。後者は「……そうな」を付けて「寂
33 しそうな顔」と言うべきだが、感情性の強い形容詞では省略されることが多い。

34 (森田良行『基礎日本語辞典』「さびしい」)

35

36 夏目語の淋しい系の言葉は、「客観的な属性」と「主観的な感情」の「二様の解釈」が同
37 時に成り立つ。たとえば、Sの「淋しい笑い方」(上七)は、〈Sは淋しそうに笑った〉とも
38 取れるし、〈Sの笑顔を見てPは淋しくなった〉とも取れる。

39 「寂寞」(下五十三)も同様。語られるS自身が「寂寞」の情を抱いているのか、語り手
40 Sから見た過去のSの有様が「寂寞」と形容されているのか、判然としない。

41 「淋しい」から〈そら恐ろしい〉つまり不安を経て「恐ろしい」に至るが、その対象が不
42 明なので「不可思議」という出発点に戻るのかもしれない。「ぐるぐる」だ。

43

44

45

46

47

- 1 1000 イタ過ぎる「傷ましい先生」
2 1500 さもしい「淋しい人間」
3 1550 淋しい夏目語
4 1553 パニック障害

5

6 日本語を初歩からやり直さなければならぬようだ。

7

8 うらさぶるころさまねし ひさかたの天のしぐれの流らふ見れば
9 (『万葉集』 卷第一・八二)

10

11 普通、さびしい系の日本語は静かな情緒を表す。

12

13 「さび」とは単に閑寂な素材を閑寂な用語で詠んだ閑寂な句をいうのではなく、対象を
14 見つめる作者の心が人生の無常をしみじみと感じとり、すべてをいとおしむ心の深さ、あ
15 たたかさがにじみ出る美的な気分をいう。

16

(『旺文社 全訳古語辞典』「さび」)

17

18 典型的な例。

19

20 中野のさと一之が家に秘めおける一卷物や、ざれ言に淋しみをふくみ、可笑みにあはれ
21 を盡くして、人情世態無常觀想残す處なし、

22

(小林一茶『おらが春』跋)

23

24 一方、夏目語のさびしい系の言葉が指す感情はかなり激しい。

25

26 けれども彼の淋しみは、彼を思い切った極端に駆り去る程に、強烈の程度なものでない
27 から、彼が其所まで猛進する前に、それも馬鹿々々しくなって已めてしまう。

28

(夏目漱石『門』二)

29

30 「淋しみ」のせいで「猛進する」可能性があるわけだ。「駆り去る」は意味不明。

31 園まりは「淋しくて 死にたくなっちゃうわ」(岩谷時子作詞・宮川泰作曲『逢いたくて
32 逢いたくて』)と歌う。この場合の欠如は恋人だが、甘えの誇張であり、本気ではない。

33

34 思い当たる原因はないが、突発的に強い不安や動悸(どうき)、めまい、呼吸困難など、
35 多くの身体的・精神的な発作に襲われ、死の恐怖や自分自身をコントロールできない症状
36 を起こすこと。

37

(『百科事典マイペディア』「パニック障害」)

38

39 結果として、「人込みにでるのが不安になり、行動や生活が狭められる可能性があり、う
40 つ症状がでたりすることもある」(『ニッポニカ』「パニック障害」)という。

41 Sの場合、「思い当たる原因」はある。それは、Kの死に対する罪悪感だ。しかし、それ
42 は偽装された「原因」だ。Sのいう「罪悪」(上十二)は意味不明なのだ。

43

44

45

46

47

48

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

第二章 不純な「矛盾な人間」

王さまの話は、はじまったばかりです。
はじまったばかりなのに、王さまは、もうたいくつしているのです。
なぜ？

(寺村輝夫『王さまきえたゆびわ』)

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2110 「私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた」
4 2111 「私^{わたくし}」は意味不明

5
6 『こころ』は、冒頭の第一文から意味不明だ。
7 『日本語の作文技術』(本多勝一)に、近代小説の書き出しが二十数例、紹介され、それに
8 『こころ』が含まれている。ただし、「文豪が必ずしも「わかりやすい文章」の手本になる
9 とは限らない」と断っている。「文豪が」は〈「文豪」の書いたもの「が」〉の略だろう。

10
11 私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた。
12 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

13
14 ウツとなる。「わたくし」と振ってあるからだ。この「私^{わたくし}」はPだ。

15
16 現代語としては、目上の人に対して、また改まった物言いをするのに使う。
17 (『広辞苑』「わたくし」)

18
19 語り手Pに対応する聞き手Qは、Pの「目上の人」なのか。あるいは、P文書の語りの場
20 では、「改まった物言い」をすべきなのか。

21
22 近世においては、女性が多く用い、ことに武家階級の男性は用いなかった。
23 (『日本国語大辞典』「わたし」)

24
25 Pは「武家階級の男性」みたいなのか。

26 ちなみに、「遺書」も「……私^{わたくし}はこの夏」(下一)と始まる。

27 『硝子戸の中』(N)の「私」に仮名は振られていない。どう読むべきか。

28 『吾輩は猫である』では、勿論、「吾輩」が用いられている。なぜ、Pは「吾輩」を用い
29 ないのか。「おれ」(中十四)や「僕」(下四十一)でないのは、なぜか。

30 『草枕』(N)や『カーライル博物館』(N)などでは「余」が用いられている。この代名
31 詞は「改まった、あるいはやや尊大な表現」(『日本国語大辞典』「よ【余・予】」)とされる。

32 『文鳥』(N)や『永日小品』(N)などでは「自分」だ。これも「男性が改まったときに
33 用いる」(『日本国語大辞典』「自分」)とされる。

34 ところで、主語は、なぜ、単数なのか。〈私達〉などでないのは、なぜか。P以外にSを
35 「先生」と呼ぶ人は皆無だったのか。静は「先生」(上十七)という言葉を用いている。だ
36 から、主語は〈「私^{わたくし}」と「奥さん」〉などが適当なのではないか。こうした含意はきちんと
37 読み取らなければならない。「私^{わたくし}」の含意が読み取れなければ『こころ』全体の雰囲気な
38 ども、うまく感じ取れないはずだ。Pの用いる「私^{わたくし}」とSの用いる「私^{わたくし}」の含意は同じ
39 か。違うか。違うとすれば、どのように違うのか。

40 日本語の人称代名詞の含意が読み取れなければ、日常生活でも支障をきたすことになる。
41 だからか、人称代名詞の使用は、日本ではできるだけ避けられる。二人称も、三人称も、特
42 別の理由がなければ使われない。日本語は、ややこしい。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2110 「私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた」
4 2112 「その人」と「常に」

5
6 「その人」はSだが、唐突にソ系の言葉が出てくると、面食らう。「その」は「話し手が
7 相手と共通で話題にしている事柄などを指す」（『明鏡国語辞典』「その」）からだ。

8
9 次にすぐ述べる事柄をさし示す。多く翻訳文などに用いる。「その名が忘れられない多
10 くの友だちがいる」「その母親が医者であるところの友人」

11 (『日本国語大辞典』「その」)

12
13 「翻訳文」みたいな堂々巡りのソ系の言葉はグレー・ゾーンを形成している。

14
15 1とそれ自身以外の約数を持たない、1より大きな整数を素数という。

16
17 数学の教科書に出てくる素数の定義です、知識として素数を知っていても、この文は読
18 みにくいな、と思う人も少なくないでしょう。ですが、この文はこのようにしか書けない
19 ので、どの教科書にもだいたいこの定義で書かれています。

20 「それ」の前に出てくる名詞は「1」しかありませんね。でも、「それ」が指すのは1
21 ではありません。「整数」です。

22 (新井紀子『A Iに負けない子どもを育てる』)

23
24 「読みにくいな」と思うような「どの教科書」も読みたくないな。

25 「この文はこのようにしか書けない」なんてことはない。「だいたい」は無責任。

26
27 1より大きい整数で、1とその数自身以外に約数をもたないようなもの。

28 (『日本国語大辞典』「素数」)

29
30 この文は読みにくくないな。「その数」は〈「前に出てくる名詞」句〉だ。

31 「常に」も困る。〈～であるときは「常に」〉の不当な略だが、〈あるとき〉が不明。

32
33 シャーロック・ホームズにとって、彼女はつねに「あの女性」である。ほかの呼びかた
34 をすることは、めったにない。ホームズの目から見ると、彼女はほかの女性全体の光を失
35 わせるほどの圧倒的存在なのだ。とはいっても、彼がアイリーン・アドラーに対して、恋
36 愛感情に似た気持ちを抱いているわけではない。

37 (コナン・ドイル『ボヘミアの醜聞』)

38
39 この「つねに」は誤訳かもしれない。「めったにない」と矛盾するようだからだ。

40 ワトソンの語る「恋愛感情に似た気持ち」について、シャーロッキアンの間で「激しい議
41 論の種になっている」(ベアリン・グールド『シャーロック・ホームズ全集3』) そうだ。

42 Sに対するPの「恋愛感情に似た気持ち」についても論じられてきた。

43
44
45
46
47
48
49

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2110 「私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた」
4 2113 「呼んで」は二股

5
6 〈「その人を」～「先生と呼んで」〉も、おかしい。

7
8 「CヲDト呼ぶ」の形で、その事物CがDという名称であることを表す。
9 人々がCをDと呼ぶことは、DがCの呼び名として定着することでもある。
10 (森田良行『基礎日本語辞典』「よぶ」)

11
12 語り手Sは、〈呼ぶ〉を次のように用いる。

13
14 私はその友達の名を此所にKと呼んで置きます。
15 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十九)

16
17 〈Sは「その友達」に向って《Kよ》と呼びかけた〉という話ではない。「此所」だけの
18 「名」だ。ただし、静は「Kさん」(下五十三)と言ったそうだ。無茶。
19 語り手Pは、〈呼ぶ〉によって、二種の物語を同時に、不十分に暗示している。

20
21 I 〈PはSに向かって「先生」と呼びかけていた〉
22 II 〈PはSのことを誰かに語るとき、「先生」という呼称を用いていた〉

23
24
25 「呼んでいた」には、〈今は「呼んで」いない〉という含意がある。P文書の語りの時点
26 でSは物故者だから「いた」でよさそうだが、この含意はIでしか活きない。

27
28 動作動詞でも、打消や「ている」「受身」などの付いた形は状態性を帯びて、回想意識
29 が生まれる。

30 「あなたはうちわをかざして高いところに立っていた」(夏目漱石『三四郎』)
31 (森田良行『基礎日本語辞典』「た」)

32
33 本文の「呼んでいた」は「回想意識」の表現なのかもしれない。その場合、Pは、Iだけ
34 でなく、IIをも回想していることになる。奇妙だ。

35 『三四郎』の「立っていた」は尻すぼみだ。つまり、「立っていた」は〈「立っていた」こ
36 とを私は覚えています〉などと補足したくなる。『こころ』の「呼んでいた」の場合、そう
37 した印象はないのだが、語り手Pは中断しているのかもしれない。「先生と呼んでいた」は
38 〈「先生と呼んでいた」ことを思い出す〉などと補足すべきなのかもしれない。

39 この場合、IとIIが混交しそうだ。「いた」という言葉には、〈呼びかけて「いた」〉と〈呼
40 称を用いて「いた」〉という二つの物語を混ぜ合わせるような作用があるのかもしれない。
41 そして、こうした朦朧とした印象を感得できる人は、書き出しの一文を読んだだけで陶然と
42 なるのかもしれない。語り手Pの混迷が聞き手Qを越えて読者に伝染するわけだ。

43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2120 「先生」は意味不明
4 2121 「先生先生と呼び掛けるので」

5
6 S自身、最初の頃は「先生」と呼ばれて戸惑ったらしい。

7
8 私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。私はそれが年長者に対する私の
9 口癖だと云って弁解した。

10 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三)

11
12 「苦笑い」の理由は不明。この私が笑われたようで、いらいらする。

13 「それが」は〈「それ」は〉が適当。「が」のままなら、〈「それが年長者に対する私の口癖
14 だ」ということをお気づきにならないとは思ってもよらなかった〉などとすべきだ。「弁解」
15 に普通の意味があるとすれば、「苦笑い」は不快の表現だったことになる。「年長者」以外の
16 条件を青年Pは隠蔽している。隠蔽にSは気づいている。「口癖」には、びっくり。

17
18 「癖」は、もともと悪いこと^{わる}です。ところが、最近^{さいきん}、「きちんとあいさつをする癖^{くせ}をつ
19 けましょう」などど、よいことにも使^{つか}われるようになってきました。これには、曲者^{くせもの}もび
20 っくりしていることでしょう。

21 (川嶋優『満点ゲットシリーズ ちびまる子ちゃんの読めると楽しい難読漢字教室』「曲者」^{くせもの})

22
23 「最近」が戦後なら、Pの「口癖」という言葉は自嘲の表現だろうか。

24
25 先生とおだてているつもり^{つめり}の者を制する言葉。

26 (『広辞苑』「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」)

27
28 「先生と呼ばれるほどの馬鹿でなし」を思い出して、Pは「弁解した」のだろう。

29
30 併し名前抜きの『先生』の呼称^{よびな}を以て、自分も怪^{あや}まず、仲間の間にもそれだけで通用し
31 て来たのはただ二人だけである。一人は夏目先生、もう一人はケーベル先生。

32 (阿部次郎*)

33
34 「先生」の安部的含意は不明。「自分も怪まず」は意味不明。名無しの「二人」を阿部の
35 「仲間」は区別できるらしい。「ただ」と「だけ」は重複。『こころ』の本文も同じ間違いを
36 している。「先生」と呼ばれると、「その人」の株価^{かぶ}が上がり、配当も増える。「二人だけ」
37 なのを、なぜか、威張^{おご}っている。常識的には〈「ただ」一人〉なのがめでたかろう。

38 「先生」の本家本元は「ケーベル」だろう。彼は「賜暇帰国などで講義を中断することも
39 なく、文字どおり一身を講義と学生指導に捧(ささ)げた」(『ニッポニカ』「ケーベル」)と
40 いう。「先生が疾^とくに索^{さく}寞^{ぼく}たる日本を去るべくして、未だ^{いま}に去らないのは、実にこの愛すべ
41 き学生あるが為^{ため}である」(N『ケーベル先生』)という伝説が流布されていたらしい。

42 Sは〈伝説の「先生」〉としてPに担^たがれたらしい。満更でもなかったか。

43
44 *唐木順三『漱石の周辺』より再引用。

45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2120 「先生」は意味不明
4 2122 「若々しい書生」

5
6 〈先生〉という呼称を、教師でも医師でも弁護士でもない人に用いると、誤解を招く。

7
8 先生と呼んで灰吹き捨てさせる (初・38)
9 (気の付かぬ事 / \) (宝十二・梅3)

10
11 これも有名な句で、長屋に住む寺子屋の師匠などが、表には尊ばれて、裏では軽蔑され
12 ていることを、煙草の「灰吹き」で表現した句である。

13 (山路閑古『古川柳名句選』)

14
15 〈先生〉は〈書生〉に対応する言葉だろう。

16
17 その時私はまだ若々しい書生であった。
18 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

19
20 「若々しい」には「馬鹿^{ばか}気^げている」(上六)という含意がある。「書生」には「他人の家に
21 世話になり、家事を手伝いながら学問する者」(『広辞苑』「書生」)という意味がある。ただ
22 し、Pがこうした意味での「書生」だった様子はない。

23
24 実際書生が代助の様な主人を呼ぶには、先生以外に別段適当な名称がないと云^{ママ}うこと
25 を、書生を置いてみて、代助も始^{ママ}めて悟ったのである。

26 (夏目漱石『それから』一)

27
28 この「先生」の含意は「主人」だ。Pは、この含意をQに否定させようとしているか。

29
30 これ実に他人の言葉です。他人の親切です。居候^{いそうろう}の書生に主人の先生が示す恩愛です。
31 (国木田独歩『運命論者』)

32
33 語り手は高橋信造で、「言葉」を発したのは、その父の高橋剛蔵だ。したがって、「主人」
34 と対比されるのは〈父〉だ。つまり、〈先生=主人 or 父〉だ。

35 「先生」は隠語めいている。だが、隠語ではない。意味不明だからだ。

36
37 隠語にはまた、他人にわからないことばを使うことで仲間意識を強める、特別なことば
38 を考え出して使うことで単調さを破る、といった効用もある。「ゲルピン」(金に困ってい
39 る状態)、「バックシャン」(後ろ姿美人)のような語では、その性格が強い。

40 (『日本大百科事典 (ニッポニカ)』「隠語」尾上圭介)

41
42 「先生」は「仲間意識を強める」という目的で用いられた隠語まがいの自分語だろう。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2120 「先生」は意味不明
4 2123 「先生先生というのは一体誰の事だい」

5
6 「知らんと云った事のない先生」(『吾輩は猫である』一)の「先生」という言葉には、からかいの気分がある。この「先生」が本物の教師だとしても、からかいの気分が認められる。

7
8 Sの呼称としての「先生」にも、からかいの気分が含まれているのだろう。ただし、それは、からかいの気分を逆手に取ったものだ。Pは、世間の人々のからかいの気分を逆転させ、その分だけ親しみを増大させているようだ。「先生」という呼称が不適切であることを十分に承知しているからこそ、あえてこの呼称を用いたのだろう。

9
10 語られるPは、Sを「先生」と呼んでいる自分を人々に見せつけることによって、〈Sを「先生」と呼べない人は愚かだ〉という暗示を試みていたのではなかろうか。そうした企図は、実際には成功しなかったので、Pは語り手に成り上がり、自分にとって都合のいい聞き手Qに向って師弟伝説を語っているわけだ。さらに、相方のQが素直に耳を傾けてくれている様子を、聴衆Gに妄想させている。このGは、『こころ』の読者と区別できない。したがって、作者は読者に対して虚偽の暗示をかけていることになる。

11
12
13
14
15
16
17
18
19 「先生先生というのは一体誰の事だい」と兄が聞いた。
20 (夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十五)

21
22 Pの「兄」は、Pの魂胆を皮肉っぽく疑ってみせている。
23
24 兄 御前が「先生先生」とわざとらしく甘えたように呼んでいるのは一体どんな人だい。

25
26 「兄」は、Sの正体を疑うと同時にPの性根を疑い、師弟関係をも疑っている。「兄」が疑うのは、当然だろう。「兄」は普通の人だ。ところが、Pは「兄」を蔑む。そして、そんなPを、作者は蔑まない。そんな作者は変だろう。だから、『こころ』は変なのだ。

27
28
29
30 「柿本先生の御返書です」
31 と、若者がきめつけるようにいい、書状を大治郎^{ママ}へわたした。そのことばづかひも非礼
32 きわまるものだ。おのれの師を他人の前で「先生」と敬^{うやま}ってよぶ。師は〔師父〕ともい
33 う。わが父同然の人を他人の前で敬称^{ママ}することなど、ばかばかしいかぎりであるし、しかも「御返書」などとも^{ママ}ったいをつける。あきれはてたものだ。
34
35 (池波正太郎『剣客商売』)

36
37 この「若者」と同様、青年Pも「あきれはてたもの」と評されてしかるべきだ。
38 大治郎は好青年として描かれている。『剣客商売』は、何度もドラマになっているし、漫画にもなっている。多くの日本人に愛されているのだろう。だから、日本人の常識では、自分の師を他人に向かって「先生」と呼ぶPは「あきれはてたもの」であるはずだ。

39
40 怪しげなPが語り手であるP文書を、普通の日本人なら、怪文書かと疑うはずだ。また、こんなおかしいPに尊敬されていたSの「遺書」にも信を置かないはずだ。

41
42
43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2130 夏目宗
4 2131 若者宿

5

6 「先生」のP的含意は、〈「本当の父」のような「年長者」〉だろう。ただし、このように
7 言い換えてしまうと、価値がなくなるようだ。ちなみに、「第二の親子」(『明暗』二十)も
8 意味不明。「先生」という言葉の価値と、Sという人物の価値は、仕分けできない。

9

10 坂本弁護士一家殺害事件の実行犯のひとりである岡崎(現・宮前)一明死刑囚は、「尊
11 師は父であり母であるような人」と語ったことがある。現代社会では家庭機能における
12 「父性」の役割がしばしば問題となる。その欠落を教祖たる麻原が埋めていた側面もまた
13 忘れてはならない。

14 (有田芳生『文学的想像力の欠如が若者を今もカルトに走らせる』*)

15

16 岡崎にとって、「尊師」の含意は「父であり母であるような人」だ。では、麻原と信者た
17 ちは、この含意を共有していたろうか。その可能性はなさそうだ。信者たちは、不安を抱え
18 たまま、「尊師尊師」と合唱していたろう。不安な人々は合唱する。彼らは、不安な自分を
19 愛するように不思議な麻原を愛したろう。麻原の罠に落ちたか。

20 「先生」という言葉のP的含意も「父であり母であるような人」だろう。だが、Sは、「先
21 生」のP的含意をPと共有しようとしなかった。Pを自分に依存させるためだ。馬の前に吊
22 り下げる人參。同じことを、PはQに強いている。読者も、Qのように、Pに依存しなけれ
23 ばならない。そうでないと、『こころ』の言葉のおかしさには耐えられない。

24

25 私は又軽微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く気にはなれな
26 かった。寧ろそれとは反対で、不安に揺かされる度^{うご}に、もっと前へ進みたくなった。

27

(夏目漱石『こころ』「上 先生と私」四)

28

29 オウム真理教のサティアンなるものは、若者宿のようなものだったろう。

30

31 若者宿あるいは娘宿として家屋の一部を提供する家の主人。一定年齢に達した若者、娘
32 はその主人と宿親・宿子という儀礼的親子関係を結んで宿入りするところもあり、若者は
33 毎晩宿に泊りに行くことで村人としての訓練を宿親から受け、さらに結婚に際しては宿
34 親が仲人をすることが多かった。

35

(『ブリタニカ国際大百科事典』「宿親」)

36

37 Pは、S夫妻の宿子のようになる。一種の「貰^{もらい}ッ子^こ」だ。Pは、夫に対して母性的な妻
38 としてふるまえない静に息子として甘えることによって、彼女の母性を目覚めさせる。Sに
39 にとっての理想の妻として育った静を、PはSに提供する。その後、S夫妻に「仲人」をやっ
40 てもらおうとしたか。

41 Pは、S夫妻の愛しあう様子を観察して、男と女のE関係を学びたかったようだ。自分の
42 両親が不仲だからだ。

43

44 *『オウム全記録』(「週刊朝日」緊急増刊2012年7月15日発行)所収。

45

46

47

48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2130 夏目宗
4 2132 「見付出したのである」

5
6 Pは、Sと出会う前から、「先生」と呼んでみたい人を探していたはずだ。

7
8 私は実に先生をこの雑沓の間に^{ざっとう} ^{あいだ}に見付出したのである。

9 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

10
11 「私」はPだ。「実に」の被修飾語が不明。
12 この時点のPは、Sのことをまったく知らない。だから、「見付出した」は不適當。

13
14 入りまじっているものの中からある物を見わける。発見する。見出す。「人ごみの中
15 から友人を一・す」

16 (『広辞苑』「見付け出す」)

17
18 「君を見つけた この渚に」(鳥塚繁樹作詞・加瀬邦彦作曲『想い出の渚』)の「見つけた」
19 を、岩谷時子が批判したそうだ。主人公の男子がプレイボーイみたいだからだ。
20 本文は、「見付出した」ような気がした「のである」などが適當だろう。語り手Pが混
21 乱していないとしたら、作者が混乱しているのだろう。

22 「先生」のイメージを、青年PはSを知る前から思い描いていた。この「先生」を中心に、
23 青年たちが円陣を組む。Pは、「先生」の一番弟子となって、その他大勢の弟子たちの上席
24 に坐りたかった。Pは丸尾くん(さくらももこ『ちびまる子ちゃん』)なのだ。Nのファン
25 も丸尾くんに違いない。ズバリでしょう。

26 ただし、語り手Pは、Sと出会う前の「先生」の像を思い出せない。Sと出会ったせいで、
27 以前のぼんやりとした「先生」の像を具体的なS像が覆ってしまったからだろう。

28 『こころ』のファンも、『こころ』を読む前から、彼らなりの「先生」の像を思い描いて
29 いるのだろう。『こころ』を読みながら、徐々に自分の「先生」の像にS像が、そして文豪
30 N像が塗り重ねられていく。そうした体験が心地よいのに違いない。

31
32 わたしは、世人の知る歴史を匿名の年代記の下に消滅させて、楽しんでいたのであった。
33 それは、透明な生活を営んでまったくひとめにつかず、孤独に生きて、世のだれよりも先
34 がけて^{ことわり}理を知っているひとたちだ。

35 (ポール・ヴァレリー『ムッシュー・テスト』)

36
37 語り手Pは、この種の真相を聞き手Qに対して隠蔽している。ところが、「見付出したの
38 である」という言葉によって〈隠蔽した真相がある〉という事実を露呈してもいる。Nの文
39 章の基本的なスタイルだ。癖。辟易。

40 語り手Pは、記憶を失ったのかもしれない。あるいは、嘘つきかもしれない。語り手Pは
41 複数の〈自分の物語〉を往還しているようだ。作者は、語り手Pを嘘つき、あるいは忘れっ
42 ぽい人として設定しているのだろうか。不明。だから、『こころ』は読みづらい。

43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2130 夏目宗
4 2133 最上級の尊称

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

Pが瀕死の父を見捨てて上京することを美談として読むには、〈SはPの父だ〉という物語を重ねて読まねばならない。Sは、Pにとって神秘的な「本当の父」なのだ。二人は、そのことを徐々に認め合うようになっていくらしい。だが、二人とも公言しなかった。語り手Pさえ、彼にとって都合のいいはずの聞き手Qに対して明言しない。この物語は、暗黙の了解によって成立するものだからだ。作者も読者に対して暗示していない。暗示すれば、SもPも妄想家ということになる。明示すれば、『こころ』はファンタジーになる。

筑前 苺萱庄（かるかやのしょう）、松浦（まつら）の党総領、加藤左衛門繁氏（しげうじ）の子。13歳のときに、出家していた父の刈萱道心（どうしん）を高野山（こうやさん）に訪ねたが、父はわが子と知りながら名乗らずに別れる。のちに石童丸は母や姉と死別してから高野山に上り、苺萱の弟子となって道念坊と称したが、ついに親子の名乗りはせず、父子ともに同時刻に往生を遂げ、信濃善光寺の親子地蔵として祀（まつ）られる。
（『日本歴史大事典』「石童丸」 関山和夫）

青年Pの〈自分の物語〉の原典の一つは『石童丸』だろう。

石童丸は刈萱道心が父であることを知らなかった。だからこそ、「父子ともに同時刻に往生を遂げ」という奇跡が起きたのだ。Pの〈自分の物語〉において同種の奇跡が起きるためには、「親子の名乗り」をしてはならない。Pが、〈Sは父であってほしかった〉などと思ったら、奇跡は起きないのだ。だが、実際には、思っていたらう。

誰かが「親子地蔵」の因縁を語った。同じように、誰かが〈SとPは神秘的な親子だった〉と語る。その誰かはQだろうか。あるいは、Rだろうか。どちらにせよ、そんなことが起きるとは考えられない。だが、どこかで誰かが〈SとPは親子だった〉と語っているようなのだ。その誰かは、『こころ』の読者だろう。作者にとって都合のいい読者だ。

〈SとPの神秘的な親子の物語〉は、きちんと終わっていない。読者は、これを補填して語り継ぐ義務を負わされている。

Pにとって、「乃木大将の死ぬ前に書き残して行ったもの」（下五十六）は、Sの「遺書」と比べて、思想的に貴重ではない。Sは乃木よりも上なのだ。「渡辺華山」（下五十六）に匹敵しよう。Sの死後、PはSの一番弟子として故郷に錦を飾る。「兄」は父の葬儀の喪主だが、Pは「明治の精神」を体現したSの葬儀の喪主を務めたのだから、格が違う。SはPの実父より偉い。だから、Pは「兄」より偉い。

この物語の聞き手は誰だろう。Pの「兄」だ。また、「兄」のような俗物どもだ。作者の何かを「受け入れる事」（下二）ができる読者に擬態したまま、『こころ』の世界から抜けられずに生きている人は、『こころ』について語るとき、偉そうな顔をする。勘違い。滑稽。

死によって、SはKと合体し、そのSとPも合体して「新しい命」（下二）を形成する。『こころ』の読者は〈 $P+S+K=N$ 〉という奥義を感得すべきなのだろう。こうした神秘主義を〈夏目宗〉と呼ぶ。『こころ』は夏目宗の聖典だ。夏目宗において、「先生」は、〈尊師〉や〈主〉などに似た最上級の尊称なのだろう。

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2140 「此所」はどこ？
4 2141 「ただ先生と書くだけで」

5
6 『こころ』の冒頭の第二文は、第一文の不備を補おうとして傷口を広げる。

7
8 私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所^{こゝろ}でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。

9
10 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

11
12 「だから」は、「此所^{こゝろ}でもただ先生と書くだけで」までしか関わっていない。
13 「あんたのお名前、なんてえのお？」と、トニー谷が算盤を弾きながら歌うと、聞かれる素人はツイストを踊っていたっけ。思い出しただけ。

14 閑話休題。

15
16 〈「私はその人を常に先生と呼んでいた」の「だから此所^{こゝろ}でもただ先生と書くだけ」にする。ただし、「先生」の「本名は打ち明けない」でおく。その理由は次に述べる〉

17 このように語るのが日本語として適当だ。

18
19 「此所^{こゝろ}」はどこ？ 「此所^{こゝろ}」がどのような性質の場所なのか、判然としないので、「本名」を秘匿する理由が推量できない。「本名」を明示しても、その後、「先生」で通すことはできる。たとえば、P文書では「静^{しず}」と明記されているが、語り手Pは「奥さん」で通している。
22 「ただ先生と書くだけ」の「ただ」と「だけ」は重複。「ただ」が名前みたいだ。

23
24 ① 過去のPは、Sに向かって、「本名」を用いず、「先生」と呼びかけた。

25 ② 過去のPは、Sについて誰かに語るとき、「先生」という呼称を用いた。

26 ③ 「此所^{こゝろ}」の語り手Pは、Sについて語るとき、「先生」という呼称を用いる。

27 ④ 「此所^{こゝろ}」の語り手Pは、聞き手Qに対して、Sの「本名」を秘匿する。

28
29 冒頭の二文の本筋は〈②→③〉だ。〈①→②〉というのは幼稚。他人には通じない。青年Pは、現実の②の場面でも、③のような物言いをしていたのだろう。つまり、Sが生きているときからPは〈SとPの物語〉の語り手だったわけだ〈③→④〉は唐突。

30 以上を繋ぐと次のようになる。

31
32
33
34 ① … ② → ③ … ④

35
36 〈…〉は弱い流れを表す。①と④は、ほとんど無関係なのだ。何らかの関係があるとすれば、語り手Pは次のような真相を隠蔽しているのだろう。

37
38 〈過去のPはSについて語るとき、誰にもSの「本名」を打明けなかった。「だから此所^{こゝろ}でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない」でおく〉

39 語り手Pは、〈青年PがSの「本名」を秘匿していた理由〉そのものを秘匿しているわけだ。ただし、秘密めかした気分を伝達しようとしている。暗示による忖度の強制。この文は謎めいているが、謎ではない。

40
41
42
43
44
45
46

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2140 「此所」はどこ？
4 2142 「受け入れる事」

5

6 思想には二種ある。〈広場の思想〉と〈密室の思想〉だ。

7 「此所」が広場なら、そして、Sが「一人の罪人」なら、〈静を含めた関係者の名誉のため
8 に「本名は打ち明けない」という判断は妥当かもしれない。

9

10 古代ギリシアのポリスの公共建築物や柱廊に囲まれた広場。市場にも使われ、市民が政
11 治、哲学などを論じて閑暇を過ごしたポリス的生活の中心。

12 (『ブリタニカ国際大百科事典』「アゴラ」)

13

14 「此所」は密室らしい。ただし、PとQの関係は不明。

15

16 結社への加入に際してイニシエーション(入社式)を施し、会員が組織内部の位階に応
17 じた秘儀を通過し、人間存在を変革していくこと自体に結社の存在理由をみいだしてい
18 る。

19 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「秘密結社」綾部恒雄)

20

21 「人間存在」は意味不明。

22 「遺書」が読み上げられる「此所」で、「入社式」が催されるようだ。

23

24 私の過去は私だけの経験だから、私だけの所有と云っても差支ないでしょう。それを
25 人に与えないで死ぬのは、惜いとも云われるでしょう。私にも多少そんな心持があります。
26 ただし受け入れる事の出来ない人に与える位なら、私はむしろ私の経験を私の生命と共
27 に葬った方が好いと思います。実際ここに貴方という一人の男が存在していないならば、
28 私の過去はついに私の過去で、間接にも他人の知識にならないで済んだでしょう。

29 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二)

30

31 〈「過去」は「経験」で「所有」で「人に与え」られる〉らしい。意味不明。

32 「過去」の何を「受け入れる事」になるのか。〈「経験を」～「葬った」〉は意味不明。

33 「私の過去はついに私の過去で」なんて無意味。「間接に」は意味不明。

34 (『こころ』は高校卒業程度の日本語の知識があれば十分に理解できる)と主張する人は、
35 次の三点について、わかりやすく説明しなさい。ただし、短めにね。

36

37 問一 「受け入れる事」とは、PがSの何をどうすることか。

38 問二 「受け入れる事の出来ない人」にも、「受け入れる事」がSの何をどうすることか、
39 理解できるのか。理解できるとしたら、あるいは理解できないとしたら、なぜか。

40 問三 ある人が「受け入れる事の出来ない人」かどうか、どうやって判別するのか。

41

42 これらの問題に答えない『こころ』ファンを、私の読者として想定しない。消えろ。

43

44

45

46

47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2140 「此所」はどこ？
4 2143 「自分で自分の心臓を破って」

5
6 「自分以外のものを受け入れようとすればすべて『ふり』になる」(いがらしみきお『ぼの
7 ぼの』)とオオサンショウウオさんは喝破した。

8
9 他方、ほとんどの人は単に物事を「受け入れ」てしまう。「これが小学校で教える事柄
10 である」と言ってそれでおしまい。常に、「これが最良の方法なのだろうか」と問いかけ
11 る必要がある。考えることが重要なのです。この能力は記憶を主体とする教育からは生まれ
12 れない。

13 (吉成真由美『知の逆転』ワトソンの発言)

14 「受け入れる事」とは、次のようなことか。

15
16
17 私は今自分で自分の心臓を破って、その血をあなたの顔に浴せかけようとしているの
18 です。私の鼓動が停った時、あなたの胸に新しい命が宿る事が出来るなら満足です。
19 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二)

20
21 Sが依拠しているところの血液顔射儀式の実態を、私は知らない。だから、この文に含ま
22 れたすべての語句の真意がわからない。

23 Pが「満足」できなくても、Sは「満足」か。あるいは……。止めよう。空しい。

24
25 「このぶどうしゅは、わたしの血、おおぜいの人のつみをゆるすために、わたしがこ
26 れから流そうとしている血です。そう思って、のみなさい。そして、これからも、わたし
27 のことを思いだすために、これとおなじことをたびたびおこないなさい。」

28 でしたちは、イエスのいうことがわからないながらも、なんだか、かなしい気もちで、
29 イエスのさいてくれた、パンをたべ、さかずきのぶどうしゅをのみました。

30 (山本静枝『キリスト』)

31
32 私にはイエスの言葉がわからない。原典のカニバリズムの実態を知らないからだろう。

33
34 なお、伝統的社会に多くみられる秘密結社には入社的なものが多いが、これらはさら
35 に、(1) 結社がその部族の社会組織の重要な一環を占めており、その部族の男は一定の年
36 齢になるとすべて「死と再生」のモチーフを伴うイニシエーションを受け秘密結社員にな
37 るもの、(2) 妖術者(ようじゅつしゃ)や呪医(じゅい)、舞踏者たちが職能的、専門家
38 的ないしは階級的な閉鎖集団をつくる場合とがある。

39 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「秘密結社」綾部恒雄)

40
41 青年Pは「妖術者」か。作品の外部には夏目宗という秘密結社があるのだろう。

42
43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2150 「本名は打ち明けない」
4 2151 「先生」はあだ名

5
6 「先生」という呼称によって「本名」を秘匿し、PはSを神秘化する。
7 「本名」の真意は〈実名〉だろう。

8
9 事実・実体に相応した名。

(『日本国語大辞典』「実名」)

10
11
12 語り手Pは、Sの「実体」を隠蔽したいのに違いない。

13
14 物の名と実とを一致させること。

(『新漢語林』「^{せいめい}正名」)

15
16
17 「先生」は、あだ名のようなものだ。あだ名は、本名を隠す働きもする。

18
19 一般に前近代社会では名前は単なる記号ではなく、呪術的意味をもち、地位や身分、帰
20 属集団などを示す役割を果たした。

(『日本歴史大事典』「名」坂田聡)

21
22
23 語り手PはSの正体を隠蔽している。作者は「呪術的」思考を隠蔽しているはずだ。

24
25 実名を知られるのを忌んだ原始信仰に基づき、実名を呼ぶのを不敬と考えるようになったところからの風習。

(『日本国語大辞典』「^{あだな}字」)

26
27
28 Nは日常的に呪術的思考をしていたのに違いない。

29
30 化け物は正体がばれるとその呪力^{じゅりょく}を失うものである。古代では名前は物そのものと変
31 わらないから、名前を知られた化け物はひとたまりもなく降参してしまう。

(稲田浩二・稲田和子『日本昔話100選』「大工と鬼六」)

32
33
34 鬼六の同類がグリム童話に出てくる。その名はルンペルシュティルツヘンという。

35 〈粉屋の娘は、小人の力を借りて藁から金糸を紡ぐ。それを贈られた王様と彼女は結婚す
36 るが、小人は見返りに彼女の子をほしがる。彼女は小人の名を唱えて彼を撃退する〉

37 小人の名について、「ピョンピョンはねる小さな棒？ ^{つむ} 錘、でしょうか」(乾由美子『「ル
38 ンペルシュティルツヘン」ってなんでしょ？』*) という説がある。

39 〈粉屋は貧しい家の娘たちに糸を紡がせ、搾取し、王に賄賂を贈って貴族になった〉とい
40 った真相が想像できる。

41 「先生」からは〈専制〉が連想される。Sは僭主のような怪しい人物だろう。救世主を騙
42 る詐欺師のようなキャラだ。作者はそうした物語を隠蔽している。

43
44 * 『ルンペルシュティルツヘン』パンフレット所収。

45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2150 「本名は打ち明けない」
4 2152 「名もない人」

5

6 Pの母親は、SのことをPに話すとき、「御前のよく先生々々という方」（中六）と言う。
7 Pの兄も「先生先生」と言う。Pは、家族に対してさえ、Sの「本名」を隠していたのかも
8 しろない。Sは「先生」というあだ名の先生なのだろう。〈センセイ先生〉か。

9

10 「先生先生というのは一体誰の事だい」と兄が聞いた。

11 「こないだ話したじゃないか」と私は答えた。私は自分で質問して置きながら、すぐ他の
12 説明を忘れてしまう兄に対して不快の念を起した。

13 「聞いたことは聞いたけれども」

14 兄は必^{ひっきょう}竟聞いても解^{わか}らないと云うのであった。私から見ればなにも無理に先生を兄に
15 理解して貰^{もら}う必要はなかった。けれども腹は立った。又例の兄らしいところが出て来たと思
16 った。

17 先生々と私が尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならないように兄は
18 考えていた。少なくとも大学の教授位だろうと推察していた。名もない人、何もしていな
19 い人、それが何処に価値^{ちか}を有^もっているだろう。兄の腹はこの点に於て、父と全く同じもの
20 だった。

21

(夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十五)

22

23 「こないだ」のことを語り手Pは語らない。語り手Pは聞き手Qに対して〈QがSを尊敬
24 しないのなら、「兄」の同類だよ〉といった暗示をかけている。作者も同様。

25 「自分で質問して」と「すぐ他の説明を忘れて」は、別の物語。だから、これらを「置き
26 ながら」で結ぶのは無意味。

27 「聞いても解^{わか}らない」は〈「聞いても」御前が「先生先生」と尊敬したように言うほどの
28 立派な人物かどうか、「解^{わか}らない」〉などの不当な略。

29 「私から見れば」は意味不明。「先生を兄に理解して」は意味不明。「必要」はあったはず。
30 目的が果たせそうになくなったので、「必要はなかった」とうそぶく。この「なかった」は、
31 語り手Pにとっての過去の出来事を表すのではなく、語られるPにとっての過去の出来事
32 を表す。語られるPは自己欺瞞^{きぼん}をしていたのだ。語られるPは、怪しげな魂胆^{こんたん}を兄に見抜か
33 れまいとしていたらしい。語り手Pは、語られるPの怪しげな魂胆^{こんたん}を聞き手Qに対して隠蔽^{おんぺい}
34 している。つまり、語られるPは兄を騙^{だま}そうとして失敗したが、語り手Pはその失敗から学
35 ばず、「兄」を俗物に仕立てることによって、Qを騙^{だま}そうとしているわけだ。「腹が立った」
36 というが、その理由をPは明示しない。愚兄賢弟の暗示か。Pは怪しい語り手だ。

37 「又例の」とあるが、先の「例」は語られていない。「兄らしいところ」は「動物的」（中
38 十四）と形容されているが、具体性に欠ける。兄の方では〈「又例の」弟「らしいところが
39 出て来た」〉と思ったことだろう。どっちもどっち。目糞^{めくそ}が鼻糞^{びくそ}を笑うような話だ。

40 突然の改行。そして、語り手Pは聞き手Qと会話を始める。実際には、語られるPが兄と
41 会話すべきだった。情けない男だ。

42 「名もない」の「名」は、「本名」の「名」と同義だろう。

43

44

45

46

47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 冒頭から意味不明
3 2150 「本名は打ち明けない」
4 2153 P的人間
5
6 Pと「兄」のやりとりに関する部分を会話に仕立て直そう。(M)は公平な司会者だ。
7
8 兄 先生先生というのは一体誰の事だい。
9 M 本当は、どんな人かって聞きたいんでしょう？
10 P こないだ話したじゃないか。
11 M 聞きました？
12 兄 聞いたことは聞いたけれども、必^{ひっきょう}竟聞いても解らない。
13 M お二人とも困りましたね。どこからやりなおせばいいのでしょうか。
14
15 語りの場である「此^{こゝ}所」に移動し、語り手Pにとって都合のいいQが野次で参加する。
16
17 Q Pよ、頑張れ。
18 P 無理に先生を兄に理解して貰う必要はなかった。
19 Q 異議なし！
20 M 本当に、そうなんですか？
21 P けれども腹は立った。
22
23 さらに、夢の中へ。
24
25 P 又例の兄らしいところが出て来た。
26 兄 御前のような高学歴の男が「先生先生」と尊敬する以上、その人は必ず著名の士でなくてはならない。少なくとも大学の教授位だろう。
27 P 違う。名もない人、何もしていない人だ。
28 兄 それが何処に価値を有っているだろう。
29 Q 偏見だ。
30 M 普通ですよ。
31 P 兄の腹はこの点に於て、父と全く同じものだった。
32 Q そうだ！ 父も兄もMも、引っこめ！ 我々はこんな人たちに負けないぞ。
33
34
35 公平なMは、話し相手の「兄」とともに、Pの〈自分の物語〉から排除された。Pにとって都合のいいQだけが残る。『こころ』の読者は、このQに擬態しなければならない。
36 語り手Pは、Sの「価値」を過不足なく表現することができない。その弱点を隠蔽するために、語られるPの窮状を語ったのだ。語り手Pは怪しい。
37 作者が読者に対して〈語り手Pに注意せよ〉と示唆しているのであれば、支障はない。ところが、そんな様子はない。だから、実際に汚い手を使っているのは作者なのだ。
38 『こころ』はP的人間と「兄」のようなG的人間を選別する篩だ。「受け入れる事の出来ない人」とはGのことだ。P的人間は被害妄想的に外敵Gを捏造する。
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2210 第一段落を読む
4 2211 「世間を憚^{はば}かる遠慮」

5
6 『こころ』の冒頭の三文は、二種の物語を、同時に、しかも、不十分に暗示している。

7
8 私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所^{こゝ}でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はば}かる遠慮というよりも、その方が私^{ママ}に取って自然だからである。

11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

12
13 第三文は、前の二文の混乱を受け継ぐ。作者はついに墓穴を掘る。

14
15 I 「私^{わたくし}は」ある人に呼び掛けるとき、「その人を」名前などで呼ばず、「常に」ただ「先生と」だけ「呼んでいた。だから此所^{こゝ}でもただ先生と書くだけ」にする。「その方が私に取って自然だからである」(「先生」と書くのはP的「自然」だ)

16
17
18 II 「私^{わたくし}は」ある人について語るとき、「その人」のこと「を常に先生と呼んでいた。だから此所^{こゝ}でもただ先生と書くだけ」にして、「本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はば}かる遠慮」のためだ。(「本名」を書かないのはP的「遠慮」だ)

19
20
21
22 形式的には「これ」は〈「本名は打ち明けない」ということ〉だけを指すはずだ。語り手PはSの「本名」を暴露しない理由として「遠慮」を排除しているのにすぎない。Pは、〈「遠慮」または「自然」〉という見せかけの二者択一によって真相を隠蔽している。

23
24
25 「というよりも」だから、「遠慮」は排除されていない。「私^こに取って自然」はナンセンス。「自然」の真意は〈癖〉だろう。Nは〈nature〉と〈nurture〉を混同していたか。

26
27
28 物事の考え方、感じ方の、その人独自の傾向から、からだの特殊な、また、無意識に出る動きまでを含んでいう。

30 (『日本国語大辞典』「癖」)

31
32 Sの前では、青年Pの口から「先生」という言葉が「無意識に出る」ことはあったろう。だが、Sのいない「此所^{こゝ}」でなら、意識的になれるはずだ。

33
34 自然はよく妙な失策をやりますよ。

36 (ドニ・ディドロ『ラモーの甥』)

37
38 Pの「自然」が「口癖」のことなら、ややこしいことになる。

39 喫煙はストレスの解消になるが、禁煙もストレスの原因になる。語られるPはSに向かって「先生」と呼ぶことによって「淋しい気^{さび}」を「常に」晴らしていたようだ。一方、Sがいないとき、「先生」と呟かないと、唇に「淋しい気」が生じるのかもしれない。そして、その違いに語り手Pは気づいていないのかもしれない。作者も。

40
41
42
43
44
45
46

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2210 第一段落を読む
4 2212 「筆を執っても心持は同じ事」

5
6 『こころ』の第一段落を丸ごと引用する。

7
8 私^{わたくし}はその人を常に先生と呼んでいた。だから此^{こゝ}所^こでもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚^{はば}かる遠慮というよりも、その方が私に取^{ママ}って自然だからである。私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云^いいたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。余^{よそ}所々々しい頭^{かしら}文字^{もじ}などはとても使う気にならない。
11
12 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」一)

13
14 「私に取って自然」は不自然だ。「口癖」が止められないのなら、心の病気だ。止めたくないのなら、その理由をもっと誰にでもわかるように説明すべきだ。

15
16
17 クライスラーの自然の本性には、自分を滅亡させようとする嵐のような瞬間と闘って勝利をおさめるやいなや、異常なもの、神秘めいたもののもつ緊張そのものがかれの心情に心地よい作用を及ぼすという点がみうけられた。
18
19
20 (E・T・A・ホフマン『牡猫ムルの人生観』)

21
22 「記憶を呼び起す」なんてことが実際にできるのなら、知識問題は満点だろう。
23 Sの生前から、青年Pは〈「先生」伝説〉の語り部になっていた。だから、「筆を執っても心持は同じ事」というわけだ。

24
25 「頭^{かしら}文字^{もじ}」は「余^{よそ}所々々しい」ものか。〈JFK〉は、よそよそしいか。〈MM〉は、〈B〉は、〈CC〉は？ 「K」はよそよそしいのかもしれない。

26
27
28 〈えへん。よろしいかな。今からある人の話をしよう。その人はもう死んでいる。生前、その人のことを、私は「先生」と呼んでいた。その人は、「先生」と呼ばれるのにふさわしいキャリアを積んだ人ではなかったが、私は彼を呼ぶとき、あえて「先生」という言葉を用いていた。「先生」という言葉に、私は特別の思いを込めていたのだ。その思いは、その人に伝わっていたはずだ。私の口から出る「先生」という言葉の真意を知るのは、私とその人だけだった。私は、特別な思いを込めて、その人に「先生」と呼びかけていたが、そうした思い込みが許される人間は私しかいなかった。その頃の私は、自分がその人にとって特別な人間であることを暗示するために、その人のことを他の誰かに話すときでさえ、常に「先生」という言葉を用いていた。私が優れた人間であることを認めてくれたのはその人だけだったから、私が優れた人間であることを認めてくれたその人は、多くの人にとっても「先生」であってくれなくてはならなかったのだ。語り手に成り上がった今も、私は私の聞き手に対して同じ策を弄している。おお、私は何と賢いのだろう。どうだ！ 拍手をなさい、ばちばちと、世間の馬鹿どもよ。(呵々大笑)

39
40
41
42 本文が意味不明だから、異本は簡単に作れる。もっと続けようか？ 読みたくないよね。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2210 第一段落を読む
4 2213 「呼び起すごとに」
5

6 「私はその人の記憶を呼び起すごとに、すぐ「先生」と云いいたくなる」という文に続いて
7 「筆を執っても心持は同じ事である」という文を読むと、ウツとなる。

8
9 I a Pは、Sのことを思い出すたびに、P自身の「記憶」の世界の住人であるSに向か
10 って「先生」と呼び掛ける。

11 II Pは、Sのことを誰かに語るとき、「先生」という呼称を用いる。
12

13 この二つの行為について「心持は同じ事」とするのは、解せない。

14 読者が確かに知りうるのは、IIのみだ。したがって、IIを主軸にしてI aを改定しなけれ
15 ば、本文には意味がない。〈「云いい」の「筆を執って」〉だろう。つまり、「云いいたくなる」と
16 いうその相手は、S以外の誰かだったわけだ。たとえば、Pの「両親」や「兄」だろう。「友
17 達」は含まれなかったのかもしれない。
18

19 I b Pは、Sのことを思い出すたびに、誰かにSの話をしたくなって、そして、する。
20 その場合、「先生」という呼称を用い、「本名」は用いない。
21

22 本文は、I bを表現しているのではない。〈I a → I b〉という展開を総括しているの
23 もない。I aはI bに含まれるのだ。〈「先生」の物語〉という曖昧模糊とした物語が先にあ
24 り、Pは「先生」役としてSを「見付出した」のだった。自分が語り手に成り上がるためだ。
25 「呼び起す」が怪しい。
26

27 忘れていたことを思い出させる。また、ある感情を生じさせる。

28 「一枚の写真が古い記憶を一」「妙なる調べが感動を一」

29 (『明鏡国語辞典』「呼び起こす」)
30

31 「一枚の写真」は〈「一枚の写真」を見たこと〉などの略だろう。

32 本文の場合、「一枚の写真」に相当する言葉が欠落している。「私」は、「云いいたくなる」
33 の主語だが、「呼び起す」の主語ではない。「呼び起す」の主語は、不明なのだ。
34

35 三四郎は急に気を易かえて、別の世界の事を思出した。

36 (夏目漱石『三四郎』一)
37

38 「思出した」は、〈思い出がよみがえった〉か、〈思い始めた〉か、わからない。つまり、
39 〈「急に気」が「易かわったせいで、「別の世界の事」がよみがえった〉という話なのか、〈「気
40 を易え」るために、「別の世界の事を」「急に」思い始めた〉という話なのか、わからない。
41 「急に」があるせいで、本文は意味不明になっている。「急に」がなければ、〈思い始めた〉
42 が適当だろう。「世界」は三四郎の自分語。「急に」は不図系の言葉。
43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2220 不確かな「記憶」
4 2221 「記憶のうちから^ひ引き抜いて」

5
6 Pの「記憶」は怪しい。

7
8 私はその晩の事を記憶のうちから^ひ引き抜いて此所^{ママ}へ詳しく書いた。これは書くだけの
9 必要があるから書いたのだが、実をいうと、奥さんに菓子^{もら}を貰って帰るときの気分では、
10 それ程当夜の会話を重く^{ママ}見ていなかった。

11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」二十)

12
13 「その晩の事」とは〈夜話の段〉(上十六～二十)と私が勝手に呼ぶ場面での出来事だ。こ
14 の夜、静は〈Sがネガティブになったのは「大変仲の^ひいい御友達」(上十九)の自殺と関係が
15 ありそうだ〉と仄めかす。「記憶のうちから^ひ引き抜いて」は意味不明。語り手Pは「引き抜
16 いて」残った方の「記憶」について語っていない。だから、聞き手Qに二種の「記憶」の軽
17 重について考えることはできない。

18 「書くだけの必要がある」というのは意味不明。「だけ」と「必要」は重複のようだ。〈読
19 んでもらう「必要」〉があるのだろう。「会話」の間、Sは用があつて外出中だった。Pが「帰
20 るとき」には、Sは帰宅していた。わざとらしい。

21
22 われわれが自分の行なったことや、他の人々が行なったことを思い出すとき、われわれ
23 は過去を考え直し、記述し直し、感じ直すのかもしれない。これらの再記述は、過去につ
24 いて完璧に当てはまるのかもしれない。そして、そうした再記述こそ、われわれが、今、
25 過去について断定的に主張している真実なのである。だが、逆説的ではあるが、それは、
26 過去においては真実ではなかった。言い換えれば、その行為が行なわれた時点で意味を持
27 っていたような、意図的な行為に関する真実ではなかったのかもしれない。だから、私は、
28 過去自体が、過去にさかのぼって改訂されていると述べているのである。私が言いたい
29 のは、行なわれたことに対してわれわれの意見が変わるということだけでなく、ある種の論
30 理的な意味合いにおいて、行なわれたこと自体が修正されるということなのだ。われわれ
31 が、自らの理解と感受性を変えるにつれて、過去は、ある意味において、それが実際に行
32 なわれたときには存在しなかった意図的な行為というもので満たされていくのである。

33 (イアン・ハッキング『記憶を書きかえる 多重人格と心のメカニズム』)

34
35 時間の錯綜は、普通に起きる。だが、「再記述」の主体にその自覚はない。少しでも自覚
36 すれば、再々記述を始めてしまうことだろう。

37 歴史を含め、通常の物語の語り手は、記憶の複雑な成り立ちを無視し、出来事があたかも
38 必然的に生じたように語る。ところが、PやSは、そのように語らない。では、作者は、〈S
39 やPは語り手として失格だ〉という表現をしているのだろうか。していない。

40 〈夜話の段〉において、実際には、青年Pは静との「会話を重く見て」いた。ところが、
41 「帰るとき」には「気分」が変わって、自分が「重く見て」いたことを忘れてしまった。「重
42 く見ていなかった」という部分は「再記述」に相当する。つまり、記憶幻想だ。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
- 2 2200 不自然な「自然」
- 3 2220 不確かな「記憶」
- 4 2222 夢のような「記憶」

5
6
7

記憶は不確かなものだ。

8 夜の音楽会。大ホールは満席。そこに一人のスパイ氏が座っている。彼は、ある女性を
9 尾行している。午後九時。彼女が現れる時間だ。演奏は佳境に入り、有名な女性歌手の声
10 量ある歌が、ホールに響く。スパイ氏の目は、彼女の居場所を突き止めようと客席を追う
11 が、一方ですばらしい歌声も楽しみたい。

12 こんな時、スパイ氏の大脳の地図の二つのセットが忙しく活動している。一つは歌声を
13 聞き、別のセットが尾行という、音を聞くのとは別のカテゴリーをつかって活動している
14 のである。

15 (イスラエル・ローゼンフィールド『記憶とは何か 記憶中枢の謎を追う』)

16

17 Pの「大脳の地図の二つのセット」は、〈理想的な「先生」の物語〉と〈具体的なSの物
18 語〉だ。P文書では、この二つの「カテゴリー」が混交する。

19

20 その夜遅く、スパイ氏は、自分が尾行していた女性が、音楽会でどんな顔をしていたか、
21 どうしても思い出せない。困ったことに、女性歌手が歌ったメロディーばかりが無意識に
22 口をついて出てくる。しかも驚いたことに、彼の想像のなかで、そのメロディーは、尾行
23 していた女性が歌っているのではない。これと同じような経験を持つ人がいるにちがひ
24 ない。

25 これは、記憶というものは、人間の脳のなかに生じたイメージが、そのままそっくり
26 反復されて出てくるのではなく、大脳内でいったんカテゴリー化されたものが再構成さ
27 れて出てくるのであるということ、よく示している。カテゴリーの再構成が起きるのは、
28 異なった大脳地図のニューロン・グループの結合が、一時的に強められるときである。

29 (イスラエル・ローゼンフィールド『記憶とは何か 記憶中枢の謎を追う』)

30

31 青年Pは「スパイ氏」のようだった。彼は自分が「尾行していた」Sの言葉を、「先生」
32 的人物が発したもののよう記憶を作り変えてしまう。そのことにSは気づいてPに「警告
33 を与えた」のだろう。ただし、『こころ』の作者がこうした真相を暗示しているのではない。

34 語り手Pは、「その人の記憶」について、「イメージが、そっくりそのまま反復される」よ
35 うに語っている。つまり、文字で記録されたものを読み返すように語っている。ところが、
36 同時に、「カテゴリーの再構成が起きる」としか思えないような事柄を語っている。その結
37 果、本文は意味不明になっている。

38 『こころ』における「記憶」という言葉は意味不明だ。また、「記憶」の内容も判然とし
39 ない。『こころ』の本文は、「記憶」の中身を確かなものとして語ろうとするPやSの意地の
40 露呈みたいだ。この露呈が「自然」と形容されるのだろう。「記憶」は、夢のように「自然」
41 なのだろう。ただし、作者が〈語り手たちは、知らず知らず、嘘をついている〉といった文
42 芸的表現をしているのではない。Nが自身の混乱を露呈しているのだろう。

43
44
45
46
47
48
49

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2220 不確かな「記憶」
4 2223 「ところがその晩に」

5
6 記憶の内容が変わらないまま、その価値などが変わるのなら、容易に自覚できよう。

7
8 私が進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日^{あくるひ}まで待とうと決心したのは土曜の晩
9 でした。ところがその晩に、Kは自殺して死んでしまったのです。

10 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十八)

11
12 「進もうか止そうかと考えて、ともかくも翌日^{あくるひ}まで待とう」と決心したのは、「土曜の晩」
13 だけではなかったのかもしれない。「Kは自殺して死んでしまった」という出来事のせいで、
14 「その晩」が特別な晩としてSの記憶に残ったのかもしれない。つまり、実際には、特別な
15 ことが起きるまで、Sは様子見を続けていたろう。真相は、〈いつまでもKの出方を「待と
16 う〉と「決心した〉というのではなかろうか。私には、そのように疑われる。そのように
17 疑わない語り手Sの魂胆を、私は疑う。

18 作者が〈Sは記憶の偽造を反省できない人間だ〉といった文芸的暗示をしているのであれ
19 ば、辻褃は合いそうだ。しかし、そんな様子はない。だから、『こころ』は意味不明なのだ。

20
21 自分と三千代との現在の関係は、この前逢った時、既に発展していたのだと思い出した。
22 否、その前逢った時既に、と思い出した。代助は二人の過去を順次に^{さかの}遡ぼってみて、い
23 ずれの断面にも、二人の間に燃える愛の炎を見出さない事はなかった。必竟は、三千代が
24 平岡に嫁ぐ前、既に自分に嫁いでいたのも同じ事だと考え詰めた時、彼は堪えがたき重い
25 ものを、胸の中に投げ込まれた。

26 (夏目漱石『それから』十三)

27
28 「自分」は代助。〈婚前の三千代は代助を愛していながら、代助によって平岡と結婚させ
29 られた〉と代助は思う。「思い出した」は〈思い起こした〉と〈思い始めた〉の二様を取れ
30 る。この二種の作業は、同時に進行しているようだ。ただし、語り手がそのように語ってい
31 るのではない。作者も記憶幻想の可能性を考慮していないはずだ。

32 「いずれの断面」についても具体的に語られていない。「愛の炎」の記憶が代助にはない
33 からだ。「愛の炎」は、「過去」ではなく、現在における代助の感傷の比喻にすぎない。彼は
34 〈「愛の炎」の物語〉という空疎な物語の世界を借りてきて、その世界の主人公を演じよう
35 としている。勿論、語り手がそのように語っているのではない。作者が〈三千代に対する代
36 助の関係妄想〉と〈作中の現実としての三千代と代助の「関係」〉とを混同しているのだ。
37 語り手は、次のように続けるべきだろう。

38 〈「自分と三千代の現在の関係は、この」次逢う時、さらに「発展して」いることだろう〉
39 と、代助は「思い出した」

40 作者が〈恋愛とは被愛妄想の共有だ〉といった文芸的表現を試みているわけではない。

41 Nは、〈男女関係はどのように成立し、中断し、そして、再燃するか〉という問題に答え
42 られない。そのことを自他に対して隠蔽するために小説を悪用している。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2230 「良心」
4 2231 「私の自然を損なったのか」

5
6 「自然」とは記憶を偽造する癖のことだろう。記憶を偽造してしまうのは、無自覚つまり
7 「自然」だ。そうしたありふれた事実に、Nは気づかなかったようだ。

8
9 彼は父と違って、当初からある計画を^{こしら}え、自然をその計画通りに強いる古風な人
10 ではなかった。彼は自然を^{もっ}て人間の^{すべ}拵えた凡ての計画よりも偉大なものと信じていた
11 からである。だから父が、自分の自然に逆らって、父の計画通りを強いるならば、それは、
12 去られた妻が、離縁状^{たて}を楯に夫婦の関係を証拠立てようとする一般であると考えた。け
13 れども、そんな理窟を、父に向かって述べる気は、まるでなかった。父を理攻にする事は
14 困難中の困難であった。

15 (夏目漱石『それから』十三)

16
17 「自然」は、『それから』に何度も出てくるが、意味不明。
18 「自然をその計画通りに強いる」は〈「その計画通り」「を」「自然」「に強いる」〉の誤り
19 だろう。〈「彼は」～「ではなかった」〉とあるが、〈「彼は～であった」〉という文が出てこない。
20 父に対する反抗心しか語られていないのだ。だから、代助は正体不明。

21 〈彼の「自然」は彼の考える「自然」と同じ〉という証拠はない。
22 「だから」は機能していない。「離縁状」の比喩は不可解。
23 「述べる気」になったとしたら、その方がおかしい。代助に「自分の自然」があるのなら、
24 誰にでも「自分の自然」はある。それらは異なるはずだ。そのことに、『それから』の作者
25 は気づいていない。『道草』あたりから、Nは気づいたらしい。『ころ』における「人間ら
26 しい」(下三十一)と「人間らし過ぎる」(下三十一)の対比が転機か。

27 「父を理攻に」は笑える。代助のような軽薄才子に誰が「理攻に」されよう。代助に「理」
28 など、ないのだ。その弱点を隠蔽するのが「自分の自然」という言葉だ。

29
30 こんな話をすると自然その裏に若い女の影があなたの頭を^{かす}掠めて通るでしょう。移っ
31 た私にも、移らない^{はじめ}初からそういう好奇心が既に動いていたのです。こうした邪気が予
32 備的に私の自然を損なったのか、又は私がまだ人慣れなかったためか、私は始めて其所の
33 御嬢さんに会った時、へどもどした挨拶をしました。

34 (夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」十一)

35
36 先の「自然」は副詞で、後の「自然」は名詞だ。意味は似ているのだろうか。不明。
37 「そういう」は不可解。「へどもど」するのは、〈静の「好奇心」が自分に働く〉という妄
38 想のせいだ。主体としての自分と客体としての自分の混同。被愛願望を隠蔽するからだ。
39 〈「邪気」＝「好奇心」〉ではない。「邪気」とは、語り手Sが隠蔽している〈妄想〉のこ
40 とだ。「私の自然」が損なわれていないとき、Sはどんな「挨拶」をしたろう。「へどもど」
41 しないで、「今まで想像も及ばなかった異性の^{におい}匂」(下十一)を犬みたいにクンクン嗅ぎまわ
42 り、「肉の方面から近づくな」(下十四)に駆られて抱きついて押し倒して……。

43
44
45
46

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2230 「良心」
4 2232 「良心の命令」

5
6 「記憶」は、その持ち主の思考を制限するらしい。

7
8 私には先刻の奥さんの記憶がありました。それから御嬢さんが宅へ帰ってからの想像
9 がありました。私はつまりこの二つのもので歩かせられていた様なものです。
10 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十六)

11
12 「記憶」は、それに基づく「想像」とともに、ある物語を形成する。そして、それらの主
13 体である自分を〈自分の物語〉に閉じ込めてしまう。

14
15 私の歩いた距離はこの三区に跨がって、いびつな円を描いたとも云われるでしょうが、
16 私はこの長い散歩の間殆んどKの事を考えなかったのです。今その時の私を回顧して、何
17 故だと自分に聞いて見ても一向分かりません。ただ不思議に思うだけです。私の心がKを忘
18 れ得る位、一方に緊張していたと見ればそれまでですが、私の良心が又それを許すべき筈
19 はなかったのですから。
20 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十六)

21
22 「距離」は〈経路〉などが適当。「いびつな円」と「Kの事」の関係が不明。
23 「何故」は、〈あのときの自分は何を考えていたか〉という問題から逃れるための言葉だ。
24 中年Sは、青年Sの気分を「回顧して」いるのではなく、反復している。「一向分かりません」
25 って、「この二つのもので歩かせられていた様なもの」じゃなかったのか？

26 「ただ」は不要。「不思議に思うだけ」の「だけ」は変。青年Sには、Kと静母子が「切
27 り離すべからざる人のように」(下三十五)思っていた。このとき、青年Sは〈静母子はKを
28 どうするつもりか〉と考えていたらしい。この物語に、S自身は登場しない。だから、話は
29 「それまで」なのだ。このあたりの趣旨は〈青年Sの「良心」が起動しなかったのは「何故
30 だ」というものだろう。この疑問の前提には〈「良心」は「自然」に起動するものだ〉とい
31 う文があるのだろう。しかし、この前提は怪しい。

32
33 もしKと私がたった二人曠野の真中にでも立っていたならば、私はきっと良心の命令
34 に従って、その場で彼に謝罪したろうと思います。然し奥には人がいます。私の自然はす
35 ぐ其所で食い留められてしまったのです。
36 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十六)

37
38 Sは、〈壁に耳あり「曠野」にも耳あり〉と思うのかもしれない。だったら、「良心」つま
39 りDは、常に沈黙を守ることになる。静母子の像は、SのDとしてSに付きまとっていた。
40 だから、彼女たちは「曠野」にも出現できたはずだ。

41 「奥」にいるのは静母子だ。彼女たちに密告しそうな「下女」(下十)も含むか。

42 「すぐ其所」はどこ？ 〈「自然」を「食い留め」〉は意味不明。

43
44
45
46

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
- 2 2200 不自然な「自然」
- 3 2230 「良心」
- 4 2233 「自然」と混乱

5
6 「良心」は「自然」に起動するのだろうか。

7
8 自己意識において意識されるのは、ただ自己が自己であるという空虚な自己の形式で
9 はなく、自己のかかわる他のさまざまなものの意識であり、この他のさまざまなものへと
10 かかわっているものとしての自己の意識である。しかし、これが自己の存在であり、自己
11 の行為であるということが顕在的に意識されるときに、自己のうちにはこれを自己自身
12 のものとして認めることを是認したり、拒否したりしようとする第二の自己の声がおこ
13 ってくる。これが良心の声である。

14 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「良心」加藤信朗)

15
16 「第二の自己」をDと考える。ただし、Dは〈悪心の「声」〉も発する。

17
18 このように、自然(人間の自然も含めて)と人間(の創造性)とを対置することの基盤
19 には、人間は、自然の一部でありながら、同時に(単なる)自然を超えた存在である、と
20 という信念がある。だが、人間にこのような特異な位置づけを与えようとする場合、はたし
21 て何が「人間の自然(本性)」に属し、何が属さないのか、という問題が生ずる。自然と
22 対置された人間の知的創造性、自由も、人間の自然(本性)に属するのではないか、社会
23 を形成し、さまざまな制度のもとで生活し、文化を創造することも、人間の本性的なあり
24 方ではないのか、という問題である。もしこのような問いに、すべて肯定的に答えるなら
25 ば、(文化の一部としての)科学・技術を駆使してさまざまな事物に手を加え、いわゆる「自
26 然」を破壊することも、また逆に、そのような「自然破壊」を予測し、それを未然に防ぐ
27 手だてを講ずることも、「人間の自然」に含まれ、ひいては「自然」も含まれることにな
28 るであろう。かくして、自然と人間との対比は、きわめて不確かなものとなる。

29 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「自然」丹治信春)

30
31 日本語の〈自然〉という言葉は、もっと「不確かなもの」だ。

32
33 自然ということばは中国に由来することばで、最初に現れるのは《老子》である。自然
34 とは、猛然とか欣然のようにある状態を表すことばであり、存在を示す名詞ではない。自
35 然とは自分に関しても万物についても人為の加わらない状態、おのずからある状態を意
36 味している。自然という漢語が日本に入っても、長い間この意味は変わらなかった。これ
37 に対して、江戸時代に蘭学・英学が受容されると、英語のネイチャー nature、蘭語のナト
38 ュール natuur の訳語として〈自然〉があてられるようになり、その意味が日本語のそれ
39 までの自然の意味に重層し、混乱を生じるようになる。

40 (『百科事典マイペディア』「自然」)

41
42 Sの「自然」が意味不明なのは、日本の近代の言語的「混乱」の反映でもあるようだ。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2240 「私の自然」
4 2241 「平生」と「自然」

5

6 『こころ』は、人間関係に対するNの混乱した想念を露呈した模擬作品だ。
7 語り手たちは論理的に語るができない。だから、当然、倫理的な話はできない。

8

9 Kに詫まることの出来ない私は、こうして奥さんと御嬢さんに詫びなければいられな
10 くなったのだと思って下さい。つまり私の自然が平生の私を出し抜いてふらふらと懺悔
11 の口を開かしたのです。

12 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十九)

13

14 このとき、Kは死んでいる。だが、Kの霊に対して「詫び」ることはできるかもしれない。
15 この前に「詫まり」(下四十九)とあるから、「詫び」という言葉が新たに出てくるのは、変。
16 意味が違うとしたら、どのように違うのだろう。単なる言葉のおしゃれだろうか。「詫びな
17 ければいられなくなった」は〈「詫びなければ」なら「なくなった」〉と〈「詫びな」いでは
18 「いられなくなった」〉の、例によって義務と欲求の混交だ。非常に読みづらい。〈静母子が
19 Kの代理になる〉という考えは不可解だが、隠蔽された主題のかすかな露呈だろう。

20 「つまり」は不適當。この「自然」は〈狂気〉だろう。「私の自然」と並べるのなら、〈「私」
21 の「平生」〉とすべきだ。〈「自然」対「平生」〉という前提があるらしいが、不可解。「ふら
22 ふらと」の被修飾語が「開かした」では、「私の自然」が「ふらふらと」していることにな
23 る。したがって、「ふらふらと懺悔の口を開かした」は、〈私が「ふらふらと懺悔の口を」開
24 くように仕向けた〉などが適當。「とと思って下さい」と言われても、思いようがない。難問
25 の解決を丸投げされたPの反応を想像することも、私には無理。ひどい悪文。

26 青年Pは、〈「先生」という言葉は「私の口癖だ」〉と言った。「口癖」は「平生」だろう。
27 一方、語り手Pは、〈「先生」という言葉は「私に取って自然だ」〉と書く。「先生」のP的含
28 意は、「平生」から「自然」へと変化してほしい。この変化をもたらした出来事を、私は特
29 定できない。だから、語り手Pの用いる「先生」の含意は推理できない。

30 ただし、Sにとって「平生」と「自然」が対立するものでも、Pにとっては対立しないの
31 かもしれない。そうだとすると、「自然」に関するSの考えをPは「受け入れる事の出来な
32 い人」なのかもしれない。Pの「自然」観はSの「自然」観を超えているのかもしれない。
33 そして、作者は、Sの「自然」観を批判しているのかもしれない。

34

35 大きな自然は、彼女の小さな自然から出た行為を、遠慮なく蹂躪した。

36 (夏目漱石『明暗』百四十七)

37

38 「則天去私」に絡めた言葉遊びをすると、「大きな自然」が「天」で、「小さな自然」が「私」
39 だろう。「大きな自然」は〈先天的素質〉で、「小さな自然」は〈後天的習性〉か。逆説であ
40 る〈氏より育ち〉とは反対のことが起きたか。だったら、普通だよ。語り手は「彼女」の本
41 性を隠蔽している。あるいは、自然の声によって、小便が「出た」後、大便が出たか。

42 「大きな自然」について、Nは何を知っているつもりだったのか。不明。

43

44

45

46

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2240 「私の自然」
4 2242 意志系

5
6
7

「自然」は夏目語だろう。ほとんどの場合、私にはその意味が推定できない。

8
9
10
11
12
13

自然の児こになろうか、又意志の人になろうかと代助は迷った。彼は彼の主義として、弾力性のない硬張こわばった方針の下に、寒暑にさえすぐ反応を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚ぐをいんだ。同時に彼は、彼の生活が、一大断案を受くべき危機に達して居る事を切に自覚した。

(夏目漱石『それから』十四)

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24

「自然の児こ」も「意志の人」も意味不明。だから、「迷った」も意味不明。「自然の児こになろう」と考えるのは「意志の人」だろう。違うのか。何が何だか、さっぱりわからない。意志系の言葉も夏目語だろう。「馬鹿気た意地」などと同じで、マイナスの価値がありそう。

「彼の主義」は、私には総括できない。そんなものではなくて、〈自分には「主義」がある〉と勘違いしてしまった代助に対する語り手の皮肉の表現のように思えるが、よくわからない。「寒暑」に心身が「すぐ反応を呈する」のは健康だろう。あるいは、アレルギーか。「自己」は意味不明。「主義」には〈自縄自縛〉という含意があるのかもしれない。皮肉のようで、皮肉ではなく、実は矛盾であり、つまり、無意味か。「器械の様に束縛する」は意味不明。だから、「愚ぐ」かどうか、不明。この一文は、私にはさっぱりわからない。

「同時に」は不可解。「断案を受く」は意味不明。「断案」は〈弾効〉の誤りか。

25
26
27
28
29
30

女は前後の関係から、思慮分別の許す限り、全身を挙げて其所そこへ拘泥こまこたわらなければならなかった。それが彼女の自然であった。然し不幸な事に、自然全体は彼女よりも大きかった。彼女の遥はるか上にも続いていた。公平な光りを放って、可憐かれんな彼女を殺そうとしてさえ憚はばからなかった。

(夏目漱石『明暗』百四十七)

31
32
33
34
35

「前後の関係」や「其所そこ」が何なのか、私にはわからない。ソ系語の濫用。

「それ」は、〈「其所そこへ拘泥こたわらなければならなかった」ということ〉だろうが、「其所そこ」が不可解なので、この文は意味不明。

「然し」は不可解。「自然全体」は「大きな自然」と同じか。

36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46

このあたりの叙述は「明暗」執筆中の漱石の思想を考える上で重要である。それは「道草」(本全集第八卷所収)第五十七章の「金の力で支配できない真に偉大なもの」とも関係する。

(「夏目漱石全集9『明暗』」(ちくま文庫)注)

「可憐かれん」は意味不明。「いじらしいこと。かわいらしいこと」(『広辞苑』「可憐」)のどちらのようでもない。「彼女」はお延だが、ちょっと美人のようで、そうでもない。性格は悪い。

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2240 「私の自然」
4 2243 自然派と写生文

5
6
7

夏目語の「自然」は〈自然主義〉の〈自然〉とは違うようだ。

8 実をいうと自分は自然派の作家でもなければ象徴派の作家でもない。近頃しばしば耳
9 にするネオロマン派の作家では猶更ない。自分はこれ等の主義を高く標榜して路傍の人の
10 注意を惹く程に、自分の作物が固定した色に染付けられているという自信を持ち得ぬも
11 のである。又そんな自信を不必要とするものである。ただ自分は自分であるという信念を
12 持っている。

13 (夏目漱石『彼岸過迄に就て』)

14

15 Nは、〈自分はどのようなタイプの作家のつもりでいるか〉という問題と、〈自分はどのような
16 タイプの作家として見られたいか〉という問題を、わざと混同して語っている。

17 「固定した色に染付けられているという自信」は、言うまでもなく、皮肉だ。皮肉を裏返
18 すと、別種の「自信」つまり「信念」が露見する。だが、皮肉を抜きにして、Nは何かを確
19 かに語りうるのだろうか。無理だろう。

20 Nが否定のために担ぎ出した「自然派の作家」とは、「自然主義の立場に立つ作家」(『日
21 本国語大辞典』「自然派」)だが、「実をいうと」彼らの正体は不明だ。

22

23 文学で、理想化を行わず、醜悪・瑣末なものを忌まず、現実をただあるがままに写しと
24 ることを目標とする立場。

25 (『広辞苑』「自然主義」)

26

27 「あるがままに写しとること」が気になる。

28

29 写生文家のかいたものには何となくゆとりがある。^{せま}逼っておらん。^{くったくげ}屈託気が少ない。し
30 たがって読んで暢び暢びした気がする。

31 (夏目漱石『写生文』)

32

33 自然主義と写生派の態度は、正反対のようだ。

34

35 自然主義は各国の小説、戯曲にもみられるが、日本では、1890年ごろゾラの理論が紹
36 介され、島崎藤村の《破戒》(1906年)が自然主義作品と呼ばれた。田山花袋や《早稲田
37 文学》の作家らがこれに続いたが、自己の内面をありのままに告白することに主眼が置か
38 れた点に特色がある。これは西欧語の〈nature〉と日本語の〈自然〉との本来的な意味の
39 ずれによるものと考えられる。

40 (『百科事典マイペディア』「自然主義」)

41

42 「本来的な意味のずれ」があるのなら、きちんと考えることはできない。

43

44

45

46

47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2250 不自然な「自然」
3 2250 「記憶して下さい」
4 2251 複数の「その人の記憶」

5
6 「その人の記憶」には、いくつもの解釈が考えられる。

- 7
8 I Sに関する語り手Pの記憶。
9 II S自身の記憶。
10 III P文書で語られるPが構想していた〈「先生」の物語〉に関する語り手Pの記憶。
11 IV 「遺書」で語られるSが構想していた「自叙伝」に関する「遺書」の語り手Sの記憶。

12
13 「その人の記憶」は、こうした複数の物語が混交したものだ。

14 Iは「遺書」を読み終えたPにとって、IIの一部になる。また、IIIを包含するか。IIはIV
15 を包含するが、Pは「自叙伝」を知らない。Sさえも「自叙伝」を完成させられなかった。
16 〈Sの物語〉の創作を、SはPに丸投げした。Pは、それを完成させていない。完成させた
17 のかもしれないが、Pによる〈Sの物語〉は『こころ』に含まれていない。作者は〈Sの物
18 語〉の創作を読者に丸投げしているのだ。

19
20 凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に云えば本当の馬鹿^{ばか}でした。世間的以上
21 の見地から評すれば、或は純なる尊^{たっと}い男とでも云えましょうか。私はその時の己れを顧
22 みて、何故^{なぜ}もっと人が悪く生れて来なかったかと思うと、正直過ぎた自分が口惜^{くや}しくって
23 堪^{たま}りません。然しまだどうかして、もう一度ああいう生れたままの姿に立ち帰って生きて
24 見^{ママ}たいという心持も起るのです。記憶して下さい、あなたの知っている私は塵^{ちり}に汚れた後^{あと}
25 の私です。きたなくなった年数の多いものを先輩と呼ぶならば、私はたしかに貴方より先
26 輩^{ばい}でしょう。

27 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」九)

28
29 「人が悪く」や「正直過ぎた」は意味不明。

30 「生れたままの」は〈幼児的〉という意味のようだが、幼児だって人見知りする。

31 何を「記憶して」やればいいのか。「あなたの知っている私」は、〈Pが「知っている
32 私」だとSが思っているS〉とは、常識的には違う。また、〈読者の知っているS〉とも違
33 う。同じなら、奇跡だ。読者は奇跡が起きているように誤読すべきか。不気味。「塵」は意
34 味不明。だから、「きたなくなった」も意味不明。

35
36 彼らと交わりながら、ただひとり立ち

37 屍衣^{しゑい}のように、人と異なる思想を身にまとった

38 今もなお、というべくは、あまりに心屈して汚れたのだが――。

39 (ジョージ＝ゴードン・バイロン『私は世を愛さなかった』)

40
41 「きたなくなった年数」は意味不明。「貴方」にウツとなる。前の文では「あなた」だっ
42 たから。「たしかに」の被修飾語がない。「たしかに」と「でしょう」は呼応しない。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2250 「記憶して下さい」
4 2252 「こんな風に生きて来たのです」

5
6 SがPに「記憶」を強いるのは、Pに「遺書」の批評をさせないためだろう。

7
8 記憶して下さい。私はこんな風に生きて来たのです。始めて貴方に鎌倉で会った時も、
9 貴方と一所に郊外を散歩した時も、私の気分^{ママ}に大した変りはなかったのです。私の後^{うしろ}に
10 は何時でも黒い影が括^くッ付^{ママ}いていました。私は妻のために、命を引きずって世の中を歩いて
11 いたようなものです。

12 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十五)

13
14 「こんな風」がどんなふうだか、S以外の誰にもわからない。そのことを、Sは知っている。
15 「記憶して下さい」は駄々と同じだ。

16 「会った」は〈出「会った」〉が適当。「郊外」は「何々園」(上二十六)のことか。

17 「黒い影」は、Kの亡霊ではない。S自身の「気分」の隠喩だ。「後」は〈過去〉の比喩。
18 「妻のために」の真相は〈「妻の」せい〉で「後」は〈過去〉の比喩。

19 この前の段落の内容を無理に要約すると、次のようになる。

20 〈静の母が死んだ後、「黒い影」あるいは「不可思議な恐ろしい力」(下五十五)と呼ばれ
21 るDがSに〈死ね〉と囁く。Sは死んでみたくなる。静を残しておくのは「不憫」(下五十五)
22 だから心中しようと思う。ただし、自殺の理由を静に「打ち明ける事の出来ない位^{ママ}な」(下五
23 十五) 彼だから、無理心中ということになる。自殺か、無理心中か、Sは迷う)
24 Nは、次のように歌うことができなかった。だから、その批判もできなかった。

25
26 できることなら あなたを殺して
27 あたしも死のうと思った
28 それが愛することだと信じ
29 よろこびに ふるえた

30 (上村一夫作詞・都倉俊一作曲『同棲時代』)

31
32 Sは、異常な「愛」さえ信じることができなかった。

33
34 自分の過去を語る手紙をほぼ終えようとして、「先生」は「私」にこう呼びかける。求
35 めているのが理解でも共感でもない点が注目される。手紙の初め(一七二ページ)と終わり
36 (三二七ページ)には「参考」という、知的な分析を想起させることばも使われている
37 が、後者は「妻」にだけは伝えるなどという限定的な文脈の中のことであり、前者も、「参
38 考」の前提として、「先生」の「血潮」が「私」の「胸に新らしい命」を宿すという、直
39 接的な継承が語られている。

40 (新潮文庫版『こころ』「注解 記憶して下さい」)

41
42 「理解でも共感でもない」のは「受け入れる」だろう。「遺書」は印可状か。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2200 不自然な「自然」
3 2250 「記憶して下さい」
4 2253 見捨てられそう

5
6 SとPが共有していたらしい「淋しみ」とは、見捨てられそうな不安のことかもしれない。

7
8 母から見捨てられたという絶望的な喪失体験による抑うつ状態。
9 (『精神科ポケット辞典 [新訂版]』「見捨てられ抑うつ」)

10
11 Sは「明治天皇が崩御に」(下五十五)になったとき、静に心中を持ちかける。彼女は冗談め
12 かし、「殉死でもしたら可かろう」(下五十五)と拒む。Sも冗談めかして、「明治の精神に殉
13 死する積りだ」と応じる。「笑談」は、乃木夫妻の心中事件後、現実味を帯びることになる。

- 14
15 0 幼児期、Sは保護者に見捨てられる。
16 1 青年期、Sの父母が死に、見捨てられたように感じる。(下三～四)
17 2 叔父一家にSは見捨てられる。(下五～九)
18 3 Sは静母子に見捨てられそうな気がする。(下十～十八)
19 4 SはKに死なれ、見捨てられたように感じる。(下十九～五十三)
20 5 静の母が死に、Sは見捨てられたように感じる。(下五十四)
21 6 Sは静に心中を拒否され、見捨てられたように感じる。(下五十五)
22 7 乃木夫妻の心中を知る。(下五十六)

23
24 「遺書」では語られないが、Sは幼児期に見捨てられたはずだ。そのせいで、1から7ま
25 での出来事に対して過敏に反応してきたのだろう。

26 SとPは、「淋しみ」という「同情の糸」(上七)で繋がっていた。彼にも見捨てられた体
27 験があったのだろう。Pの失われた「記憶」の代用品がSの「遺書」だ。「その人の記憶を
28 呼び起す」というPの言葉の真意は、〈S自身の「記憶」という墓に埋葬された「淋しみ」
29 をPは私有するために「呼び起す」〉といった意味だろう。

30
31 十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥様に継なる娘あり、桂次が
32 はじめて見し時は十四か三か、唐人髻に赤き切れかけて、姿はおさなびたれども母のちが
33 ふ子は何処やらをとなく見ゆるものと気の毒に思ひしは、我れも他人の手にて育ちし
34 同情を持てばなり、

(樋口一葉『ゆく雲』上)

35
36
37 「育ちし同情」は〈「育ちし」ゆえの「同情」〉と解釈する。
38 P文書におけるSの発言は、その「背景」(下二)である「遺書」を読むことによって、
39 Pにとって理解可能なものになったのだろう。ただし、私に「遺書」は意味不明。

40 『こころ』を理解するためには、SとPに共通する「背景」が仮想できなくてはならない
41 ようだ。その「背景」について、Sは語っていない。作者は「背景」の隠蔽あるいは欠落を
42 文芸的に利用していたのだろうか。そうとは思えない。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
- 2 2300 「恋は罪悪ですよ」
- 3 2310 姦通罪
- 4 2311 『厭世詩家と女性』

5
6 NHKの『こころ』の輪読会で、平成の若い女性が〈「恋は罪悪」って凄いですよね〉み
7 たいなことを言っていた。カマトトか？ わからん。

8 角川文庫の『こころ』の帯紙に「しかし君、恋は罪悪ですよ。わかっていますか」という
9 二文が引用されていた。出版社は〈この二文に客寄せ効果がある〉と思ったのだろう。そし
10 て、実際に効果はあるのだろう。なぜ？ 私にはわからない。

11 明治には、「恋は罪悪」ではなかったのか。そんなはずはない。

12 昭和の戦後でも、「恋しぢゃならない受験生」（中川五郎作詞・高石智也作曲『受験生ブル
13 ース』）と歌われていた。平成でさえ、AKB48のメンバーが恋をして謝罪のために丸坊主
14 になったよね。令和でも、不純かどうか知らないが、男女交際を理由に退学になった高校生
15 がいるそうだ。

16
17 凡そ吾々東洋人の心底に蟠まる根本思想を剔抉してこれを暴露するとせよ。教育なき
18 者はいざ知らず、前代の訓育の潮流に接せざる現下の少年はいざ知らず、尋常の世の人心
19 には恋に遠慮なく耽ることの快なるを感ずると共に、この快感は一種の罪なりとの観念
20 附随し来ることは免れ難き現象なるべし。吾人は恋愛を重大視すると同時にこれを常に
21 踏みつけんとす、踏みつけ得ざれば己れの受けたる教育に対し面目なしといふ感あり。
22 意馬心猿の欲するままに従へば、必ず罪悪の感随伴し来るべし。これ誠に東西両洋思想の
23 一大相違といふて可なり。西洋人は恋を神聖と見立て、これに耽るを得意とする傾向を有
24 すること前諸例によりても明かなるべく、また如此く重きを置かれたるこの情緒を
25 囿纏せる文学の多きも勢免るべからざるなり。

26 (夏目漱石『文学論』「第一編 第二章 文学的内容の基本成分」)

27
28 SはPに「恋は最悪ですよ」と告げた。Pは戸惑ったらしい。なぜだろう。Pは、「前代
29 の訓育の潮流に接せざる現下の少年」で、「尋常の世の人の心」を持たなかったのか。

30 「一種の罪悪」は意味不明。Nは、こういう「一種の」の使い方をよくする。誤用。

31 「東西両思想の一大相違」は誇張。

32 「恋を神聖と見立て」に留意。

33
34 思想と恋愛は仇讐なるか、安んぞ知らむ、恋愛は思想を高潔ならしむる嫻母なるを。
35 (北村透谷『厭世詩家と女性』)

36
37 「恋は罪悪」といった類の常識を北村が批判しているわけだ。

38
39 恨みわび ほさぬ袖だにあるものを 恋にくちなむ 名こそ惜しけれ
40 (『語拾遺和歌集』14・恋・4・815・相模)

41
42 浮名が立つことは、罪ではなかったか。

- 43
- 44
- 45
- 46
- 47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2310 姦通罪
4 2312 不義はご法度

5

6 青年Pにとって「罪悪という意味は朦朧^{もうろう}として」いた。なぜだろう。

7

8 I Pは「恋は罪悪」という考えを知らなかったので、Sの質問に驚いた。

9 II Pは「恋は罪悪」という考えを知っていたが、それは古臭い考えのように思っていた
10 のに、開明的なはずのSがそんな古い考えを信じているような発言をしたので驚いた。

11

12 どっちが正しい解釈だろう。私にこの問題は解けない。他に選択肢はあるのか。

13

14 それまでの日本には「恋」という言葉しかなく、それは性交をとまなうものであったが、
15 「恋愛」はプラトニック・ラブを意味した。夫婦一心同体であるような緊密な一夫一婦制
16 もまた、新しいトレンドとして広まっていった。江戸時代までの日本では性は豊饒であり、
17 豊かさであり、祭であり、聖なるものであったが、これ以降、性は邪悪なものとして位置
18 づけられる。同時に、遊女や芸者や妾などの玄人の女性たちは蔑視されるようになった。
19 江戸時代までは普通の女性も恋に積極的であったが、明治以降、女性は性にはまるで興味
20 がないかのようにふるまうことが要求された。

21

(田中優子『張形と江戸女』)

22

23 「それ」は「明治維新」(『張方と江戸女』)だ。「恋愛」という語は「明治三十五年頃から
24 辞典に登録されはじめ、love の訳語として定着していったことが明らか」(飛田良文『明治
25 生まれの日本語』)という。「聖なるもの」に留意。「邪悪」とSの言う「罪悪」は似ているか。

26

27 一般には肉体的感覚的欲望に優越する精神的愛をいい、文字通りプラトンの愛(エロス)
28 に由来する。なおプラトンのエロスは、性愛的段階での対象との合一を超克して、超越的
29 価値との出会いを目的とする。

30

(『ブリタニカ国際大百科事典』「プラトニック・ラブ」)

31

32 SもPも、また、『こころ』の作者も、「江戸時代までの日本」の習俗を踏まえている様子
33 はない。作者が「恋」についてどんなことをほのめかしたつもりなのか、私にはわからない。

34

35 江戸の人々が真摯^{しんし}に生きて、麗^{うるわ}しく咲かせた「文化」という名の花は、明治の世が進
36 んでいくにしたがって、目に見えて萎^{しぼ}んでいった。新たな価値観や文化を創出できたなら、
37 それはそれで結構な話だろう。しかし実状は、まったく、そうではなかった。明治政府は、
38 江戸のすべてを否定したが、異なる新しい文化の花を咲かせられなかった。それでも、社
39 会の紐帯^{ちゆうたい}を維持できていたのは、「江戸時代の遺産」があったからに違いない。

40

(森田健司『明治維新という幻想 暴虐の限りを尽くした新政府軍の実像』)

41

42 「明治維新という幻想」は〈「明治維新」は日本近代の始まり「という幻想」〉などの略。

43

44

45

46

47

48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2310 姦通罪
4 2313 『みだれ髪』

5
6 明治において、「恋は罪悪」という考えは、皮肉な意味で新鮮だったのかもしれない。

7
8 歌にきけな誰れ野の花に紅^{あか}き否^{いな}むおもむきあるかな春^{はる}罪^{つみ}もつ子

9 (与謝野晶子『みだれ髪』)

10
11 あえて「罪^{つみ}もつ子」と呼ばれてやろう。そんな感じだ。誇らしげ。

12
13 1947年の刑法一部改正以前は183条によって、有夫の婦女が夫以外の男性と性的に関
14 係をもったとき、夫の告訴をまっけて本罪で処罰された。しかし、有婦の男性は有夫の婦女
15 と性的関係をもったときのみ相姦者として処罰されることになっていたため、憲法14条
16 の法もとの平等に違反するのではないかが問題とされ、夫の姦通をも処罰するか、両方
17 とも処罰しないか議論が分れ、結局削除された。

18 (『ブリタニカ国際大百科事典』「姦通罪」)

19
20 与謝野晶子は、北村透谷とは正反対の戦術を採用したようだ。

21
22 むねの清水あふれてつひに濁りけり君も罪の子我も罪の子

23 (与謝野晶子『みだれ髪』)

24
25 「君」は与謝野鉄幹、「我」は未婚の鳳明子。だから、二人とも法的な「罪」は犯してい
26 ない。柳原白蓮の場合とは違う。『花子とアン』(NHK)参照。

27
28 1870(明治3)年の新律綱領は妻妾二等親を復活し妾にも妻と同様の貞操義務を課した。
29 また、妾は妻と同様夫の戸籍に登録され、妾の産んだ子は妻の子と同様公生^{こせい}の子とされた。
30 また父の妻と庶子との間には嫡母庶子関係という親子と同一の関係が発生するものとさ
31 れた。新律綱領にかわって制定された旧刑法(1880年公布)は親属に妾を含まず、ここ
32 に法の明文からは妾という文言が消滅し、1898年の明治民法は嫡母庶子関係を残し、家
33 督相続の順位において嫡出女子よりも庶男子を先にしたことは事実上妾の存在を認めた
34 ものであった。

35 (『日本歴史大事典』「めかけ」白石玲子)

36
37 〈「罪の子」or 妾〉という二者択一を拵え、「罪の子」を選べば、男女平等か。

38
39 ああ皐^{きつき}月^{フランス}仏蘭西の野は火の色す君も雛^{コクリゴ}罌粟^{コクリゴ}われも雛罌粟

40 (与謝野晶子『夏より秋へ』)

41
42 「罪の子」が成長して「雛罌粟」の花になったらしい。

43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2320 「先生のいう罪悪という意味は朦朧として」
4 2321 「冷評」

5
6 日本で恋愛結婚が普通になったのは、昭和四十年代からではないか。それまで、明治維新
7 以降の日本の常識では、「恋は罪悪」だったはずだ。

8
9 ある時花時分に私は先生と一所に上野へ行った。そうして其所で美しくい対の男女を
10 見た。彼等は睦まじそうに寄添って花の下を歩いていた。場所が場所なので、花よりも
11 其方を向いて眼を峙だてている人が沢山あった。
12 「新婚の夫婦のようだね」と先生が云った。
13 「仲が好さそうですね」と私が答えた。

14 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十二)

15
16 「或時」は〈或年〉や〈或日〉などが適当。

17 「そうして」だと、「男女」を見物しに行ったみたいだ。そうかもしれない。

18 「場所が場所なので」は意味不明。「寄添って」いたのがまずかった。「夫婦なら夫のあと
19 に妻が少し離れてついていくのが普通」(清水勲編『ビゴー日本素描集』「芸者の一日」)と
20 されていた。女が玄人のようなら、見て見ぬふりをされたろう。〈「花」「を向いて眼を峙だ
21 てている人が」少しは「あった」のかな。羨望と嫌悪の混交の露呈。

22 「新婚」という言葉には〈大目に見てやれ〉という含意があるのだろう。

23
24 「君は今あの男と女を見て、冷評しましたね。あの冷評のうちには君が恋を求めながら相
25 手を得られないという不快の声が交っていきましょう」
26 「そんな風に聞こえましたか」

27 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十二)

28
29 「仲が好さそうですね」というPの言葉を、Sは「冷評」と取ったらしい。その理由は不
30 明。あるいは、「冷評」が意味不明。

31 「恋を求め」は意味不明。〈求愛〉という言葉はあるが、〈求恋〉という言葉はなかりう。
32 〈「相手」を得る〉は意味不明。〈Pは「相手」に片思いをしている〉と解釈すべきか。ある
33 いは、〈Pは片思いの「相手」さえ見つけていない〉と解釈すべきか。「不快」は意味不明。
34 〈不満〉の類語か。「不快の声」は変。〈不快感〉が「声」として聞こえたらしい。幻聴だろ
35 うか。〈不快そうな響き〉のつもりか。

36 「不快」は、羨望に基づく嫉妬が原因だろう。しかし、若いカップルを見て青年が羨まし
37 がるのは普通だろうから、Sがわざわざ指摘するのはおかしい。しかも、Pは否定的な返事
38 をしているから、なおさらおかしい。P自身、カップルを羨んだつもりはなかったのだろう
39 か。あるいは、本音が露呈して恥じ、慌てて嘘をついたか。

40 「聞こえましたか」は笑える。耳鼻科へ行けてか？ 近頃、〈～と言っているように聞
41 こえますよ〉という言い方がちょっとだけはやっているようだ。あるとき、〈ええ、そう言
42 ってるんですよ〉と返事された人が目を白黒させていた。いい気味だ。

43
44
45

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2320 「先生のいう罪悪という意味は朦朧^{もろうろう}として」
4 2322 「恋の満足」

5
6 SとPの会話に、私はついていけない。

7
8 「そんな風に聞こえましたか」

9 「聞こえました。恋の満足を味わっている人はもっと暖かい^{ママ}声を出すものです。然し……
10 然し君、恋は罪悪ですよ。解^{わか}っていますか」

11 私は急に驚^{ママ}ろかされた。何とも返事をしなかった。

12 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十二)

13
14 「恋の満足」は意味不明。これは〈「恋」をされていると感じるとき「の満足」〉の不当な
15 略だろう。「もっと」だから、Pの声は少しばかり「暖かい声」だったことになる。

16 「然し」は話題の転換か。

17 「解^{わか}っていますか」は〈知ってはいても本当に「解^{わか}っていますか」〉の略か。

18 「急に驚^{わか}ろかされた」は変。ゆっくりと「驚^{わか}ろかされ」ることがあるのか。受身の「され」
19 は変。Sに驚かす意図があったのか、なかったのか。Pの驚く理由が不明。Pは〈「恋は罪
20 悪」じゃない〉と思っていたのか。では、何とっていたのか。不明。

21 「返事をしなかった」という、その理由は不明。

22
23 「恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。

24 「罪悪です。たしかに」と答えた時先生の語気は前と同じように強かった。

25 「何故ですか」

26 「何故だか今に解ります。今にじゃない、もう解っている筈です。あなたの心はとっくの
27 昔に既に恋で動いているじゃありませんか」

28 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十三)

29
30 「その時」がどの「時」か不明。「突然」というのは、会話が途切れていたからだ。

31 Sにとって、Pの質問は「突然」ではなかった。「たしかに」の被修飾語がない。

32 「何故ですか」は、〈「何故」「恋は罪悪」なの「ですか」〉の略か。あるいは、〈「恋は罪悪」
33 だと「何故」「たしかに」言えるの「ですか」〉の略か。不明。

34 「今に解ります」がPにとってまっとうな答えになっているとすれば、「何故ですか」は
35 〈「何故」「恋は罪悪」なの「ですか」〉の略だったわけだ。その場合、Pは「たしかに」を
36 無視したことになる。また、Sの「語気」さえ無視したことになる。

37 「今」は、Pに到来したのだろうか。つまり、Pは、「何故」の答えを自分で見つけたの
38 か。見つけたのなら、それはどんな答えになるのだろうか。不明。

39 語り手Pは「もう解っている」ことになるのか。そうだとしたら、なぜか。「遺書」を読ん
40 だからか。そうだとしたとしても、私にはわからない。「花やかなロマンス」も「美しい恋愛」
41 も、「遺書」で語られていないからだ。物語のない「恋」の「罪悪」など、あるはずがない。

42 「恋で動いて」は意味不明。「じゃありませんか」と言ったのは、チャーリー浜ではない。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2320 「先生のいう罪悪という意味は朦朧^{もうろう}として」
4 2323 「黒い長い髪で縛られた時の心持」

5
6 「恋で動いているじゃありませんか」というSの決めつけを、Pは否定する。Sは一步退
7 いてみせる。

8
9 「然し気を付けないと不可^{いけ}ない。恋は罪悪なんだから。私の所では満足が得られない代り
10 に危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

11 私は想像で知っていた。然し事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪
12 悪という意味は朦朧^{もうろう}としてよく解らなかった。その上私は少し不愉快になった。

13 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十三)

14
15 「然し」は〈ところで〉か。何に「気を付け」るのだろうか。また、どうやって？

16 「私の所」は〈S夫妻の家〉か。この場合、「恋」は宿親に対する宿子の思慕のように考
17 えられる。「満足」は〈人恋しさを満たすこと〉だろうか。真相は、〈宿親でしかないS夫妻
18 にPの被愛願望を満たしてやることはできない〉といったものだろう。親の溺愛は子にとっ
19 て「危険」でないらしい。「——」の内容を満たすことは、私にはできない。この記号は不
20 凶系だろう。「危険」とは〈「黒い長い髪で縛られる」こと〉らしいが、不可解。縛られるの
21 は、〈苦痛〉ではあっても、「危険」ではなかろう。脱出できないと「危険」かもしれない。
22 だったら、話題は〈脱出できない「危険」〉でなければならぬ。「女の髪の毛には大象も繫
23 がる」という言葉があるが、この場合、罪を犯すのは女だ。

24 少女静はSを性的に束縛したのだろうか。「遺書」にそんな話はない。少女静が「無邪気
25 に遣る」(下三十四)ことを、青年Sが性的束縛と誤解したのだろうか。「縛られた時」は、
26 〈「縛られた」ような気分になっている「時」〉などの不当な略だろう。だが、Sの空想する
27 静が異性を拘束した理由や手段などは不明。被愛妄想的気分と被害妄想的気分は表裏一体
28 の関係にある。彼は、この二種の背反する気分を仕分けすることができない。好きな人に好
29 かれたいのではなくて、苛められそうな人に好かれたがるからだ。汝の敵に愛されよ。

30 Pの「想像」の具体例は不明。「想像で知って」は意味不明。

31 「想像」と「事実」の対比は無意味。〈想像×現実・「真実」(下十五)〉だろう。また、〈事
32 実×虚偽・虚構・「理窟」(上二十九)〉だろう。Pは日本語がお下手。

33 「いずれにしても」は、「想像で知って」いるだけでなく、「事実として」も「知って」い
34 るときにしか使えない。「想像」の中身は不明。Pにわからないのは、〈Sの用いた「罪悪」
35 という語の「意味」〉ではなく、〈Sが語った「恋は罪悪」という文の「意味」〉だろう。〈S
36 の用いる「恋」の「意味」〉からわかっていたいなかった。そのことは、すぐに知れる。「それは
37 恋とは違います」(上十三)と、PはSに抗弁している。ただし、語り手Pは「恋」のP的
38 意味について聞き手Qに語らない。作者は怪しい。

39 S的意味の「罪悪」という言葉の「意味」は、『こころ』の読者にとっても「朦朧として」
40 いなければならない。そうでなければ、Pは漫才のボケであり、Sはその相方で、〈『こころ』
41 は漫才〉ということになる。なってもいいけど。

42 「少し」の含意は〈何となく〉などか。「不愉快」の原因は不明。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2330 「恋」
4 2331 「たとい慾を離れた恋そのものでも」

5

6 〈「恋は」Kを自殺に追い込んだから「罪悪ですよ」〉といった解釈をする人がいそうだ。
7 しかし、そんな解釈が成り立つのなら、〈貧困は窃盗の原因になるから貧困は「罪悪ですよ」〉
8 ということになる。原因と結果が逆だ。ただし、逆でもいいのかもしれない。

9

10 Kは真宗寺に生れた男でした。然し彼の傾向は中学時代から決して生家の宗旨に近い
11 もではなかったのです。教義上の区別をよく知らない私が、こんな事をいう資格に乏し
12 いのは承知していますが、私はただ男女なんによに関係した点についてのみ、そう認めていたの
13 です。

14 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

15

16 「傾向」は「思想的に特定の方向」(『明鏡国語辞典』「傾向」といった意味らしい。
17 「男女の関係した点」は「肉食妻帯」(『マイペディア』「浄土真宗」)か。

18

19 道のためには凡てを犠牲にすべきものだと云うのが彼の第一信条せつよくなので、
20 や禁慾は無論、たとい慾を離れた恋そのものでも道の妨害さまたげになるのです。Kが自活生活
21 している時分に、私はよく彼から彼の主張を聞かされたのでした。その頃から御嬢さん
22 を思っていた私は、勢いどうしても彼に反対しなければならなかったのです。私が反対する
23 と、彼は何時でも気の毒ぶべつそうな顔をしました。其所には同情よりも侮蔑の方が余計に現わ
24 れていました。

25 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

26

27 「道」の中身は空っぽ。この「恋」は性行為を伴うか。「恋そのもの」でも快感は伴うは
28 ず。Kの「主張」はありふれている。なお、Kが「第一信条」を実践していた証拠はない。

29 Sに、K以外の人から同種の「主張を聞かされた」という体験はないのか。

30 「御嬢さんを思って」は怪しい。誰かを「思って」いなければ「反対し」なくてもいいのか。

31 「勢い」は不可解。「彼に」は〈「彼」の「主張」「に」〉の略。「反対しなければならなかつ
32 た」は〈「反対し」ないではいられ「なかった」〉などが適当。語り手Sは、語られるSの欲
33 求を義務として表現しているわけだ。『こころ』に何度も出てくる混乱。

34 語り手Sは、〈「彼に反対」したいのに賛成「しなければならなかった」〉という真相を隠蔽
35 しようとして失敗しているらしい。つまり、〈反対したいという欲求〉と〈賛成しなければ
36 ならないという義務〉の混交だろう。作者は混乱している。

37 どんなふうに「反対する」のか。このときの青年Sの発言は不明だから、Kの反応の適否
38 は判断できない。「気の毒」は意味不明。「他人の苦痛・難儀についてともに心配すること」

39 (『広辞苑』「気の毒」)のようだが、Kは〈Sは異性に関して「苦痛・難儀」を感じている〉
40 と思ったのか。〈僕に軽蔑される君は「気の毒」〉の略か。だったら、くだらない。

41 「やは肌のあつき血汐に触れも見でさびしからずや道を説く君」(与謝野晶子『みだれ
42 髪』)と歌った人は、男心がわかっていない。男は淋しいから道を説くのだ。

43

44

45

46

47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2330 「恋」
4 2332 『ロミオとジュリエット』

5
6 『こころ』の読者はシェイクスピアを忘れていなければならないのか。

7
8 ロミオ だが、くちびるは聖者にもあり、巡礼にもありましょう。

9 ジュリエット でもね、巡礼様、それはお祈りに使おうためのくちびるですわ。

10 ロミオ おお、ではわたしの聖女様、手にお許しになることなら、くちびるにもお許し下
11 さいませんか？ 願わくは許したまえ、信仰の、絶望に変わらざらんがために、——わた
12 しのくちびるの祈りです、これが。

13 ジュリエット いいえ、聖者の心は動きませんわ、たとえ祈りにはほだされても。

14 ロミオ では、動かないで下さい、祈りの効^{しる}だけをいただく間。(接吻する) さあ、こ
15 れでわたしのくちびるの罪はきよめられました、あなたのくちびるのおかげで。

16 ジュリエット では、その拭われた罪とやらは、わたしのくちびるが背負うわけね。

17 ロミオ わたしのくちびるからの罪？ ああ、なんというやさしいおとがめだ、それは！
18 もう一度その罪をお返してください。(ふたたび接吻する)

19 (シェイクスピア『ロミオとジュリエット』)

20

21 「恋」と「本当の愛」(下十四)は違う」ということにしてみてもどうか。

22

23 恋の中には呪いが含まれているのだ。それは恋人の運命を幸福にすることを目的とし
24 ない、否むしろ、時として恋人を犠牲にする私の感情が含まれているものだ。その感情は
25 憎みと背を合せている際^{まわ}どいものだ。恋人同志は互いに呪いの息をかけ合いながら、互い
26 に祝していると思っていることがあるのだ。恋人を殺すものもあるのだ。無理に死を強う
27 るものさえある。それを皆愛の名によってするのだ。愛は相手の運命を興味とする。恋は
28 相手の運命をしあわせにするとは限らない。

29

(倉田百三『出家とその弟子』)

30

31 『こころ』では、こうした仕分けがされていない。作者は混乱している。

32 Sは静を幸せにしようとしているのか。不幸せにしたいはなかろう。だが、彼は自分の本
33 心を彼女に打ち明けていない。彼はとんでもない勘違いをしているのかもしれない。

34

35 浮気は許される。それは伊達者の生活のあらゆる制約と両立しうる。恋愛はそうではな
36 い。それは情熱のうちで最も非社会的で、最も反社会的で、最も野蛮で残忍なものである。
37 それゆえ、世間はこれを艶事や身持ちのおさまらぬことよりも厳しく批判する。

38

(アナトール・フランス『赤い百合』)

39

40 いくら考えても、私には「恋は罪悪」のS的意味がわからない。勿論、Pがわからない理
41 由もわからない。語り手Pの意図が不明であるばかりか、作者の意図も不明だ。「恋」の真
42 意を、Nが隠蔽しているのだろう。

43

44

45

46

47

48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2330 「恋」
4 2333 『男組』
5

6 明治から昭和のバブル期の前まで、男が女を愛するのは罪だった。

7 『宮本武蔵』(吉川英治)の武蔵は、お通から逃げ続ける。武者修行の邪魔になるからと
8 いうのが表向きの理由だろうが、彼女が武蔵の友人である又八の許嫁だったせいなのが大き
9 いのだろう。又八との友愛をお通との恋よりも重視したわけだ。

10 『次郎長三国志』(マキノ雅弘監督)シリーズでは、次郎長がお蝶との馴初めを語ると、子
11 分たちが笑いながら親分を殴る。その後、お蝶は死んでしまう。まるで次郎長がのろけたせ
12 いで天罰が下ったみたいだ。また、森の石松が恋をすると、無敵だった彼があっさり殺さ
13 れてしまう。この出来事も天罰のようだ。男が恋をすると腑抜けになる。

14 『東京流れ者』(鈴木清順)では、「女と一緒に歩けないんだ」という男の台詞に、観客
15 の男たちは悲鳴のような歓声を上げ、拍手を送ったものだ。フラレタリア同盟。

16 『第三の男』(リード監督)のパクリである『霧笛が俺を呼んでいる』(山崎徳次郎監督)
17 では、あの有名なラスト・シーンとは正反対に、待っている女を男が無視する。ちなみに、
18 小説の『第三の男』(グリーン)では、男女は仲良くなる。わかりやすい。

19 『赤いハンカチ』(榊田利雄監督)でも、恋愛より友愛が尊ばれる。主人公は親友の墓前
20 で親友の妻を残して去る。死んだ親友に縛られるのだ。

21 『カサブランカ』(カーティス監督)のパクリである『夜霧よ今夜もありがとう』(江崎実
22 生監督)でも、友愛が尊重される。原典では、主人公は元カノのために彼女とその夫の亡命
23 を助ける。だが、パクリでは友人になった夫を助けるために主人公は彼女を捨てる。

24 園まりのそっくりさんと園まり本人の二役を演じた園まりの演技が光る『逢いたくて逢
25 いたくて』(江崎実生監督)は『ローマの休日』(ワイラー監督)のパクリだが、記者が女か
26 ら去るだけでなく、恋愛すらしない。彼には婚約者がいたことになっている。原典のラスト・
27 シーンでは主人公が独歩する。王女が追いかけてくるのではないか。いや、そんなことはないよ
28 な。未練がましい印象が素敵なのに、日本の映画人はそれを嫌悪したらしい。

29 森繁久弥の社長シリーズの主人公は、恐妻家のくせに女好きで、見栄っ張りのおっちょこ
30 ちょいだ。ただし、仕事はできる。植木等の無責任男シリーズの主人公も女好きで軽薄だが、
31 彼もビジネスで成功する。男の異性愛者は有能でも笑いものにされた。ちなみに、エッチと
32 スケベは違う。あだち充『みゆき』の「エッチとスケベ」参照。

33 『男組』(雁屋哲+池上遼一)で、紅一点のヒロインが振袖に着替える、そのちょっと
34 前、流全次郎は失明し、彼女が普段着に戻ると視力を回復する。しかも心身ともに強くな
35 っている。失明は禁欲の象徴。あるいは、エディプス・コンプレックスの象徴。ちなみ
36 に、彼女は流の宿敵である神竜の許嫁だが、未来の夫を諫めるために流と共闘していた。

37 〈王子は悪魔から王女を救う〉という物語ではない。

38 大正のベストセラー『地上』(島田清次郎)では、稚児にされかけた少年を主人公が救い、
39 少年の知人の少女と恋愛をするようになる。面白くないので、私は最初の部分しか読んでい
40 ない。後に、島田は「婦女暴行事件を起こして失墜。翌年〈早発性痴呆〉という診断で精神
41 病院に入院し、そこで没した」(『マイペディア』「島田清次郎」)という。そんな元気すぎる
42 男にしか恋愛小説は書けなかったようだ。

43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
- 2 2300 「恋は罪悪ですよ」
- 3 2340 被愛願望
- 4 2341 女性崇拜

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49

〈西洋人は恋愛を賛美し、東洋人は恋愛を忌避する〉といった総括は眉唾物だ。

〈修練〉を意味するギリシア語アスケシスに由来する英語 *ascesis, asceticism* などの訳。救済あるいは聖なる体験の獲得のために、世俗的・肉体的欲望を制御すること。断食と性的隔離が代表例。

(『百科事典マイペディア』「禁欲」)

『古事記』によれば、神々はみとのまぐわいによって国を産んだ。元来、日本人は性愛を罪悪視してはいない。むしろ、信仰している。

真実の知恵(般若)の極致(理趣)は現実の愛欲や欲望をそのままの形で汚れないものとして肯定できる立場(一切法自性清浄)である。この苦楽を超越した絶対境(大楽)が悟りであると説く。日本の真言宗では最も重要な経典。

(『百科事典マイペディア』「理趣経」)

ただし、真言立川流は「さかんに女犯(にょぼん)の是認を説いていた」(『日本歴史大事典』「真言立川流」)ので江戸時代に弾圧された。

エジプト、ギリシアなどの古代文明国にも行われていた。日本でも日光金精峠の金精大明神、静岡県掛川市の孕石をはじめ、道祖神像など陰陽道と結びついて広くみられる。また田植え祭や豊年祭に男根像を用いることも多い。

(『ブリタニカ国際大百科事典』「生殖器崇拜」)

日本人はスケベだ。性欲を罪悪視する日本人は変だ。Kは変だ。Nも変だ。

西洋において女性崇拜が始まるのは十二世紀以降である。東方遠征に赴いた騎士が寶石や絹織物や香料などを持ち帰ったことによって、女性をかこむ環境や衣裳だけではなく、女性の社会的条件も必然的に変わった。愛の情熱を歌った北伝のトルヴェールや南伝のトルヴァドゥール〔それぞれ宮廷風の抒情詩を作った詩人を指す〕、それに十字軍兵士や巡礼者が恋愛の対象となる新しい理想像を作り上げる。詩人や彩色画家や彫刻家によって「クルトワジー」〔女性への献身を旨とする雅びな騎士道精神の一形態〕という愛の神話が確立したのである。こうした「気高い心」の追求はそこかしこで力をふるい、野蛮で粗野な状態をしだいに駆逐するようになった。

(ロミ『乳房の神話学』)

洋の東西を問わず、性愛を重んじたり軽んじたりする思想はあったようだ。それらは時代の流れによって交代したり、あるいは併存したりしていたらしい。

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2340 被愛願望
4 2342 『罪と罰』

5
6 「罪悪」のS的意味は〈恥〉だろう。

7
8 軟派の連中は女に好かれようとする。

9 (森鷗外『キタ・セクスアリス』)

10
11 女好きは男の恥だが、被愛願望は恥を超えた「罪悪」なのかもしれない。

12
13 罪と罰をアントとして考えたドストの青みどろ、腐った池、乱麻の奥底の、……ああ、
14 わかりかけた、いや、まだ、……などと頭脳に走馬燈そうまとうがくるくと廻っていた時に、
15 「おい！ とんだ、そら豆だ。来い！」

16 (太宰治『人間失格』「第三の手記」二)

17
18 「罪と罰」はドストエフスキーの作品名。「アント」は「アントニム対義語」(『人間失格』)の略。主
19 人公は「罪のアントがわかれば、罪の実体もつかめるような気がするんだけど」(『人間失格』)
20 と呟く。意味不明。『反対語対照語辞典』では〈罪〉に対して〈罰〉が出ている。だが、〈功
21 罪〉というから〈罪〉の反対は〈功〉だ。〈賞罰しょうまつ〉というから〈罰〉の反対は〈賞〉だ。

22
23 果して、無垢の信頼心は、罪の源泉なりや。

24 (太宰治『人間失格』「第三の手記」二)

25
26 妻の不貞を知ったときの葉蔵の自問。自答は「くるくる」だ。「信頼心」の真意は〈被愛
27 妄想〉だろう。しかし、妻こそ、被愛願望を抱く夫に飽き足らず、他の男を迎え入れたのか
28 ももしれない。そこらの仕分けができないから「くるくる」が起きたわけだ。

29 Sが「恋は罪悪」の「源泉なり」と語ったのなら、まだ、わかる。

30 ところで、ドストエフスキーに対する日本人の「信頼心」は疑わしい。

31

32 形而下的な苦しみや屈辱が道徳的人物を向上せしめるという考えをドストエフスキー
33 が情熱的に固執したことは、個人的な悲劇にその源があるのかもしれない。シベリアの刑
34 務所生活によって、ドストエフスキーの内部の自由を愛する人間、反逆者、個人主義者が
35 ある種の損害を蒙ったこと、少なくとも自然なびやかさを傷つけられたということ、
36 彼自身感じていたのではなからうか。だが、自分は「ましな人間」になって帰って来たの
37 だという考えに、ドストエフスキーはあくまで執着したのだった。

38 (ウラジミール・ナボコフ『ロシア文学講義』)

39
40 『罪と罰』は奇怪な小説だ。奇怪な事件を描いた小説ではない。作者が変なのだ。

41 『罪と罰』を種にした『心理試験』(江戸川乱歩)では、奇怪な事件が描かれる。その際、
42 ラスコーリニコフ式の臍茶の書生論は意図的に排除されている。正しい。

43

44

45

46

47

48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2340 被愛願望
4 2343 被愛妄想的気分

5
6 私は、被愛願望を揶揄しているのではない。願望の意図的な隠蔽を批判している。

7
8 いっそ真実の狂人になって世界中の女が悉く僕にその全部の愛を濺いで生きているの
9 だというような妄想を持ち得たら、自分はどれ程幸福になることが出来るだろう。——こ
10 んな空想をするだけでも、自分はなんとなく自分が少々それに接近しかけているのでは
11 ないかとも考えられるのである。

12 それさえ出来たら、自分はどうやら世界中の人類を悉く愛し得られるように思う。

13 (辻潤『浮浪漫語』)

14
15 日本男児が被愛願望を自覚すれば、自分で自分を「狂人」扱いしてしまうほどなのだ。

16
17 愛は與へる本能ではない。愛は掠奪する烈しい力だ。

18 (有島武郎『惜しみなく愛は奪ふ』)

19
20 有島は、被愛願望を隠蔽したまま美化しようとした。

21
22 孤高の文学といふ。然し、真実の孤高の文学ほど万人を愛し万人の愛を求め愛に飢えて
23 みるものはないのだ。

24 (坂口安吾『大阪の反逆』)

25
26 こんな混乱した言説に接して、「孤独な人間」は感涙に咽ぶのかもしれない。

- 27
28 I (通説) 孤高の人は他人を愛さない。
29 II (逆説) 孤高の人は他人を愛する。
30 III (伝説) 孤高の人は他人に愛される。
31 IV (邪説) 孤高の人は他人に愛されたがる。

32
33 『白痴』(坂口安吾)は、ある男が一時的な被愛妄想から醒める話。
34 被愛願望が募って被愛妄想を抱くようになるのだろう。

35
36 この妄想を抱く者の大半は女性で、対象となるのは人気者、有名人、政治家などである。
37 比較的長期にわたるあこがれと希望の時期から、失望と苦痛の時期を経て、憎しみと絶望
38 の最後の時に入るが、この時期はしばしば周囲の人々や対象に対する実際の行動が見ら
39 れるので、医学的・法的に最も危険である。

40 (『ブリタニカ国際大百科事典』「被愛妄想」)

41
42 『ぼるとがるぶみ』(不詳) 参照。

43
44
45
46
47
48
49

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2350 「本当の愛」
4 2351 「罪悪」かつ「神聖」

5
6 困ったことに、「恋は罪悪」であるだけではない。

7
8 「又悪い事を云った。焦慮^{じら}せるのが悪いと思って、説明しようとする、その説明が又あ
9 なたを焦慮^{じら}せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。
10 とにかく恋は罪悪ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

11 私には先生の話が益^{ますます}解らなくなった。然し先生はそれぎり恋を口にしなかった。

12 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十三)

13
14 Sは「説明し」ていない。だから、「その説明」の「そ」の指すものはない。

15 「この問題は」は〈「この問題」について論じるの「は」〉などの不当な略。

16 「然し」の後は、〈私は「それぎり恋を口にしなかった」〉などが適当。

17 Pは〈「神聖」〉がわからないのか。〈「罪悪」かつ「神聖」〉がわからないのか。不明。

18
19 「ちょっと待ってよ。私はもっとロマンチックな神聖な純粋な気分でのよ。どうして、
20 すぐ寝るとか寝ないとかいう話になるのよ」

21 (北川悦吏子『ロング バケーション』5)

22
23 この「神聖」は「神聖なる恋愛、二人は決して罪^{おか}を犯しては居らぬ」(田山花袋『蒲団』)
24 の場合と同様で、肉体関係のこと。

25
26 「ああ、いいなあ……」南はうっとりする。

27 「何が」

28 「男の人に好きって言われるの」

29 「何言ってるの……」

30 「私、言わせるのは卑怯^{ひきょう}な気がして、いつも自分から言っていました」

31 「黙らない人だなあ……」と、杉崎は、その唇をふさいだ。

32 (北川悦吏子『ロング バケーション』7)

33
34 南は被愛願望を隠蔽し、自立した女を演じようとして、かなり無理をしていた。

35
36 外^{ほか}へはやられぬ。神聖なる玩具^{おもちゃ}として生涯^{しょうがい}大事にせねばならぬ。

37 神聖とは自分一人が玩具にして、外の人には指もささせぬと云^{ママ}う意味である。

38 (夏目漱石『虞美人草』十二)

39
40 「自分」は藤尾で、「玩具」にされるのは小野。藤尾は「玩具」に愛されたがる。

41 この「神聖」は語り手の皮肉の表現だ。『こころ』の「神聖」はSの自嘲の表現か。いや、
42 Sの自分語らしい。『こころ』の「神聖」は複雑すぎて、無意味のようだ。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2350 「本当の愛」
4 2352 『近代の戀愛觀』

5
6 『文学論』では、「恋」は「神聖」として称揚されてはいない。

7
8 ただ恋は神聖なりなど、説く論者には頗る妥当を欠くの感あるべし。所謂 Plato 式恋
9 愛なるもの、もし世に存在すると仮定せば、これには劣情の混入しあらざること勿論なれ
10 ども、同時にまた劇烈の情緒として存在し能はざること明かなり。

11 (夏目漱石『文学論』「第一編 第二章 文学内容の基本成分」)

12
13 「劇烈の情緒」の不足を補うために、SはKを巻き込む。

14
15 精神と肉體と兩方からの完全な全人的な人格的結合を個人と個人の間に見ることは、
16 戀愛生活の外には断じて有り得べからざる事だ。両性の肉體的結合には他の何者とも比
17 すべからざる絶大な精神的意義の存することを知らねばならぬ。文字通りに同心一體
18 といふ言葉は、他の如何なる生活に於ても適用し得べからざる語である。

19 (厨川白村『近代の戀愛觀』)

20
21 『近代の戀愛觀』は『こころ』の八年後に出た。

22
23 先生、屹度今でも遣つて居るに相違ない。若い時、あゝいふ風で、無闇に戀愛神聖論者
24 を氣取つて、口では綺麗なことを言つて居ても、本能が承知しないから、つい自から傷つ
25 けて快を取るといふやうなことになる。そしてそれが習慣になると、病的になつて、本能
26 の充分の働を爲ることが出来なくなる。先生のは屹度それだ。つまり前にも言つたが、肉
27 と靈とがしつくり調和することが出来んのだよ。

28 (田山花袋『少女病』三)

29
30 「罪悪」とは、「自から傷つけて快を取るといふこと」かもしれない。

31
32 A・アルステーンズも非妥協的な態度はおなじであるが、しかし彼の場合は精神分析を
33 背景にしている。この著者はフロイトに依拠して、マスターベーションが神経衰弱症にお
34 いてある役割を果たし、器官障害を引き起こす(フロイトにもその器官障害の仕組みはわ
35 かっていなかった)、と主張しているのである。自慰という罪を犯した者はもはや非難さ
36 れない。「教育的援助」こそがその者を難局から救い出すことができるであろう、とい
37 わけだ。

38 (ロジェ=アンリ・ゲラン『マスターベーション糾弾!』*)

39
40 「戀愛神聖論者」はオナニストと疑われたわけだ。〈静であてがきをしたことはない〉と、
41 語り手Sは暗示しているのか。だが、〈エロ本を種にしたせんずりのせいで「病的になつて」
42 いたかも〉という不安を隠蔽しているのかも。

43
44 *ジョルジュ・デュビー他『愛とセクシュアリテの歴史』所収。

45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2300 「恋は罪悪ですよ」
3 2350 「本当の愛」
4 2353 「信仰に近い愛」
5

6 青年Sは少女静に愛の告白をしようと思わない。「好きっていいなよ」(葉月かなえ『好き
7 っていいなよ。』) という気もなかったようだ。被愛願望を悟られたくなかったからか。

8
9 私は女らしかったのかも知れ^{ママ}ません。

10 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十四)

11
12 「女らしかった」は〈女々しかった〉などが適当のようだが、〈意気地なしだった〉とい
13 う話ではなからう。〈受動的だった〉という事実の隠蔽に違いない。

14
15 私はその人に対して、殆んど信仰に近い愛を有っていたのです。私が宗教だけに用いる
16 この言葉を、若い女に応用するのを見て、貴方は変に思^{ママ}うかも知れませんが、私は今でも
17 固く信じているのです。本当の愛は宗教心とそう違^{ママ}ったものでないという事を固く信じ
18 ているのです。私は御嬢さんの顔を見るたびに、自分が美^{ママ}しくなるような心持がしまし
19 ました。御嬢さんの事を考えると、気高い気分がすぐ自分に乗り移って来るように思いました。

20 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十四)

21
22 「その人」は静。「殆んど」の被修飾語が決まらない。〈「殆んど」～「近い」〉だと、近く
23 ない。〈「殆んど」～「有っていた」〉だと、「有って」い^{ママ}なかった。〈「信仰」そのものである
24 「愛」の物語〉は、〈神は私を愛する〉というものだろう。だったら、〈「信仰」と区別でき
25 ない「愛」の物語〉は〈静はSを愛する〉というものだろう。つまり、被愛妄想だ。

26 「宗教だけに用いる」は間違い。〈科学信仰〉などと用いる。〈若くない「女に応用するの」
27 は「変」ではない〉という考えを、SとPは共有しているようだ。Sの場合、〈若くない「女」
28 とは、静の母のことだ。Sの被愛願望の本来の対象は、静の母だった。Pの場合、静だ。

29 「本当の愛」は、〈被愛妄想の「愛」〉の美化だ。「宗教心とそう違^{ママ}ったものではない」と
30 いう説明は無理。「宗教心」の方が難しそうだからだ。

31 「美しくなる」の真意は〈赤ちゃん返りする〉などか。

32 「気高い気分」は意味不明。「気分」は「乗り移って」こ^{ママ}ない。「神仏・霊魂などがとりつ
33 く」(『広辞苑』「のりうつる」) というのが常識。〈「考えると」～「乗り移って来る」
34 か。あるいは、〈「考えると」～「思いました」
35 か。「来るように」だから、来ていなかったわけ
36 だ。〈「すぐ」～「乗り移って来る」
37 か、〈「すぐ」～「思いました」
38 か。

37 愛は信仰より成る。信仰は二つの神を念ずるを許さぬ。愛せられべき、わが資格に、^{きえ}帰依
38 の頭^{こうべ}を下げながら、二心^{ふたごころ}の背を軽薄^{ちまた}の銜^{やしろ}に向けて、何の社^{やしろ}の鈴を鳴らす。

39 (夏目漱石『虞美人草』十二)

40
41 「信仰」は夏目語か。

42 Sには、この程度の「説明」もできなかつたのか。そうだとしたら、なぜか。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2410 文豪は悪文家
4 2411 「向上心が」「精神的に」「ない」

5
6 『こころ』で一番有名らしい文を読もう。

7
8 『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』
9 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

10
11 「精神的に」の被修飾語が決まらない。「向上心」が「精神的に」「ない」なんて意味不
12 明。「精神的に」「馬鹿だ」と考えても、やはり意味不明。「精神的」な「向上心」とや
13 っても、やはり確かな意味はない。「精神的」方面「に」において「向上心のないものは、馬
14 鹿だ」と補うと、やっと日本語らしくなるが、まだもやもやしている。「肉体的方面にしか
15 「向上心のないものは、馬鹿だ」という意味か。つまり、「体育会系は馬鹿だ」と言いたい
16 のか、言ってもいいけど。

17
18 よりよい方向を目指し自らを高めようとする心。
19 「—のない人」「精神的に—のないものは馬鹿だ〈漱石〉」
20 (『明鏡国語辞典』「向上心」)

21
22 この説明と本文を合成すると、「精神的に」「よりよい方向を目指し自らを高めようとする
23 心」「のないものは馬鹿だ」となる。この場合、「精神的に」の被修飾語は「よい」だ。
24 この辞典によれば、本文では被修飾語が欠落していることになる。だったら、本文は悪文と
25 判定してよい。ところが、『こころ』の作者がこれを悪文として表現している様子はない。
26 だから、文豪Nは悪文家だろう。そうでないのなら、この辞典は間違っている。

27
28 「問題の日本語」には、「問題として出されている日本語」「問題になっている日本語」な
29 どの意味と、「問題のある、変な日本語」という意味がありますが、「問題な日本語」には
30 前者の意はなく、「問題のある日本語」の意に限定され、誤解なく伝わるという利点もあ
31 ります。

32 (北原保雄『続弾！問題な日本語——何が気になる？ どうして気になる？』)

33
34 「問題な日本語」の「な」を、「のある、変な」と言い換えてわかったつもりになれるの
35 なら、「問題な日本語」は問題な日本語ではないわけだ。しかし、「精神的に」は違う。「に」
36 を弄った程度ではわかったつもりになれないのだ、私はね。

37
38 私は先ず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と云い放ちました。これは二人で房州
39 を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。

40 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

41
42 「馬鹿」の真意を知っているのは、Kだけだ。Sは知らない。作者は、どうか。

43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2410 文豪は悪文家
4 2412 立身出世

5
6 「向上心」というと、スマイルズの『向上心』が連想される。彼の『西国立志編』と訳さ
7 れた『自助論』は「西洋の個人主義的道德」（『広辞苑』「西国立志編」）を説いたものだが、
8 「しばしば立身出世の文脈で読まれた」（『日本史小辞典』「西国立志編」）という。

9
10 当時のベストセラーであるスマイルズの『西国（さいごく）立志編』（1870～71）や福
11 沢諭吉の『学問のすゝめ』（1872）は、人々に自らの才覚と努力で立身出世（=上昇移動）
12 を勧める内容であり、また当時の個人レベルの立身出世はそのまま国家レベルの立身出
13 世（=列強への追い付き）と重なり、立身出世は公的にも正当化された。その後明治後期
14 からしだいに社会階層が固定化し安定化するようになると、社会的上昇移動のコースは
15 学校や官僚制によって制度化され、それとともに立身出世の観念も当初の野性味を失い、
16 形式化、矮小（わいしょう）化されるに至った。

17 （『日本大百科事典（ニッポニカ）』「立身出世」麻生誠）

18
19 『それから』の代助の父の世代では、「個人レベルの立身出世」と「国家レベルの立身出
20 世」が一致していたようだ。代助の世代では大義を失ったためか、彼は「nil admirariの
21 域に達して」（『それから』二）いた。〈ニル・アドミラリ〉とは、〈無関心〉とか〈無感動〉
22 とかいう意味だ。この言葉は『舞姫』（森鷗外）に出ている。昭和中期に〈無責任〉が加わ
23 り、〈三無主義〉と言う言葉ができる。その後、〈ハレンチ〉が流行。その後、〈シラケ〉だ。

24
25 我々は実際偉くなる積りでいたのです。ことにKは強かったのです。

26 （夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十九）

27
28 どんなふうに「偉くなる積り」だったのか、具体的に語られてない。ありふれた立身出世
29 を願っていた様子はないから、「偉く」は意味不明。

30 「強かった」は、〈「積り」が「強かった」〉と解釈する。

31
32 けれども天の与へた性質から言ふと、彼は率直で、単純で、そして何処か^{おき}圧ゆべからざ
33 る勇猛心を持つて居た。勇猛心といふよりか、^{かんい}敢為の氣象と言つた方が可からう。則ち一
34 転すれば冒険心となり、再転すれば^{やまぎ}山氣となるのである。現に彼の父は山氣のために失敗
35 し、彼の兄は冒険の為に死んだ。けれども正作は西国立志編のお蔭で、此氣象に訓練を加
36 へ、堅実なる有為の精神としたのである。

37 （国木田独歩『非凡なる凡人』）

38
39 Kの雑言に含まれた「精神的に」の「精神」は「堅実なる^{ゆうい}有為の精神」とは違ふようだ。
40 むしろ、その逆で、「山氣」だろう。〈Kは「山氣のために失敗し」て「冒険の為に死んだ」〉
41 と言える。ただし、その「冒険」は内向きであり、「精神的に」頑張っていただけだ。その
42 非現実的な「向上心」を、Kは「^{しやうじん}精進」（下十九）という言葉で美化していたらしい。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2100 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2110 文豪は悪文家
4 2413 「精神的に」しか「向上心のないもの」

5
6 Kに、スマイルズ風のポジティブな「向上心」があったろうか。

7
8 寺に生れた彼は、常に精進しやうじんという言葉を使いました。そうして彼の行為動作は悉ことごとく
9 この精進の一語で形容されるように、私には見えたのです。私は心のうちで常にKを畏敬いけい
10 していました。

11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と遺書」十九)

12
13 「彼」はKだ。この「常に」は〈しばしば〉などが適当。

14
15 「梅雨時はいつも調子が悪い／梅雨時は常に調子が悪い」を比べると、「いつも」は“梅
16 雨時になると毎年きまって調子を落とす”で、「常に」は“梅雨の期間中はずっと調子が
17 よくない”である。

18 (森田良行『基礎日本語辞典』「いつも」)

19
20 Kの「行為動作」の具体例は語られない。「悉ことごとく」は誇張。「私には見えた」には、〈私
21 以外の人間には見えなかった〉という含意がある。Sは、Kの「精進しやうじん」芝居の唯一の観客
22 だったようだ。Kは、Sに煽られて芝居を止められなくなっていたのかもしれない。

23 〈「私は心の」そとでは「常にKを」侮蔑していました〉という文が見え隠れする。

24
25 こうして第一章で確認したように、近代国家の確立に伴う国家体制の整備・固定化によ
26 り、一種の閉塞状況が青年層にもたらされた。「神経衰弱」という言葉がこの頃初めて使
27 われ出したことに示される「煩悶青年」、「女学生との遊蕩に耽っている」と非難された「墮
28 落青年」、他方では「一攫千金」を夢みる「成功青年」などの青年の諸タイプがこのアノ
29 ミー状況に応じて登場してくる。そしてこれらの青年層向けに「努力による人格の修養」
30 を第一義とする修養書が大量に書かれ、修養書ベストセラー時代が出現するのである。そ
31 してさらにこのプロセスの中で修養主義が確立し、大正、昭和へと分極化しつつも受け継
32 がれていくことになる。

33 (筒井清忠『日本型「教養」の運命—歴史社会学的考察』)

34
35 Kは書淫つまり活字ヲタクだったようだ。活字中毒。本の紙魚。

36
37 彼は寧ろ神経衰弱かかに罹っている位なのです。私は仕方がないから、彼に向って至極同感
38 であるような様子を見せました。

39 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十二)

40
41 「彼」はKだ。〈「精神的に」しか「向上心のないもの」〉は「神経衰弱」だろう。
42 静の存在とは無関係に、SはKを騙していたのだ。

43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2420 「馬鹿」の含意
4 2421 「さも軽薄もののように」

5

6 意味不明の「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」という雑言にKがこめた意味つまりK
7 的含意を、Sは知らなかった。〈SはK的含意を知らない〉ということに、Kは気づいてい
8 たらうか。不明。気付かれているかどうか、Sは気にしたらうか。不明。

9

10 たしかその翌^ある晩の事だと思いますが、二人は宿^{ママ}へ着いて飯を食って、もう寐^ねようとい
11 う少し前になってから、急にむずかしい問題を論じ合い出しました。Kは昨日^{きのう}自分の方か
12 ら話しかけた日蓮の事に就いて、私^{ママ}が取り合わなかったのを、快よく思っていなかったの
13 です。精神的に向上心がないものは馬鹿だと言って、何だか私をさも軽薄もののように遣
14 り込めるのです。

15

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十)

16

17 「翌^ある晩」は不可解。なぜ、〈その「晩」〉ではないのか。「もう寐^ねようという少し前にな
18 ってから」は意味不明。「むずかしい問題」が何なのか、不明。この後のやりとりを指すの
19 だろうか。だったら、「問題」は意味不明。普通の意味での「問題」はないからだ。

20

21 「日蓮の事」の内容は語られない。「昨日^{きのう}」のSは「草臥^{くたび}れて」(下三十)いて、「日蓮の
22 事」を聞き流していた。この「晩」のSが〈「むずかしい問題」は嫌いさ〉と言ったのかど
23 うか、不明。〈「むずかしい問題」だから整理してみよ〉と言ったのかどうか、不明。

24

25 「何だか」や「さも軽薄もののように」は怪しい。Sは、「遣り込め」られなかった。こ
26 の後、「私は私で弁解を始めたのです」(下三十)と続く。ただし、「弁解」は変。(反撃)な
27 どが適当のようだが、真意は〈ごまかし〉だろう。〈Sは「馬鹿」か〉という簡単そうな問
28 題の解答はない。この問題は消えてしまう。だから、「馬鹿」は意味不明。

29

30 「精神的に向上心がない」という言葉には、日本語として確かな意味がない。そんな言葉
31 を意味ありげに用いる日本人は、「精神的に」怪しい。また、「向上心」の話をしているとき
32 に「馬鹿」なんて幼稚な言葉を使うK自身がバカみたいだ。「馬鹿」を聞きとがめないSも
33 バカみたいだ。利口ぶったバカだ。専門バカなどとは違う。軽薄才子。

34

35 私は実際に浮^{ママ}ぶ^{ママ}ままを書いた。けれども書いたあとの気分は書いた時とは違っていた。
36 た。

37

38 私はそうした矛盾を汽車の中で考えた。考えているうちに自分が自分に気の変りやす
39 い軽薄もののように思われて来た。私は不愉快になった。

40

(夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三十六)

41

42 「心に浮かぶまま」の真相は、〈Dに言われるがまま〉だ。Pは、暗記していたらしい「感
43 傷的な文句」(上三十六)を「兄」宛ての手紙に書いてしまった。

44

45 「書いたあと」で我に返った。「書いた時」は〈書いている間〉などが適当。
46 「矛盾」はない。「矛盾」なんて言葉を不用意に用いるのが「軽薄もの」なのだ。
47 「自分に」は意味不明。

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2420 「馬鹿」の含意
4 2422 「恋の行く手」

5

6 房州旅行から帰った後、Sの方から「むずかしい問題」を蒸し返す。そのとき、Sは、そ
7 れがすでに解けていて、しかも、その答えを二人がずっと共有してきたふうを装う。

8

9 私は先ず『精神的に向上心のないものは馬鹿だ』と云い放ちました。これは二人で房州
10 を旅行している際、Kが私に向かって使った言葉です。私は彼の使った通りを、彼と同じよ
11 うな口調で、再び彼に投げ返したのです。然し決して復讐ではありません。私は復讐以
12 上に残酷な意味を有っていたという事を自白します。私はその一言でKの前に横たわる
13 恋の行手を塞ごうとしたのです。

14 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十一)

15

16 「先ず」は意味不明。〈次〉がないからだ。

17 「使った言葉」は意味不明。〈あることを目的として「使った言葉」〉などの不当な略か。

18 「使った通り」は意味不明。なお、「房州」でKは「向上心が」と言った。「向上心の」で
19 はない。「投げ返した」として、どうなるのか。俗にいうブーメラン効果をSは期待したの
20 だろう。その程度のことしか、私には想像できない。

21 「復讐」は、〈「房州」で「軽薄もの」扱ひされたことに対する「復讐」〉の略。

22 「復讐以上」に「復讐」が含まれないのは変。「意味」の意味は〈意図〉か。不明。

23 『こころ』には「横たわる」が何度か出てくるが、どれも誤用。『こころ』における「恋」
24 は意味不明。したがって、「恋の行手」も意味不明。

25

26 彼の重々しい口から、彼の御嬢さんに対する切ない恋を打ち明けられた時の私を想像
27 して見て下さい。

28 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十六)

29

30 「重々しい口」は意味不明。「彼の重々しい口から」は〈「彼の」「口から」「重々しい」口
31 調で〉とでも添削してやるか。面倒くさい。〈Kの「御嬢さんに対する切ない恋」の物語〉
32 の中身は空っぽだ。〈この後、「私」の状態が語られるから、それを「想像して見て」という
33 ことなのかもしれない。「切ない恋」というと〈叶わぬ思い〉のようだが、違う。〈学生が恋
34 をしてはいけない〉というふうに誤読できなくはないが、青年Sが空想していたはずの真相
35 は〈Kは静に誘惑されて嬉しがっている自分を恥じる〉といったものだ。「切ない恋を打明
36 けられた時の」Sの「心は半分その自白を聞いていながら、半分どうしようどうしようとい
37 う念に絶えず掻き乱されていましてから、細かい点になると殆んど耳に入らないと同様」
38 (下三十六) だったそうだ。しかも、聞こえていた「半分」さえ、語り手Sは語らない。

39 作者は、Sの空想する〈Kの「恋」の物語〉を徹底的に隠蔽している。Kの「恋」は被愛
40 妄想だろう。一方、Sの「恋」は被愛妄想的気分に留まっていた。「相手は自分より強い
41 のだ」(下三十六)とは、〈「相手は」妄想的性格において「自分より強いのだ」〉の不当な略だ
42 ろう。作者は、自身の被愛妄想的性格を隠蔽している。

43

44

45

46

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2420 「馬鹿」の含意
4 2423 「単なる利己心の発現」

5
6 「恋の行手」云々に続く話が、私にはほとんど理解できない。だから、飛ばす。

7
8 こういう過去を二人の間に通り抜けて来ているのですから、精神的に向上心のないも
9 のは馬鹿だという言葉は、Kに取^{ママ}って痛い^{ママ}に違^{ママ}い^{ママ}な^{ママ}か^{ママ}つ^{ママ}た^{ママ}の^{ママ}です。

10 (夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」四十一)

11
12 「こういう」がどういうだか、私には読み取れない。「過去を二人の間に通り抜けて来て」
13 は意味不明。「来ているのですから」に呼応させるには、「違^{ママ}い^{ママ}な^{ママ}か^{ママ}つ^{ママ}た^{ママ}の^{ママ}です」は〈違^{ママ}い^{ママ}な^{ママ}い^{ママ}と^{ママ}思^{ママ}つ^{ママ}た^{ママ}の^{ママ}です〉
14 など^{ママ}で^{ママ}な^{ママ}け^{ママ}れ^{ママ}ば^{ママ}な^{ママ}ら^{ママ}な^{ママ}い^{ママ}。ただし、このように語ると、〈実^{ママ}は^{ママ}違^{ママ}つ^{ママ}て^{ママ}い^{ママ}た^{ママ}〉
15 という含意が生じる。この含意を処理できないから、語り手Sはおかしな言葉遣いをして
16 いるのだろう。

17 この後も意味不明なので、飛ばす。

18
19 要するに私の言葉は単なる利己心の発現でした。

20 (夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」四十一)

21
22 この前の話を私なりに要約すると、〈Sは互いのために良かれと思ってKの雑言を引用し
23 た〉となる。だから、「利己心」という言葉は、やや唐突。〈良かれと思ったのは自己欺瞞だ
24 った〉と補足するか。「私の言葉」は〈Kの雑言〉だから〈「私の」発言〉が妥当。「単なる」
25 には〈悪意のない〉という含意があるが、〈善意のない〉と解釈すべきか。「発現」には〈意
26 図しない表出〉という含意があるが、〈意図を自覚したくない発言〉と解釈すべきか。

27 要するに、Sの反省が足りない。語り手Sの言葉は、語られるSの混乱を反復している。

28
29 『精神的に向上心のないものは、馬鹿だ』

30 私は二度同じ言葉を繰り返しました。そうして、その言葉がKの上にどう影響するかを
31 見詰めていました。

32 『馬鹿だ』とやがてKが答えました。『僕は馬鹿だ』

33 (夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」四十一)

34
35 「二度」の理由、あるいは三度ではない理由などが不明。「繰り返し」た理由が不明。

36 「そうして」は、〈そうすることによって〉や〈そうしながら〉などの混交。「Kの上に」
37 は意味不明。「どう影響するか」について、Sは予想していたろうか。わからない。「どう影
38 響するかを見詰めて」は意味不明。どう影響したのか、この後を読んでも、わからない。『こ
39 ころ』を最後まで読んでも、わからない。

40 最初の「馬鹿だ」は、KのDの言葉であり、〈御前は「馬鹿だ」〉の略だ。Kはそれに対し
41 て「僕は馬鹿だ」と応じたわけだ。どちらも、眼前のSに対する返事ではない。

42 「馬鹿」のK的含意は不明のまま、『ころ』は終わる。

43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2430 「馬鹿」と「軽薄」
4 2431 「人間のどうする事も出来ない持って生れた軽薄」

5
6 「馬鹿」や「軽薄もの」は、『こころ』の隠蔽された主題に関わる言葉だ。それは「気取
7 るとか虚栄とかいう意味」の類語であり、最終的に「明治の精神」と総括される。

8
9 私は人間をはかないものに観じた。人間のどうする事も出来ない持って生れた軽薄を、
10 はかないものに観じた。

11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三十六)

12
13 この前は、「自分が自分に気の変りやすい軽薄もののように思われて来た」という話だっ
14 た。「自分に」だから、「思われ」は受身のようにも読める。Pは、「軽薄もののように」か
15 ら「もののように」を削り、「自分」を「人間」に拡張する。語り手Pの「軽薄」の露呈。
16 「はかない」は意味不明。「に観じ」という用例を、私は知らない。この「に」は「に思わ
17 れて来た」の「に」を引きずったものか。だったら、「に観じた」は「に思われて来た」の
18 類語で、その誇張だろうか。

19 〈「どうする事も出来ない」～「軽薄」〉や「持って生れた軽薄」は意味不明。「はかない」
20 が「あさはかである」(『広辞苑』「はかない」)という意味で、「軽薄」が「思慮のあさはかで
21 篤実でないこと」(『広辞苑』「軽薄」)という意味なら、言い換えによる不当な誇張だ。

22
23 神々^{あざけ}られ打ち滅ぼされるような真の愚か者とは、自分自身の何者であるかを^{わかま}弁え
24 ぬ人間のことだ、ぼくも長いあいだそういう人間だった。きみもやはり、長いあいだそう
25 いう人間だった。が、もうそういう自分から足を洗いたまえ。恐れてはならない。浅薄こ
26 そ、最高の悪徳なのだ。なにごとにもせよ、身をもって理解したことだけが真実である。
27 きみがみじめに感じながら読むすべてを、ぼくはもっとうちひしがれた気持で書いてい
28 る、ということも忘れないでほしい。きみににとっては「見えざる力」がはなはだ^{さいわい}幸して
29 いる。この力はきみに、不可思議で悲劇的な人生の姿を、いろいろ水晶にうつる影のよう
30 に見せてくれた。

31 (オスカー・ワイルド『獄中記』)

32
33 Pの言う「軽薄」も「自分自身の何者であるかを^{わかま}弁えぬ」状態だろう。身の程知らずだ。
34 ただし、彼には「見えざる力」が作用していない。〈自分は自分の身の程を「見えざる力」
35 の助けなしに知ることができる〉と思っているものこそ、本物の身の程知らずだろう。Sの
36 場合、「見えざる力」は「恐ろしい力」として不都合に働いた。「軽薄もの」の究極の姿は「こ
37 の不可思議な私というもの」(下五十六)だろう。

38 Pは、「遺書」で語られるSの生き方を他山の石とし、同じような間違いをしでかさな
39 いように努めなければならないはずだ。しかし、「どうする事も出来ない」のなら、「遺書」は
40 無益だろう。どうにかすることができたのなら、その話をすべきだ。

41 Pが批判すべきなのは、語られるSではない。語り手Sだ。Sの文体だ。ただし、作者が
42 そんなことを示唆しているわけではない。

43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2430 「馬鹿」と「軽薄」
4 2432 死刑宣告

5
6 「馬鹿」は夏目語だろう。

7
8 「貴様は馬鹿だ」と兄が大きな声を出した。代助は俯向いたまま顔を上げなかった。
9 「愚図だ」と兄が又云った。「不断は人並以上に減らず口を敲く癖に、いざと云う場合に
10 は、まるで啞の様に黙っている。そうして、陰で親の名誉に関わる様な悪戯をしている。
11 今日まで何の為に教育を受けたのだ」

12 (夏目漱石『それから』十七)

13
14 代助は大卒のニートで、何に関しても意欲がない。理想もない。親の金で一軒を構え、書
15 生を置いて、無為に暮している。腹の減らない「馬鹿」には「減らず口を叩く癖」がつく。

16 代助は「自分に特有なる細緻な思索力と、鋭敏な感応性」(『それから』一)が自慢。だが、
17 作中の誰一人として彼を尊敬していない。『それから』の作者が想定する読者は、代助をど
18 のように評価すべきか。作者は、代助を批判しているのだろうか。あるいは、「兄」のよう
19 な人々を批判しているのだろうか。どっともどっちか。不明。

20 「兄」の言葉遣いはよろしくないが、その主旨は常識的なものだ。代助は、結局、勘当さ
21 れてしまう。当然の成り行きだ。なるようになっただけのこと。読者は、そんなくだらない
22 話を読まされる。

23
24 或者はまるで彼の存在を認めなかった。或者は通り過ぎる時、ちょっと一瞥を与えた。
25 「御前は馬鹿だよ」

26 稀にはこんな顔付をするものさえあった。

27 (夏目漱石『道草』九十七)

28
29 『道草』は、『こころ』の次に発表された。

30 「彼」は健三という名で、作家以前のNがモデルとされる。

31 「ちょっと」は不要。健三は〈誰か私の「存在」を認めてくれよ〉と叫びたかったのだろ
32 う。そんな思いが顔に出ていて、だから、通行人がチラ見したか。

33 「御前は馬鹿だよ」というのは幻聴のようでもあり、単なる想像のようでもある。

34 「こんな顔つきをするもの」は、健三の幻覚のようだが、実在したのかもしれない。

35 この場面の語り手は、情景を客観的に語っているのでもなく、健三の妄想を語っているの
36 でもない。語り手には、通行人の見方と健三の見方の仕分けができないのだ。作者は何をし
37 ているのだろう。読者はどう読めばいいのだろう。

38 「馬鹿」は死刑宣告に等しい。Kは自分を「馬鹿」と思って死にたくなかった。健三は誰か
39 に「馬鹿」と呼ばれたような気がして滅入ったらしい。Kは、眼前のSからではなく、頭の中
40 にいるDから「馬鹿」と呼ばれたのだろう。健三も、通行人からではなく、頭の中のDから
41 「馬鹿」と呼ばれたのだろう。Kの死後、Sも自分のDから「馬鹿」呼ばわりされている
42 ようだ。Nこそ、Dから「馬鹿」呼ばわりされながら暮らしていたのだろう。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2430 「馬鹿」と「軽薄」
4 2433 文豪は「馬鹿」だった

5
6 「馬鹿」の真意を、Nは執拗に隠蔽している。

7
8 もし世の中に全知全能の神があるならば、私はその神の前に^{ひざま}跪^ずいて、私に^{ごうはつ}毫^{うたが}髪^いの疑
9 を^{さしはさ}挟^む余^{くもん}地^{げだつ}もない程明らかな直覚を与えて、私をこの苦悶から解脱せしめん事を祈る。
10 でなければ、この不明な私の前に出て来る^{すべ}凡^{れいろう}ての人を、玲瓏透徹な正直ものに変化して、
11 私とその人との魂がびたりと合うような幸福を授け給わん事を祈る。今の私は馬鹿で人
12 に騙されるか、或は疑い深くて人を容れる事が出来ないか、この両方だけしかない様な気
13 がする。不安で、不透明で、不愉快に充ちている。もしそれが生涯つづくとするならば、
14 人間とはどんなに不幸なものだろう。

15 (夏目漱石『硝子戸の中』三十三)

16
17 「全知全能」でなくてもよからう。〈直覚を与えて〉くれる「神」で十分。ただし、「直
18 覚」は意味不明。「神があるならば」はふざけ過ぎ。「全知全能の神」と取引をする気か。し
19 かも、その代償が「^{ひざま}跪^ずいて」やるだけか。「^{ごうはつ}毫^{うたが}髪^いの疑いを^{さしはさ}挟^む余^{くもん}地^{げだつ}もない程」は贅沢。
20 とりあえず、〈もうちょっと「明らかな直覚」で我慢しなさい。「この^{くもん}苦悶」について、こ
21 の前に縷々語られているが、意味不明。だから、「神」の正体も不明。

22 どんなふうに「不明な」のか、私には読み取れない。「出て来る」のを待つのは怠け者。
23 昼間にカンテラを掲げて〈人間はいないか〉と呼ばわりなさい。「^{れいろうとうてつ}玲瓏透徹な正直もの」は
24 意味不明。普通の人に通じないような漢語を盾にしてその陰に身を隠す癖が治らない限り、
25 実直な人が「前に出て来る」可能性はゼロだろう。「変化して」は〈「変化」せ「し」め「て」〉
26 の間違いか。「魂」は意味不明。したがって、「幸福」の実態も不明。

27 どんなふうに自分が「騙されるか」ということについて、Nは明らかに語っていない。「容
28 れる」様子も語っていない。「疑い深くて」には笑わされる。間違いなく、「騙され」てきた
29 のだ。つまり、「人」はNに対して、「不安で、不透明で、不愉快」な感情を隠して対面して
30 きた。「人を容れる事ができない」は、〈「人」はN「^いを容れる事ができない〉〉の間違い。「騙
31 される」の真相は、〈「人」はN「^いを容れる事ができるとNが勘違いする〉〉だろう。「両方
32 だけしか」は、〈「両方だけ」〉と〈「両方」「しか」〉の混交。〈「両方だけ」～「ない」〉だと、
33 「両方」以外に何かがありそう。〈「両方」「しか」～「ない」〉だったら、言うまでもなく、
34 「両方」以外には何もない。何かがありそうで、なさそうな、矛盾した気分の露呈だ。Nは、
35 この種の混乱の露呈に気づいていない。

36 「不安で、不透明で、不愉快」と「淋しみ」は同じような情緒だろう。さびしい系の語句
37 は夏目語。「不透明」は意味不明。「不愉快」の反対が「幸福」らしい。だったら、お手軽な
38 「幸福」だ。あるいは、「愉快」が意味不明。

39 「それ」の指す言葉はない。「人間」は唐突。「私」が適当。「人間」につなげたいのなら、
40 「つづくとすれば」は〈誰にでも「つづく」ことだと「すれば」〉などとやるべきだった。
41 Nは、彼一人の「不愉快」を、何の断りもなく「人間」全体に共有させようと企む。こんな
42 汚い言葉遣いをするからNは嫌われたのだろう。

43
44
45

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2440 「ぐるぐる」
4 2441 不合理な二者択一

5
6 「遺書」の語り手Sは、不合理な二者択一を聞き手Pに迫る。

7
8 凡てを叔父任せにして平気でいた私は、世間的に云えば本当の馬鹿^{ばか}でした。世間的以上の見地から評すれば、或は純なる尊^{たつと}い男とでも云えましょうか。
9
10 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」九)

11
12 Sが「本当の馬鹿^{ばか}」つまり当時の言葉でいう〈白痴〉なら、叔父によってとっくに禁治産者にされていたはずだ。逆に、「純なる尊^{たつと}い男」であれば、まるで「本当の馬鹿^{ばか}」みたいに「財産」を叔父に与えて「平気でいた」ことだろう。「訴訟」(下九)に関わるような話題で「本当の馬鹿^{ばか}」という言葉を用いる語り手Sは非常識だ。

13
14
15
16 聞き手Pの対応はどこにも記されていないが、読者は〈Pは「純なる尊^{たつと}い男」を選ぶ〉と思うはずだ。この場合、読者は作者によって「純なる尊^{たつと}い男」を選ばされることになる。朝三暮四の故事において二者択一が成り立つのは、〈合計七つ〉という前提があるからだ。二者択一の前提を疑わずに即答してしまうのは、賛成しようが反対しようが、猿と一緒に。悪意のある質問者の掌の上で踊らされているのに気づかない利口ぶった猿人だ。

17
18
19
20
21
22 釈尊の弟子の一人。兄の摩迦槃特が聡明であったのに比し愚鈍であったが、後に大悟したという。悟りに賢・愚の別がないことのたとえとされる。
23
24 (『広辞苑』「周利槃特^{しゅうりはんとく}」)

25
26 Sは、愚者のような賢者として描かれている。だが、「大悟した」という話はない。

27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
ああ全くたれがかしこくたれが賢くないかはわかりません。ただどこまでも十カ^{じゅうりき}の作用は不思議です。
43
44
45
46 (宮沢賢治『虔十公園林』)

何ですかあ〜？

「よろしい。しずかにしろ。申しわたした。このなかで、いちばんえらくなくて、ばかで、めちゃくちゃで、てんでなっていないくて、あたまのつぶれたようなやつが、いちばんえらいのだ」

どんぐりは、しいんとしてしまいました。

(宮沢賢治『どんぐりと山猫』)

作者の言いたいことを六十字以内にまとめよ。

まとめたあなたは「えらい」つまり「ばか」だ。「ばか」のふりをするあなたは「えらい」つまり「ばか」だ。「しいん」としてしまっただあなたは、そう、「どんぐり」だよ。

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2440 「ぐるぐる」
4 2442 ドラマティック・アイロニー

5

6 青年Sは、〈自分は「本当の馬鹿」か、「純なる^{たつと}尊い男」か〉という不合理な二者択一を
7 本気で自分に課したのだろうか。語り手Sは、聞き手Pを相手に芝居をしているみたいだ。

8

9 イアーゴー ああ、みじめな^{フール}阿呆だ、

10 愛してきたあげく誠実のせいで^{フェイス}悪党にされるとは！

(シェイクスピア『オセロー』後出エンプソン論文から)

11

12 「愛して」は、〈オセローを敬い「愛して」〉の略。「誠実」とは、イアーゴーがオセロー
13 に、その妻の不貞を告げたときの態度。不貞は、オセローを悩ませるための作り話だから、
14 言うまでもなく、観客の観点では、イアーゴーは「^{フェイス}悪党」だ。

15 イアーゴーは、〈「世間的に云えば」自分は「^{フール}阿呆」だ〉と、オセローに訴える。オセロー
16 は〈自分は「世間的以上の見地」に立つ人物だ〉と思いたくて、イアーゴーにやすやすと騙
17 されてしまう。

18 冷静な読者なら、「遺書」の語り手Sは、イアーゴーのような嘘つきのように思えるはず
19 だ。また、聞き手Pがオセローに相当する騙され役のように思えるはずだ。ところが、この
20 ように解釈すると、『こころ』は作品として解体する。

21

22 ここにあらわれているのは、世間はそう考えているかもしれないが、「^{フール}阿呆」にはなる
23 ものかというイアーゴーの気持である。だがこの気持は劇的アイロニーでもあり、彼の
24 「誠実な」の概念に立ち戻る。彼は陰謀に我を忘れることによって「^{フール}阿呆」になっている
25 のだ。彼は他人を認識することにも、そして恐らく自分自身の欲求を認識することにすら
26 失敗している。

(ウィリアム・エンプソン『『オセロー』における「誠実な」*Honest*という単語』)

27

28 エンプソンのように読めば、語り手Sは、ある種の「馬鹿」になっている。彼は、語り手とし
29 て失敗しているわけだ。作者は、このことに気づいているのだろうか。

30 Pのいう「恐ろしい悲劇」は、〈「純なる^{たつと}尊い男」であるSが「運命」(下四十九)に翻弄
31 される〉といったドラマだろう。だが、このドラマは、作品の内部の世界の住人であるSの
32 独り芝居だ。だから、『こころ』に意味があるとすれば、「遺書」をドラマティック・アイロ
33 ニー(劇的アイロニー)として読むことになる。つまり、『こころ』は、『吾輩は猫である』
34 や『坊っちゃん』などの喜劇を悲劇に仕立て直そうとして意味不明になった失敗作なのだ。

35 語り手Sは、イアーゴーのように、「他人を認識することにも、そして恐らくは自分自身
36 の欲求を認識することにすら失敗している」のだろう。ところが、作者が語り手Sをイアー
37 ゴー的しくじり先生として設定している様子はない。だから、作者こそ、「他人を認識する
38 ことにも、そして恐らくは自分自身の欲求を認識することにすら失敗している」のだろう。
39 こうした疑問を抱かない人は、実生活において、「他人を認識することにも、そして恐らく
40 は自分自身の欲求を認識することにすら失敗している」のではなからうか。

41

42

43

44

45

46

47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2440 「ぐるぐる」
4 2443 「子供扱い」

5
6 青年Sが叔父のような普通の人から「子供扱い」(下八)をされるのは、当然だったろう。

7
8 Aさんは親から譲り受けた莫大な財産を持っているのですが、そのせいもあって、極度
9 に他人を信じない傾向を心の中に持っています。Aさんにとっては他人とはすべて自分
10 の財産を狙って近づいてくる下心を持った人たちであり、少しも油断できない存在です。
11 ですから、Aさんはどんな人に対しても心を開こうとはしません。

12 (山岸俊男『日本人という、うそ—武士道精神は日本を復活させるか』)

13
14 タイトルは、〈「日本人」はサムライかナデシコだ「という、うそ」〉などの略。

15
16 もちろん、若いうちは、Aさんと友だちになりたいと考えた人もいたでしょうし、また
17 誰も他人を信じられないAさんを気の毒に思い、手を貸してあげようとする親切な人
18 もいたかもしれません。

19 しかし、そうやっていくら仲良くしても、親切にしてあげても、Aさんが心の中で「何
20 か下心があるのではないか」と疑っていることに気がつけば、普通の人ならば、Aさんと
21 付き合うのがだんだんイヤになってくるものです。

22 (山岸俊男『日本人という、うそ—武士道精神は日本を復活させるか』)

23
24 「普通の人ならば」Sを「Aさん」の同類と見なそう。『黄金』(ヒューストン監督)参照。

25
26 その上熱の高い時に出る母の言葉は、いかにそれが筋道の通った明かなものにせよ、一
27 向記憶となって母の頭に影さえ残していない事がしばしばあったのです。だから……然
28 しそんな事は問題ではありません。ただこういう風に物を解きほどいて見たり、又ぐるぐ
29 る廻して眺めたりする癖は、もうその時分から、私にはちゃんと備わっていたのです。

30 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」下三)

31
32 「そんな」の指すものは、「……」を復元したときに発見される言葉だろう。

33
34 この性分が倫理的に個人の行為やら動作の上にと及んで、私は後来 益 他の徳義心を疑う
35 ようになったのだらうと思うのです。それが私の煩悶や苦悩に向って、積極的に大きな力
36 を添えているのは 慥 ですから覚えていて下さい。

37 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」下三)

38
39 「この性分」は「ぐるぐる」のこと。「ぐるぐる」は不合理な二者択一に関わっている様
40 子の形容だろう。「倫理的に」は意味不明。「個人」は〈他人〉のこと。

41 「向って」や「積極的に」などは意味不明。「益」だから、すでに叔父以外の誰かの「徳
42 義心」を疑っていたことになる。それは誰だろう。両親しか考えられまい。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2450 継子いじめ
4 2451 『弱法師』

5
6 Kが「精神的に」云々の雑言を投げつけたかった本当の相手は、Sではなかったろう。語
7 られるSはそのように推測していたはずだ。その相手は、日蓮の生まれた村にある「誕生寺」
8 (下三十)の「住持」(下三十)だ。Kは、自分が常日頃から考えていることを「住持」の口
9 から聞いたかったのだが、期待外れに終わったので悔しがり、その悔しさをSと共有したが
10 った。ところが、Sに無視されたので、八つ当たりをした。そうしたKの気分が察せられた
11 ので、SはKの雑言をまともに受け取ろうとはしなかった。ただし、もともと、Kが雑言を
12 投げつけたかった相手は、彼の実父だ。彼は、「住持」に、実父のような人間を非難させた
13 かった。そして、「住持」を〈理想的な父〉として敬愛したかった。

14 Sの空想するKは、〈理想的な父と邂逅する〉という夢を見ていたのだろう。この夢の物
15 語は、〈Pは理想的な父と邂逅する〉というP文書の物語と相似だ。

16
17 これは夢かとして俊徳は、親ながら恥づかしくて、あらぬかたに逃げれば、父は追ひ着き
18 手を引きて、なにをか包む難波寺の、鐘の聲も夜紛れに、明けぬ先にと誘ひて、高安の
19 里に帰りけり、高安の里に帰りけり。

20 (『弱法師』)

21
22 Kが実父を嫌うのは、実父が再婚したからだ。「住持」を実父の批判者として想定したの
23 は、「住持」が日蓮宗徒だったからだろう。

24
25 日本の仏教にあっては、鎌倉時代以後、愛欲を基本的に否定しようとするもの、愛欲を
26 肯定しそのなかに生じる罪の意識や無常観をもとに阿弥陀仏の救済を求める浄土教、愛
27 欲の生活にありながらも題目を称えることによって浄化されるとする日蓮仏教、の3つ
28 の傾向が生れた。

29 (『ブリタニカ国際大百科事典』「愛欲」)

30
31 Kは浄土教的愛欲を罪悪視したかった。なぜなら、彼は「真宗の坊さんの子」(下十九)
32 でありながら「医者ママの所へ養子に遣られた」(下十九)からだ。

33 ただし、「養子」は口実であり、実際には継母に唆された実父がKを厄介払いしたのだろ
34 う。Kは、実父を恨みつつも憐れみ、継母を憎んでいたのかもしれない。

35 両親に対する恨みや憎しみを、Sも抱いていた。〈親に虐待された子の物語〉を文脈とし
36 て、KとSは「話を交換して」(下二十五)いた。ただし、「話を交換して」は意味不明。

37 Nの小説の主人公たちのほとんどが、少年期、親に疎まれている。あるいは、親を疎んで
38 いる。さもなければ、親元から離れて暮している。ところが、Sだけは違う。〈両親はSを
39 溺愛していた〉と誤読できる。ただし、溺愛も虐待の一種だろう。

40 Sを虐げたのは、両親ではなく、叔父一家ということになっている。『こころ』の作者は、
41 親子関係に対する自分の実感を隠蔽するために、具体性の乏しい話を書いているようだ。K
42 とSの育ちに、大きな違いはなかったろう。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2450 継子いじめ
4 2452 母性喪失症候群

5
6 作者は、〈Kの物語〉を、可能な限り、隠蔽しようとしている。

7
8 Kは母のない男でした。彼の性格の一面は、たしかに^{けいぼ}継母に育てられた結果とも見る事
9 が出来るようです。

10 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十一)

11
12 「母のない男」は〈「母の」慈愛を知ら「ない男」〉などの不当な略だろう。
13 「たしかに」の被修飾語が不明。「彼の性格の一面」という言葉は、その「面」が致命的
14 なことを隠蔽している。語り手Sは、〈実母はKを愛した〉という虚偽の暗示をしている。

15
16 性格としては、孤独、攻撃的、疑い深い、拒否的となる。不活発でおどおどしているが、
17 自分を受入れてくれる人にはまつわりつく。

18 (『ブリタニカ国際大百科事典』「母性喪失症候群」)

19
20 こうした「性格」は、K限定のものではない。Sも、Pも、そして、Nの小説に登場する
21 男たちのほとんど全員が、こうした「性格」の持ち主だ。Nの生い立ちが反映しているわけ
22 だが、『道草』以前の作者は母性喪失症候群を過小評価していたようだ

23 Sは一種の「母のない男」であり、静の母によって癒されたように錯覚していたらしい。
24 彼女によってKが癒されれば、静の母の母性が証明されるか。ただし、真相は不明。

25 語り手Sは、〈Kは実母に育てられなかった〉という物語と〈Kは「^{けいぼ}継母に育てられた」〉
26 という物語を同じもののように語っている。無理だ。

27 Kが継母から受けた精神的な傷は、意外に深かったのかもしれない。

28
29 齋一は小さい道徳家である。埴生と話をするには、僕は遣り放しで、少しも自分を拘束
30 するようなことは無かったのだが、齋一と何か話していて、少しでも野卑な詞、^{わいせつ}猥褻な詞
31 などが出ようものなら、彼はおきになって怒るのである。

32 (森鷗外『朧・セクスアリス』)

33
34 Kも「小さい道徳家」だった。

35
36 齋一の母親は継母である。ある時齋一と一しょに晴雪楼詩鈔を読んでいると、^ま真間の
37 ^て手古奈の事を詠じた詩があった。僕は、ふいと思ひ出して、「君のお母様は本当のでない
38 そうだが、^{いじ}窘めはしないか」と問うた。「いいや、窘めはしない」と云ったが、彼は母親
39 の事を話すのを嫌うようであった。

40 (森鷗外『朧・セクスアリス』)

41
42 「継母」は「僕」を性的にからかう。彼女は、齋一をも性的に混乱させていたろう。

43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2400 「精神的に向上心がないものは馬鹿だ」
3 2450 継子いじめ
4 2453 『摂州合邦辻』

5
6 『こころ』の隠蔽された主題は継子いじめだ。

7
8 「継子話」は継母のいじめの方法により2大別できる、一つは、不可能な課題を与えて
9 継子を苦しめる話である。第二は、継子を殺害するか追い出すかする話である。いずれも
10 継子の苦難は、継子を守護する生母の霊や神仏の霊力によって救われる。

11 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「継子話」小島瓊禮)

12
13 Kが養子に出されたのは、継母の策略によるものだったのかもしれない。語られるSは、
14 そのように空想していたのではないか。

15 あらゆる継母が先妻の子に対して冷淡であるはずはない。〈実母=良い母〉かつ〈継母=
16 悪い母〉というのは類型だ。実の子だからこそ厳しく接する母親はいる。『秋のソナタ』(ベ
17 ルイマン監督)参照。

18 青年Sが空想し、語り手Sが隠蔽する〈Kの物語〉は、次のようなものと仮定できる。

19
20 継母に唆された実父は、「次男」(下十九)であることを口実に、Kを養子に出した。Kは、
21 実父を愛欲に溺れた男とみなし、自分は違うタイプの男になろうと頑張った。理想の男にな
22 れたら実父を見返し、改心させ、実父に継母を罰させるつもりだった。

23
24 語り手Sは、青年Sの空想していた〈Kの物語〉の気分だけを漂わせている。

25
26 河内国高安郡信吉長者の一子しんとく丸は継母の呪いによって癩(らい)となり、捨て
27 られて乞食となるが、追ってきたいいなずけの乙姫と再会し、清水観音(清水寺)の利生
28 によって元の身を取り戻すというのがその内容である。改作としてのちに有名な《摂州合
29 邦辻(せっしゅうがっぽうがつじ)》が出た。

30 (『百科事典マイペディア』「しんとく丸」)

31
32 しんとく丸は『弱法師』の俊徳と同一人物。『身毒丸』(寺山修司)は現代の異本。

33 SとKが共有していた文脈は『しんとく丸』だったろう。静は乙姫だ。

34
35 高安家の御家騒動を背景に、奥方玉手御前が、継子俊徳丸への邪恋を装って悪人の毒手
36 から俊徳丸の命を守る苦衷と、玉手の父合邦の苦悩とを描く。

37 (『ブリタニカ国際大百科事典』「^{せっしゅうがっぽうがつじ}摂州合邦辻」)

38
39 Sの空想するKは、〈継母の冷たさの裏には母性愛がある〉という夢を見ていた。玉手御
40 前は静の母だ。Sは、彼女に〈良い母〉と〈悪い母〉の両面を見て、混乱した。

41 Sがこんな空想を好むのは、自分が母親から受けた精神的虐待の記憶をKの体験とすり
42 かえるためだ。Sにとって、実母は継母のようによそよそしく感じられていたろう。

43
44
45
46
47
48
49

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2510 謎めいた『ころ』
4 2511 「自由と独立と己れ」と「明治の精神」

5
6 〈オリンピック精神〉という言葉をよく耳にする。だが、私には意味不明だ。

7
8 オリンピック精神 (=Olympianism) (特に「勝敗よりも参加することに意義があるとする
9 考え方」).

10 (『リーダーズ英語辞典/リーダーズ・プラス』「Olympism」)

11
12 〈オリンピック精神〉という言葉を用いる人が常に「参加することに意義がある」といっ
13 た意味で用いているようには思えない。「考え方」は、よくある誤用。〈考え〉が適当。全盛
14 期の〈方法論〉に似ている。

15 〈オリンピック精神〉が意味不明なら、〈オリンピック精神に反する〉は意味不明だ。

16 同様に、「明治の精神」は意味不明だから、「明治の精神に殉死する」は意味不明であり、
17 したがって、Sの自殺の動機は不明ということになる。ただし、Sの自殺の動機が「明治の
18 精神に殉死する積り」そのものであったかどうか、定かではない。

19
20 「自由と独立と己れ」を「明治の精神」と捉える見方も珍しくなく、唐木順三は先生
21 について「明治の精神」である「自由と独立と己れ」の犠牲になって倒れた」人間である
22 とし(『現代日本文学序説』春陽堂、一九三二)、瀬沼茂樹は「自由と独立と己れ」の外
23 化である明治の精神の終焉」といういい方によって、両者を同一視していました(『夏目
24 漱石』東京大学出版会。一九七〇)。

25 それに対して山崎正和や三好行雄は「自由と独立と己れ」を「明治の精神」の中核的な
26 要素として想定しながらも、それに固執することによって自己の内面に空虚をもたらし
27 てしまうアイロニーに、この時代を特徴づける「精神」のあり方を見えています。

28 (柴田勝二『村上春樹と夏目漱石 二人の国民作家が描いた〈日本〉』)

29
30 この「見方」はナンセンス。「自由と独立と己れ」が意味不明だからだ。こんな言葉が『こ
31 ころ』の外部の現実の世界にあったのか。不明。「同一視」は意味不明。

32 「中核的な要素」は意味不明。「アイロニー」も意味不明だが、「笑談」の類語とすれば、
33 当たらずとも遠からず。ただし、Sによる「アイロニー」なのか。作者による「アイロニー」
34 なのか。どちらでもないのか。不明。

35
36 一方この言葉とは切り離して、明治天皇の死によって遡及的に喚起された精神として
37 「明治の精神」を考えるならば、それは明治天皇が〈大帝〉として国を率いた時代の精神
38 であることになり、逆に国家への同一化が全面に押し出されてくることになるます。

39 (柴田勝二『村上春樹と夏目漱石 二人の国民作家が描いた〈日本〉』)

40
41 「この言葉」は「自由と独立と己れ」だ。「切り離して」も、「遡及的に」も、「時代の精
42 神」も、「国家への同一化」も、「押し出されてくること」も、意味不明。

43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2510 謎めいた『こころ』
4 2512 「家庭の事情」と「オタンチン、パレオロガス」

5
6 『こころ』の内部の虚構の世界においても、外部の現実の世界においても、「明治の精神」
7 という言葉に確かな意味はないはずだ。「明治の精神に殉死する積り」は「無論笑談」なの
8 だが、「明治の精神」そのものが、「笑談」めいている。

9
10 恋をするのも 家庭の事情
11 (トニー谷+宮川哲夫作詞・多忠修作曲『さいざんすマンボ』)

12
13 「家庭の事情」という言葉の意味は、わからなくもない。だが、「恋」との関係は不明だ。
14 したがって、この歌における「家庭の事情」は意味不明だ。

15 言うまでもなく、この「家庭の事情」は誤魔化しであり、どういう「事情」なのか、聞き
16 手には推測できない。この歌の作者は、都合の悪いことを隠蔽して美化するような小賢しい
17 態度を嘲笑している。「恋をするのも 家庭の事情」と言い訳する人にとって、「家庭の事情」
18 は冗談ではない。嘘だ。そして、『さいざんすマンボ』は冗談だ。

19 同じようなことが「明治の精神」についてもあてはまる。Sは、都合の悪いことを明示し
20 ないためにこの言葉を造り、そして悪用した。静はそうしたSのあざとい技巧を察し、婉曲
21 に窘めたらしい。

22 ここまでは、私の勝手な解釈ではない。まっとうな読解だ。

23 ところが、多くの日本人には、このまっとうな読解ができないらしい。なぜか。まっとう
24 に読むと、Sが「馬鹿」になってしまうからだ。「明治の精神」などという意味不明の言葉
25 を弄ぶSは、普通に考えたら、軽薄才子だ。ところが、そのように、つまり、普通に考える
26 と、『こころ』は喜劇になってしまう。深刻ぶった下手糞な喜劇を本格的な悲劇に読み替え
27 ようとして、夏目宗徒は四苦八苦ししてきた。私は連中を相手にしない。

28 「失恋」をするのも「明治の精神」だ。「自殺」をするのも「明治の精神」だ。何とでも
29 言えそうだが、では、「恋」をするのも「明治の精神」か。言えそうで、言えなさそうで、
30 言えなくもなさそうではない。ひどいものだ。

31
32 「あとは何でも宜う御座んす。オタンチン、パレオロガスの意味を聞かして頂戴」
33 「意味も何にもあるもんか」

(夏目漱石『吾輩は猫である』五)

34
35
36 苦沙弥と妻の会話。
37 〈「オタンチン、パレオロガス」に「意味」がある〉とすれば、〈苦沙弥は妻に嘘をついて
38 いる〉と解釈せねばならない。あるいは、「意味」が意味不明。

39 苦沙弥は「オタンチン、パレオロガス」の真意を自他に対して隠蔽している。ここまでは
40 誰でもわからなければならない。

41 わからないのは、次の問題の答えだ。

42 作者は読者に対して、この言葉の真意が伝わるように表現しているつもりなのか。

43
44
45
46
47
48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2510 謎めいた『ころ』
4 2513 『ペ』

5
6 いつ頃からか、『ころ』は謎の物語とみなされるようになった。しかし、『ころ』は謎
7 の物語ではない。謎など、ないのだ。意味不明の言葉が謎のように思えるだけだ。

8 典型的な謎の物語は『ねらわれた星』（星新一）だ。ここに出てくる「皮」という言葉が
9 謎になっている。「皮」の真意がわかるまで、この「星」で具体的にどんなことが起きたの
10 か、わからない。小学生ぐらいだと「皮」の真意がわからないので面白がらない。

11 『ころ』の場合、「皮」の謎を解くようにして「明治の精神」の意味を推定することは
12 できない。中学生だと、「明治の精神」という言葉によって示される心的現象について大人
13 たちはみんな知っているのだろう」と勘違いして読み流し、わかったつもりになる。

14

15 「ペ」については、過去およそ三十年間、私はさまざまな機会をとらえて発言をつづけ
16 てきた。下町の小さな喫茶店で、男の俳優一人と、女の税理士一人（この人は当時まだ独
17 身だったが、今は娘が二人いる）、そして非常に年とった亀一匹と公開座談会をしたこと
18 もあるし、ボルト・ナット業界の業界紙に見開きページをもらって、「ペ」讃歌の如きも
19 の書いたこともある。

20 さらにある年の新年のことであるが、不可解な衝動に従って、「ペ」を明治神宮に^{ほうのう}奉納
21 しに行ったことすらあるのだが、四十歳を過ぎるころから、「ペ」の物理的側面に対する
22 興味が徐々にうすれてきて、かつて「ペ」について抱いていたイメージが、他のもろもろ
23 のイメージ、たとえば中学校の始業式のイメージとか、きわめてポップ・アートのネオ
24 ンサインのイメージ、そしてなかんずく雪をいただいた天山山脈のイメージなどと、一瞬
25 の相互浸透を始めているのに気づいている。

26

（谷川俊太郎『ペ』）

27

28 『ペ』の作品の内部の虚構の世界の住人は、「亀」を含め、「ペ」の意味を知っているつも
29 りである。ただし、その「イメージ」は共有されていない。共有されていないからこそ、深
30 遠な議論ができてるように勘違いしている。そんな軽薄才子を、作者は冷笑している。

31 『ころ』の作者は、冷笑されるべき軽薄才子を美化しようと苦慮し、そして、失敗した。
32 土台、無理な仕事なのだ。

33 Sは自己正当化ができなくて死にたがる。そうした態度は、成金が破産して死にたがるの
34 と基本的に同じものだ。「明治の精神」は、書物を豊富に購入できる「財産家」（上二十七）
35 の二代目の「精神」なのだ。行商からやり直す気概がない二代目。二十歳過ぎればただの人
36 の元秀才。知的「財産家」でしかない読書家が「思想家」を気取る悲喜劇。

37 本文に「明治の精神」の類語らしいものや「イメージ」を暗示する言葉が散見する。しか
38 し、真意は推定できない。「イメージ」も具体的には思い浮かばない。

39 『ペ』の内部の世界の「明治神宮」とその外部の現実の世界の明治神宮は、「明治の精神」
40 によって繋がっている。

41 ありもしない〈「明治の精神」の物語〉を原典として採用できる人には、その異本である
42 『ころ』が意味ありげに思えるのだろう。

43

44

45

46

47

48

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2520 明治はまだ終わっていない
4 2521 「天皇に始まり天皇に終わったような気」

5
6 「明治の精神」という言葉は、唐突に出てくる。

7
8 九月になったらまた貴方に会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く
9 会う気でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きて、きっと会う積りでいた
10 のです。

11 すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。その時私は明治の精神が天皇に
12 始まり天皇に終わったような気がしました。最も強く明治の影響を受けた私どもが、その後
13 に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが烈しく私の胸を打ちました。私は
14 明白さまに妻にそう云いました。妻は笑って取り合いませんでしたが、何を思ったものか、
15 突然私に、では殉死でもしたら可かろうと調戯いました。

16 (夏目漱石『こころ』「先生と遺書」五十五)

17
18 「九月」の話が、〈十月〉でなく、どうして「冬」になるのか。「冬が尽きて」は意味不明。
19 この後、〈ところが、「嘘を吐いた」ような結果になります〉などといった文が続くべき。

20 「すると」は〈ところが〉などが適当。この「すると」は不図系らしい。「夏の暑い盛り」
21 に文芸的な効果はない。Pの記憶を呼び覚ます効果なら、あるのかもしれない。

22 「明治の精神」の典拠は不明。私の知る限り、典拠を挙げた論文はない。「天皇に始まり
23 天皇に終わった」は意味不明。「終わったような気」というのだから、「終わった」わけではな
24 い。語られるSの「気」を想像することは、私にはできない。

25 「最も強く」とする根拠は不明。「私ども」のメンバーは不明。静は含まれるとして、他
26 に誰がいるのか。〈四十五歳以下はみんな死ね〉ってか。「その後」の「そ」が指すものは不
27 明。「生き残っている」は意味不明。勿論、〈生きている〉でも変。「生き残っているのは時
28 勢遅れだ」というのは意味不明。これに「という感じ」が付くと、ほとんど無意味。

29 「明白さまに」は意味不明。

30 静が「笑って取り合」わなかった理由は不明。「何を思ったものか」がわからないのに、
31 どうして「調戯いました」と言えるのか。Sは「殉死」の静的意味を知っているのか。

32
33 私は殉死という言葉^{ほど}を殆んど忘れていました。平生使う必要のない字だから、記憶の底
34 に沈んだまま、腐れかけていたものと見えます。妻の笑談^{ママ}を聞いて始めてそれを思い出
35 した時、私は妻に向ってもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積りだと答え
36 ました。私の答も無論笑談に過ぎなかったのですが、私はその時何だか古い不要な言葉に
37 新らしい意義^{ママ}を盛り得たような心持がしたのです。

38 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十六)

39
40 「忘れて」は「意識的に記憶から消そうとする」(『広辞苑』「忘る」)という感じを含むか。

41 「必要」は〈こと〉で十分だろう。「字」を「忘れて」いたってこと? 「記憶の底」は
42 意味不明。〈「言葉」あるいは「字」が「腐れ」〉は意味不明。気障ですらない。つまらん。

43
44
45

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2520 明治はまだ終わっていない
4 2522 死ねば？

5
6 「明治の精神に殉死する積り」云々の場面を、人々はどのように思い描くのだろう。

7
8 S (読んでいた新聞を膝に置いて) 明治の精神が天皇に始まり天皇に終わったような気が
9 する。最も強く明治の影を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れ
10 だという感じがする。その感じが烈しく私の胸を打つ。

11 静 (笑) では、殉死でもしたらよかろう。

12 S 殉死という言葉をはほとんど忘れていた。平生使う必要のない字だから、記憶の底に沈
13 んだまま、腐れかけていたものとみえる。お前の冗談を聞いて初めてそれを思い出した。
14 もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだ。(笑) 何だか古い不要な言
15 葉に新しい意義を盛り得たような心持ちがする。

16
17 こんな会話は、ありそうにない。

18
19 S (新聞を畳み) 明治の精神が天皇に始まり天皇に終わったような気がする。最も強く
20 明治の影を受けた私どもが、その後に生き残っているのは必竟時勢遅れだという感じが
21 する。その感じが烈しく私の胸を打つ。

22 静 (笑) では、殉死でもしたらよかろう。

23 S もし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死するつもりだ。(笑)

24
25 静の返事が欲しくなる。

26
27 S (新聞を見ながら) 天皇陛下がお亡くなりになったね。

28 静 ええ。これからどうなるんでしょう。(針仕事の手が止まる)

29 S 封建時代に戻るのかな。社会主義国になるのかな。いずれにせよ、そんな社会に自分
30 が適応できるとは思えない。俺たちも死んだ方がいいんじゃないか？

31 静 死ねば？ (作り笑い) じゃあ、殉死でもしてみます？

32 S ジュンシ？ ああ、殉死ね。いや、勝手に殉死なんかできないんだよ。だから、もし
33 俺が殉死するとしたらだな、ううむ、明治の精神に殉死するつもりにでもなってみるか
34 かな。(すすり泣きのような含み笑い)

35 静 (溜息のように) イミフ～。(反応がないので) 略してIMFナンチャッテ。

36 S (静の声が聞こえているのか、いないのか。ぎらぎらした目で中空を仰ぐ)

37 静 (Sを不必要に長く見てから針仕事に戻ろうとするが、手は動かない)

38

39 静は、夫婦^{めおと}心中の誘いを拒絶するために、Sに自殺を勧めた。本音が漏れたわけだ。自分
40 でも気づかなかったSに対する疎ましさを、静は露呈してしまった。静の害意を感知して、
41 Sは慌てて嫌味で返す。同時に自殺願望が募る。静がSを殺したようなものだ。

42 女に対する不満や恨みなどを、作者は露呈している。文芸的に表現しているのではない。

43

44

45

46

47

48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2520 明治はまだ終わっていない
4 2523 ボッチの夢

5

6 語り手Sは「明治の精神」という言葉を不意に持ち出す。語られる時点において、明治は
7 まだ終わっていないから、「明治」限定と断言できる「精神」など、あるわけがない。

8

9 すると、漱石が「明治の精神」と呼ぶものは、明治二十年代において整備され確立され
10 ていく近代国家体制の中で排除されていった多様な「可能性」そのものだった、とって
11 いいのではないのでしょうか。つまり僕がいおうとする「歴史」とは、今や隠蔽され忘却さ
12 れてしまったもののことです。

13 (柄谷行人『漱石の多様性』)

14

15 「漱石」ではない。Sだ。「明治の精神」という言葉は、「体制」によって「隠蔽され忘却
16 され」るように暗示された不可能性のモザイクといってもいいのではないか。私のいおうと
17 する〈歴史〉とは、軽薄才子の発信するフェイク・ニュースのことだ。

18 「明治」の真意は「自由と独立と己れとに充ちた現代」だろう。この「明治」は、単なる
19 元号ではない。「精神」も、漠然とした〈物質や肉体でないもの〉とは違う。これは「向上
20 心」のことだが、「向上心」はKの自分語であり、Sに真意は知り得ない。

21 「明治の精神」はSの自分語だろう。自分語を共通語に偽装したがるのが「明治の精神」
22 の症状だ。ボッチを恥じるボッチは、自分が虚構の共同体に属しているように装う。そこは、
23 軽薄才子の集うクラブハウスだ。家族やリアルな友人などから排除され、また、新しく親密
24 な人間関係を構築する夢も希望もないとき、〈自分を「受け入れ事」のできるは少なくない〉
25 という夢を見て不安を解消しようとあがく。この夢を共有する人がいたとしても、当人を
26 「受け入れる事」はできない。できるふりをするのが夏目宗徒だ。

27 『こころ』の作者がSの自己欺瞞を文芸的に表現している様子はない。作者が自身の言語
28 技術の限界を露呈しているだけのことだ。言うまでもなく、「先生」は漱石先生ではないが、
29 両者の言語能力の性格は同質だ。また、柄谷のような夏目宗徒の言語技術も同質だ。意味不
30 明の言説を理解したふりになりたがる軽薄才子がいるだけのことだ。

31 「明治の精神」は明治限定の心的現象ではない。現在も継続中の何かだ。だからこそ、『こ
32 ころ』は今も読まれている。Sにとって、「明治の精神」は「明治」限定の「精神」のよう
33 に思われる自分の精神状態の仮称でしかない。それを「殉死」の対象とみなしたとき、よう
34 やく意味ありげに思われる気分でしかない。ただし、「殉死」もSの自分語であり、確かな
35 意味はない。ありそうでなさそうな「殉死」の「意義」も明示できないでいる。

36 「明治の精神」とは、意味ありげなだけで確かな意味のない自分語、他人に通じることが
37 ないばかりか、自分でも共通語に仕立て直せない、自分でもどんなことを指しているのか、
38 明白でないような精神状態、朦朧とした、混乱した、曖昧な、矛盾だらけの悲痛な気分の仮
39 称だ。「明治の精神」とは、「明治の精神」などといったレッテルを貼って粹がるしかないよ
40 うな深刻な憂鬱な精神状態を指すが、同時に、ご大層なレッテルを貼ってしまえば悶々をお
41 蔵入りにできてしまいそうに思ってしまうがちな軽薄さの仮称なのでもある。つまり、無知
42 な人間でさえ免れない「神経衰弱」を、自他に対して隠蔽する言葉だ。

43

44

45

46

47

48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
- 2 2500 明示できない精神
- 3 2530 和魂洋才
- 4 2531 言文二途

5
6
7

「明治の精神」は、明治後期の軽薄才子にありがちなスタイルを指す言葉だろう。

8 彼の父は洋筆^{ペン}や万年筆でだらしなく綴^{つづ}られた言文一致の手紙などを、自分の倅^{せがれ}から受け取る事は平生^{ひごろ}からあまり喜^{ママ}こんでいなかった。彼は遠くにいる父の顔を眼の前に思い浮かべながら、苦笑して筆^おを擱いた。

10
11 (夏目漱石『明暗』十五)

12
13 「一致」は初出では「一途」だ。
14 世代間の思想的対立はなかったから、古い文体が無効になると同時に対立も消えた。

15
16 明治初期の改良運動の一つで、国語・国字改良と類縁をなしている。改良運動とは、日本を急速に西欧近代に接近させるため、日本のさまざまな分野の制度を西欧風に改良していこうとする運動だが、その根幹となったのが言文一致を中心とすることばの組み替えの試みであった。具体的には国民の啓蒙(けいもう)を目的としていたが、結果的には日本人のそれまでの思考の変革を促す一種の精神革命として機能していった。

20
21 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「言文一致」山田有策)

22
23 「明治の精神」は「一種の精神革命」に関わる事だろう。

24
25 平安時代まで言文一致であったが、文に変化が生じなかったのに対し、言は変化し、鎌倉時代以降は言文二途の時代になる。その後江戸時代に至るまで標準的な文章体(和文)が古典的な性格を帯びたものだったために、幕末から明治期にかけて、西欧にならった言文一致の文章が求められた。

28
29
30 (『山川 日本史小辞典』「言文一致」)

31
32 「言文二途」は建前と本音の使い分けと関係があるのではなかろうか。

33
34 社会学者作田啓一によれば、普通、社会体系の外側にある理念的文化(あらゆる状況を通じて意味の一貫性を保持しようとする文化)がタテマエとして尊重されるが、それは、社会体系内の状況からの要請を入れて現実と妥協し、制度的文化となる。生活上の実際の行動を動機づけるのは、ホンネとしての制度的文化のほうである。日本のような後者が相対的に優位を占める社会では、タテマエ・ホンネ間の相互浸透や両者の使い分けが顕著であるという。

39
40 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「タテマエとホンネ」濱口恵俊)

41
42 こうした「使い分け」に失敗した人の精神状態を指す言葉が「明治の精神」ではないか。

43
44
45
46
47
48

1 2000 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
2 2500 明示できない精神
3 2530 和魂洋才
4 2532 分裂病的

5

6 「明治の精神」という言葉は建前の表現だ。Sは本音を隠している。静に隠しているばかりか、聞き手Pにも隠している。その隠蔽工作に作者は加担している。作者は本音を隠したまま、その気分を読者に伝達しようとしている。鬱陶しい。

9

10 和魂洋才とは外面と内面とを使いわけるということである。これこそまさに精神分裂病質者が試みることである。あるいはこう言った方がよければ、ある危機的状況にあって、外面と内面との使いわけというこの防衛機制を用いることが、精神の分裂をもたらすのである。当人はこの使いわけによってうまく危機的状況に対処しているつもりでも、そのことが彼の人格にぬぐいがたい亀裂と傷痕をきざみこむ。そして、その結果、彼がうまく対処するつもりであった危機的状況はますます危険で脅威的となり、彼はますますこの防衛機制に訴えざるを得なくなり、ここに悪循環が生じる。洋才は外面だけのことであり、内面では和魂を堅持しているつもりでも、そうはゆかない。外的自己と内的自己とが生き生きとした統一的关系にあってこそ、いいかえれば外的自己が内的自己のありのままの自発的表現であり、かつ内的自己が外的自己の行動を自分の主体的意志に発し、自分が決定でき、自分に責任がある行動であると実感してこそ、人格の統一性、自己同一性は保たれるのである。外的自己と内的自己を使いわけ、外的自己を危機的状況、脅威的外敵に対処するための一時の仮面とするならば、内的自己は外的自己に対するコントロールを失い、そのうち、外的自己は内的自己の意志とは無関係に振舞いはじめ、その行動は自分ではなく他者によって決定されるかのように感じられてくる。つまり、内的自己から見れば、外的自己はむしろ敵の同盟者のようにうつる。他人が自分の内奥まで踏みこんでくるといふ被迫害感の起源はここにある。

27 (岸田秀『ものぐさ精神分析』「日本近代を精神分析する——精神分裂病としての日本近代」)

28

29 「和魂洋才」という言葉のもとには〈和魂漢才〉だ。

30

31 日本固有の精神を以て中国から伝来した学問を活用することの重要性を強調している。
32 (『広辞苑』「和魂漢才」)

33

34 和魂漢才の実態は不明。

35

36 明治の菅原道真ともいべき和洋の学芸に精通した森鷗外(おうがい)は、平安以来の系統を踏んで「和魂洋才」をすすめた。それは西洋文化の摂取とともに、それと日本文化の融合を説く良識豊かなものであったが、近代日本の激流的な思想界はそれを流布させないで終わった。

39

40 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「和魂漢才・和魂洋才」原田隆吉)

41

42 和魂洋才の実態も不明。

43

44

45

46

47

48

49

1 2000 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
2 2500 明示できない精神
3 2550 和魂洋才
4 2533 造語

5

6 和魂洋才の場合、〈開化の漢語による和風の意味の表現〉だったと考えられる。原語のままではなく、「アイスクリーム」(上一)のようなカタカナ語、「印氣」(下十七)のような当て字を用いた。さらには、「アンドレ」(上五)を「安得烈」(上五)と書いて〈安んぞ烈しきを得ん〉などと読ませる気だったのなら、ややこしいことになる。

10

11 アメリカの教科書を、そのままほん訳して使ったので、かなりむずかしく、おかしな文章が多くてたいへんでした。

12

13 (樋口清之監修『学研まんが 日本の歴史 第12巻 明治維新』)

14

15 「おかしな文章」が明治前期の青年にはハイカラに思えたのだろう。

16

17 文豪・大家たちは、古くから一般的に用いられてきた四字熟語はもちろん、みずから新たに造語したのも縦横に駆使して、それぞれ独自の文章世界を築いています。

18

19 (日本漢字教育振興会編著『知っ得 文豪・大家の「四字熟語術」』)

20

21 漢語による造語は、江戸時代から始まっていた。

22

23 (zenuw(オランダ)の訳語として、杉田玄白が「解体新書」で初めて用いた語。「神気配」「経脈」から造語)

24

25 (『広辞苑』「神経」)

26

27 「神経」と「万物を生成する霊妙な力」(『広辞苑』「神気」)や「漢方で、気血が運行する主要な通路」(『広辞苑』「経脈」)の関係は不明。「人体内の生氣と血液。血液の循環」(『広辞苑』「気血」)も私にはわからない。「生氣」で行き止まり。

30

31 Kの神経衰弱はこの時もう大分可くなっていたらしいのです。それと反比例に、私の方は段々過敏になって来ていたのです。

32

33 (夏目漱石『こころ』「下二十八」)

34

35 「神経衰弱に罹っている位」(二十二)が「神経衰弱」になっている。「らしい」は伝聞か。「それ」の指す言葉がない。「反比例に」は誤用だろう。

36

37 「過敏」を「衰弱」と並べるのはおかしい。二人は、神経質だったのではないか。

38

39 ふつう神経質が体質性であるのと異なり、獲得性のものとされるが厳密な区別はない。
40 (『百科事典マイペディア』「神経衰弱」)

41

42 何が何やら。こっちの方が「神経衰弱」になりそう。

43

44

45

46

47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2540 「継続中」の「精神」
4 2541 「どうかこうか生きている」

5
6 Nにとって、「明治の精神」は明治の終わりとともに終わらなかったはずだ。

7
8 どうかこうか生きています。——私はこの一句を久しい間使用した。しかし使用するごと
9 に、何だか不穏当な心持がするので、自分でも実は已められるならばと思って考えてみた
10 が、私の健康状態を云い現わすべき適当な言葉は、他にどうしても見付からなかった。
11 ある日T君が来たから、この話をして、癒ったとも云えず、癒らないとも云えず、何と答
12 えて好いか分らないと語ったら、T君はすぐ私にこんな返事をした。

13 「そりゃ癒ったとは云われませんね。そう時々再発する様じゃ。まあ故の病気の継続なん
14 でしょう」

15 この継続という言葉を知った時、私は好い事を教えられたような気がした。それから以
16 後は、「どうかこうか生きています」という挨拶を已めて、「病気はまだ継続中です」
17 と改めた。そうしてその継続の意味を説明する場合には、必ず歐洲の大乱を引合に出し
18 た。

19 (夏目漱石『硝子戸の中』三十)

20
21 相手変われど主変わらず。一個の台詞で万人を納得させられるような「適当な言葉」など、
22 あるはずがない。Nは世界を舞台にし、万人を観客に見立てることによって、つまり文学者
23 になりすますことによって、「どうかこうか生きています」のだった。

24 「継続中」について「漱石文学の代表的テーマの一つに関わることば」(ちくま文庫『夏目
25 漱石全集 10』註)と紹介してある。意味不明。

26
27 私は私の病気が継続であるという事に気が付いた時、歐洲の戦争も恐らく何時の世か
28 らかの継続だろうと考えた。けれども、それが何処からどう始まって、どう曲折して行く
29 のかの問題になると全く無知識なので、継続という言葉を知らない一般の人を、私は却っ
30 て羨ましく思っている。

31 (夏目漱石『硝子戸の中』三十)

32
33 「歐洲の」から「けれども」までを省いて読んでみよう。Nは、自分の「問題」について
34 「無知識」でいたくて、つまり、病因について反省しなくて、世界史的事件に話をすり
35 かえたのだ。「継続」という語は夏目語。

36
37 造語症ともいう。本人だけにしか通用しない言葉を作りだすこと。病的状態では統合失
38 調症にみられる。

39 (『精神科ポケット辞典 [新訂版] 「言語新作」)

40
41 Nには造語の癖があった。この〈造語〉は「新らしい意義」などの創出も含む。

42
43
44
45
46
47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2540 「神経衰弱」
4 2542 「外発的」

5
6 「明治の精神」は「神経衰弱」と言い換えられる。

7
8 すでに開化と云うものがいかに進歩しても、案外その開化の賜^{たまもの}として吾々の受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらいしなければならぬ心配を勘定^{かんじょう}に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変りはなさそうである事は前御話しした通りである
9
10 上に、今言った現代日本が置かれたる特殊の状況^まに因って吾々の開化が機械的に変化を
11 余儀なくされるためにただ上皮^{うわがわ}を滑って行き、また滑るまいと思つて踏張^{ふんば}るために神経
12 衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言わんか憐れと言わんか、誠に言語道断の
13 窮状に陥ったものであります。私の結論はそれだけに過ぎない。

14
15 (夏目漱石『現代日本の開化』)

16
17 『日本文化の雑種性』(加藤周一)は、これの気の抜けたパクリ。

18 「神経衰弱」について語るNの文体そのものが、彼自身の「神経衰弱」の症状だろう。一文を適当に終えることができず、憑りつかれたようにべらべらとしゃべる。「神経衰弱」の
19 症状は「いらいら」だが、彼の語り口そのものが「いらいら」しているわけだ。
20 Nは自身の「心配事」や「状況」や「窮状」を隠蔽している。

21
22
23 それで現代の日本の開化は前に述べた一般の開化とどこが違うかと云うのが問題です。
24 もし一言にしてこの問題を解決しようとするならば私はこう断じたい、西洋の開化(す
25 なわち一般の開化)は内発的であつて、日本の現代の開化は外発的である。

26 (夏目漱石『現代日本の開化』)

27
28 ナンセンス。詭弁ですらない。

29
30 が、初めてこの文章を読んだ時に感じた、素人の幼稚な疑問だけはぜひ書いておきたい。
31 それは、なぜ、「西洋」と「日本」が比較されているのかということである。これが「西
32 洋」と「東洋」の比較であれば分かる。あるいは、「イギリス」「フランス」「ドイツ」等
33 の国々と「日本」が比較されているのであれば理解できる。しかし、「西洋」と「日本」
34 では、比較させるもののカテゴリーがまるですれてしまっているのではないか。こんなカテ
35 グリー間違い(category mistake)の典型のような設定で、それぞれの開化の特質につ
36 いて、正確な判断が下せるものなのだろうか。

37 (香西秀信『論争と「詭弁」』「レトリックのための弁明」)

38
39 「外発」は、普通、〈外圧〉という。Nのいう「外発」は〈外因〉という意味を内包し、
40 隠蔽している。Nは文明を病気と考えていた。〈自然×文明〉が〈健康×病気〉から〈正常
41 ×異常〉へとずれこむ。Nは自身の異常性格が内因的性であることを自他に対して隠蔽する
42 ために文明論をでっち上げた。ただし、そうした自覚はなかったのだろう。

43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2540 「神経衰弱」
4 2543 「不安」
5

6 Sの「煩悶^{はんもん}や苦悶」(下三)は、明治に特有の文化などによって生じたのではない。語り
7 手Sはその原因を徹底的に隠蔽しようとして、意味不明の言葉を並べる。作者はこうした隠
8 蔽工作に加担している。
9

10 日本は西洋から借金でもしなければ、到底立ち行^ゆかない国だ。それでいて、一等国を以
11 て任じている。そうして、無理にも一等国の仲間入^{ママ}をしようとする。だから、あらゆる方
12 面に向って、奥行を削って、一等国だけの間口を張っちまった。なまじい張れるから、な
13 お悲惨なものだ。

14 (夏目漱石『それから』六)

15
16 代助は、「日本対西洋」(『それから』六)の関係と自他の関係混同している。〈父親対息子〉
17 の対立を隠蔽するためだ。そのことに作者は気づいていない。だから、読者も気づいてはな
18 らない。
19

20 私は死んだ後^{あと}で、妻から頓死^{とんし}したと思われたいのです。気が狂ったと思われても満足な
21 のです。

22 (夏目漱石『ころろ』「下 先生と遺書」五十六)

23
24 語り手Sは、「気が狂った」と、Pには「思われ」ない」と暗示している。Pには「思わ
25 れ」ないとしても、「医者」からはどう「思われ」るのだろう。「気が狂った」と思うのは、
26 静か。「先生」の含意は〈女からは「気が狂った」と思われそうな中年男〉かもしれない。
27

28 その上彼は、現代の日本に特有なる一種の不安に襲われ出した。その不安は人と人との
29 間に信仰^{げんいん}がない源因から起こる野蛮程度の現象であった。彼はこの心的現象のために甚
30 しき動揺を感じた。

31 (夏目漱石『それから』十)

32
33 語り手は〈代助に「特有なる一種の不安」の物語〉を隠蔽している。

34 「その不安」は手品。「一種の不安」は「不安」ではない。淋しい系の言葉だ。「信仰」の
35 真意は〈共感〉などか。「野蛮」の真意は〈幼児〉だろう。

36 普通の意味での「不安」のせいで「はなはだしき動揺」は起きない。
37

38 恐ろしいものに脅かされているという感情。現実には恐れる対象がはっきりしている恐
39 れとは異なり、その原因は本人にも明瞭でない。

40 (『ブリタニカ国際大百科事典』「不安」)

41
42 「不安」は夏目語だ。
43
44
45
46
47

1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2550 「主人」
4 2551 「父」と「叔父」とK

5
6 Sは父性に対して矛盾した思いを抱いている。

7
8 ———私は実際あの電報を打つ時に、あなたの御父さんの事を忘れていたのです。その癖
9 あなたが東京にいる頃には、難症だからよく注意しなくっては不可いと、あれ程忠告した
10 のは私ですのに。私はこういう矛盾な人間なのです。或は私の脳髓よりも、私の過去が
11 私を圧迫する結果こんな矛盾な人間に私を変化させるのかもしれませんが。

12 (夏目漱石『こころ』「下 先生の遺書」一)

13
14 「あの電報」は「ちょっと会いたいが来られるか」(中十二)といったもの。
15 「忘れていた」のだから、普通の意味の矛盾はない。

16
17 I Pは死にそうな父のために実家にいるべきだ。
18 II Pは死にそうなSのために上京すべきだ。

19
20 矛盾めいた考えがあるとすれば、〈Iの物語とIIの物語に近縁性がある〉と考えねばなら
21 ない。つまり、PにとってPの父とSが代替可能であるばかりでなく、Sにとっても代替可
22 能だと考えねばならない。Pの父が病んでいることを聞いて、Sは「私が代られれば代って
23 上げてほしいが」(上二十一)と言った。SはPの「本当の父」になりたがっているのだ。
24 ただし、それは〈死ぬべき父〉だ。

25
26 この位私の父から信用されたり褒められたりしていた叔父を、私がどうして疑^うがう事
27 が出来るでしょう。

28 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四)

29
30 「この位」がどの「位」でも構わない。異様な語気が感じられたら十分。「父から信用さ
31 れたり褒められたりしていた叔父」は、おかしい。「〈兄から「信用されたり褒められたりし
32 ていた」自分〉という〈「叔父」の物語〉がないからだ。ここは、〈「父」が信用したり褒め
33 たりしていた「叔父」〉と語るべきだ。しかし、このように語れば、「父」の責任を問うこと
34 になりかねない。「私がどうして疑う事ができるでしょう」という質問は、父へ向けられた
35 ものだ。ここで語り手Sは亡父に対して恨み言を並べている。勿論、その自覚はない。この
36 「私」は〈成人しても「父」を「疑がう事」ができない「私」〉の略だ。「叔父」に対するS
37 の疑いは、「父」に対する疑いの再発だ。Sが父を本当に信じていたのなら、叔父に対する
38 自分の疑いを疑ったはずだ。不都合でも「叔父」の言いなりになったことだろう。Sが「叔
39 父」を疑ったのは、幼少期から「父」を疑っていたからだ。「叔父」は「父」の代理だ。「父」
40 を疑うことは不孝なので、積年の恨みを「叔父」に向けたわけだ。

41 Sは誰かの「本当の父」になることによって「父」に復讐しようとした。自覚できない「父」
42 との確執が、不十分な「叔父」との確執を経て、Kとの確執として実現した。

43
44
45
46
47
48

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2550 「主人」
4 2552 倭文子と静子と静

5

6 『こころ』の作者が隠蔽した物語は、次のようなものだろう。

7

8 相手の女性は、かれらの双方に無関心ではなかった。だが、いつまでたっても、はっきりした選択を示さないのだ。かれらはほとんど一時間ごとに、あまいうぬぼれと、胸をかきむしるような嫉妬^{しつと}とを、交互に感じなければならなかった。今はもはやこの苦痛に耐えがなくなった。相手が選択しなければ、こちらで決めてしまうほかはない。どちらかが引きさがる？ 思いもよらぬことだ。では、決闘だ。昔の騎士のように、いさぎよく命がけの決闘をしようではないか。と、ふたりの恋愛狂人の相談がなりたった。笑えない気違いざたである。

13

(江戸川乱歩『吸血鬼』)

15

16

17

相手の女性の名は「倭文子^{しづこ}」という。

18

SとKは、静の前で「いさぎよく命がけ」の対決をすべきだったのだ。ただし、Sの考えでは、〈静が「どちらかを選ぶ」〉という問題は成り立たない。

19

20

21

日本人、ことに日本の若い女は、そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇気に乏しいものと私は見込んでいたのです。

22

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」三十四)

23

24

25

一般論をやって何になるろう。「日本人」には当然〈「日本の若い」男〉も含まれる。男であるSも、男女関係において「習慣の奴隷^{どれい}」(下十七)だったはずだ。「そんな場合」がどんな場合か、不明。「日本の若い女」は、〈プロポーズをしても握手をしてくれない〉というだけではなかろう。SとKのどちらに対しても、〈ごめんなさい〉さえ言ってくれないらしい。本文は、次のような真相を隠蔽しているはずだ。

26

27

28

29

〈「日本人、ことに日本の若い」男である私は、「そんな場合に、相手に気兼ねなく自分の思った通りを遠慮せずに口にするだけの勇気に乏しいもの」だった「のです」〉

30

31

32

33

江戸川乱歩の最高傑作である『陰獣』の男女関係は異様だ。寒川^{しゅんでい}と春泥は静子を取り合う。「しゅんでい」は、中国語の〈兄弟 xiongdi〉の洒落か。

36

春泥は実在しないのかもしれない。春泥の正体は、静子かもしれない。そういう解釈を寒川がしたくなるように、春泥が仕組んでいるのかもしれない。『陰獣』は推理小説の枠を超え、幻想文学の趣を呈している。寒川は二重人格で、春泥は寒川の別人格かもしれない。

38

39

Sは、恋敵を必要とした。ところが、その自覚がない。Kは、実在しなかったのかもしれない。彼はSの「もう一人男」かもしれない。Kという男が実在したとしても、下宿にはやって来なかった可能性がある。勿論、そうした解釈を作者が望んでいる様子はない。

40

『吸血鬼』と『陰獣』は『こころ』の異本みたいだ。

41

42

43

44

45

46

47

- 1 2000 不純な「矛盾な人間」
2 2500 明示できない精神
3 2550 「主人」
4 2553 ナオミズム

5

6 Sは三角関係を必要とした。だが、同時に、忌避した。だから、Sは「矛盾な人間」を自
7 認するわけだ。「矛盾」の真意は〈不純〉だろう。

8 彼は、自分自身の不純な「罪悪」としての欲望を自他に対して隠蔽し、「神聖な」「本当
9 の愛」の物語を捏造し、その主人公演じようとした。そして、失敗し続けた。

10 Kを排除せずに「恋」を継続すれば、次のような物語になる。

11

12 主人公河合譲治は(かわいじょうじ)は美少女ナオミを自分の思い通りに教育しようとし
13 てるが、ナオミは毒々しいまでの美女に変身し、譲治を振りマワす。「美しき強者」とし
14 ての女性とその前に屈する男性という関係を描いた悪魔主義の代表作。大正期のモダン
15 ズムがふんだんに取り入れられており、ナオミはモダン・ガールの典型と見なされ「ナオ
16 ミズム」という流行語まで生まれた。

17

(『近現代文学事典』「痴人の愛」)

18

19 「ナオミズム」が〈大正の精神〉なら、「明治の精神」は〈マゾヒズムに憧れつつ恐れる
20 「矛盾な人間」の異様な精神〉などと総括できよう。

21

22 女と一所に草の上を歩いて行くと、急に^{きりぎりし}絶壁の^{てっぺんママ}天辺へ出た、その時女が庄太郎に、此処
23 から飛び込んで御覧なさいと云った。底を^{のぞ}覗いて見ると、^{きりぎりし}切岸は見えるが底は見えない。
24 庄太郎は又パナマの帽を^ぬ脱いで再三辞退した。すると女が、もし思い切って飛び込まなけ
25 れば、豚に^な舐められますが^よ好う御座んすかと聞いた。

26

(夏目漱石『夢十夜』「第十夜」)

27

28 〈昭和の精神〉だと、エロ・グロ・ナンセンスかな。

29

30 二人の男性からされて、真美はすごく感じちゃった。それから、主人に体をもたれかか
31 りながら、Kの手をピシャッと叩いてはずさせたの。そうするとKが真美のアソコを舐め
32 るにはおすわりして舌だけうんと伸ばすしかないでしょ。奴隷にはその方がふさわしい
33 と思ったのよ。その代り舐めやすいようにもっと股を開いてあげたわ……

34

(下川歌史『レター・セックスの快樂』)

35

36 Sは、Kを排除するのではなく、「奴隷」にしたかった。自分が「主人」(下十六)になる
37 ために、Sは「奴隷」を従属させる必要があった。なぜなら、Sは自分自身をおぞましい「奴
38 隷」として空想していたからだ。静の義務は、Sが「奴隷」ではないことを証明することだ
39 った。この仕事に静は失敗した。Kが死んだら元も子もない。

40 「明治の精神」に確かな意味はない。それは、複数の矛盾した〈自分の物語〉の主人公を
41 演じようとしてしくじり続けながら、しかもそのしくじり具合を明示できない精神状態を、
42 必死で隠蔽しつつも、ちょっとだけ露呈してしまった造語だ。夏目語。

43

44

45

46

47

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51

第三章 窮屈な「貧弱な思想家」

算数の時間は、ひきさんのれんしゅうでした。

$$28 - 5 = \quad 37 - 15 = \quad 56 - 18 =$$

王さまは、もんだいを見て、泣きだしたくなりました。

(あさのしょくじ) - (めだまやき) = (はらへった)

もんだいがそう見えてくるのです。

(寺村輝夫『はらぺこ王さまふとりすぎ』)

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3110 『だくだく』
4 3111 『粗忽長屋』

5
6 意味不明の言説に関する意味不明の解釈を足して引いても掛けても割り切れはしない。

7
8 　しかししばらくしている中に、私の心がその物凄い閃めきに^{うち}応ずるようになりまし
9 た。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如く
10 に思われ出して来たのです。

11
12 　こうして『こころ』の内面は「外」から襲ってくる力に屈服する。『こころ』とは、こ
13 ころの敗北、近代日本の内面の崩壊の痛ましい記念碑であった。

14 　（中条省平『反=近代文学史』「第一章 夏目漱石——敗北する内面」）

15
16 　最初の引用は『こころ』からだだが、例によって意味不明。「閃めき」を発する本体は「恐
17 ろしい影」（下五十四）と呼ばれている。「影」は意味不明。

18 　「外から来ないでも」とSは語るのだから、「外」から襲ってくる力に屈服する」という
19 中条の解釈は間違いだろう。ただし、本文が意味不明だから、間違いと断定することはでき
20 ない。〔1153「自分の頭がどうかしたのではなかろうか」〕参照。

21 　「こころの敗北」の「こころ」は、どうして平仮名かな。前の方に書いてあるのかもしれ
22 ないが、こんな悪文を読み返す気にはなれない。「近代日本の内面」も「痛ましい記念碑」
23 も意味不明。〈「近代日本の」～「崩壊の」～「記念碑」〉がどこかに実在するのかな。

24 　『酢豆腐』だろう。

25
26 　大正期に入ってから^{こうじん}の漱石は、『行人』『こころ』『道草』『明暗』と、近代的自我や明治
27 の精神への^{かいぎ}懐疑と苦悩をさらに踏み込んで描こうとしていきます。大正五年（一九一六）
28 に四十九歳で亡くなり、最後の『明暗』が未完となって、漱石の人生探求は道半ばで終わ
29 りました。しかし明治とともに歩んだその人生において、「いかに生くべきか」を徹底し
30 て掘り下げ、見事な文体によって表現した漱石の文学は、そのまま現代社会の私たちにも
31 様々な示唆を与えてくれます。

32 　（森本哲郎『漱石の小説は「自分探し」の文学だ。』）

33
34 　「近代的自我」は意味不明。「明治の精神」の出典が不明。〈「近代的自我や明治の精神へ
35 の」～「苦悩」〉は意味不明。「踏み込んで」は意味不明。

36 　「人生探求」は意味不明。「道」は意味不明。「道半ば」と言えるのなら、森本は「道」の
37 始まりと終わりを知悉しているのだろう。彼は「漱石」を凌駕したわけだ。

38 　「明治とともに歩んだ」は意味不明。「生く」は古語。「近代的」ではないな。〈「いかに
39 生くべきか」を」～「掘り下げ」は意味不明。「徹底して」いたのに「道半ば」だったの？
40 「見事な文体」であることを証明せよ。森本のはどんな「文体」かな。

41 　「自分探し」って『粗忽長屋』かい。探しに佐賀市に行くべきか。

42 　「現代社会の私たち」は『だくだく』の二人かな。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」

2 3100 死に後れ

3 3110 『だくだく』

4 3112 『千早振』

5

6 以下、知っておくべき情報だが、面倒くさければ読み飛ばしてくれていい。

7

8 「先生」はみずからの死を「明治の精神」に殉死したのだと説明しています。これはやや謎めいた説明で、このテキストだけからは、何を意味するのか、よくわかりません。推測を行えば、次のようなことを意味しているのでしょうか。

11 (作田啓一『個人主義の運命』「第三章 日本の小説にあらわれた三者関係」)

12

13 「殉死したのだ」なんて、ありえない。「遺書」の語り手Sは、言うまでもなく、まだ死んでいない。また、この時点の語られるSは、自殺の「決心」(下五十六)さえしていない。

15 「説明して」いない。ひどい誤読というか、誤読以前の非常識。

16 「謎めいた」は誤読。

17 「よくわかりません」で留まるべきだ。SはPに対して「貴方にも私の自殺する訳が明らかに呑み込めないかもしれませんが」(下五十六)と語っている。この懸念あるいは慢心は、作者のものだろう。だったら、読者はSの自殺の動機について理解すべきではない。

20 「次のようなこと」は、次のようなことと違わない。

21

22 漱石は先述したように明治の精神を個人主義道徳の追求という方向へ転化させたのであり、明治日本に対する信頼感に支えられて個人の問題を次の世代に受け渡す覚悟を持ち得たのであり、また実際受け渡すことが出来たのである。即ち明治の精神に殉ずることによって個人の生き方を否定したのではなく、そのことによって個人の生き方を更に推し進める為の踏切台にしたと言ってよい。しかし漱石がここまで到達するには鷗外とはまた違った意味で紆余曲折のコースを辿っているのである。

28 (伊沢元美『明治の精神と近代文学』——夏目漱石「こころ」をめぐって——)

29

30 『千早振』かよ。

31

32 おそらく先生をおびやかしたKの黒い影は、先生自身の影であり、それは「自由と独立と己れ」の新しい日本の時代精神である。

34 Kを出し抜いて恋の勝利者となった先生は、「おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ」と思ふ。この「人間として」の人間とは、「自由と独立と己れ」の「自己本位」としての人間ではない、己れを無にする伝統的な倫理観に支えられた人間である。そして、いくらか図式的にいへば、先生の勝利は、明治の近代日本の旧日本への勝利であり、「人間として負けた」といふ苦痛の感情は、近代がみづからの手で扼殺した過去の日本へのうしろめたい負い目を象徴してゐる。

40 (桶谷秀昭『明治の精神 昭和の心—桶谷秀昭自選評論集』)

41

42 「Kの黒い影」は誤読。常識的には「先生自身の影」だが、Sにそうした考えはない。

43

44

45

46

47

48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3110 『だくだく』
4 3113 神経病

5
6 「明治の精神」の真意は、俗語としての「神経衰弱」だ。

7
8 石坂公歴にとっては、維新以後、日本民族の国家は、ひとときも安らいだ気持で見ている
9 ることのできない不安と危険な存在であったろう。つまり恒常的な危機意識——いつま
10 ども民族の独立の完全な達成がえられないという焦燥感（中江兆民のいう外患に対する
11 「神経病」）がかれらを苦しめ、一種の強迫観念としてかれら明治人の心を激しいものに
12 駆りたてていたのであろう。それはじっさいに植民地化の危機があったか、なかったかと
13 いう問題を越えた衝迫であったろう。

14 (色川大吉『新編 明治精神史』)

15
16 同書によれば、中江兆民は「余も亦神経病者の一人なり」と書いていたようだ。

17
18 中枢神経系の機能障害をきたす病気のほか、解剖学的には異常の認められない神経症、
19 精神病をも含めていうこともある。

20 (『日本国語大辞典』「神経病」)

21
22 次は素朴な印象。

23
24 乃木大将の自死には多くの議論がありますが、少なくとも『こころ』の中の「先生」は
25 乃木大将に象徴される自死を“ブーム”と捉えて、それに乗っかっていたのではないでし
26 ょうか。乃木大将には、忠義や義理などといった“カッコいい”日本人男性のイメージが
27 あります。それを自分にも扎扎实り投影させようとしているように思うのです。

28
29 「先生」は、ブームの先頭を走る自分を学生である「私」に見せつけ、「俺はイケてる
30 だろう」といった具合にマウンティングしたのではないのでしょうか。

31 (手塚マキ『裏・読書』)

32
33 Sが「乗っかって」いるのではない。「乗っかって」いるのは作者だ。

34 『こころ』の作者は、「明治の精神」について、理解するのではなく、感得するよう、読
35 者に要求している。作者は読者に対して「マウンティング」を仕掛けているのだ。

36
37 「N閣下などはどうだろう？」

38 青年の顔には当惑の色が浮かんだ。

39 (芥川龍之介『将軍』)

40
41 「N閣下」は乃木希典のこと。

42 明治四十年頃の「青年」は殉死を蔑んだ。『軍国美談と教科書』（中内敏夫）参照。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3120 自己嫌悪
4 3121 『金明竹』
5

6 「遺書」を読み終えたPに、Sの自殺の動機が理解できたのか。〈「先生」は死ぬしかなか
7 ったんだな〉と納得できたのか。〈自分が早めに上京して説得すれば「先生」は死ななかつ
8 たかもしれない〉とは思わなかったか。『こころ』の内部の世界で「遺書」を読むことにな
9 る誰か、つまりRは、Pを責めたか。許したか。褒めたか。彼と抱き合って泣いたか。泣き
10 ながら笑ったか。Sから生きる勇気をもらったような気がしたか。

11 作者は、どのような後日談を暗示しているのだろうか。不明。
12

13 「こないだからの長じけで、つかいつくして、骨は骨、紙は……ああ、ねこに、紙はな
14 かった……皮は皮で、ばらばらになりまして、つかい道になりませんから、たきつけにし
15 ようとおもって、物置きへほうりこんであります」

16 (古典落語『金明竹』)
17

18 以前、与太郎は「知らないひと」(『金明竹』)に「傘」を貸してしまった。彼の伯父は馬
19 鹿な与太郎にも覚えられそうな断りを教えてやる。「貸し傘も、なん本もございましたが、
20 このあいだから長じけで、つかいつくしまして、骨は骨、紙は紙と、ばらばらになりまして、
21 つかい道になりませんから、たきつけにしようとおもって、物置きへほうりこんであります
22 す」(『金明竹』)と。この「傘」を、与太郎は「ねこ」に変えてしまった。

23 わかりにくい〈「ねこ」の物語〉はありふれた〈「傘」の物語〉の不適當な異本だ。「紙」
24 が直接に「皮」に代わるのではない。「傘」が「ねこ」に代わったからだ。

25 〈「殉死」の物語〉は、わかりにくい。「殉死」の「新らしい意義」について詮索するの
26 はなく、わかりやすい原典を探してみよう。〈「自由と独立と己れ」の物語〉では無理だ。こ
27 れも、やはり、わかりにくい物語だ。
28

29 ^{ひと}他に^{あいそ}愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。

30 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十二)
31

32 〈「殉死」の物語〉の原典は〈自己嫌悪の物語〉だろう。

33 ただし、〈自己嫌悪〉という言葉は、決してわかりやすくはない。
34

35 生理状態は殆んど苦にする暇^{いとま}のない位、一つ事をぐるぐる回って考えた。それが習慣
36 になると、終局なく、ぐるぐる回っている方が、埒^{らっ}の外へ飛び出す努力よりも却^{かえ}って楽に
37 なった。

38 代助は最後に不決断の自己嫌悪^{けんお}に陥った。
39

40 (夏目漱石『それから』一四)
41

41 Sも「ぐるぐる」をやる。「ぐるぐる」が「明治の精神」に変わったので、「一番楽な努力」
42 (下五十五)が「殉死」に変わったのだろう。
43
44
45
46
47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3120 自己嫌悪
4 3122 「アカチバラチー」

5
6 『デンスケ』（横山隆一）のドシャ子は「アカチバラチー」と叫ぶ。意味不明。原形は「赤
7 い薔薇が散った」ということだそうだが、原形を知ってもドシャ子の気持ちは想像しがたい。
8 だから、私はこれを使いこなせない。

9 『ブラック・ジャック』（手塚治虫）のピノ子の「アッチョンブリケ」は、意味不明のよ
10 うで、そうでもない。文脈によって彼女の気持ちを想像することができる。だから、私は適
11 当に使える。

12 『魔法使いサリー？』（横山光輝）の「テクマクマヤコン」に意味はない。意味があろう
13 となかろうと、呪文だから、私がこれを唱えても何も起きない。

14
15 吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。太平は死ななければ得られぬ。南無阿弥陀仏南無
16 阿弥陀仏。難有い難有い。

17 (夏目漱石『吾輩は猫である』一一)

18
19 「南無阿弥陀仏の文字の解釈には種々の説がある」（『ブリタニカ』『南無阿弥陀仏』）とい
20 う。ワガハイはどんな「説」を信じているのだろう。不明。

21 「転じて、死ぬこと、物事の尽きること。終わることをいう」（『日本国語大辞典』『南無
22 阿弥陀仏』）というが、ワガハイの場合、通俗的転意で用いているのではなさそう。意味
23 がありそうで、意味不明なのだ。「太平」とは自己嫌悪を感じない状態だろう。

24 ワガハイは「太平」などについて十分に語ってはいない。『こころ』の場合も同様。
25 夏目宗徒は、「太平」を得ないのが偉い」と思っているのかもしれない。

26
27 私は密かに思っている。漱石が参禅して、其処でもし見性^{けんしやう}していたり、悟ったりなど
28 したとしたらおかしい。却ってそれが無かったところに漱石の人となりや、頭のよさがあ
29 ったと思っている。

30 (千谷七郎『漱石の病跡』)

31
32 「密かに」の真意は〈無根拠に〉などだろう。
33 「参禅」は「約二週間」ということだ。「其処」は「帰源院」だが、この引用の後、千谷
34 はこの寺に関する悪評を仄めかす。「おかしい」というのは、〈「帰源院」は駄目な寺だから、
35 誰であれ、「悟ったりなどしたとしたらおかしい」〉などの不当な略でもある。「見性」は「自
36 己の本来の心性を見極めること」（『広辞苑』『見性』）で、「心性」は「天性」（『広辞苑』『心
37 性』）で、「天性」は「うまれつきそなわっている性質」（『広辞苑』『天性』）で、ええっと、
38 だから、何？ ところで、「道元は不変の心性を認めないのが仏教であるとし、見性を全く
39 否定する禅を説く」（『岩波 仏教辞典』『見性』）という。

40 「それ」の指す言葉はない。千谷に「無かった」と、どうして、知れているのか。「人と
41 なりや、頭のよさ」があるとかないとか、意味不明。

42 この種の勿体ぶった意味不明の文章によって、文豪伝説は拡散されてきた。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3120 自己嫌悪
4 3123 『昭和維新試論』

5
6 Nは、個人的な心身の不調と、身近な人々との不和と、明治の社会の混乱などを、無根
7 拠に関係づけて偉ぶり、何となく独創的な思想が表現できたように勘違いしていたらしい。
8 こうした異様な勘違いが「明治の精神」の隠蔽された意味だ。

9
10 生活の定型喪失にともなう「神経衰弱」「煩悶」「発狂」「自殺」等の現象が明治の初年
11 に多く見られたことは、島崎藤村の『夜明け前』や、福沢諭吉の『学問のすすめ』などに
12 証言がある。

13 (橋川文三『昭和維新試論』「五 青年層の心理的転位」)

14
15 「生活の定型」は意味不明。「ともなう」は怪しい。これらの「現象」の淵源を「明治の
16 精神」と呼ぶことができる。いつの時代でも、社会の変化をピンチとを感じる人はいる。だが、
17 チャンスとを感じる人もいる。「喪失」を〈新生〉とを感じる人はいる。

18 暗くて怪しい「明治の精神」は命和も「継続中」だろう。

19
20 しかし、ジャンセンのいう「自己完成の可能性へのオプティミズム」から、懐疑的な「内
21 観的夢想」(introspective reveries)への転位を個人のレベルで正確につきとめること
22 はそれほど簡単な作業でないであろう。ここで私のいうのは、当時青年であった岩波茂雄
23 の言葉を借りていえば、「乃公出でずんば蒼生を如何せん、といったような慷慨悲憤の時
24 代のあとをうけて、人生とは何ぞや、われは何処より来りて何処へ行く、というようなこ
25 とを問題とする内観的煩悶の時代」(『岩波茂雄伝』)への劇的な推移がどうして生じたの
26 か、そしてその傾向が、のちに日本の進路にどういう意味をもったのかという問題である。
27 もとより、いついかなる時代の青年もその同じ問題に直面したと見ることはできる。しか
28 し、現代に生きる私たち自身のそれとほぼ同じ構造をもち、同じ色どりをおびたものと思
29 われる「煩悶」はこの時期に始まっているのではないだろうか？ たとえば「現代人の孤
30 独」とでもいうべき様相が青年心理の中に登場するのはこの時代ではないか、ということ
31 である。

32 (橋川文三『昭和維新試論』「五 青年層の心理的転位」)

33
34 「ジャンセン」は無視。「自己完成」も「内観的夢想」も「転位」も意味不明。

35 「ここ」の指すものは不明。岩波が登場する理由は不明。

36 「劇的な推移」でなく、〈喜劇的な衰退〉なら、「問題」にする価値はなかろう。「慷慨悲
37 憤」が壮士芝居で、「煩悶」が新劇なら、芸能界の「問題」だ。

38 「乃公出でずんば蒼生を如何せん」も「人生とは何ぞや、われは何処より来りて何処へ行
39 く」も意味不明で、気障で、芝居がかっていて、滑稽。こうした胡散臭いスタイルが昭和の
40 「日本の進路」を確実にしたのだろう。

41 「構造」や「色どり」は意味不明。

42 「現代人の孤独」は、「青年心理」限定ではない。勿論、日本人限定でもない。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3130 「直感」とか「直覚」とか
4 3131 「近づき^{がた}難い不思議」

5
6 『こころ』に出てくる気障な文句の多くは、意味不明であるがゆえに、読者には価値があ
7 るように思われるらしい。たとえば、「先生」に明確な意味はない。だが、そのせいで、読
8 者はSという正体不明の男が有難い人物のように思い込まされてしまう。こうした効果は、
9 文芸的なものではない。呪術的なものだ。

10
11 神秘性を高めるため意味不明の文句が使用されることも多い。

12 (『ブリタニカ国際大百科事典』「呪文」)

13
14 Nの残した文章には多くの意味不明の文言が含まれている。そのことを、夏目宗徒は知っ
15 ている。知っているのにNを崇める。いや、知っているからこそ崇めるのだ。

16
17 私は最初から先生には近づき^{がた}難い不思議があるように思っていた。それでいて、どうし
18 ても近づかなければいけないという感じが、何処かに強く働^{ママ}らいた。こういう感じを先
19 生に対して有^もっていたものは、多くの人の中で或^{あるい}は私^{ママ}だけかも知れない。

20 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」六)

21
22 「近づき^{がた}難い不思議」は不思議。〈「不思議」に近づく〉はわからない。だから、「近づき
23 難い^{がた}」は、もっとわからない。〈「先生には」～「不思議がある」〉も不思議。「あるように思
24 っていた」は、〈「あるよう」だと「思っていた」〉と〈「ある」と「思っていた」「ように」
25 思う〉の混交だろう。語り手Pは、語られるPのぼんやりした印象と、語りの時点における
26 ぼんやりした記憶を、語り手Pはごっちゃにしているわけだ。ぼんやりした印象だけでPが
27 Sに近づくのはおかしい。はっきりとした思い込みがあったから近づいたはずなのだ。その
28 思い込みの具合などが、語りの時点では薄れてしまっているのだろう。

29 「それでいて」の「それ」の指す言葉がない。「どうしても」は唐突。「近づかなければい
30 られない」は〈「近づかなければ」なら「ない」〉と〈「近づか」ないでは「いられない」〉の
31 混交。つまり、義務と欲求の混交。語り手Pは、語られるPの精神的混乱をこの言葉によっ
32 て反復しているらしい。語り手Pは、〈PはSに近づきたかった〉という物語を封印してい
33 る。「強く働いた」というのに、働いた先が「何処か」わからないのは変。「働いた」は〈「働
34 いた」のだろう〉が正しいのだろう。語られるPは、ある部位を「強く」意識していた。し
35 かし、語り手Pには、その部位が「何処か」思い出せないらしい。嘘としか思えない。

36 ちなみに、Sも「廻らなければいられなくなった」(下四十九)というふうに語る。これ
37 も、〈「廻らなければ」なら「なくなった」〉と〈「廻らな」いでは「いられなくなった」〉の
38 混交だ。作者は、義務と欲求の仕分けができないらしい。作者は、数々の意味不明の文言に
39 よって自身の精神的混乱を露呈している。

40 「こういう感じ」には、〈どういう「感じ」か、もう、わかったよね〉といった押し付け
41 がましい感じがあるよね。「多くの人」は、〈「多く」ない「人」〉の誤記か。だって、Sは「孤
42 独な人間」だろう。「私だけ」という限定の根拠は不明。

43
44
45
46
47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3130 「直感」とか「直覚」とか
4 3132 「馬鹿気ている」
5

6 「多くの人のうちで或^{あるい}は私だけかもしれない」の続き。
7

8 然しその私だけにはこの直感^{のち}が後になって事実の上に証拠立てられたのだから、私は
9 若々しいと云われても、馬鹿^{ばか}気^げしていると笑われても、それを見越した自分の直覚をとにかく
10 頼もしくも又嬉しく思っている。

11 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」六)
12

13 「直感」は、意味不明の〈近づき難い不思議があるよう〉で「どうしても近づかなければ
14 ばいられないという感じ」の言い換え。こういう「感じ」を「直感」と呼べるのは、それが
15 「事実の上に証拠立てられた」とわかった後だろう。つまり、〈こういう感じが「直感」
16 だったことは「事実の上に証拠立てられた」と語るべきだ。ただし、「事実の上に証拠立て
17 られた」も意味不明。「事実」は「遺書」の内容だろうが、〈語り手Sは真実のみを述べてい
18 る〉という「証拠」は皆無だ。誰に「云われ」たり「笑われ」たりするのだろう。Qではな
19 かる。Pの「兄」か。P文書はPとQの架空対談であり、その観客が別にいる。それは「兄」
20 のようなタイプの俗物だ。実在しない彼がGだ。PはGを説得できそうにないので、自分と
21 Qが通じ合っている様子をGに見せつけ、先手を打ってGの攻撃を封じようとしている。

22 「それ」は、〈先生には近づき難い不思議がある〉こと〉だろうか。「見越した」は意味不
23 明。『日本国語大辞典』の「見越す」の項にこの文から引用してある。その意味は「先のな
24 りゆきをおしはかる。将来を見通す」というものだ。しかし、「見越す」は、将来起こるこ
25 とを予測する意で、多くは、その建てた予測に対して、あらかじめなんらかの対策を取る場
26 合に用いられる」(『類語例解辞典』[察する])ということだから、『日本国語大辞典』は間違
27 っている。この辞典は、「それ」を〈この直感^{のち}が後になって「証拠立てられ」ること〉と
28 解釈したのだろう。しかし、そのように解釈すると、「それを見越した自分の直覚」は〈こ
29 の直感^{のち}が後になって証拠立てられ」という将来を見通した「自分の直覚」ということにな
30 り、ナンセンス。そうでないのなら、「直感」と「直覚」は別の意味だ。同義語だとすると、
31 違う言葉を使ったPの魂胆が怪しくなる。怪しいということにしよう。「見越した」の
32 真意は〈見抜いた〉だろう。語り手Pは、〈青年PはSに「不思議がある」ことを「直感」
33 によって察知した〉という虚偽を語ろうとしたが、虚偽という自覚があるものだから、しど
34 ろもどろになっているのだろう。「頼もしく」は真相を隠蔽するためで、意味不明。

35 「遺書」はSとPの架空対談であり、その観客はRだ。ところが、不合理なことに、Rは
36 Qと重なるようだ。SはP文書の出現を予知しており、「遺書」をQのために書いたみたい
37 だ。さもなければ、作者は、自分の企画とPやSの希望を混同しているのだろう。

38 語り手Pは〈語られるPはSの美質を察知した〉といった虚偽を聞き手Qに信じさせよう
39 としたが、うまくいかなかった。QはGと区別できないからだ。そこでSが登壇し、Pの暗
40 示した虚偽を真実として保証した。すると、虚偽を真実として信じるQと信じないGが分離
41 する。Pを信じるQはSをも信じるRに変わる。一方、どちらのことも信じないGは排除さ
42 れる。排除されたくないQは、P的になり、G的でなくなる。あなたなら、どうする？
43
44
45
46

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3130 「直感」とか「直覚」とか
4 3133 論より証拠

5

6 Pの感知した「不思議」の一部は「或強烈な恋愛事件」だろう。だが、この「恋愛事件」
7 は、『こころ』が終わってもなお「不思議」のままだ。だから、Pの「直感」あるいは「直
8 覚」がどのように機能したことになるのか、私にはわからない。
9 ところで、「直覚」という言葉は、普段、見ない。

10

11 「直観」はドイツ哲学から一般化したとされ、「英独仏和哲学字彙」（一九一二）では、
12 英語 Intuition には「直覚」だけをあてているが、ドイツ語 Anschauung では、「直観」を
13 第一に挙げ、複合語ではすべて「直観」を用いている。

14

（『日本国語大辞典』「直観」）

15

16 〈直観〉と言えば、「例えばベルクソン」（『広辞苑』「直観主義」）だろう。

17

18 普通、ベルクソンの哲学は科学および知性を厳しく批判した哲学だとされる。しかしな
19 がら、そのような見方に真向うから反撃したのがベルクソン自身であった。じっさい、彼
20 の哲学は科学の検閲に服し、科学を前進させることのできる哲学であり、彼のいう知性は
21 科学的知性として直観とならんで実在意識をうることができる能力であった。そうして、
22 ベルクソンが空虚な認識だとして終始一貫反対したのは、言葉を認識の手段とする考え
23 方であった。したがって、ベルクソンの言語批判は直ちに科学批判・知性批判ではないの
24 である。より詳しく言えば、言葉による認識が果たして真の意味の知性のなすところかど
25 うかが問題なのである。そうなら、そこには当然、言葉と科学、言葉を用いる通常の知性
26 と科学的知性との区別が問題になるのでなければならない。

27

（池辺義教『ベルクソンの哲学』）

28

29 Pも、『こころ』の作者も、読者も、こんなややこしい議論を喜ばないはずだ。

30

31 これに反して、成員間の相違が比較的小さい日本は、言挙げ（フィクション）よりも互
32 いに共有する事実（ファクト）にもとづく一体感に頼ることが可能な文明でした。ここで
33 は「論より証拠」が決め手で、理屈や言説はおしる無駄なものとして排除される傾向が強
34 かったのです。しばしば耳にする「理屈としてはそうだが、でも事実は違う」といった表
35 現は、一般に外国では矛盾と受け止められてしまいます。このことはフランス語で“Vous
36 avez raison.”（理屈、道理はあなたにある）が、「あなたの言う通りだ、あなたは正しい」
37 となることと対照的です。

38

（鈴木孝夫『英語はいらない?!』）

39

40 「これ」は〈欧米や中国などの社会〉のこと。日本人だって、〈無理が通れば道理は引
41 込む〉と愚痴る。〈論より証拠〉は、言うまでもなく、逆説だ。〈証拠のない論〉は疑わしい
42 が、〈論のない証拠〉なんて無意味だ。

43

44

45

46

47

48

49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3140 窮屈な思想家
4 3141 「貧窮問答歌」
5

6 Sは、次のように自己紹介している。
7

8 私は貧弱な思想家ですけれども、自分の頭で纏め上げた考を無暗に人に隠しやませ
9 ん。隠す必要がないんだから。

10 (夏目漱石『こころ』上三十一)

11
12 「貧弱な思想家」は、自分の思想を、「無暗に」ではないが、「必要が」あれば、「人に隠
13 すものだ」という前提があるらしい。「頭で纏め上げた考」は意味不明。Sは、〈自分には「自
14 分の頭で纏め上げた考」がある〉という妄想を抱いていたのだろう。ただし、作者が〈Sの
15 「考」に中身はない〉という文芸的表現を試みている様子はない。「隠す必要がないんだか
16 ら」は唐突。このような弁明が、なぜ、必要なのだろう。作者は読者に対して、「僕の思想
17 が危険思想でもなんでもないと云うこと」(森鷗外『かのように』)を暗に訴えているつもり
18 だろう。その読者の典型は特別高等警察か。

19 見劣りがしてみすばらしいこと。必要を満たすに十分でないこと。また、そのさま。

20 *こ、ろ(1914)〈夏目漱石〉上「私は貧弱な思想家ですけれども」

21 (『日本国語大辞典』「貧弱」)

22
23
24 「必要を満たすに十分でない」のなら、「貧弱な思想家」は思想家失格だろう。

25 「思想家」の「家」は、「高尚な愛の理論家」(下三十四)などの「家」と同様、誇張による
26 自嘲の表現か。「貧弱な」という言葉を、Sの謙遜と解釈する人は多いのだろう。だが、
27 謙遜でなければ、どのような形容が適当だろう。私は〈窮屈〉を思いつく。「貧窮問答歌」
28 (『万葉集』892)の貧者は「吾をおきて 人はあらじと 誇ろへど」と歌う。一方、窮者は
29 「かくばかり すべなきものか 世間の道」と歌う。

30
31 叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづく感じたには相違あり
32 ませんが、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確な気がしていました。世間はどうか
33 ろうともこの己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。それがKのために
34 美事に破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふ
35 らしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。

36 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十二)

37
38 「この己は立派な人間だ」と誇るのなら、思想的貧者だろう。「動けなくなった」のなら、
39 思想的窮者だろう。窮者が貧者と自己紹介すれば、むしろ高慢だろう。謙遜ではない。Sは
40 「貧弱な思想家」というより、〈窮屈な思想家〉だろう。平たく言うと、意地っ張りだ。〈窮
41 屈〉は「意地を通せば窮屈だ」(N『草枕』)から取った。

42 「同じ人間」は〈「同じ」種類の「人間」〉の不当な略。どういう種類だろう。不明。
43
44
45
46

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3140 窮屈な思想家
4 3142 空っぽの「思想問題」
5

6 P文書の語り手Pは、Sの「思想」に関して、次のように語る。

7
8 私は思想上の問題に就いて、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。
9 (夏目漱石『こころ』「上 先生と遺書」三十一)

10
11 青年Pが抱えていた「思想上の問題」は不明。したがって、「利益」の内容も不明。「自白
12 する」は穏やかでない。(他人から思想上の「利益」を受けるのは罪だ)といった前提でも
13 あるのだろうか。ちなみに、Pの卒業論文は「教授の眼にはよく見えなかったらしい」(上
14 三十二)というから、学問上の「利益」は受けなかったようだ。あるいは、「見えなかった」
15 の真意は〈解らなかった〉かもしれない。だったら、いじましい。

16
17 貴方は現代の思想問題に就いて、よく私に議論を向けた事を記憶しているでしょう。私
18 のそれに対する態度もよく解っているでしょう。私はあなたの意見を軽蔑^{けいべつ}までしなかつ
19 たけれども、決して尊敬を払い得る程度にはなれなかった。あなたの考えには何等の背景
20 もなかったし、あなたは自分の過去を有^もつには余りに若過ぎたからです。

21 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二)

22
23 「現代」がいつから始まるのか、不明。「現代」のものに限らず、「思想問題」は、『こ
24 ろ』のどこにも見当たらない。だが、作者は「現代の思想問題」を暗示したつもりかもしれ
25 ない。「議論を向けた」は意味不明。読者は、「記憶して」いるつもりになるべきか。
26 「それ」が「現代の思想問題」なら、「態度」は意味不明。Sは、どうして、〈Pには「よく
27 解っている」〉と思うのだろう。

28 「あなたの意見」は、Sの「態度」と同様、どこにも見当たらない。さっきは「貴方」で、
29 今度は「あなた」だ。ちなみに、この混用は、P文書におけるSの発言にもみられる。たと
30 えば、「あなたは私に会っても」(上七)と「貴方は外の方を向いて」(上七)などの例がある。
31 Pが聞き分けたわけではなかろう。だから、作者の意図によるのだろう。その意図を、読者
32 は察すべきか。「なれなかった」は〈なるべきなのに「なれなかった」〉と〈なりたくなかつ
33 た〉の混交。つまり、義務と欲求の混交。ここだけ常体なのは、なぜか。

34 Pの「考え」は、私には見つけられない。「意見」と同じか。同じなら、なぜ、言葉を変
35 えたのか。「背景」は意味不明。「背景も」の「も」は不可解。「何等の背景もなかった」と
36 断定する根拠は不明。「なかつたし」は〈「なかつた」からだ「し」〉が適当。ここまでは、
37 前の文の理由を語るものだろう。また、「あなたは自分の過去を」以下は、「あなたの考えに
38 は何等の背景もなかった」ということの、その理由を語るはずだ。そうだとしたら、「なか
39 かつたし」と引っ張るのは不合理。一旦、切ろうよ。「自分の過去」は意味不明。「過去を有^もつ」
40 は意味不明。「余りに」ではなくて「若過ぎ」るのは何歳からか。単に〈若い〉のは何歳ま
41 でだろう。SがPと同じ年齢のときも「若過ぎた」のだろうか。そして、「過去を有^もつ」こ
42 ともなかったのか。何が何やら、さっぱりわからない。

43
44
45
46
47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3140 窮屈な思想家
4 3143 「世間に向って働らき掛ける資格のない男」

5
6 思想が「貧弱」になってしまう原因は何だろう。

7
8 われわれの祖先も、茶席においては、それが共通な話題として、また、文字通り、主人
9 自ら奔走し、親しく手をくだし、心を尽くして席をととのえ、食品を調理し、会食に当た
10 ってはそれらのものの由来などを話しあって、お互いの真実にふれて行く手がかりにし
11 た。そこには、いきとどいた会話のしかたがきめられていた。近代の日本人であるわれわ
12 れは、そういう伝統まで旧弊と一緒に忘れ去り、西洋の実際生活から抽象された様式だけ
13 を文化として学びとることに急であったために、われわれの話しあいが社会的なものとし
14 て発達せず、また、そういうばあいに使われることばがきわめて抽象的な概念として考
15 えられるようになってきたために、ことばの具体性が失われ、われわれの話しあいは貧弱
16 なものになり、会話はみすばらしい状態に陥っていることが観察され、反省される。

17 (西尾実『日本人のことば』「Ⅱ 談話」)

18
19 「それ」は、たとえば「猷立」(『日本人のことば』)だ。

20 『こころ』における会話が「貧弱なもの」であることに気づかない人は、日本の「伝統」
21 を知らないのだろう。また、「西洋の実際生活」を体験したこともないのだろう。体験する
22 機会があっても、有効に活用できないのだろう。英国に滞在中のNがそうだったようだ。

23
24 先生はまるで世間に名前を知られていない人であった。だから先生の学問や思想に就
25 ては、先生と密切の関係を有っている私より外に敬意を払うもののあるべき筈がなかつ
26 た。

27 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十一)

28
29 この二文の因果関係は転倒しているようだ。「世間」にとってSの「学問や思想」が「ま
30 るで」価値のないものだからSは無名だったはず。Sの「学問や思想」などの業績は皆無だ
31 ろう。著作がないだけでなく、演説や公開討論などもしない。

32
33 その時先生は沈んだ調子で、「どうしても私は世間に向って働らき掛ける資格のない男
34 だから仕方ありません」と云った。

35 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十一)

36
37 「その時」は無視。「どうしても」は宙に浮いている。「世間に向って働らき掛ける」は意
38 味不明。だから、「資格」は意味不明で、「資格」を与えたり奪ったりする機関や人格なども
39 想像できない。「仕方」についても同様。

40 Sから「資格」を剥奪したのは、「恐ろしい力」だ。ただし、語り手Sは、「資格」以前の
41 能力について反省をしていない。能力さえあれば、Dと戦いながら「世間に向って働らき掛
42 ける」ための「仕方」を見つけられたかもしれないのだ。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3150 いんちきな「思想家」
4 3151 『貧困の哲学』と『哲学の貧困』

5

6 「貧弱な思想家」というSの自己紹介に、Pは突っこまない。謙遜と解釈したからか。で
7 は、Sには謙遜する資格があったのか。

8

9 彼の著書の中でのプルドンのサン・シモンとフーリエとに対する関係は、ほぼフォイ
10 エルバッハがヘーゲルに対する関係に等しい。ヘーゲルに比べると、フォエルバッハは
11 極めて貧弱である。しかし、ヘーゲル以後に於ては、彼は一時期を画した。何故なら、彼
12 は、キリスト教的良心にとっては不愉快で哲学的批判の進歩にとっては重要な然しヘー
13 ゲルによつて神秘的な明暗の中に残された諸点をはっきりさせたからである。

14 (カール・マルクス『哲学の貧困』「附録 カール・マルクスの観たプルドン」)

15

16 「彼」はプルドンで、「著書」は『貧困の哲学』だ。「貧弱」でも、取り得はある。
17 Sは自分をプルドンやフォエルバッハ級の「思想家」と自負していたのだろうか。ある
18 いは、「思想家」という言葉そのものが冗談なのだろうか。

19 マルクスの考える「貧弱な思想家」の特性は、どのようなものか。

20

21 充たすべき欲望がかく多数あるということは、生産すべき物がかく多数あるというこ
22 とを仮定している——生産なくして生産物は存しないから。生産すべき物がかく多数あ
23 るということは、それらの物の生産を助けているのはもはやだた一人の人の手ではない
24 ことを仮定している。ところで、吾々が生産を助ける一人の人以上の手を仮定した瞬間か
25 ら、吾々は既に分業に基礎を置く全分業を仮定しているのである。かくて、プルドン君
26 の仮定しているような欲望は、それ自身全生産を仮定している。分業を仮定するなら、そ
27 こには交換が存在し、従つて又交換価値が存在する。それなら、初めから交換価値を仮定
28 したのと違いはない。

29 しかしプルドン君は廻り路をすることを好んでいる。いつもその出発点に戻るこ
30 になるその総ての廻り路を、同君にしたがって歩いて見よう。

31 (カール・マルクス『哲学の貧困』「第一章 科学上の一発見」)

32

33 「分業」が「商品生産とは結び付いていない」(『ニッポニカ』「分業」)という社会はある。
34 「貧弱な思想家」の特徴は「廻り路をすること」だろう。Sの「ぐるぐる」と同質か。た
35 だし、この「プルドン」に「廻り路」の自覚はない。Sに「ぐるぐる」の自覚はある。

36

37 いわゆる人民の代表と国家の支配者に対する全人民の普通選挙権——これが民主派と
38 同じようにマルクス主義者たちの最後の言葉である——なるものはいんちきであり、そ
39 の背後には少数者専制が隠され、虚偽の民意を体現しているだけにいっそう危険である。

40 (ミハイル・アレクサンドロヴィッチ・バクーニン『国家制度とアナキー』)

41

42 マルクス主義が「いんちき」であることは、アナキストにとって自明だった。

43

44

45

46

47

48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3150 いんちきな「思想家」
4 3152 『国家制度とアナキー』

5
6 バクーニンにとっての「貧弱な思想家」は「自由思想家」だろう。

7
8 これらの自由思想家諸先生は頭のとっぺんから爪先に至るまでブルジョアであり、実
9 証主義者を自称したり自ら唯物論者を気取るときでさえ、そのやり口、習慣、生活の面で
10 は手のつけられぬ形而上学者なのだ。彼らには、生活は思想から出てくるのであって、あ
11 らかじめ存在する思想の実現であるかのようにつねに見えるのだ。したがって思想、彼ら
12 の貧弱な思想が生活をも支配しなければならぬと信じており、だから彼らには、逆に思
13 想が生活から出てくるのであって、思想を変えるにはまず生活を変革しなければならない
14 ことが分からないのだ。人民にゆったりとした人間らしい生活を与えてみたまえ、諸君
15 は人民の思想の深い合理性に驚くであろう。

16 自由思想家を自称する熱心な教条主義者たちが、理論的、反宗教的宣伝を実際活動に先
17 行させているのには、いま一つ別の理由がある。彼らは大部分が見込みのない革命家であ
18 って、たんに虚栄心の強いエゴイストであり、臆病者にすぎないのだ。しかもその地位か
19 らすれば彼らは教養ある階級に属し、これら階級の生活に充満している逸楽、デリケート
20 な優雅さ、知的虚栄心をひどく大切にす。彼らは、人民革命がその本質においても目的
21 そのものにおいても、荒々しくぞんざいであり、彼らが快適に暮らしているブルジョア社
22 会の破壊をも辞さぬことを、百も承知しているのだ。しかも彼らは、革命の事業に誠心誠
23 意奉仕することで生ずる著しい不都合をまねくつもりが毛頭ないからこそ、またたいし
24 て自由主義的でも大胆でもないが、教養や生活上の関係、優雅さや物質的安楽の面でな
25 お貴重なパトロンであり、崇拜者であり、友人であり、同志である連中の不興を買いたく
26 ないからこそ、彼らは自分たちを高い地位から引きずりおろし、現在の地位から得ている
27 あらゆる便宜をいきなり奪ってしまうような革命をひたすら嫌悪し、恐れているのである。

28 ところで、彼らはこの点を認めたがらない。彼らはその急進主義でブルジョア社会を驚
29 かせ、革命的青年層やできれば人民そのものをしっかりと自分たちにひきつけておかね
30 ばならない。一体どうすればよいのか？ ブルジョア社会を驚倒させねばならないし、そ
31 うかといってそれを怒らせてはならないし、革命的青年層をひきつけると同時に革命に
32 よる破滅は避けねばならないのだ！ そのための手段はただ一つ、その見せかけの革命
33 的憤怒をことごとく主なる神へ向けることである。彼らは神の不在を確信しているので、
34 神の怒りも恐れぬ。官憲、すなわちツァーリから最下位の警官に至るすべての官憲とな
35 れば、話は別だ！ 銀行業者やユダヤの買占め商人から最下位の富農商人や地主に至る
36 までの、富裕にして社会的地位の強大な人間となれば話は別だ！ 彼らの怒りはてきめ
37 んである。

38 (ミハイル・アレクサンドロヴィッチ・バクーニン『国家制度とアナキー』「付録A」)

39
40 バクーニンこそ「貧弱な思想家」かもしれない。「彼の著述から独創的な考えを引き出す
41 ことはできない」(ウドコック『アナキズムI』)ということだから。

42 アナキズムは平凡な思想だろう。「独創的な考え」であってはならない。

43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3100 死に後れ
3 3150 いんちきな「思想家」
4 3153 自分の影

5
6 「思想家」について、Pは非常識なことを考えているはずだ。そして、その自覚がありながら、横車を押そうとして失敗し、おかしな言い方をしてしまったようだ。作者は語り手P
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18

Sは、普通の意味の「思想家」ではない。ただし、普通の意味での「思想家」がどのような人間なのか、必ずしも自明ではない。

〈普通の思想家の覚悟は生きた覚悟ではない。火に焼けて冷却し切った石造家屋の輪郭
だ。Pの眼に映ずる普通の思想家はたしかに思想家である。けれどもその思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事実が織り込まれていない。自分と切り離れた他人の事実でなくって、自分自身が痛切に味わった事実、血が熱くなったり脈が止まったりする程の事実が、
畳み込まれていない〉（1542「強い事実」）参照。

Pなら、このように語ったろうか。そうだとしても、意味不明だから、参考にならない。

ひどいものだね、あなたの覚りの悪さは。自分の影をこわがり自分の足跡をいやがって、
走って逃げ出した男がいたが、足を早く挙げれば挙げるほど足跡はますます多くなり、走り方を
どンドン早めても影は体から離れない、自分ではまだ走り方が遅いのだと思ってどこまでも疾走し、
力つきてとうとう死んでしまった。日蔭に入って影を消し、じっと立ちどまって足跡を作らずに
いることを知らなかったのだ。馬鹿かげんもひどいものだね。ところであなたは、仁とか義とか
いう道德の世界をこまかくつつきまわり、賛成できるかどうかの分かれめをはっきりさせ、
行動を起こすかどうかの変わりめを見きわめ、贈物やりとりする交際の度あいを適切にし、
好き嫌いの感情をうまくととのえ、喜びや怒りをやわらげて節度づけることに懸命だ。
これでは〔あの馬鹿な男と同じむだな骨折りで〕、まず危害は避けられないだろう。
〔人のことを気にするより、〕ひきしめて自分の身を修め、慎んで生まれつきの
真実なものを守り、世俗の物は人々に返してしまうなら、何物にも乱される
ことがなくなるだろう。いまわが身に道を修めることをしないで、他人にそれを
求めているのは、なんと外界にとらわれたことではなからうか。

（『莊子』「漁夫篇 第三十一」）

語っているのは「漁父」で、「あなた」は孔子、という設定。

「自分の影」は、Sの「黒い影」と同質。

Sは「あの馬鹿な男と同じむだな骨折り」をして、死にたくなっている。そんなSを、
Pは「馬鹿な男」と思わないのだろうか。「傷ましい先生」という言葉に「馬鹿な男」という
含意はあるのか、ないのか。あるはずだ。

Kは死に後れだった。だが、Sも死に後れのはずなのだ。「もっと早く死ぬべきだのに何
故今まで生きていたのだろうか」（下四十八）というKの自問は、Sのものでもあった。Kの
自殺とは無関係に、Sも「もっと早く死ぬべきだ」と思っていたはずだ。その理由を、Sは
捏造しながら生きていた。Sの捏造と作者の創造が混交している。

43
44
45
46

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3210 「一種の失望」
4 3211 「何処かで見た事のある顔の様」

5

6 青年Pは「淋しい人間」だったはずだ。しかし、その自覚がなかったのだろう。

7

8 その時私はぼかんとしながら先生の事を考えた。どうも何処かで見た事のある顔の様
9 に思われてならなかった。然しどうしても何時何処で会った人が想い出せずにした。
10 その時の私は屈託がないというより寧ろ無聊に苦しんでいた。それで翌日もまた先生に
11 会った時刻を見計らって、わざわざ掛茶屋まで出かけて見た。

12 (夏目漱石『こころ』「上 先生と遺書」二)

13

14 「その時」は、PがSを見かけたときだ。〈「ぼかんとしながら」～「考えた」〉は意味不
15 明。この「先生」は、Sであると同時に〈「先生」的人物〉でもあったろう。

16 「考えた」が「思われて」に下落している。

17 「思」の文字が「想」に変わっている。嫌らしい。

18 「何時何処で」より、〈どんな「人」か〉という問題を先に解くべきだろう。

19

20 私たちの実験によれば、過去のできごとを思いだすときに活性化する脳領域と、未来の
21 できごとを想像するときに活性化する脳領域はほぼ重なっていた。脳にとって、この二つ
22 の行為のあいだにはほぼ違いというものがないようだ。

23 (マイケル・コーバリス『意識と無意識のあいだ 「ぼんやり」したとき脳で起きていること』)

24

25 「屈託がない」は意味不明。

26

27 気にかかることが一つもないさまでさっぱりしている。

28 *霧の中の少女(1955)〈石坂洋次郎〉四「二人は小指を絡み合わせながら、屈託無く
29 笑い出した」

30

(『日本国語大辞典』「^{くったくない}屈託無」)

31

32 「無聊」は意味不明。

33

34 ① 心配事があって楽しくないこと。新花つみ「一の事なりとて、ひたすら避してうけざ
35 りけり」

36 ② つれづれなこと。たいくつ。「一を慰める」「一な日々」

37

(『広辞苑』「無聊」)

38

39 本文の「無聊」は①だろうか。「苦しんでいた」というから、〈Pは退屈している「という
40 よりも」気晴らしを必要としていた〉と解釈すべきだろうか。その場合、青年Pには何か「心
41 配事」があったように思われる。「心配事」を、語り手Pは隠蔽しているわけだ。また、〈「心
42 配事」を「先生」的人物が解消してくれる〉という物語をも隠蔽しているようだ。

43

44

45

46

47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3210 「一種の失望」
4 3212 「相手も私と同じ様な感じを持って」

5
6 〈PとSの邂逅の物語〉は不可解だ。

7
8 私は最後に先生に向って、何処かで先生を見たように思うけれども、どうしても思い出
9 せないと言った。若い私はその時暗に相手も私と同じ様な感じを持ってはいしまいかと
10 疑った。そして腹の中で先生の返事を予期してかかった。ところが先生はしばらく沈吟
11 したあとで、「どうも君の顔には見覚みおぼえがありませんね。人違ひとちがひじゃないですか」と言ったの
12 で私は変に一種の失望を感じた。

13 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」三)

14
15 「最後に」は、〈我慢しきれなくなつて、話の流れを無視して〉などが適當。ここまで、
16 Sは、Pにとってあまり興味のないような「色々の話」(上三)をしていた。

17 「若い」や「暗に」や「疑った」などは、過負荷だ。思わせぶりが過ぎる。

18 Pが「予期して」いたのは、〈私も「同じ様な感じを持って」いますよ〉だろう。だつたら、
19 〈先生も「同じ様な感じを持って」いらっしゃるのではありませんか〉と問えばよかる
20 う。そのように問わない理由は不明。

21 Sの答えは、Pに対する応答としては、ずれている。Pが「予期して」いたのと違うので
22 はなくて、普通の会話として成り立っていないのだ。

23 Pが「変に一種の失望を感じた」という理由は、Sの返事がPの発言に対して適切ではな
24 かったこと、および、「予期して」いた「返事」と異なること、この二つだ。ところが、こ
25 のことがPには整理できない。前者の場合、「変」なのはSだ。後者の場合、「変」なのはP
26 だ。「一種の」だから、Pの「失望」は普通の意味での〈失望〉ではない。「予期して」いた
27 「返事」が推定できなければ、「一種の失望」の意味を想像することはできない。

28
29 「このお嬢さんなら、ぼくお会いしたことがありますよ」

30 するとご隠居さまがお笑いになって、

31 「そらまたそんなでたらめを。会ったことがあるなんて、そんなわけがあるものかね」

32 宝玉も笑いながら、

33 「いいえ、それは会ったことはないでしょうけれど、なんだがぼく、お顔に見覚えがある
34 ような気がするんです。だからこれは昔の旧友で、今日こうして久しぶりに再会したとい
35 うことにしても、かまわないじゃないでしょうか？」

36 「そうかい、そうかい、それはよかった。そんなエ合だといっそう仲良しになれるだろう
37 ね」

38 (曹雪芹『紅樓夢』第三回)

39
40 Pが「予期して」いたのは、「ご隠居さま」のような対応だろう。彼女は眞実を知らない
41 が、「お嬢さん」の黛玉と宝玉は靈的な世界で「会ったこと」がある。ただし、二人ともそ
42 の記憶を失くしていた。

43
44 (付記)『紅樓夢』(北京衛視) 参照。

45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3210 「一種の失望」
4 3213 認知的不協和

5

6 語り手Pは、語られるPの〈自分の物語〉における自分とSの亡霊との会話を語りなおし
7 ている。この〈自分の物語〉は怪談だ。

8

9 P 私は、なぜ、先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつたのです。

10 Sの亡霊 それは私が死んだ今日になってみれば、もう解ってしましよう。私は、初めか
11 らあなたを愛していたのです。私があなたに示した時々の素っ気ない挨拶や冷淡に見え
12 る動作は、あなたを遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのです。

13 P 傷ましい先生！

14 Sの亡霊 私は、自分に近づこうとする人間に、〈近づく程の価値のないものだから止せ〉
15 という警告を与えていたのです。他人の懐かしみに応じない私は、他人を軽蔑する前に、
16 まず自分を軽蔑していたのです。

17

18 本文は、次のようになっている。

19

20 私は何故先生に対してだけこんな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くな
21 った今日になって、始めて解って来た。先生は始めから私を嫌っていたのではなかつたの
22 である。先生が私に示した時々の素っ気ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけよう
23 とする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づこうとする人間に、
24 近づく程の価値のないものだから止せという警告を与えたのである。他の懐かしみに応
25 じない先生は、他を軽蔑する前に、まず自分を軽蔑していたものと見える。

26

(夏目漱石『こころ』上四)

27

28 「こんな心持」を要約することは、私にはできない。

29 「始めから私を嫌っていたのではなかつた」には〈最後には私を嫌うようになった〉とい
30 う含意がある。だが、この含意は無視しなければならないらしい。つらいな。

31 「傷ましい」は、私には皮肉に思える。〈イタ過ぎる〉みたいな感じ。

32

33 こうした不協和を心理学では「認知的不協和」といって、アメリカの心理学者フェス
34 ィンガーが提唱した。これは、人が自分の考えなどと矛盾するものと出会った時に心のな
35 かで生じるストレス状態のことをいう。このモヤモヤとした精神状況を解決するために、
36 「自分は初めから嫌われてなどいなかったのだ」と思い込むようになる。この際、相手へ
37 の好感度も自然とUPする。

38

認知的不協和を巧みに利用すれば、相手の考えを誘導することができるのだ。

39

(斎藤勇『マンガ 悪用禁止！裏心理学』)

40

41 Sは、「認知的不協和を巧みに利用」していた。つまり、Sは人たらしだった。ただし、
42 たらせる相手は、自分に似た「淋しい人間」に限られていたろう。

43

44

45

46

47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3220 正体不明の「先生」
4 3221 Dの代役

5

6 「淋^{きび}しい人間」には、「相手も私と同じ様な感じを持ってはいはしまいか」と思いたがる傾
7 向があるようだ。〈相手も自分と同じように感じてほしい〉という期待が過度になり、妄
8 想的になるのだろう。

9

10 蠅は手の上にぴたりととまった。
11 その気になれば、手をのばして、蠅を追っばらうこともできる。
12 でも彼女は追わなかった。
13 彼女は追わずに、だれかが見ていければいいのにと思った。そうすれば、彼女がどんな人
14 間かを知ってくれるだろう。
15 なんだ、あの女は、蠅も殺せないんだ……と。

16

(ロバート・ブロック『サイコ』)

17

18 「彼女」の名はノーマという。彼女の空想する「だれか」との間答を上演してみよう。

19

20 だれか 蠅があなたの手にぴたりととまった。手をのばして、蠅を追っばらわないのか。
21 ノーマ その気になれば、手をのばして、蠅を追っばらうこともできる。でも、私は追わ
22 ない。追わずに私を、だれかが見ていてくれればいいのと思う。そうすれば、私が、ど
23 んな人間かを知ってくれるだろう。
24 だれか なんだ、あなたは、蠅も殺せないんだ。

25

26 お笑いになってしまった。
27 彼女の〈自分の物語〉は、次のように語られている。聞き手は「だれか」つまりDだ。
28 〈蠅は私の手にぴたりととまった。その気になれば、手をのばして、蠅を追っばらうこと
29 もできる。でも私は追わない〉。

30

31 ノーマは、〈私は、蠅も殺せないんだ〉と自己紹介したくない。他人に忖度してほしい。
32 〈私は、「あの女は、蠅も殺せないんだ」とだれかに思われたがる人間だ〉というふうに自
33 己紹介するのも、いやだ。では、〈私は「あの女は、蠅も殺せないんだ」と人から思われた
34 がる人間だと自己紹介することもできないんだ〉と自己紹介すべきだろうか。そんな自己紹
35 介はほとんど無意味だろう。ノーマは、どんな自己紹介もできない。

35

36 Sは自己紹介ができない。語り手Pは、Sに代わってSをQに紹介することができない。
37 作者は読者にSを紹介できない。

37

38 あなたは とうさんのイメージが いえ… 愛^{あい}の心^{こころ}がつくりあげたのです！

39

(永井豪&ダイナミックプロ『手天童子』)

40

41 PはSのDの最後の化身だろう。Sは「遺書」の聞き手の「イメージ」としてPを「つく
42 りあげた」のかもしれない。実在のPは「イメージ」の素材でしかなかったのかもしれない。

43

44

45

46

47

48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3220 正体不明の「先生」
4 3222 「先生の顔が浮いて出た」

5

6 PとSは「鎌倉」から別々に東京へ帰る。その理由は不明。二人は再会を約束したが、P
7 はSの自宅をすぐには訪ねなかった。

8

9 私は無論先生を訪ねる積りで東京へ^{ママ}帰って来た。帰ってから授業の始まるまでにはま
10 だ二週間の日数があるので、そのうちに一度行って置こうと思った。然し帰って二日三日
11 と経つうちに、鎌倉に居た時の気分が段々薄くなって^{ママ}来た。

12 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」四)

13

14 この夏、Pは帰省したのだろうか。帰省したとしても、かなり短い期間だったろう。

15 「気分が段々薄くなって」しまった理由を、語り手Pはぼかしている。

16 〈SはPの訪問を待ち望んでいない〉という物語と〈SはPの訪問を待ち望んでいながら、
17 そうではないように装っていた〉という物語が、同時に、しかし不十分に暗示されている。
18 この二つの物語は、同時に真実でありうる。つまり、〈Sの気持ちはぶれていた〉と考えら
19 れる。だが、青年Pはそうした可能性に思い至らず、前者を重んじた。一方、語り手Pは後
20 者を暗示している。そのことに作者は気づいていない。

21

22 私は何だか不足な顔をして往来を歩き始めた。物欲しそうに自分の^{へや}室の中を見廻した。
23 私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私は又先生に会いたくなった。

24 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」四)

25

26 「何だか」は変だ。「不足な」のは「先生」であるはずだ。ところが、青年Pには、その
27 ことが自覚できなかったようだ。この時期の青年Pの暮らしぶりを想像するのは困難。「往
28 来」で知人に出会わなかったのか。「友達」(上一)はどうした。下宿を訪ねたり訪ねられた
29 りする相手はいなかったのか。こうした疑問が山ほど、浮かぶ。

30 「物欲しそうに」の「物」は怪しい。新しい「友達」が欲しいのか。新しい「先生」が欲
31 しいのか。異性の恋人が欲しいのか。「^{へや}室」の外は「見廻した」のか。

32 Sと出会う前から、Pは何度もこうした体験をしていたのだろう。そして、そのたびに、
33 〈「先生」的人物〉の「顔が浮いて出た」のだろう。そうした事情を露呈するのが「再び」
34 という言葉だ。この前に、「先生の顔が浮いて出た」という話はない。本文は、二つの物語
35 を同時に、しかし不十分に暗示している。一つは、〈Sの生霊がPの「頭の中」に出現して
36 Pを誘った〉というもの。もう一つは、〈PはSの「顔」を思い出そうとしたら簡単に思い
37 出せた〉というもの。次の文に続くのは、前者の物語だ。

38 Pは、「又先生」的人物に「会いたくなった」のだ。Sその人に、ではない。

39 「鎌倉に居た時の気分が段々薄くなって」いたせいで、実在のSに対する遠慮などが消え
40 た。そして、かつての「先生」的人物のぼんやりとした「顔」が浮かんだのだろう。

41 「淋しい人間」は、複数の〈自分の物語〉を同時に、しかし不十分に語る。そのせいで混
42 乱し、苦痛から逃れたくて「死の道」(下五十五)を展望するわけだ。

43

44

45

46

47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3220 正体不明の「先生」
4 3223 「一人の西洋人を伴れて」

5

6 PがSに接近した理由を作者は徹底的に隠蔽している。Sを正体不明にしておくためだ。

7

8 特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかった。それ程浜辺が混雑
9 し、それ程私の頭が放漫であったにも拘わらず、私がすぐ先生を見付出したのは、先生が
10 一人の西洋人を伴れていたのである。

11 その西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純
12 粋の日本の浴衣を着ていた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出したまま、腕組をして
13 海の方を向いて立っていた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けていなかった。
14 それが私には第一不思議だった。私はその二日前に由比が浜まで行って、砂の上にしゃが
15 みながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めていた。私の尻を卸した所は少し小高い丘
16 の上で、そのすぐ傍がホテルの裏口になっていたので、私の凝としていた間に、大分多く
17 の男が塩を浴びに出て来たが、いずれも胴と腕と股は出していなかった。女は殊更肉を隠
18 し勝であった。大抵は頭に護謨製の頭巾を被って、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かして
19 いた。そういう有様を目撃したばかりの私の眼には、猿股一つで済まして皆なの前に立っ
20 ているこの西洋人が如何にも珍しく見えた。

21 彼はやがて自分の傍を顧みて、其所にごこんでいる日本人に、一言二言何か云った。そ
22 の日本人は砂の上に落ちた手拭を拾い上げているところであったが、それを取り上げる
23 や否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。その人が即ち先生であった。

(夏目漱石『こころ』「上 先生と私」二)

24

25 「特別の事情」は何だったのか。不明。私には埋め草のように思える。

26

27 当時の海水浴の様子が、フランスの画家で多数の風刺画を世に残したジョルジュ・ピゴ
28 ーの作品の中に見られる。そのひとつが一八八七(明治二十)年の熱海の海岸である(図
29 5-2)。腰巻ひとつで上半身は裸の女性が、特に恥じることなく男性と一緒に沐浴して
30 いる。子供は丸裸である。海中で見えないが、男性はふんどし姿が一般的だったようであ
31 る。ただ、手前でしゃがんでいる男性は何もつけていないように見える。

32 (中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか』「第5章 複雑化する裸体観」)

33

34 ところが、次第に日本人は裸体を恥じるようになる。

35

36 このように、ハイネが見た下田公衆浴場から四十年余りたって、日本人の裸体観は、古
37 風な価値観と新たなそれとがせめぎ合う様相を呈する。

38 (中野明『裸はいつから恥ずかしくなったか』「第5章 複雑化する裸体観」)

39

40 Pの「第一不思議」は「複雑化する裸体観」の表出だろう。『こころ』の読者はめまいを
41 覚えるはずだ。くらくらしているとき、「先生」が登場する。狡い書き方だ。

42

43

44

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3230 『運命論者』
4 3231 額縁であるべきP文書

5
6 Sが「鎌倉」へ一人で来た理由は不明。事故死を装った溺死を企んでいたか。そうだとす
7 ると、Sには危うげな雰囲気ママが漂い、目立っていたのかもしれない。そうした雰囲気つまり
8 「黒い影」に気付いた人は、気味悪がってSを避けたい。ところが、Pは惹かれた。その
9 理由は不明だ。「黒い影」に気づいて関心を抱いたのではない。Pが半裸の白人を珍しが
10 った理由さえ不明なのに、その同伴者であるだけのSがどうして興味の対象になるのだら
11 う。まったくわからない。かなり無理な話だ。

12
13 秋の中過なかばすぎ、冬近くなると何れの海浜いづを問はず、大方は淋れて来る、鎌倉も其通りで、自
14 分のやうに年中住んで居る者の外は、浜へ出て見ても、里の子、浦の子、地曳網の男、或
15 は浜づたいに往通ふ行商ママを見るばかり、都人士らしい者の姿を見るは稀なのである。
16 (国木田独歩『運命論者』一)

17
18 この場面とは反対に、P文書の「鎌倉」は夏で賑わっている。作者は、わざと『運命論者』
19 と反対の設定をしているらしい。

20 『運命論者』の最初の語り手である「自分」は、「都人士らしい者」との出会いを期待し
21 ていたようだ。すると、お約束のように、「運命論者」である高橋信造が登場し、「自分」は
22 彼の身の上話を聞くことになる。ありふれた展開だ。この身の上話が『運命論者』の本体に
23 なる。「自分」が語り手である部分は額縁のようになっている。身の上話を聞き終わると、
24 再び「自分」が語り手になり、そして、作品は終る。

25 常識的には額縁であるべきP文書が『こころ』の前半を占めていて、しかも、「遺書」が
26 終わっても、P文書は再開されない。おかしい構成だろう。

27 「自分」は挙動不審の男つまり信造を見かける。

28
29 妙な奴だと自分も見返して居ること暫し、彼は忽ち眼たちまを砂の上に転じて、一步一步、
30 静かに歩きたした。されども此窪地の外に出やうとは仕ないで、たゞ其処ママらをブラ／＼歩
31 いて居る、そして時々凄ママい眼で自分の方を見る、一たいの様子が尋常でないので、自分は
32 心持が悪くなり、場所をつちり積ママで其処を起ち、砂山の上まで来て、後うしろを顧ると、如何だ
33 らう怪あやしの男は早くも自分の座つて居た場処に身体を投げて居た！ そして自分を見送つ
34 て居る筈が、さうでなく立たてた膝の上に腕組つづぶをして突伏して顔を腕の間に埋めて居た。

35 余りの不思議さに自分は様子を見てやる気になつて、兎ある小蔭とに枯草ママを敷て這ひつ
36 くばい、書ほんを見ながら、折々頭を挙げて彼の男うかがを覗ママつて居た。

37 (国木田独歩『運命論者』一)

38
39 この「不思議さ」には何の不思議もない。Pの「不思議」とはまるで違う。

40 『こころ』と『運命論者』には、類似の話がいくつもある。ただし、弄られて変な話にな
41 っている。作者は、『運命論者』を利用しながらも、そのことを読者に気づかれまいと工夫
42 し、しくじり続ける。本文が意味不明なのは、そのせいだ。

43
44
45
46

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3230 『運命論者』
4 3232 「運命の恐ろしさ」

5
6 〈信造の物語〉は〈Sの物語〉の隠蔽された原典かもしれない。

7
8 父に背いて他の男に走った母の娘と知らずに結婚した男の苦悶を描く。

9 (『広辞苑』「運命論者」)

10
11 Sは養子であり、両親はそのことをSに対して秘密にしていた。しかし、叔父を含め、親
12 戚はSが養子であることを知っていた。Sも長ずるに従い、そのことを薄々察するようにな
13 る。「ぐるぐる」は、自分の出自に関する問題を解こうとして解けない状態、いや、解きた
14 くない状態を形容する言葉だろう。Sの母は死に際に「東京へ」(下三)と呟く。「東京」に
15 はSの実母がいるからだ。静の母はSの実母だった。ただし、静の母は、そのことを知らない。
16 ところが、なぜか、Sは知る。静は異父妹に当たる。

17
18 里子は兎も角も妹ですから、僕の結婚の不倫であることは言ふまでもないが、僕は妹と
19 して里子を考へることは如何しても出来ないのです。

20 人の心ほど不思議なものはありません。不倫といふ言葉は愛といふ事実には勝てない
21 のです。僕と里子の愛が却つて僕を苦しめると先程言ったのは此事です。

22 (国木田独歩『運命論者』六)

23
24 「僕」は信造。奇妙なことだが、〈信造の母＝里子の母〉という決定的な証拠はない。里
25 子と信造の「愛という事実」は描写されていない。作者は、それを表現できなくて、インセ
26 スト・タブーの物語へと逃げているみたいだ。つまり、作者は、「妹として里子を考へること」
27 しかできなくて、〈作者にとって表現困難な「愛という事実」〉を〈作中人物の「不倫と
28 いう言葉」〉によって表現したふりをしているように疑われる。

29 語り手Sは「運命の恐ろしさ」(下四十九)という言葉を用いているが、この「運命」の
30 物語は空っぽだ。作者は「運命」という言葉を『運命論者』から持ってきたのだろう。

31 『それから』の三千代は、代助の友人だった菅沼の妹だ。友人を〈もう一人の自分〉と見な
32 せば、代助はインセスト・タブーを犯したことになる。さらに言えば、二人の男は一人の少
33 女を媒介として精神的に合体する可能性があったことにもなる。少女を媒介とした男同士
34 のプラトニック・ラブが成立するわけだ。

35 Sは、Kと精神的に合体するために、〈静とKの恋愛〉を空想していたのだろう。当然な
36 がら、この空想が実現することを忌避してもいた。この矛盾を、Sは自覚できなかった。語
37 り手Sも自覚していない。作者さえ、自覚していない。だが、作者は、この奇妙な「運命の
38 恐ろしさ」を露呈してしまっている。

39 ちなみに、『女系図』(泉鏡花)は「小説としては構想が不自然に過ぎる」(『ブリタニカ』
40 「女系図」)とされる。話が複雑になった原因は、主人公の主税とその妹のような妙子との
41 恋愛感情を作者が隠蔽しているせいだろう。主税の恋人であるお蔭は、彼と妙子の母あるい
42 は姉のような存在だ。

43
44
45
46
47
48
49

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3230 『運命論者』
4 3233 みゆき現象

5
6 Sは、従妹と結婚する気になれなかった理由について、次のように語る。

7
8 あなたも御承知でしょう、^{きょうだい}兄妹の間に恋の成立した^{ためし}例のないのを。私はこの公認され
9 た事実を勝手に^{ふえん}布衍しているかも知れないが、始終接触して親しくなり過ぎた^{なんによ}男女の間
10 には、恋に必要な^{しげき}刺戟の起る清新な感じが^{ママ}失なわれてしまうように考えています。
11 (夏目漱石『ころ』「下 先生と遺書」六)

12
13 一つでも「例」が^{ためし}見つければ話はひっくり返ってしまう。

14
15 兄の木梨軽皇子（きなしのかるのみこ）皇子との兄妹相姦説話で知られる。
16 (『古語林 古典文学事典／名歌名句事典』「衣通王」^{そとりのみこ})

17
18 「公認された事実」には〈黙認された別の「事実」〉という含意がある。
19 Sは〈兄妹のように育った男女間の「恋」の物語はない〉とでも思っているのか。『井筒』
20 (世阿弥)を知らないのか。『たけくらべ』(樋口一葉)でもいい。
21 Nは『あわれ、彼女は娼婦』を知っていたはずだ。

22
23 特に主人公ジョバンニが懐妊させた実の妹アナベラを殺し、その心臓を剣に突刺して
24 登場する最後の場面は圧巻。
25 (『ブリタニカ国際大百科事典』「あわれ、彼女は娼婦」)

26
27 『ザ・ルーム』(ダオー監督)では、兄妹相姦による懐妊が聖母マリアの処女懐胎に擬せら
28 れる。こうしたトリックは、日本では不必要だろう。日本では、兄妹相姦は、愚行ではあつ
29 ても、悪行ではないからだ。

30
31 一人の女の子に“恋人、母、妹”の役割を求める当世の男の子の姿をよくとらえている。
32 (世相風俗観察会編『現代風俗史年表』1983年「みゆき現象」)

33
34 古代日本の近親相姦の罪としては、「己が母犯せる罪、己が子犯せる罪」(『ブリタニカ』「国
35 津罪」)しかなかったようだ。『運命論者』の主人公の苦悩は、日本の近代社会における性愛
36 文化の混乱によって生じたのだろう。罪と恥の混同かもしれない。

37 近代日本人の作家は、恋愛の「感じ」として兄妹相姦を思いつく。『運命論者』の作者は
38 西洋的禁忌を利用して自身の想像力の不足を隠蔽した。『ころ』の場合はもっと複雑だ。
39 兄妹相姦の物語は作品の深層でもSの妄想でもない。それは母子相姦を希釈したものだ。S
40 は、静の母を実母として想像し、静とではなく、その母との結婚を夢見た。こうした混乱を、
41 作者は必死になって隠蔽している。その結果、本文が意味不明になってしまった。

42 「恋は罪悪」の真意は「己が母犯せる罪」だろう。

43
44 (付記) 井田生『一地方における凄い性生活(見聞集)——近親姦の種々相を中心に』「一
45 ○ 近親姦序説——文学の中の表現」(日本生活心理学会〔編〕『生心リポート・セレクショ
46 ン④さまざまな耽美性愛の情動』所収) 参照。

47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3240 「その妻を一所に連れて行く勇氣」
4 3241 「代表者」

5
6 Sにとって静はどういう対象だったのか。多くの人はこういう疑問を抱かないらしい。

7
8 私は齒がゆい。「先生」は自分の苦惱から、あえて妻を遠ざけようとしている。それが
9 「先生」なりの愛なのだとしても、そんな臆病^{おくびょう}な愛はお断りだ！

10 男同士の恋情（にも似たなにものか）はねっちりと描写するわりに、美しい女性を描く
11 と途端に腰が引けて、「待って、あなたちょっと一人で空回ってるわ」としか言いようの
12 ない、珍妙な気遣いを發揮する。

13 （三浦しをん『百年経ってもそばにいる—夏目漱石のおもしろさ』）

14
15 「男同士の恋情（に似たなにものか）」はゲイの暗示だろう。だが、Sは、ゲイではない。

16
17 女の代表者として私の知っている御嬢さんを、物の数とも思っていないらしかったか
18 らです。

19 （夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十七）

20
21 「思つて」の主語はKだ。「女の代表者」の真意は〈乳母の代理人〉だろう。静の母が乳
22 母のばあやで、静が子守りのねえやだ。だが、Sにそうした自覚はない。作者にもない。

23
24 ローマカトリック教会と絶対王政を念頭に置きつつ「ポリスの一体性」＝政治的統一体
25 の秩序原理として考えられた Repräsentationこそが、フランス革命期憲法に「ひき移さ
26 れ」、一七九一年憲法第三篇二条の「フランス憲法（＝国制）は代表制である」という文
27 言となった、というシュミットの理解。その意味での Repräsentation に、どう訳語を与
28 えるか。戦前、宮沢俊義「国民代表の概念」（一九三四年）は、「代表なる表象」が「法律
29 的實在」を持たぬ「全くのイデオロギーにすぎぬ」ことをあばく地点に、自己の位置を定
30 めた。一方で、尾高朝雄、清宮四郎、黒田覚らの知的サークルで「体現」「象徴」という
31 語が議論されていた、という注目に値する最近の指摘がある（市川健治「象徴・代表・機
32 関」全国憲法研究会編『日本国憲法の継承と発展』）が、幸いなことに、この語に正面か
33 ら相対した大著が、われわれにはすでに与えられている。和仁陽の労作『教会・公法学・
34 国家—初期カール・シュミットの公法学』（一九九〇年）がそれである。和仁は、いくつ
35 かの了解を前提とした上で、「やむを得ず」と一步下る慎重さを示しながら、
36 Repräsentation に「再現前」の訳を与えた。この訳語によって、「代表」という語が同時
37 に歴史的意味連関を豊富に包蔵するものであることが、あぶり出されると言ってもよいだ
38 ろう。

39 （カール・シュミット『現代議会主義の精神的状況 他一篇』樋口陽一解説）

40
41 Sの「代表者」という言葉は、開化の漢語、あるいは江戸時代中期以降の蘭学の訳語に始
42 まる和製漢語の「やむを得ず」的、あるいは〈とりあえず〉的な曖昧さを悪用したものだ。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3240 「その妻を一所に連れて行く勇氣」
4 3242 『みれん』

5
6 「丸くてちっちゃくて三角だ」というCMがあった。〈円であると同時に三角形〉なんて
7 不合理だ。しかし、〈角丸の三角〉や〈3辺が弧の三角〉や〈正面から見たら三角で上から
8 見たら円〉という物はある。厳密に受け取ると不合理な文言でも、常識的に甘く考えると、
9 ありうる場合がある。いや、ありうるように考えるのが常識的だ。

10 〈S夫妻は「幸福な一対」だったのに静はSの自殺を止められなかった〉という話は変だ。
11 しかし、〈「幸福な一対」というのはPの買い被りだった〉と考えれば、静がSを助けられな
12 かったのも無理はないことになる。

13
14 私は今日こんにちに至るまで既に二三度運命の導いて行く最も楽な方向へ進もうとした事があ
15 ります。然し私は何時でも妻に心を惹かされました。そうしてその妻を一所に連れて行く
16 勇氣は無論ないのです。

17 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」五十五)

18
19 「勇氣」のある方が変だ。変なことを否定して普通になっている。無駄話だろう。
20 〈作者は乃木希典と静子夫人の心中を批判している〉と誤読する人がいる。

21
22 病人は両手で女の顔を挟んだ。昔可哀がった時にしたやうなし方である。「マリイ。約
23 束の事はどうしてくれるのだ。」

24 「約束とはなんでせう。」かう云つて、女は病人の手を放さうと思つた。
25 病人は平生の力を悉く恢復し得たやうに、しつかり女の頭を押へて放さない。「己と一し
26 よに死んでくれる約束ぢやないか」と、忙しい語調で云つて、女の顔の側ママへびつたり顔を
27 寄せた。病人の息が女の口ママに障る。

28 女は顔を引かうとしても引かれない。

29 病人は自分の詞を一句一句女の口に注ぎ込むやうに言ふのである。「己は一人で行くの
30 は厭だから、お前を連れて行くよ。己はこんなにお前を愛してゐるのだから、お前を手放
31 して置く事は出来ない。」

32 女は恐ろしさに麻痺したやうになつてゐる。その咽からは自分にも殆ど聞えない位な、
33 咳しはが噎れた叫び聲が出た。顛顛と頬とをしつかりと押へられてみて、頭を動かす事が出来な
34 い。

35 病人は頻りに口説き立てる。濕っぽい、熱い息が女の顔へ觸れる。「一しよだ。一しよだ。
36 お前の意志でさう極めたのぢやないか。一人ではこはくて死なれない。一しよに死んでく
37 れるかい。」

38 女は足で自分の椅子を押し退けた。そして鐵の箍を脱すやうに、自分の頭を病人の手か
39 ら引き放した。

40 (アルツウル・シュニツラー『みれん』五十四)

41
42 Sは、あるいは作者は、こうした展開になることを恐れたのに違いない。

43
44
45
46
47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3240 「その妻を一所に連れて行く勇氣」
4 3243 教訓の色眼鏡

5

6 『こころ』の主題を「イゴイストは不可^{いけな}いね」(中十五)などと思い込んでしまうと、多
7 くの本文の様々な不整合などを読み落としてしまう。

8 『浦島太郎』を例に、考えよう。乙姫は、なぜ、危険な玉手箱を太郎に持たせたのか。

9

10 異郷と現世との時間の単位の違いが玉手箱の中に込められていたような語り方である
11 が、本来は、靈魂を身体の外に置くことによって不死身を得るという外魂(がいこん)の
12 信仰を基盤にした話で、おそらく玉手箱は外魂の入れ物であろう。

13 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「玉手箱」)

14

15 この程度の説明では、乙姫の意図はわからない。

16

17 なかでも、古くから一貫して異郷訪問譚の形式をとるが、登場する乙姫と亀と浦島の関
18 係のあり方からみると、近世の恩義という観念で3者を結合させたことにより、古代にみ
19 られた異郷の女性と人界の男との神婚というモチーフが消えており、時代により話の変
20 容がうかがえる。

21 (『ブリタニカ国際大百科事典』「浦島伝説」)

22

23 「恩義」の着色によって、「神婚」に関する無知は隠蔽された。

24 ドイツの少年が『浦島太郎』を聞き終えて、「亀はどうなったの？」と質問したそうだ。
25 〈さすがはドイツ人。子どものときから理屈っぽい〉という話だが、はたしてそうか。

26 『御伽草子』では、結末が次のようになっている。

27

28 太郎は小船に乗り竜宮に行き、女房と結婚し3年を送るが、望郷の念にかられ暇を乞
29 う。女房は自分が助けられた亀だと明かし、けっして開けないようにと玉手箱を形
30 見に渡す。帰郷してみると700年がたっており、太郎は悲しみのあまり箱を開けると煙が
31 立ちのぼり、老翁の姿に変貌する。太郎は鶴となり蓬莱山で亀と再会、浦島明神となって
32 現れる。

33 (『山川 日本史小辞典』「浦島太郎」)

34

35 こうなると玉手箱を開けたのが正解みたいだ。

36 唱歌の『うらしまたろう』(石原和三郎)だと、〈若いときに頑張るとかないと老後は悲惨
37 だよ〉みたいな解釈ができる。この場合も、乙姫が〈玉手箱を開けるな〉と命じた理由は不
38 明。『昔ばなしの謎 あの世とこの世の神話学』(古川のり子)で浦島伝説に関する諸説が紹
39 介されているが、どれも私には納得できない。

40 同様に、『こころ』は不可解であるはずなのに、『うらしまたろう』のように教訓の色眼鏡
41 をかけてしまうと、何となく意味があるように勘違いしてしまう。

42 なぜ、Sは、一時的とはいえ、静と心中しようと考えたのか？

43

44

45

46

47

48

49

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3250 隠蔽体質
4 3251 パシリ・メロス

5
6 ある物語からどんな教訓を読み取ろうと、個人の自由だ。しかし、その前に、表面的な意
7 味ぐらいは万人と共有できていなければならない。

8
9 シキリアでは、暴君ディオニューシオスがこの上もなく残虐であり、市民たちを責め殺
10 したので、モエロスは暴君を殺そうとした。衛兵たちが武装している彼を捕らえ、王のも
11 とに連行した。彼は尋問されると、王を殺そうとしたと答えた。王は彼を磔^{はりつけ}にするよう
12 命じた。モエロスは姉妹の結婚のために三日の猶予を王に求め、自分が三日目に戻ってく
13 る保証人として、友人であり仲間であるセリーヌーンティオスを王に差し出した。

14 (ヒューギヌス『ギリシャ神話集』「257 勿頸^{ふんけい}の交わりを結んだ者たち」)

15
16 この話は不可解だ。次の二点が問題になる。

17
18 1 シキリアの慣習では、友人の命を危険に晒してまでも親族の結婚式に参列する義務
19 などがあったのか。あるいは、モエロスが変人だったのか。

20 2 モエロスは、どうして「自分が三日目に戻ってくる」ことを確信できたのか。事故や
21 天災や王の妨害などを考慮しなかったのは、なぜか。モエロスが幼稚だったからか。

22
23 モエロスが変人でも幼稚でもなかったのなら、〈モエロスは立身出世のために市民派を裏
24 切り、王は、モエロスごと、市民派を抱きこんだ〉というのが真相だろう。〈テロ未遂から
25 権力者との和解へ〉という出来事は茶番なのだ。モエロスは王のパシリだった。

26 『走れメロス』(太宰治)でも、〈パシリ・メロス〉の可能性が大だ。ところが、「信ずる
27 に足る人間像を提示した」(『日本国語大辞典』「走れメロス」)などと、意味不明の総括がなさ
28 れている。どんな「人間像」だろう。格好だけ反省してみせる人を喰った暴君像か。反省の
29 色を見せてくれさえしたら暴君の前非を水に流してやれる似非テロリスト像か。二人の茶
30 番劇を真に受ける愚昧な市民像か。そんな像を「提示した」からどうだってんだよ。

31 『にほんごであそぼう』(ETV)で、『走れメロス』を上演していた。驚くべきことに、
32 ラストで巨大な女神みたいなのが天空に現われ、町全体を覆う。演出家は『走れメロス』の
33 結末に対する不満を露呈しているわけだ。

34 『忠直卿行状記』(菊池寛)は「暴君と称された忠直の心理に新しい解釈を与えたもの」
35 (『ブリタニカ』「忠直卿行状記」)とされる。一方、『走れメロス』の暴君の告白は薄っぺら
36 で嘘っぽい。しかし、薄っぺらだからこそ俗受けするのだろう。映画の『忠直卿行状記』(森
37 一生監督)の結末は、『走れメロス』のそれと似ている。だから、愚作。

38 『走れメロス』は尻切れ蜻蛉なのだ。暴君は改心した後、善政を施したのか。人々は幸福
39 になったのか。こうしたことが希望的観測としてさえ話題になっていない。

40 〈人と人が信じ合うのはいいことだ〉といった薄っぺらな教訓を読み取って小説を理解
41 した気になってしまう人は、詐欺に遭いやすいタイプだろう。逆に、詐欺まがいの商売で飯
42 を食っている人かもしれない。たとえば、そうね、国語科教師とか。

43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3250 隠蔽体質
4 3252 「教育相当の良心」

5
6 桃太郎が鬼退治に出かけたが、卑怯で逃げ帰る。こんな話を誰が聞きたい？
7

8 その時の私はたといKを騙し打ちにしても構わない位に思っていたのです。然し私に
9 も教育相当の良心はありますから、もし誰か私の傍へ来て、御前は卑怯だと一言私語いて
10 くれるものがあつたら、私はその瞬間に、はっと我に立ち帰ったかも知れません。もしK
11 がその人であつたら、私は恐らく彼の前に赤面したでしょう。ただKは私を窘めるに
12 は余りに善良でした。余りに単純でした。余りに人格が善良だったので。目のくらんだ
13 私は其所に敬意を払う事を忘れて、却って其所に付け込んだのです。其所を利用して彼を
14 打ち倒そうとしたのです。

15 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」四十二)

16
17 要するに、Kがいけないわけね。

18 「その時」がKにとってどういう「時」なのか、不明。「たといKを騙し打ちにしても構
19 わない位に思っていた」のは、なぜか。「是非御嬢さんを専有したいという強烈な一念に動
20 かされて」(下三十二) いたから、というふうに誤読できる。だが、それとこれとは話が違
21 う。「是非」は唐突。〈静はSとKを天秤に掛けていた〉という話はない。だから、〈Kを排
22 除すればSは静と結婚できる〉ということにはならない。静がSと結婚したがっていたとし
23 ても、うまくいかない。Sは「誘き寄せられるのが厭」(下十六) だったのだ。青年Sは、
24 静の存在とは無関係に、Kを排除したかったのに違いない。この真相を、語り手Sは執拗に
25 隠蔽し続ける。作者はこの隠蔽工作に加担している。

26 「教育相当の良心」が怪しい。誰による「教育」だろう。Sの両親によるものとは考えに
27 くい。「誰か」は理性的な、あるいは道義的なDだ。「卑怯」は〈臆病〉という意味ではなく、
28 〈卑劣〉という意味だ。

29 Kが「善良」で「単純」だったという事実はない。SはKを買いかぶっていた。
30

31 烈火のような怒りと洪水のような情欲が沸き立ったときに、わが心にはそれとはっきり
32 り知っていて、また知っていながらつい犯してしまう。このとき、そのはっきりと知る者
33 は誰であるのか、また知っていながら犯してしまうものは誰であるのか。ここで忽然とし
34 て思い返すことができれば、その邪悪な魔性のものは退散して、忽ち良心が現われて来る。

35 (洪自誠『菜根譚』前集一一九)

36
37 「はっきりと知る者」がDだ。「知っていながら犯してしまう者」だけが自分ではない。
38 青年Sには、自身の内的葛藤を反省する能力がなかった。「忽然と思い返すこと」ができ
39 なかった。つまり、もう一人の自分と会話できなかった。そのことをSは過小評価する。だ
40 から、「邪悪な魔性のもの」が生き延びた。そして、それは「不可思議な恐ろしい力」(下五
41 十五) となってSを殺しに来た。ありきたりのしくじりだ。作者は何をしているのだろう。

42 Nは利いた風な言葉によって軽薄才子の男どもをけむに巻くが、女子供は騙されない。
43
44
45
46
47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3200 「近づく程の価値のないもの」
3 3250 隠蔽体質
4 3253 「トチメンポー」

5
6 Sは、「明治の精神」の内容を明示しない。「明治の精神」とは、本音を自他に対して隠蔽
7 する態度のことだろう。隠蔽体質。建前しか語りたくない。しかし、「気取るとか虚栄とか
8 いう意味」の態度を取り続けて自己満足ができるはずがない。いらいらは「継続中」になる。
9 建前の裏に潜む「傷ましい先生」の本音を付度されたがる。そのために何かを仄めかすふり
10 をする。だが、何をどんなふうにつ度されたいのか、自分でもわかっていない。わからなく
11 なっている。Sの本音がどんなものか、Pには知れていないはずだ。だが、作者は知っている
12 ように装う。そして、読者も同様に装う。そうした偽装も「明治の精神」の発露だ。

13
14 「それからボイにおいトチメンポーを二人前持って来いという、ボイがメンチポーで
15 すかと聞き直しましたが、先生は益^{ますます}真^ま面目^{まじめ}な貌^{かお}でメンチポーじゃないトチメンポーだと
16 訂正されました」「なある。そのトチメンポーという料理は一体あるんですか」「さあ私も
17 少し可笑しいとは思いましたが如何にも先生が沈着であるし、その上あの通りの西洋通
18 でいらっしゃるし、ことにその時は洋行なすったものと信じ切っていたものですから、私
19 も口を添えてトチメンポーだトチメンポーだとボイに教えてやりました」
20 (夏目漱石『吾輩は猫である』二)

21
22 話者は東風^{とうふう}、聞いているのは苦沙弥。「先生」は迷亭。
23 「トチメンポー」は俳人の名の「椽面坊^{とちめんぼう}を種に使ったところが面白かろう」(『吾輩は猫
24 である』二) というのだが、面白いのか？

25
26 「(「とちめく坊」の意とも、枳麩を造るには、早くしなければよく延びないので、急い
27 で棒を使うことからともいう) あわてること。うろたえること。またあわてももの。
28 (『広辞苑』「枳麩棒」)

29
30 迷亭にとって、「トチメンポー」は謎のつもりだろう。だが、実際には駄洒落でしかない。
31 作者はそのことに気づいていないらしい。
32 迷亭は、『おそ松くん』のイヤミ同様、「洋行」をしていない。だから、「洋行」帰りのハ
33 イカラに対する嫉妬に苛まれ、「ボイ」を相手に憂さ晴らしをしているようだ。そんな彼を、
34 作者は冷笑しているのかもしれない。よくわからない。

35 迷亭は、言うまでもなく、「トチメンポー」＝「メンチポー」＋「椽面坊^{とちめんぼう}」と考えてい
36 る。一方、「ボイ」は「トチメンポー」＝「あわてももの」などと仮定しているのだろう。や
37 がて、彼は「料理番」(『吾輩は猫である』二) か誰かに「椽面坊^{とちめんぼう}」という名を教わって、〈客
38 の悪ふざけだ〉と確信するらしい。こんな話のどこが面白いのか。この後、「トチメンポー」
39 という言葉が何度も繰り返される。悪ふざけとしか思えない。

40 Sは「殉死」について悪ふざけをしている。〈「殉死」＝贖罪＋孤独死〉といったことを考
41 えているおだろうか。一方、Pが何と解釈しているのか、私にはまったくわからない。
42 「椽面坊^{とちめんぼう}」に類する媒介のための「殉死」の「新しい意義」は本当にあるのか。

43
44

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3310 逆説的勸善懲悪主義
4 3311 『文芸と道徳』

5
6 イソップの『北風と太陽』から教訓を抽出するのは容易だ。太陽政策が有効。〈北風は旅
7 人を凍え死にさせてから着物を奪った〉という異本も可能だろう。この場合、〈先に太陽が
8 旅人を暖かく照らしたが、旅人は着物を脱がなかった〉という話がなければならない。この
9 話には無理がある。この寓話が有名なのは、「説得は暴力に勝る、という教訓」（『ニッポニ
10 カ』「北風と太陽」）が優れているせいではない。話としてわかりやすいからだ。

11 『猿蟹合戦』に、〈蟹は親の仇の猿を許す〉という異本があるらしい。本来の昔話の後半
12 の主題は孝行だろう。異本の場合、博愛だろう。〈どちらの主題が道徳的に立派か〉という
13 ことを問題にしたら、本末転倒だ。〈どちらの物語が合理的か〉という問題を先に解かなけ
14 ればならない。そして、合理的な方の物語の教訓を尊ぶ。さもないと、話がいたずらに難し
15 くなる。たとえば孝行が儒教的徳目で博愛が仏教的徳目だとすると、〈儒教と仏教のどちら
16 が偉いか〉という問題になってしまう。

17 『こころ』の場合も同様だ。〈親友と争う〉という物語はないから、〈親友と争うのは悪い〉
18 という教訓も抽出できない。〈Sと静とKの三角関係〉という物語はないのだ。この物語は、
19 語られるSの危惧の表出でしかない。

20
21 もし活社会の要する道徳に反対した文芸が存在するならば……存在するならばではな
22 い、そんなものは死文芸としてよりほかに存在はできないものである、枯れてしまわなけ
23 ればならないのである。人工的にいくら声をからして天下に呼号してもほとんど無益か
24 と考えます。社会が文芸を生むか、または文芸に生まれるかどっちかはしばらくお措いて、
25 いやしくも社会の道徳と切っても切れない縁で結びつけられている以上、倫理面に活動
26 するていの文芸はけっして吾人内心の欲する道徳と乖離かいりして栄える訳がない。

27 (夏目漱石『文芸と道徳』)

28
29 「活社会」は意味不明。「死文芸」は意味不明。〈「死文芸」として「存在」する〉も意味
30 不明。だから、「存在できないもの」は無意味。Nは混乱している。

31 「枯れてしまわなければ」というのだから、実際には「枯れて」いないのだろう。

32 「人工的に」は意味不明。「呼号しても」は、形式的には〈「死文芸」を「呼号しても」〉
33 の略のようだが、常識的には〈「道徳」を「呼号しても」〉だろう。「ほとんど」は笑える。
34 少しは利益があるみたい。だったら、確信犯は諦めまい。

35 「文芸に生まれる」は意味不明。因果関係が不明の「縁」を、どうやって尊重しよう。「倫
36 理面に活動するてい」は意味不明。「活社会」の住人である「吾人」が内心では異端者であ
37 る可能性はないのか。「栄える」必要はなく、発禁にならないだけで十分だろう。

38 Nの「欲する道徳」は、大多数の人々の「欲する道徳」とは違っていた。だからこそ、彼は
39 虚構を利用したはずなのだ。

40 文芸と道徳にどのような関係があろうと、道徳には確かな意味がなければならない。〈ナ
41 ンセンス文芸〉はある。だが、〈ナンセンス道徳〉は「存在できないもの」だ。意味不明の
42 文芸作品に道徳を「結び付けられて」は困る。どんな道徳であれ、非常に困る。

43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3300 明示しない精神
- 3 3310 逆説的勸善懲悪主義
- 4 3312 『坊っちゃん』

5
6 『坊っちゃん』は、ひどく誤読されてきた。

7
8 田舎の中学に赴任した江戸っ子教師の若い正義感が因襲と衝突するさまを描く。
9 (『広辞苑』「坊っちゃん」)

10
11 「田舎」は間違い。地方都市だ。「正義感」は〈正義漢〉の誤記か。「因習」は誤読。「正
12 義派の江戸っ子教師の痛快な活躍ぶり」(『マイペディア』「坊っちゃん」)なども誤読。語り
13 手の「五分刈り」の口調に騙されているようだ。「歯切れのよい文体と、わかりやすい筋立
14 て」(『ブリタニカ』「坊っちゃん」)なんてのも伝説。「筋立て」など、ない。

15
16 些細な事柄についてのこのような神経の過敏さ、このような傷つきやすさは、アメリカ
17 では、不良青年の記録や、神経病患者の病歴簿の中で見受けられるだけである。ところが
18 日本では、これが美德とされている。
19 (ルース・ベネディクト『菊と刀—日本文化の型—』「第五章 過去と世間に負目を負う者」)

20
21 これは「五分刈り」に対する評価だが、まったく正当なものだ。「五分刈り」自身も、「お
22 れは到底人に好かれる性でない」(『坊っちゃん』一)と認めている。「五分刈り」は嫌われ
23 者なので、変人の清にすがるしかなかった。東京を出て、そのことを思い知るわけだ。

24
25 人生観と云ったとて、そんなおぼろしいものじゃない。手近な話が、『坊っちゃん』の
26 中の坊ちゃんといふ人物は或点^{ある}までは愛すべく、同情を表すべき価値のある人物である
27 が、単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今^{よう}の複雑な社会には円満に生存しにくい人だな
28 と読者が感じて合点しさえすれば、それで作者の人生観が読者に徹したと云うてよいの
29 です。

30 (夏目漱石『文学談』)

31
32 Nは、彼の聞き手に「合点し」てもらいたくて、「生存しにくい人だな」で切っている。
33 正しくは、〈「坊ちゃんといふ人物は」「単純過ぎて経験が乏し過ぎて現今の様な複雑な社会
34 には円満に生存しにくい人」「であるが、」「或点までは愛すべく、同情を表すべき価値のある
35 人物」「だな〉でなければならない。「それ」の指すものはない。

36
37 然^{しか}もその人生観が間違^{もつ}って居らぬと作者の見識で判断し得たとき、作者は幾分でも文
38 学を以て世道人心に裨益^{せどうじんしん ひえき}したのである。勸善懲悪主義を文学上に発揮し得たのである。
39 (夏目漱石『文学談』)

40
41 N的「勸善懲悪主義」とは、〈「社会」で「悪」とされる言動も見方を変えれば「善」にな
42 るという「主義」〉のことで、逆説だ。〈勸偽悪・懲偽善〉か。

43
44
45
46
47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3310 逆説的勸善懲悪主義
4 3313 ゲゼルシャフトとゲマインシャフト

5

6 平成にドラマ化された『坊っちゃん』(フジテレビ)では、「天に代って誅戮^{ちゅうりく}を加える夜遊
7 び」(『坊っちゃん』十一)が完全にカットされていた。他にも作り替えは多々あった。

8

9 さて小説『坊っちゃん』の世界は、この狸校長に胡麻をすって自己の立身出世をはかる、
10 赤シャツやノダが、利益社会の主要なメンバーである。これに対して人格社会には、坊っ
11 ちゃんと山嵐がある。この二人には利害の打算はない。開放された自由な心魂の交流があ
12 るばかりだ。

13 (宮井一郎『『猫』の周辺』)

14

15 「利益社会」は〈ゲゼルシャフト〉の訳語だろう。「誅戮^{ちゅうりく}」は、ここでの仕事だ。

16

17 成員が各自の利益的関心に基づいてその人格の一部分をもって結合する社会。成員間
18 の関係は表面的には親密に見えても、本質的には疎遠である。大都市・会社・国家など。
19 (『広辞苑』「ゲゼルシャフト」)

20

21 「人格社会」は〈ゲマインシャフト〉の訳語だろう。「夜遊び」は、ここでの仕事だ。

22

23 共同社会とも訳す。成員が互いに感情的に融合し、全人格をもって結合する社会。血縁
24 に基づく家族、地域に基づく村落、友愛に基づく都市など。

25 (『広辞苑』「ゲマインシャフト」)

26

27 「五分刈り」と「山嵐」の「友愛」は継続したか。不明。

28

29 注意すべきは表面的には、そして常識からすれば、校長に善があり、坊っちゃんに悪が
30 あるにもかかわらず読者は、その内面の真実を読み透して校長を悪玉、坊っちゃんを善玉
31 と、全く逆な認識をして、しかもそのことにすこしも疑問をもたないことである。つまり
32 読者もいつの間にか作者と共に、利益社会に対峙する人格社会をその魂に溶融している
33 からである。この微妙な倫理感^{ママ}の転換に、やくざの任侠に喝采する活劇などとは、全く異
34 質の近代小説の作用があるのだ。

35

(宮井一郎『『猫』の周辺』)

36

37 「読み透して」は意味不明。「認識」は〈判断〉が適切か。『坊っちゃん』では、〈誅戮^{ちゅうりく}
38 の物語〉も〈夜遊び〉の物語〉も終わっていない。だから、「五分刈り」はどちらの社会に
39 も属していない。「そのことにすこしも疑問をもたない」のは読み落としなのだ。

40

41 「その魂に溶融して」は〈利益社会〉と〈人格社会〉に二股をかけて〉が適切。「微妙な」
42 は〈奇妙な〉が適切。「倫理感」は意味不明。「弱きをたすけ強きをくじく気性」(『広辞苑』
43 「任侠」)ですらないのなら、正気のサタデー・ナイト・フィーバーだ。

43

44

45

46

47

48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3320 スタイル
4 3321 「奇々怪々の妖魔文章」

5

6 Nの小説は総じて意味不明なのだが、それらに関する論評なども意味不明だ。なぜ、こんなことになっているのだろう。なぜ、出版社はこうした不可解なものを平然と世に送り出してきているのだろう。

9 「明治の精神」のせいだ。

10 「明治の精神」を〈明治天皇の精神〉と誤読する人がいる。しかし、「明治の精神」が漠然と暗示している気分か何かは、明治天皇の生誕や即位、「崩御」などと、直接の関係はない。あるとしても検証不能だろう。

13 「明治の精神」の意味は推測するしかない。私の大雑把な印象では、「明治の精神」はあらゆる種の思想や信念ではない。スタイルだ。文体。態度。構え。規範。癖。

15

16 福地が標的とするのは、なんと大日本帝国憲法の告文と憲法発布の勅語の文体である。たとえば、後者の勅語の舞踏はこんな具合である。「朕国家ノ隆昌ト臣民ノ慶福トヲ以テ中心ノ欣栄トシ朕カ祖宗に承クルノ大権に依り現在及将来ノ臣民ニ対シ此ノ不磨ノ大典ヲ宣布ス」。

20 このような布告や勅語を拝読して正しく解釈できる者は、「此四千余万の日本臣民中」に何人いるだろうか、と福地は問いかける。おそらく大学を卒業した秀才でも理解できないはずだ。というのは、このような文は「支那古文中にても尤も典雅を以て称せられたる尚書の文体」に則っているからだ。けれども、専門の漢学者であっても、これらの文を正確に解釈することはできないはずだ。なぜなら、「其文字言語の特別なる新意義は彼輩（漢学者）が更に知り得ざる所たればなり。現に帝国憲法七章七十六条中に掲げられたる文字には自から特別の意義を表し其秘密術語を知るに非ざれば得て通曉し難き所あればなり」。こうした漢文体の文章は、形式的には古典漢文にもとづいているかもしれないが、意味内容の面ではそうではない。その文体は、「特別の意義」がこめられた「秘密術語」によって組み立てられているため、特定の者にしか理解することのできない、いやもしかしたら誰にも理解することのできない独特の文章になっているからである。福地は痛烈にもこのような文章を「奇々怪々の妖魔文章」となづける。

32

(イ・ヨンスク『「放縦文法」から「妖魔文章」へ』)

33

34 翻訳不能の「妖魔文章」は〈霞が関文学〉を含む現代日本文学および論文の源流か。

35 Sから「明治の精神」という、痛切なようでも意味不明の造語めいた言葉を聞かされ、静は「殉死」という前近代的な言葉を返してきた。負けそうになったSは、二つの言葉を繋ぎ合わせ、「明治の精神に殉死する」という文を急造する。ただし、さらに意味不明になった。だから、「殉死」に「新しい意義」があるみたいに自己欺瞞する。その「意義」が静に理解できたかどうか、不明。Pに理解できたのかも、不明。だが、そんなことは、Sにとって、いや、作者にとって、どうでもいいのだろう。

41 「明治の精神に殉死する」という言葉は「奇々怪々の妖魔文章」であると同時に、「明治の精神」の発露でもある。『こころ』は「妖魔文章」だ。Nの他の小説も同様。

43

44

45

46

47

48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3300 明示しない精神
- 3 3320 スタイル
- 4 3322 「よいどれ語」

5
6 〈意味〉について、基礎から確認しなければならないらしい。

7
8 ところで、言語活動の中に結晶してひそんでいる本質主義的な偏見のとりことなっ
9 ているのは、とりわけ価値に関する語彙である。「おくびょう者」、「不潔なブルジョワ」、「ア
10 ラビア野郎」、「コミュニスト」などと言うことは、いいかえれば自分がぶつかったテーブ
11 ルを、それが憎いからといってなぐるようなものだ。

12 ここでもわれわれは、個人的で移ろいやすい主観的判断をもって絶対的な特徴とみな
13 している。特に道徳的価値に関する言語活動は、もはや現実の構造に対応していないし、
14 われわれの経験と無関係に、責任とか刑罰とかの概念を含んでいる。

15 このような語は絶えず再定義されなければならないのだが、そのことは語が抽象的に
16 なるにつれてますます困難になる。われわれの「fusil〔銃〕」が祖父の時代の fusil〔火
17 打石〕ではないということはいつでも検証できる。だが、「paresse〔怠惰〕」とは何か？
18 自分の課題を果たさないことか、水を汲まないことか、材木を切らないことなのか？
19 「自由」とか「民主主義」というたぐいの抽象語になるとさらに、定義のための検証され
20 うる具体的な実体から遠ざかる。そしてそれらの語の価値が進化するばかりか、それらの
21 指示内容についてさえだれも一致しないことになる。まことに、錨索を切り、冒険に向っ
22 て漂流しはじめるとよいどれ語なのだ。

23 (ピエール・ギロー『意味論—ことばの意味—』「第6章 さまざまの意味論」)

24
25 平成生まれは〈差別的表現は、昭和なら許されたけど、令和では駄目なんだよね〉なんて
26 嘯く。大間違い。昭和にも禁句はあった。言葉狩りもあった。

27
28 本質主義とは、男性や女性の中に、ある生物学的・心理的な〈本質〉を認め、さらにそ
29 れを時代が変わっても変化することのない、普遍的で絶対的なものだとする考え方のこ
30 と。逆に構成主義とは、人は社会の中でさまざまな要素から〈構成〉されるものであって、
31 絶対的かつ普遍的な本質などないのだとする考え方。

32 (『百科事典マイペディア』「本質主義・構成主義」)

33
34 この意味での「構成主義」は〈構築主義〉とも訳されるそうだ。

35
36 たとえば、多くの人々は「地球は丸い」ということを体験的に確認しているわけではな
37 く、物理的計算や史実に基づいて共有された社会的な現実として認識している。このよう
38 に、客観的かつ物理的な現実として存在すると考えられている「丸い地球」も、人々が共
39 有する「地球は丸いものだ」という認識によって構築された現実として理解される。

40 (『日本大百科事典(ニッポニカ)』「構築主義」田中智仁)

41
42 本質主義であれ、構築主義であれ、私としては「通じさえすれば満足」なのだが。

43
44
45
46
47
48
49

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3320 スタイル
4 3323 スキゾフレニア
5

6 「不可思議な恐ろしい力」(下五十五)と「この不可思議な私というもの」(下五十六)の
7 関係は、私にはわからない。「遺書」が、いや、『こころ』そのものが、私にとって「不可思
8 議な」ものだからだ。「不可思議」という言葉こそが意味不明だ。

9
10 実際、前世紀の後半から徐々に胎動をはじめて今世紀初頭に顕現する文化や芸術のさ
11 まざまな流れはそれ自体、スキゾフレニアの文化的成就と言っても過言ではないほどで、
12 ヤスパースはすでに一九二二年に「一八世紀以前の精神にとってヒステリーが自然的な
13 適合性をもったように、精神分裂病は現代になんらかの適合性があると想像できるかも
14 しれない」(前掲書)と、スキゾフレニアと現代文化との親和性を控え目ながら指摘して
15 いるし、同じドイツのウィングラーは一九四九年に、自然主義にのっとなってきたそれまで
16 の「循環気質性芸術」にたいして、反自然、非現実を標榜する現代芸術をはっきり「分裂
17 気質性芸術」と名づけているほどである(『現代芸術の心理』)。

18 (宮本忠雄『言語と妄想 危機意識の病理』「現代文化の精神病理」)

19
20 「前世紀」は一九世紀。「今世紀」は二十世紀。

21 『こころ』は、「スキゾフレニアの文化的成就」として高い評価を得ているのではなかろ
22 う。しかし、建前と本音は違って、逆の可能性もある。日本人は「スキゾフレニア」を
23 〈英知〉などを混同してしまいがちなのかもしれない。

24
25 これまでの検討で示されたように、日本語という私たちのことばは、危機状況に際して、
26 表音性と表意性の二方向に乖離する傾向のあるらしいことがわかるのだが、しかし、考え
27 てみると、もともと、表音文字と表意文字の両系列からなる日本語では、表音性と表意性
28 がこれまでもけっして安定した均衡をたもっていたわけではなく、むしろ、長い歴史のな
29 かで絶えず動揺にさらされていたと見るのが真実に即している。むしろ、これは戦後の国
30 語審議会のレベルの話などではない。この辺の消息は私のようなことばの非専門家のよ
31 く解説できるところではないにしても、大ざっぱにみて、たとえば、日本の上代に中国文
32 化の渡来とともに入ってきた漢字がその表意性によってやまとことばの表音性を浸食し
33 たのは事実だろうし、また、くだって明治期に、こんどは西欧の言語や思考が導入されて、
34 それまで数百年にわたる安定をたもっていたことばの記号体系が激変をこうむった経緯
35 もまちがいなく指摘できるだろう。日本語にとって、こんにちの言語状況は、いってみれば
36 歴史上第三の危機であって、表音性は表意性にたいしてふたたび優位に立とうとして
37 いるのが実情のようにみえる。

38 このように、日本語はその成立の宿命からして表音性と表意性が遊離しやすい傾向を
39 潜在的にそなえているわけだが、これは精神病理の領域でいよいよ鮮明に顕在化する。

40 (宮本忠雄『言語と妄想 危機意識の病理』「日本語と言語危機」)

41
42 日本文学の「領域で」はスキゾ的傾向が「顕在化し」にくいのだ。
43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3330 受動 - 攻撃性格
4 3331 「いや考えたんじゃない」

5

6 意味不明の表現による命令や規制などに対して、賛成するのも反対するのも難しい。賛成
7 した場合、どんな責任を負わされるか、予測できない。反対する場合、明確な反対の仕方が
8 わからない。こんなとき、人は受動攻撃的になるしかなかろう。

9

10 わずかなことで自分が無視され、自尊心が傷つけられたと感ずる。気むずかしく、ふく
11 れづらをよくする。他人から声をかけられることを望んでいるが、自分が相手にどんな態
12 度を示しているかに気づかない。一般に母親に対して両面感情を示し、母親が子どもに対
13 して一貫した態度をもっていないときに見られる。

14 (『心理学辞典』「受動 - 攻撃性格」)

15

16 「明治の精神」は、意味不明の表現を勿体ぶって発信する文化のことだ。また、そうした
17 表現に対して同様の意味不明の受動 - 攻撃的表現で応じる文化でもある。悪循環。

18

19 「いや考えたんじゃない。遣ったんです。遣った後で驚ろいたんです。そうして非常に怖
20 くなったんです」

21

(夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十四)

22

23 〈考えずにやった〉ということが重点。考える力がひどく不足している。

24

何を「遣った」ことになるのか、不明。

25

「驚ろいたんです」は、わかりにくい。

26

「非常に怖くなった」は、もっとわかりにくい。

27

28 SはKに対して悪いことをしたくてしたのではない。動機において無罪。Sは静に関する
29 ことで被害妄想的になっていた。だから、過剰防衛的に振る舞って、結果的にKを苦しめる
30 ことになった。中年になってもSは自分の動機を反省できないでいる。作者も、自分が何を
31 表現したことになるのか、わかっていないはずだ。だったら、読者にもわからない。

31

しかし、推測できることはある。真の動機をSは隠蔽しているはずだ。

32

33 Sは少年時代からKに苛められていた。だから、青年になってSはKを苛め返した。よく
34 ある話だ。普通の知識がある人なら、〈KはSを家来のように扱っていて、Sは自尊心を保
35 つために友達ごっこを続けていたが、ついに堪忍袋の緒が切れた〉という物語を思い浮かべ
36 るはずだ。ただし、作者がこのように表現しているわけではない。だが、常識的観点に立て
37 ば、Kに対するSの「復讐以上に残酷な意味」(下四十一)は、語り手Sや作者が暗示して
38 いることよりも深刻な「意味」があると推測できる。〈怨恨〉などのはずだ。

38

39 多くの日本人はこうした常識的な観点に立つことができない。日本の社会では文豪伝説
40 が支配的だからだ。売れてらセブンのような有名な作家の文章の意味を、思想の内容などで
41 はなく、普通の意味を問題にすることが禁じられているように思えるからだ。思わされてい
42 るからだ。文豪伝説が支配的なのは、悪文を悪文として感知する能力が育っていないからだ。
43 誰が育てなかったのか？ 国語科教師に決まっている。

43

44

45

46

47

48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3300 明示しない精神
- 3 3330 受動 - 攻撃性格
- 4 3332 言外の意味

5
6 明確には表現されていない〈言外の意味〉というものがある。しかし、その〈意味〉は絶
7 対多数の人々にとって共有されるものでなければならない。人によって受け取り方がまち
8 まちだったら、それは〈意味〉ではない。この絶対多数の人々に元の発信者が含まれない場
9 合、つまり、元の発信者にとっての〈意味〉が絶対多数の人々にとっての〈意味〉と違って
10 いる場合、発信者には弁明する責任がある。弁明できなければ発信者の負けだ。

11
12 漱石は、作品の中に、なかなか解決されない^{なぞ}謎を提示し、読者を引っ張ることの巧みな
13 作家です。

14 (北村薫『『こころ』を読もうとしているあなたに』)

15
16 「なかなか解決されない^{なぞ}謎」は意味不明。謎の答えが絶対多数の人々にとって同一でない
17 のなら、それは謎ではない。謎めいた表現でしかない。

18 たとえば、『陰獣』の真犯人は確定できない。したがって、『陰獣』は推理小説ではない。
19 謎めいた小説だ。謎めいているところが面白い。

20 〈謎〉と〈謎めいた表現〉を混同してはいけない。

21 Sは、謎めいた発言、Pにとって「不得要領」の発言をいくつも残している。それらの発
22 言の真意は「遺書」を読むことによって明瞭になるみたいな感じだが、しかし、実際にはそ
23 うはならない。謎めいた発言の真意は、最後まで明らかにならないのだ。では、『こころ』
24 は『陰獣』のように謎めいているところが面白いのか。そうではない。『こころ』の作者は
25 「読者を引っ張ること」に成功しているのかもしれないが、引っ張るだけ引っ張っておいて、
26 読者を放り出してしまった。落ちがない。真相の解明は読者に丸投げ。だから、『こころ』
27 を文芸作品として読解することは不可能。作品として出来損ない。

28 『こころ』の作者が暗示しているのは〈謎めいた表現ができれば勝ち〉という考えだ。

29
30 私は不思議に思った。然し私は先生を研究する気でその宅へ^{うちママ}出入りをするのではなか
31 った。私はただそのままにして打過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のう
32 ちで^{むし}寧ろ^{たっと}尊ぶべきものの一つであった。

33 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」七)

34
35 この種の「不思議」大好きな場面は、いくらでも見つかる。
36 「不思議」大好きは、Sも同様だ。

37
38 然し年の若い私達には、この漠然とした言葉が^{たつ}尊とく響いたのです。

39 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十九)

40
41 「私達」はSとKだ。「漠然と」は〈意味が「漠然と」〉の不当な略。この「言葉」は「道」
42 (下十九)だが、どのような言葉であれ、〈言葉が^{たつ}尊とく響いた〉は意味不明。

43
44
45
46
47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3330 受動 - 攻撃性格
4 3333 素読の弊害

5
6 K、S、Pらは、軽薄才子だ。彼らは意味不明の言葉を濫用して気取っている。ただし、
7 根暗の軽薄才子だ。彼らは難解な言葉がわかったつもりになっているのではない。ありがちな
8 若気の至りなどとは違う。自分のことを〈人並み外れて賢い〉と思いあがっているのでは
9 ない。逆だ。むしろ、謙虚なつもりでいる。卑下慢。へりくだる演技に酔っている。彼らは
10 変なのだ。滑稽なのではない。自己欺瞞が困難になると、暴れるか死ぬかしかない。
11 彼らは〈意味不明だからこそ尊ぶべきだ〉という誤った考えを刷り込まれている。

12
13 日本では、読解ができないのは読者のせいであり、著者側に責任はないと決め込んでいる
14 ようなところがあります。かならずしもそうではありません。本書を読んで、「読解で
15 きないのは自分のせいではない。問題は書かれている文章自体にあったのだ」というケー
16 スがあることに気づいていただければと思います。
17 (福澤一吉*『論理的に読む技術 文章の中身を理解する“読解力”強化の必須スキル!』

18
19 「そう」が指すのは「著者の側に責任はない」であり、「決め込んでいる」ではない。
20 「問題」は意味不明。

21 「読解」の基本は反論だ。何とか欠点を探そうとする。欠点を探せなかったときにだけ、
22 降参して、「著者」を尊ぶ。疑わないのは阿諛追従であり、侮辱ですらある。

23 「著者の側に責任はないもの」という卑下慢ルールは、漢文の素読の弊害だろう。素読は、
24 口先だけの、鸚鵡のような国民を育てた。

25
26 近ごろの国語教育では、もっぱら解釈や鑑賞が中心になり、わたし自身もふくめて、古
27 典をそっくりそのまま暗誦することがなくなった。しかしながら、頭で理解した意味など
28 というものは陽炎かげろうのようにあやふやで、いざというとき当てにならない。早急に意味をもと
29 めようとせず、ことばそのものを、できればその全体を、くりかえし自分の心に刻みつけ
30 ておけばこそ、やがて深く根をおろし、生きたことばに育っていくのではなからうか。「こ
31 と」と「ことば」が、わたしたちの内での出会い、実をおすぶようになる。

32 (安藤忠夫『素読のすすめ』)

33
34 「陽炎かげろう」のような主張。

35 「近ごろの国語教育」の実状なんか、私は知らないが、「解釈や鑑賞が中心」が駄目なの
36 ではない。読解のスキルを教えないのが駄目なのだ。

37 ある程度の記憶は必要だが、その対象は「古典」に限らない。読み進めつつあるテキスト
38 の重要な部分だけで十分。「その全体」を記憶できるのは特殊な才能の持ち主だけだ。

39 「いざというとき」に「暗誦」に頼るのが軽薄才子だ。自分にも相手にも「意味」のわか
40 らない名言を「当て」にしているから、会話を怠ける。劇団ひとり。

41 「意味をもとめ」とか「心に刻みつけて」とか「深く根をおろし」とか「生きたことばに
42 育って」とか「内での出会い」とか「身をむすぶ」とか、『外郎売』かよ。

43
44 *上が土の俗字。

45 (付記)『歲月』(星新一)参照。『だれかさんの悪夢』(新潮文庫)所収。

46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3340 「覚悟」宣言の前後
4 3341 『転失気』
5

6 「自由と独立と己れとに充ちた現代」の真意は、〈冷たい人だらけの「現代」社会〉など
7 だろう。ところが、Sはこのようにわかりやすく表現しなかった。なぜか。わかりやすく表
8 現すると、真相が明るみに出てしまいそうだったからだ。

9 真相とは、〈Sは冷たい人だから、静から冷たくされる〉という物語だ。また、〈Kは冷た
10 い人だったから、Sから冷たくされた〉という物語だ。

11 〈現代社会では人と人の絆が失われがちだ〉というのは常識だろう。しかし、〈現代社会
12 では人と人の絆が完全に断ち切られてしまい、それを修復することは不可能なので、諦めて
13 泣いて暮らしながら死ぬのを待つしかない〉と言い切るのは非常識だ。

14 Sは、後者のような、非常識な「覚悟」を暗示している。虚偽の暗示だ。彼自身、信じて
15 いない「覚悟」を暗示している。誇張、嫌味、皮肉であり、要するに駄々をこねている。甘
16 ったれている。そうした自覚があるから、明言できないのだ。絆を修復する可能性について
17 考察する能力の不足を自他に対して隠蔽しているのでもある。

18 こうした真相の隠蔽に、作者は加担している。だから、読者も加担せざるを得ない。

19 「覚悟」宣言について、〈自己疎外〉だの〈実存的不安〉などといった難解な用語を用い
20 て解釈を施すことは、できなくはないのかもしれない。しかし、そんな解釈は便所の落書き
21 にだって施すことができるのではないか。だったら、『こころ』の作者の独創性や特異性な
22 どについて考察したことにはならないはずだ。
23

24 医者 of 言った「転失気」という語が「屁(へ)」のことと知らなかった和尚が、その意
25 を尋ねに行かせた小僧から「盃」のことだと嘘を教えられ失敗する。

26 (『広辞苑』「転失気」)

27
28 「転失気」には四つの意味がある。
29

- 30 ① 屁(へ)が肛門まで来て、外に出ないで、音が内へ反転すること。(『日本国語大辞
31 典』の説)
32 ② 外に出る屁(へ)。(「医者」の説)
33 ③ 盃。(「小僧」の嘘)
34 ④ 呑酒器。(「和尚」の造語)
35

36 『日本国語大辞典』が正しいとすると、「医者」は間違っていることになる。しかし、作
37 中では正しいから、問題にする必要はない。「小僧」は邪気のある嘘をついたが、愉快ない
38 たずらっ子だ。「和尚」は嘘をついている。ただし、単純な嘘ではない。自己欺瞞だ。彼は
39 自分の嘘に騙されている。軽薄才子だ。

40 「覚悟」宣言の①に相当する意味、つまり作品の外部における意味は、私にはわからない。
41 ②に相当するSの意味は不明。③に相当するPの意味も不明。④のように「覚悟」宣言の内
42 容についてわかったように論じる人々は「和尚」の仲間だ。
43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3340 「覚悟」宣言の前後
4 3342 「現代一般の誰彼」

5

6 「覚悟」宣言を聞かされたPは「或強烈な恋愛事件」を連想する。その理由は不明。しか
7 も、その「事件」を否定した。おかしな展開だ。

8

9 「かつてはその人の前に跪^{ママ}ずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せさ
10 せようとする」と云った先生の言葉は、現代一般の誰彼^{だれかれ}に就いて用いられるべきで、先生
11 と奥さんの間には当てはまらないものようでもあった。

12 雑司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、——これも私の記憶に時々動いた。

13 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十五)

14

15 この「言葉」は意味不明だ。だから、「誰彼^{だれかれ}」あるいは「先生と奥さん」に適用できると
16 か、できないとか、そういう話は、私には理解できない。

17 しかも、唐突に「墓」の話になる。この「墓」はKのものだ。「遺書」を読んだ後、〈あの
18 ときの「先生の言葉」はKの「墓」と関係があったのだな〉と思うのなら、わからなくもな
19 い。だが、特に情報がないのだから、奇妙だ。Pは超能力者か。そうかもしれない。

20 「覚悟」宣言の前後の話を要約してみよう。

21

22 1 PはSを「見付出し」(上一)て接近する。その理由は不明。

23 2 PはSと「懇意」(上三)になる。その理由は不明。

24 3 静に教えられた「墓地」(上四)で、PはSに会う。出来過ぎ。

25 4 Sは自分と静が「最も幸福に生れた人間の一对であるべき筈^{はず}」(上十)と語る。

26 5 Sは「恋は罪悪」(上十二)と語る。Pにも意味不明。

27 6 Sは「覚悟」(上十四)を宣言する。意味不明。

28 7 PはSの「覚悟」の由来として、「或強烈な恋愛事件」(上十五)を仮定する。

29 8 Pは、Sの「覚悟」とからKの「墓」(上十五)を連想する。不可解。

30 9 静は、PにSとの不和と関連したKの「変死」(下十九)について仄めかす。

31

32 ここまでが「上」の前半に相当する。

33 「上」の後半では、Pは探偵のようになり、「恋愛事件」と「変死」を関係づけようとする。
34 「下」では、SはPに誘導されたみたいに〈静とSの「花やかなロマンス」〉と〈Kの自
35 殺の物語〉を縋い交ぜにしようと頑張る。しかし、しくじり続ける。結局、「この不可思議
36 な私というもの」(下五十六)が主人公であるところのSの「自叙伝」(下五十六)は完結し
37 ない。そして、「遺書」は終わる。同時に『こころ』も終わる。Pは再登場しない。

38 作者は何をしているのだろう。作者は、「現代一般の誰彼^{だれかれ}」が抱く疎外感と、Sに特有の
39 「この淋しさ」とが、同種のものであるのかないのか、わからなくなったのだろう。

40 〈「この淋しさ」は「現代」の人々にとって不可避だ〉というのが作中の真理なら、「花や
41 かなロマンス」と絡めて話を作る必要はない。Kに対する違和感を主題にすればいいだけだ。
42 なぜ、作者は物語を二本立てにしたのか。どちらもまともに作れないからだ。

43

44

45

46

47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3340 「覚悟」宣言の前後
4 3343 『茶の湯』
5

6 静はPに「よく男の方は議論だけなさるのね、面白そうに。空の盃^{さかずき}でよくああ飽きずに
7 献酬^{けんしゅう}が出来ると思いますわ」(上十六)と言う。「覚悟」宣言に至るSとPのやりとり対す
8 る揶揄と考えられなくもない。読者にとっては、そのように感じられる。

9 Pは静を賢い女性とと思っているらしいが、小賢いだけだ。ただし、そのように解釈する
10 と、『こころ』は作品として解体する。作者は、〈静は男同士の空威張りの根底にある「明治
11 の精神」に気づいていない〉と暗示している。ただし、静にも「明治の精神」はある。つま
12 り、彼女も軽薄才子だ。「最も強く明治の影響を受けた私ども」(下五十五)の一人だ。

13 男同士の〈「献酬」ゲーム〉は、『菟菟問答』ではない。『茶の湯』だろう。

14 男たちは意味不明の言葉を交わす。相手の発した言葉の意味を理解できていないのに、理
15 解できたふりをして応じる。だから、そのときの自分の言葉の意味も理解できていない。馴
16 れ合いに慣れた連中は、腐れ縁を断ち蹴れない。だが、いつかきっと同行不能になる。ゲイ
17 でもない限り、あるいはゲイでもか、きつい上下関係、主人と奴隷のような関係が確立して
18 いない限り、殺し合いになる。ありふれた話だ。『こころ』は、根暗の軽薄才子たちの思想的
19 自己破産の露呈だ。普通の意味での作品にはなっていない。

20
21 その時彼の用いた道という言葉は、恐らく彼にも能く解っていなかったでしょう。私
22 は無論解ったとは云えません。然し年の若い私達には、この漠然とした言葉が尊^{たう}とく響
23 いたのです。

24 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十九)
25

26 「その時」は無視。「彼」はKだ。〈「言葉は」～「解って」〉は意味不明。「言葉」は〈「言
27 葉」の意味〉などの不当な略だろうが、断定はできない。「能く解っていなかった」とする
28 根拠は隠蔽されている。傲慢なKのことだから、〈僕には「能く解って」いるぞ〉と語った
29 のかもしれない。青年Sは、〈「能く解って」いないからこそKは偉い〉という理不尽な感想
30 を抱いたのかもしれない。とにかく、不可解。

31 Nは〈清狂〉という言葉を知っているはずだ。Kは一種の狂人だ。超俗的で狂っているみ
32 たいだからこそ、Kは偉い。ところが、Sは、そのように語らない。おかしい。

33 「無論」は変。〈賢い自分に解らないのだから愚かな相手には「無論」わかるまい〉とい
34 う話なら、わからなくもない。「云えません」は怪しい。青年Sは「解った」とKに言った
35 のか。言いたくても言えなかったのか。不明。過去のSが語り手Sに変身し、〈Pに「云え
36 ません」〉という話にすりかえている。語り手Sは怪しい。この種のすりかえは、『こころ』
37 に散見する。作者は怪しい。怪しがらない夏目宗徒は怪しい。

38 「然し」は怪しい。「年の若い」ことは理由にならない。若気の至りなら、「解った」と信
39 じ、威張って明言したろう。〈自分は偉い〉と思いががるのが若者だ。「言葉が尊^{たう}とく響いた」
40 は意味不明。「言葉の重み」(下三十六)と同種の表現らしいが、これも意味不明。

41 「道」ゲームは「向上心」ゲームに発展する。だが、Kは自作のどのゲームもクリアでき
42 ず、新しいゲームを構想することもできず、自信を喪失して自殺した。くだらない男だ。
43
44
45
46
47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3350 「覚悟」宣言
4 3351 暗流の「その人」
5

6 『こころ』は出来事の羅列のように思える。「これはただ思い出した^{ついで}序に書いただけで」
7 (下十六)などといった居直りみたいな文が出ているほどだ。

8 『こころ』を面白がる人は、「ただ思い出した^{ついで}序」というのが虚偽であることを感知して
9 いるはずだ。あるいは、この「^{ついで}序」が文脈の代りをしていると感じる。暗流。そうした何
10 かを感じ取っている。辻褃の合わない言葉と言葉、出来事と出来事を通底する何かがあるよ
11 うな気にさせられている。読者は非文芸的暗示にかかっているわけだ。

12 作者による非文芸的暗示は、冒頭の第一文である「私は常にその人を先生と呼んでいた」
13 (上一)に仕掛けられていた。「その」が畏だ。

14 〈その〉は、「或る」の意に近く用いられることがある(『広辞苑』「その」)というが、
15 本文の「その」は、もっとごみごみした感じだ。玄関開けたら、きのうのご飯。

16
17 私は、その男の写真を三葉、見たことがある。

(太宰治『人間失格』「はしがき」)

18
19
20 これも書き出し。「その男」は変だが、〈ある男〉に置き換えたら、違和感はなくなる。

21
22 ……その女は、私の、これまでに数知れぬほど見た女の中で一番気に入った女であつた。
23 (近松秋江『黒髪』)

24
25 これも書き出し。この「その女」は〈ある女〉に置き換えられない。また、「……」があ
26 るから、「その」が指す言葉はここに含まれるように思える。この「その」は異様だ。ただ
27 し、この異様さは「私」の性向を表現したもののようで、聞き手の好奇心を刺激する。逆に、
28 不快になる人がいるかもしれない。

29 ちなみに、「遺書」は「……」で始まる。P文書も「……」で始めるべきだろう。

30
31 話し手が、空間的、心理的に、聞き手の側にあると考える人や物などをさし示す語。
32 (『日本国語大辞典』「そ-の」)

33
34 P文書の聞き手Qは「その人」という言葉に接した瞬間、Sを知人のように感じる。Qは、
35 いつからか、Pと「先生」のP的意味をも共有している。

36
37 僕は最近真理先生を知った。真理先生という人がいることは僕は友達から随分前から
38 知らされていた。しかし僕は食わず嫌いで、逢^あいたいとは思わなかった。

39 (武者小路実篤『真理先生』一)

40
41 この「僕」はQに相当する。「友達」がPだ。『こころ』の作者は、懐疑的Qを予め排除し
42 ている。「真理」などの言葉を冠しないのも、読者に警戒されなためだ。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3350 「覚悟」宣言
4 3352 『猫の皿』

5
6 『こころ』は『猫の皿』に似ている。道具屋は猫の皿を手に入れてやろうと目論んで、猫
7 を欲しがる。猫に興味があったのではない。そのことを猫の飼い主は察していた。飼い主こ
8 そが詐欺師なのだが、飼い主を騙そうとした道具屋に相手を責める資格はない。

9 Sは、腹の探り合いや騙し合いなどを会話と思っていたようだ。Kの大言壮語を許容して
10 いたのは、そのせいだ。また、同様に、自分の知ったかぶりも正当化していた。

11 「淋しい人間」は嘘つきだ。Sの叔父も嘘つきもだった。父母も嘘つきだった。Kの家族
12 も同様だろう。Pの家族も嘘つきだ。嘘つきに育てられると「淋しい人間」ができあがる。
13 Sは、この真相を隠蔽し、「現代」のせいにしてている。作者は、この隠蔽工作に加担してい
14 る。読者も加担せねばならない。私にはできない。

15 Pは、Sに対して婉曲に、何かについて執拗に問い続ける。それに対して、Sは「不得要
16 領」の答えを返すばかりだった。「覚悟」宣言はその一例だろう。SはPの魂胆を察してい
17 たらしい。だが、私にPの魂胆は知れない。『猫の皿』における皿に相当する何かを想像す
18 ることが、私にはできないのだ。

19 Sの体験の中でPにとって「参考になるもの」(下二)が何なのか、不明。Sの考える〈P
20 にとって「参考になるもの」〉と、青年Pが求めていた「参考になるもの」と、「遺書」読了
21 後のPにとって「参考になるもの」が同じなのかどうか、そうしたことさえ不明。

22 Pは、「遺書」読了後、〈自分が探し求めていたのはこれだったか〉と思うのかもしれない。
23 『こころ』の読者は、このPに擬態せねばならないのだろう。ところが、P文書の語り手P
24 は「遺書」の感想を語っていない。だから、作者が表現しなかったことを読者は付度せねば
25 ならないことになる。本当に私たちが付度せねばならないのは、個人としてのNの魂胆だろ
26 う。Nは、言語技術の未熟な〈構ってちゃん〉だった。しかも、〈頑固ちゃん〉だった。

27 小説に限らず、Nの表現は付度を期待したものだ。随筆でも、日常会話でも、論文でも。

28
29 『文学論』は完成した整合性をもつ書物ではない。それは進化論の枠組みと、意識の心
30 理学とビュー・ブリア以降の修辞学の方法と、そして漱石個人の、ときに凡庸すぎ、とき
31 に鋭すぎる読みが不安定に結びついたシステムである。それが失敗しているのか、成功し
32 ているのかなどということは、私にとってはどうでもいいことだ。私にとっての魅力はその
33 不安定さにある。その不安定さの中に漱石の無惨な失敗の痕跡を認めると同時に、その
34 不安定さの中に漱石の放棄してしまわざるを得なかった可能性を見ることのうちに、そ
35 の魅力はある。

36 もし敵対し、反抗し、否認すべきものがはっきりと見えていたならば、漱石はこのよう
37 な不安定なシステムを残すことはなかつたらう。私の推測しうる限りでは、彼には当時
38 の英文学研究のレベルと動向を適確に判断する知識があったとは思えない。

39 (富山太佳夫『ポパイの影に 漱石／フォークナー／文化史』)

40
41 私にとっての苦痛が、夏目宗徒にとっては「魅力」であるらしい。

42 「不安定さ」を「可能性」と瞞着する人を、私は私の読者として想定しない。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3300 明示しない精神
3 3350 「覚悟」宣言
4 3353 「金魚売らしい声」

5
6 Sは「恋愛は罪悪」という話を自分から始めておきながら、都合が悪くなると、「この問
7 題はこれで止めましょう」と勝手に打ち切る。Pは反抗できない。

8 「この問題」の追究は、この前の回（上十三）で終わったような感じだ。ところが、実際
9 にはそうではなかった。Pは打診を続けたらしい。そのあたりのことが茫洋としている。

10 「然し先生はそれぎり恋を口にしなかった」に続いて、次のような話が始まる。

11

12 年の若い私はやや稍ともすると一ママ図になり易やすかった。少なくとも先生の眼にはそう映って
13 いたらしい。私には学校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであった。教授の意見よ
14 りも先生の思想の方が有難いのであった。とどのつまりをいえば、教壇に立って私を指導
15 してくれる偉い人々よりも只ただひと独りを守って多くを語らない先生の方が偉く見えたのであ
16 る。

17 「あんまり逆上のぼせちゃ不可いけません」と先生がいった。

18 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十四)

19

20 「やや稍」は〈動〉が適當。

21 「少なくとも」は意味不明。

22 「とどのつまりをいえば」の「をいえば」は不要。

23 「ただ只」の被修飾語が決まらない。「独りを守って」は意味不明。

24 「あんまり逆上のぼせちゃ不可いけません」という言葉を読んで、私は見えない壁にぶつかったように
25 感じた。どうして、ここにSが？ 実際の会話はどこから始まったのだろう。また、どうや
26 って始まったのだろう。不明。

27 語り手Pの回想が、突如、過去の事実として語られる。こんなことは不合理だ。三人称の
28 語りなら、ありうる。だが、一人称の語りでは不合理だ。勿論、作者が〈語り手Pは怪しい〉
29 という表現をしているわけではない。だから、本当に怪しいのは作者だ。

30

31 その時生垣いけがきの向うで金魚売らしい声がした。その外には何の聞こえるものもなかった。

32 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十四)

33

34 こんなことを覚えているのは、おかしい。覚えていたとしても、語る必要はない。

35 この無音の描写は、Sと静とPの靈的關係が成立したことを暗示している。この後に始ま
36 る「覚悟」宣言は、靈感の持ち主にとってのみ価値のあるものだろう。

37 「かつてはその人のひざ膝の前にひざま跪ひざまずいたという記憶」に始まり、「自由と独立と己れとに充
38 ちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋しみを味わわなくてはならないで
39 しょう」(上十四)で突き放したように終わるSの長台詞、「覚悟」宣言の意味は、普通に読
40 む限り、不明なのだ。意味不明だからこそ、靈感の持ち主にとって価値があるのだ。ただし、
41 これを盗み聞きしているはずの静に、どのように感じられたか、不明。

42 「覚悟」宣言は呪文のようなものだ。

43

44

45

46

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3410 「自由」について
4 3411 自由・平等・博愛

5

6 「自由と独立と己れとに充ちた現代に生れた」という意味不明のスローガンめいた文が
7 あたかも英知の表現のように流通する社会に生きている「我々はその犠牲としてみんなこ
8 の淋しみを味わわなくてはならないでしょう」ね。

9

10 しかしこのスローガンは、その性質からして二つの重要な問題点をもっている。第一に
11 それは、大衆の理性や合理的な認識よりも情緒や感性に訴える傾向があり、往々にして大
12 衆の非合理性を社会的に増大させる結果になることが多い。第二にそれは、真理を問題に
13 するよりも真理を隠蔽(いんべい)してしまう傾向をもち、虚偽なるものを絶対視する結
14 果を招来しかねない。

15 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「スローガン」矢澤修次郎)

16

17 「大衆」は〈軽薄才子〉が適当。話題になっている事柄に対して無知な人、関心がない人、
18 「本当の馬鹿」の場合、スローガンに踊らされることはない。

19 ほとんどの人は、何かの専門家だ。学問の専門家だったり、家事の専門家だったり、自分
20 のペットの専門家だったりする。プロとして稼げなくても有能だ。ただし、専門外の事柄に
21 関しては無知無能であることが多い。つまり、万能の天才以外、誰もが「大衆」なのだ。

22 「大衆」には二種ある。専門外の事柄に関するスローガンに接したとき、わかったふりを
23 しがちな人と、わかったふりをしない人。前者が軽薄才子だ。ただし、わかったつもりにな
24 ってしまうのは不可避だ。優秀でも勘違いすることはある。

25 ちなみに、〈衆愚政治〉の〈愚〉とは軽薄才子のことだ。「本当の馬鹿」ではない。

26 「覚悟」宣言はスローガンのようなものであり、それに確かな意味があるように思っ
27 てしまう人は軽薄才子だろう。ただし、Nと霊界通信ができる人は別。

28 「自由」と「独立」について、Sは肯定と否定の両方の価値で使用している。「己れ」は
29 処置なし。この三つの語は並立するものではないのかもしれない。「己れ」は「自由」や「独
30 立」の類義語の上に位置する概念のようだ。たとえば、〈犬〉や〈猫〉の上位に〈愛玩動物〉
31 が位置するような仕掛けになっているのかもしれない。よくわからない。

32 「自由」から始まる有名なスローガンがある。

33

34 近代民主主義の価値理念を表現したものといわれている。特にこのなかの博愛の意味
35 についてはさまざまな解釈が行われてきた。端的に「人類愛」を意味するという説と、革
36 命によって特権階級を打倒して不可分一体となった「国民」そのものをさすとする説があ
37 る。

38 (『ブリタニカ国際大百科』「自由、平等、博愛」)

39

40 この「平等」に対応するのが「独立」かもしれない。つまり、〈誰も彼もが強いられてい
41 る孤立〉といった感じだ。そして、意味の確定していない「博愛」に対応するのが「己れ」
42 かもしれない。「己れ」は、愛する主体ではなく、愛される客体だ。被愛願望。

43

44

45

46

47

48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3410 「自由」について
4 3412 人間は自由か

5
6 〈自由〉とは何か。

7
8 以後、現代にいたるまで、人間の行為において自由意志は一層重要な位置を与えられな
9 がらも、一方で無条件に外的な状況や強制から自由な自律性を認めることには困難があ
10 ることが自覚されており、実存主義の立場はそれに対する一つの解決でもある。

11 (『ブリタニカ国際大百科事典』「自由」)

12
13 「実存主義」を調べるか？

14
15 人間の選択は、どのような形にせよ説明できるものではないと実存主義者は主張して、
16 科学的唯物論を否定する。

17 (『ブリタニカ国際大百科事典』「実存主義」)

18
19 次は「科学的唯物論」か。

20
21 19世紀後半ヘーゲル左派より出たマルクスやエンゲルスはこれらの唯物論が科学的成
22 果に立っていることを評価しながらも、それらが虚妄な哲学的世界像を含んでいること
23 を批判し、より科学的な弁証法的唯物論を提唱し、これが今日の哲学界では唯物論の最も
24 大きなものとされている。

25 (『ブリタニカ国際大百科事典』「唯物論」)

26
27 もうちょっと。

28
29 この認識論としての弁証法的唯物論を人間社会の歴史に即して考えたものが史的唯物
30 論といわれる。

31 (『ブリタニカ国際大百科事典』「弁証法的唯物論」)

32
33 まだかよ。

34
35 社会の一般的発展法則に関する科学として、マルクス-レーニン主義の構成部分の一
36 つである史的唯物論は、他のマルクス主義の理論と同様に、永遠不変の図式ではなく生き
37 た行動の指針として生れたものであり、したがってそれは常に実践的活動とその成果を
38 一般化し、公式化することによって創造的に発展していこうとする社会生活の認識方法
39 であるといわれる。

40 (『ブリタニカ国際大百科事典』「史的唯物論」)

41
42 おしまい。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3410 「自由」について
4 3413 「自他の区別を忘れて」

5
6 Sの「自由」は、普通の意味で用いられていないはずだ。

7
8 「行動の自由」は事実上の自由の問題であり、哲学的にはさほど難問を含まない。これ
9 は外的拘束に対立する意味での強制からの自由〔羅〕libertas a coactione であり、自
10 由意志を否定する決定論と両立しうる。

11 (『現代哲学事典』「自由」市川浩)

12
13 Sは自身にとっての「外的拘束」について語っていない。

14
15 「自己に覚めよ」と近代人は云ふ。而して彼等は自己に覚めて何を発見せしやと問ふに、
16 自己の価値ある事、自己に権利ある事、自己の自由なる事、無限に発展して宇宙を我有と
17 するの資格ある事を発見したりと答ふ。

18 (内村鑑三『近代人と基督信者』)

19
20 「自己に覚めよ」は意味不明。この「近代人」と「現代に生れた我々」は同じか。

21
22 その頃は覚醒とか新しい生活とかいう文字のまだない時分でした。
23 (夏目漱石『ころ』「下 先生の遺書」四十三)

24
25 「その頃」は、SとKの学生時代。「覚醒」は、初出では「自覚」だった。改めた理由は
26 不明。「文字」は〈流行語〉みたいな意味だろうが、「覚醒」や「新しい生活」の出典は確
27 認できない。『漱石全集』(第九巻注解)参照。この「時分」は「現代」だろうか。不明。

28
29 そこで前申した通り自分が好いと思った事、好きな事、自分と性の合う事、幸にそこに
30 打つかって自分の個性を發展させて行くうちには、自他の区別を忘れて、どうかあいつも
31 おれの仲間引き摺り込んで遣ろうという気になる。その時権力があると前いった兄弟
32 のような変な関係が出来上るし、また金力があると、それを振り蒔いて、他を自分のよう
33 なものに仕立上げようとする。すなわち金を誘惑の道具として、その誘惑の力で他を自分
34 の気にいるように変化させようとする。どっちにしても非常な危険が起るのです。

35 (夏目漱石『私の個人主義』)

36
37 SとKは「兄弟のような変な関係」になっていた。Sは、こうした「関係」から脱するた
38 めに「月々の費用」(下二十三)を負担し、Kを「自分のようなものに仕立上げよう」とし
39 た。その結果、「非常な危険が起る」ことになった。ただし、この二種の争いは「自分達の
40 心付かない暗闘」(『行人』「友達」二十七)としてさえ表現されていない。『ころ』の作者
41 は何をしているのだろう。

42 「自由」とは「自他の区別を忘れて」他を束縛してしまうことか。自己同一視か。

43
44
45
46

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3420 「独立」について
4 3421 「インデペンデント」

5
6 「自由」が他への過干渉のことだとすると、「独立」は他の「自由」に対する〈反抗〉か。
7 この場合、「自由」と「独立」は、類義語ではない。反義語だ。

8
9 子供の内は親のいうことばかり聞いておっても、段々一人前いちにんまえになって来るとインデペン
10 デントというものは自然に発達して来る。

11 (夏目漱石『模倣と独立』)

12
13 この「インデペンデント」は〈インデペンデンス〉が適當のようだ。「段々一人前いちにんまえになっ
14 て来る」と「インデペンデントというものは自然に発達して来る」は同義だろう。

15
16 心の発達はそのインデペンデントという向上心なり、自由という感情から来るので、
17 われわれもあなた方もこの方面に修養する必要がある。

18 (夏目漱石『模倣と独立』)

19
20 この場合、「自由」と「独立」は類義語になる。
21 「修養する必要がある」は、先の「自然に発達して来る」と矛盾するようだ。

22
23 インデペンデントの資格を持っておって、それを抛ほうって置くのは惜しいから、それをも
24 っている人はそれを発達させて行くのが、自己のため日本のため社会のために幸福であ
25 る。こういうのです。

26 (夏目漱石『模倣と独立』)

27
28 「資格」は意味不明。誰が「資格」を与えるのか。「惜しい」と思うのは「資格」を与え
29 た人か。不明。「自己」と「日本」と「社会」を並べるのは奇妙だ。

30
31 全国人民の間に一片の独立心あらざれば文明も我国の用を為さず、
32 (福澤諭吉『文明論之概略』「卷之六 第十章 自国の独立を論ず」)

33
34 意味不明。

35
36 彼らは、たとえ自由が世界中から完全に失われたとしても、みずからの精神においてそ
37 れを想像し、感じとり、さらにはそれを味わうだろう。そして隷従は、いくら装飾された
38 ものであったとしても、彼らにとってはいかなる魅力もないものとなる。

39 (エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』)

40
41 Nは「模倣」と「隷従」を混同しているらしい。

42
43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3420 「独立」について
4 3422 傲慢

5
6
7

「独立」のS的意味は〈傲慢〉などかもしれない。普通は嫌がられる。

8 しかしこういう風にインデペンデントの人というものは、怒すべく或時は貴^{たつと}むべきも
9 のであるかも知れないけれども、その代りインデペンデントの精神というものは非常に
10 強烈でなければならぬ。のみならずその強烈な上に持って来て、その背後には大変深い背
11 景を背負った思想なり感情なりがなければならぬ。如何となれば、もし薄弱なる背景があ
12 るだけならば、徒^{いたずら}らにインデペンデントを悪用して、唯世の中に弊害を与えるだけで、
13 成功はとても出来ないからである。

(夏目漱石『模倣と独立』)

14
15
16
17
18
19
20

「背景」は、「あなたの考えには何等の背景もなかったし」(下二) というSの言葉に含ま
れたそれと同義だろう。プラスの価値の「インデペンデントの精神」の裏にマイナスの価値
の「明治の精神」を想定せねばならないのかもしれない。つまり、「明治の精神」はSの言
う「現代に生れた我々」に「弊害を与えるだけ」のものだろう。「だけ」は余計か。

21
22
23
24

けれども月々の費用を金の形で彼の前に並べて見せると、彼はきっとそれを受取る時
に躊躇^{ちゅうちよ}するだろうと思ったのです。彼はそれ程独立心の強い男でした。

(夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」二十三)

25
26
27

「躊躇^{ちゅうちよ}する」にしても結局「受取る」のなら、あまり「独立心の強い男」ではなさそう
だ。むしろ、躊躇しない方が変わっている。この「独立心」は皮肉っぽい。

28
29
30
31
32
33
34
35
36

客。僕は子供の時に讀まされたことがあるが、怪しからん本だ。ロビンソン・クルソオ
と云ふ男は、航海がしたいと云ふので、両親が泣いて留めるのを聴かずに、家を飛び出す。
不孝ではないか。夫から無人島に漂泊する。單身で、人の助を借らずに、物を食つたり、
着物を着たり、家に住まつたりする様になる。フライデエと云ふ黒ん坊を掴まへて、共同
生活のやうな事を始める。そのうち舟に助けられて國へ歸る。その間、人の助を借らずに、
自活したのを得意としてゐるらしい。そんな事がなんになるのか。人間は親があつての子
である。先祖があつての子孫である。國家があつての臣民である。家族や國家を離れて生
活したつて、そんな生活はなんの價値もない。その價値のない生活をしてゐる間、本國た
る英國政府に對する、あらゆる義務を果さずにある。不忠ではないか。

(森鷗外『ロビンソン・クルソオ』)

37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47

これは、森の意見ではない。森が想定している「客」のものだ。「客」は、〈反社会的〉と
〈反国家的〉を混同しているらしい。あるいは、〈反政府的〉とも。
ちなみに、ロビンソン・クルソーのモデルになったアレクサンダー・セルカークを、森
は擁護しないかもしれない。『実録ロビンソン』(ルーズ) 参照。

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3420 「独立」について
4 3423 「オリジナル」

5
6 「インデペンデント」と並んで「オリジナル」という言葉が出てくる。

7
8 日露戦争というものは甚だオリジナルなものであります。インデペンデントなもので
9 あります。あれをもう少し遣っておいたならば負けたかも知れない。宜い時に切り上げた。
10 その代り沢山金は取れなかった。けれどもとにかく軍人がインデペンデントであるとい
11 うことはあれで証拠立てられている。西洋に対して日本が芸術においてもインデペンデ
12 ントであるという事ももう証拠立てられて可い時である。日本は動もすれば恐露病に罹
13 ったり、支那のような国までも恐れているけれども、私は軽蔑している。そんなに恐しい
14 ものではないと思っている。

15 (夏目漱石『模倣と独立』)

16
17 「戦争」について「オリジナル」という言葉を用いるのは、「甚だ」不適切だろう。しか
18 も、戦術などに対する評言ではないから、意味不明。

19 「インデペンデント」と「オリジナル」が同義語なら、夏目語の「独立」は〈独創〉の類
20 語か。かなり無理がありそうだ。

21 「負けたかも知れない」のなら、「オリジナル」も何もなかりう。

22 「金」は〈賠償金〉のこと。

23 「軍人」と並べるのなら、「芸術」は〈芸術家〉などが適當。「戦争」と「芸術」を並
24 べるのは不適當。軍樂、戦争画、戦争文学などがある。国会前で、石田純一は「戦争は文化
25 じゃない」と叫んだが、彼は『カウラ大脱走』という立派な戦争ドラマに出ている。

26 「恐露病」は「当時自然主義を奉ずる者の間に、ロシア文学かぶれの風が強かったのを
27 揶揄して言う」(岩波文庫『漱石文明論集』注解)ということだが、「恐」の意味が私にはわ
28 からない。

29 「支那の国」は、〈近代の「支那の国」の「芸術」〉の略か。あるいは、〈「支那の国」の「軍
30 人」〉の略か。他にも考えられるが、とにかく、意味不明。「軽蔑して」いるのは露西亜か、
31 ロシア近代文学か、清国か。不明。

32 「恐しい」は意味不明。

33

34 東京日比谷公園の国民大会は賠償金のないことなどを不満とする国家主義者の指導に
35 始まったが、戦争による生活苦にあえぐ民衆は条約破棄を叫んで暴徒化し、内相官邸・警
36 察署・交番・政府系新聞社を襲った。政府は戒厳令をしいて軍隊を出動させ鎮圧した。し
37 かし、暴動は横浜・名古屋・大阪・神戸など各地に波及した。

38 (『日本史事典』「日比谷焼打ち事件」)

39

40 「日比谷焼打ち事件」の暴徒は、「インデペンデント」あるいは「オリジナル」か。
41 この事件は「大正デモクラシーの都市民衆運動の起点となった」(『山川 日本史小辞典』
42 「日比谷焼打ち事件」)という。

43

44

45

46

47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」「人間に対するこの覚悟」
3 3430 「己れ」について
4 3431 『プライドと偏見』

5
6 「覚悟」宣言の「己れ」は、漠然としすぎている。プラスの価値の漢語では、〈自負・自尊・自信〉などが思い浮かぶ。マイナスなら、〈利己・我利・私心〉など。

9 玩具にされたのならこのままでは置かぬ。我は愛を八つ裂にする。面当はいくらかもある。
10 貧乏は恋を乾干にする。富貴は恋を贅沢にする。功名は恋を犠牲にする。我は未練な恋を
11 踏み付ける。尖る錐に自分の股を刺し通して、それ見ろと人に示すものは我である。自己
12 が尤も佝ありと思うものを捨てて得意なものは我である。我も立てば、虚栄の市にわが
13 命さえ屠る。逆しまに天国を辞して奈落の暗きに落つるセータンの耳を切る地獄の風は
14 我！ 我！ と叫ぶ。——藤尾は俯向ながら下唇を噛んだ。
15 (夏目漱石『虞美人草』十二)

16
17 何やら大変なことになっているらしいが、意味不明。

18 〈我〉はマイナスの価値で用いられることが多い。〈我を殺す・我を立てる・我を張る〉
19 などと、「ひとりよがり」(『広辞苑』「我」)といった意味で用いられる。当然、〈無我〉はプ
20 ラスの価値になる。〈無我夢中〉など。

21 『虞美人草』の語り手は、「プライド」をマイナスの価値で用いている。カタカナ語の「プ
22 ライド」は、昭和までマイナスの価値で用いられていたようだ。古い日本人は、〈自慢は傲
23 慢〉と考えたようだ。そうした雰囲気は少しずつ変わってきた。今井美樹の『PRIDE』(布
24 袋寅安泰作詞・作曲)は、〈プライド〉の価値をマイナスからプラスに変えた。

25 『細雪』(谷崎潤一郎)の原典である『自負と偏見』(オースティン)は、『高慢と偏見』
26 とも訳されている。どちらが正しい訳だろう。映画の邦題は『プライドと偏見』(ライト監
27 督)になっている。配給会社は、「自負」か、「高慢」か、決めかねたらしい。

28
29 田舎の中産階級一家の娘たちの結婚問題をめぐって、社交や恋愛にからまる男の自負
30 心や女の偏見など、さまざまな心理のもつれが織りなすあやを繊細的確な筆致で描く。
31 (『ブリタニカ国際大百科事典』「自負と偏見」)

32
33 男は女に「偏見」を捨てさせようとする。その過程で、男の「高慢」が「自負」へと洗練
34 される。女は、彼の「高慢」の本体が「自負」であることを薄々感じ取っていたが、明確に
35 自覚してはいなかった。感じ取ることができたのは、愛の力による。
36 Nの小説の男たちは傲慢だ。その裏に高貴な精神を透視するよう、作者は読者に求めている
37 のかもしれない。

38 「夏目漱石(そうせき)は「則天去私」の作品例として、この作品を推している」(『ニッ
39 ポニカ』「自負と偏見」榎本太)という。「則天去私」の出典は不明。「私」を「私心」(『日
40 本国語大辞典』「則天去私」と解釈するのが定説らしい。「私心」は「己れ」の同義語か。
41 「創作上、作家の小主観を挟まない無私の芸術を意味したものだとする見方もある」(『広辞
42 苑』「則天去私」とか。何が何やら。もう、いや。

43
44
45
46
47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3430 「己れ」について
4 3432 利己主義と利他主義

5
6 「己れ」は「our own egoistical selves」(“KOKORO”)と英訳されている。「利己心」と同じ
7 ような意味の英語か。

8
9 さらに倫理学説として普遍化されれば、各人が自己の利益だけを追求する結果、主張者
10 の利益にならないという現実の矛盾に陥り、普遍的な格率とはなりにくい。

11 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「利己主義」杖下隆英)

12
13 「各人」は、どうでもいい。「利己主義」の「主張者」ではなく実践者を、人々はハブに
14 する。だから、「結果」として当人は損をすることになる。普通にものを考えられる人なら、
15 利己主義者ではないように振舞うものだ。こんなことを書く必要があるのか？

16
17 さらに、各人が自分のことをまったく考えず、他人のためばかりを考えれば、自己完成
18 の努力を怠り、また他人に深情けをかけることになって、かえって迷惑を及ぼすことにも
19 なるから、規範的にも普遍的格率とはなりにくい。

20 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「利他主義」杖下隆英)

21
22 「他人のためばかりを考えれば」臓器提供などをやって、すぐに死んでしまう。生きてい
23 る人の生き方の基本は利己的に決まっている。〈捨身飼虎〉だって、虎に会う前に捨身の機
24 会がいくらでもありそうなものだ。

25
26 代助は昔の人が、頭脳が不明瞭な所から、実は利己本位の立場に居りながら、自らは固
27 く人の為と信じて、泣いたり、感じたり、激したり、して、その結果遂に相手を、自分の
28 思う通りに動かし得たのを羨ましく思った。

29 (夏目漱石『それから』十三)

30
31 「昔の人」は、かつての代助でもある。

32
33 それでもわたくしはどうしてもこの方たちをお助けするのが私の義務だと思いました
34 から前にいる子供らを押しのけようと思いました。けれどもまた、そんなにして助けてあげ
35 るよりはこのまま神の御前にみんなで行く方が、ほんとうにこの方たちの幸福だとも思
36 いました。それからまた、その神にそむく罪はわたくしひとりです。よってせひとも助けて
37 あげようと思いました。

38 (宮沢賢治『銀河鉄道の夜』「九 ジョバンニの切符」)

39
40 利他主義者を装う「わたくし」は「家庭教師」で、「この方たち」は彼の生徒。彼は生徒
41 たちに対する愛憎などを自他に対して隠蔽している。作者は隠蔽工作に加担している。

42 『タイタニック』(キャメロン監督) 参照。

43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3430 「己れ」について
4 3433 許容使役

5
6 「覚悟」宣言の全文。

7
8 「かつてはその人の^{ひざ}膝の前に^{ひざま}跪^{ひざま}ずいたという記憶が、今度はその人の頭の上に足を載せ
9 させようとするのです。私は未来の侮辱を受けないために、今の尊敬を^{しり}斥^{しり}ぞけたいと思う
10 のです。私は今より一層^{さび}淋しい未来の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいの
11 です。自由と独立と己れに^{ママ}充^みちた現代に生れた我々は、その犠牲としてみんなこの淋し
12 むを味わわなくてはならないでしょう」

13 私はこういう覚悟を^も有^もっている先生に対して、云うべき言葉を知らなかった。
14 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十四)

15
16 〈「かつてはその人の^{ひざ}膝の前に^{ひざま}跪^{ひざま}ずいた」には、〈「今度はその人」を跪^{ひざま}かせる〉といった
17 含意がある。「その人」は唐突。「その人の^{ひざ}膝の前に^{ひざま}跪^{ひざま}ずいた」という部分は、「遺書」では
18 「彼の前に^{ひざ}跪^{ひざま}まずく事を^{あえ}敢^{あえ}てした」(下二十二)となっている。「彼」はKだ。青年Sは、い
19 やいやながらKに従った。だから、やがて悔しくなった。ただし、「遺書」の語り手Sは、
20 そのようには語らない。〈Sの「記憶」がSの「足」をKの「頭」に「載せさせ」る〉は意
21 味不明。「させようとする」のなら、まだ「載せ」ていない。

22 「覚悟」は〈諦念と呪詛〉などが適当だろう。

23
24 「花子は風で帽子を飛ばしてしまった」とか「花子は交通事故で息子を死なせてしまっ
25 た」といったタイプの使役構文の場合も、何もしないことを行為として捉えて、「飛ばし
26 た」や「死なせた」という表現を用いていると考えられます。

27 主体が何もしないことによって結果を引き起こす場合は、「許容使役構文」と呼ばれま
28 す。より正確に言うなら、「ある事態が生じることを抑止する力のある人がその抑止力を
29 行使せず、その結果その事態が生じた」という場合です。

30 (西村義樹・野矢茂樹『言語学の教室』における西村の発言)

31
32 本文の「載せ」は許容使役のようだ。ただし、本人の「記憶」は、「風」や「交通事故」
33 とは性質が違う。「記憶」が本人から独立したDとなり、外部にあるようなら、許容使役だ
34 ろう。「^{ひざま}跪^{ひざま}ずいた」は、〈「^{ひざま}跪^{ひざま}ず」かさせられて「いた」〉などの不当な略だろう。Dによる
35 使役の印象を隠蔽しようとして、Sの言葉はぎこちなくなったようだ。

36 「未来の侮辱」をSに加えるのはPだ。だから、「今の尊敬」は芝居だ。つまり、Sの空
37 想するPは、Sの慈愛か何かと自分の「尊敬」を交換しようとしている。Sは慈愛などを与
38 えられないから、PはやがてSを恨むようになる。そういう息苦しい話だ。

39 「自分を我慢し」は意味不明。「我慢したい」の含意は〈「今」は「我慢し」ていない〉だ。

40 「己れ」とは〈「自分」の気分〉のことだろう。つまり、〈「我慢し」なければならぬの
41 に、できないでいるときの「自分」の気分〉など。

42 Sは、〈私は被愛願望の充足を期待しないぞ〉と、Dを脅しているらしい。

43
44
45
46

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3440 「自分を呪うより外に仕方がないのです」
4 3441 現代病

5

6 「自由」と「独立」と「己れ」という言葉を、Sはマイナスの価値としてのみ提示している
7 わけではない。基本的にはプラスの価値を有するものとして提示している。つまり、この
8 宣言は皮肉なのだ。ただし、どういう皮肉なのか、よくわからない。

9

10 「何でも奥歯に物の挟った様な皮肉ばかり云うんですよ」

11 「皮肉なら好いけれども、時々気の知れない噺言を云うにゃ困るじゃないか。何でもこの
12 頃は様子が少し変だよ」

13 「あれが哲学なんでしょう」

14

(夏目漱石『虞美人草』十二)

15

16 甲野欽吾に関する義妹とその母の批評。

17 「覚悟」宣言は、「皮肉」のような、「噺言」のような、「哲学」みたいな、しかし、いずれ
18 でもない意味不明の自己完結的な呟きだ。何かの症状だろう。

19

20 欽吾は腹を痛めぬ子である。腹を痛めぬ子に油断は出来ぬ。これが謎の女の先天的に
21 教わった大真理である。この真理を発見すると共に謎の女は神経衰弱に罹った。神経衰
22 弱は文明の流行病である。自分の神経衰弱を濫用すると、わが子までも神経衰弱にして
23 しまう。そうしてあれの病気にも困り切りますと云う。感染したものこそいい迷惑であ
24 る。

25

(夏目漱石『虞美人草』十二)

26

27 「先天的に」は意味不明。「先天的に教わった」は意味不明。誰に「教わった」のだろう。

28 「大真理」は語り手の皮肉だろうが、皮肉でなければどんな言葉が適当だろう。

29 「大真理」が「真理」に変わっている。「大」だけが皮肉で、「真理」は皮肉ではなかつた
30 のか。「教わった」のに「発見する」とは、どういうことか。どちらかが冗談なのだろう。
31 両方とも冗談なのかもしれない。「謎の女」は義母のことだが、「謎」の意味は平明ではない。

32 「神経衰弱」は意味不明。「神経衰弱に罹った」ので「この真理を発見する」という話で
33 はない。語り手は因果関係を逆に語っているようだ。わざとか。

34 「近代病」と「腹を痛めぬ子」と、どんな関係があるのだろう。無理に関係づけることが
35 「近代病」の症状だろうか。

36

37 都市化、産業化が進むとともに目だってくる疾病のこと。医学上の用語としてよりは、
38 ジャーナリズムによって作られた用語。

39

(『日本大百科全書(ニッポニカ)』「現代病」真田是)

40

41 「神経衰弱を濫用する」は意味不明。「わが子」は甲野のこと。

42 「感染した」は意味不明。

43 「親譲りの無鉄砲」は「母」から「感染した」「神経衰弱」のことかもしれない。

44

45

46

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3440 「自分を呪うより外に仕方がないのです」
4 3442 『イロニーの精神』

5

6 多くの人は「明治の精神に殉死する」が「笑談」であることを忘れているようだ。

7 Nの言葉は、おおむね、皮肉だ。冗談のような、哲学のような、呪文のような、スローガ
8 ンのような、得体のしれない何かだ。真面目ぶった笑い話。笑い話のような気取り。とぼけ
9 るほど、虚栄心が傷く。傷ついているから、とぼける。とぼけるから、なおさら傷つく。自
10 傷と自証の区別がつかない。虚栄と自尊の仕分けが、誰にも、本人にすらできない。奇を衒
11 っているようで、そうでもない。要するに意味不明。

12

13 イロニストは自分自身の無関心な態度に自信をもつあまり、われとわが身を試みる。と
14 ころが、その脆弱な鎧は、イロニストを十分に守ってくれない。かれの中立性は、笑うた
15 ための中立性である。とはいえ、イロニストがこの生れたての共感の公平さに、反逆するこ
16 とも起る。すなわち、言葉の洒落はイロニストから逃げてしまうこの言語をまどろませる
17 のに、まさに役立つ。しかしいくつかの地口だけではイロニーにはならない。イロニスト
18 はほとんど冷かしに近いようなことを言いながら、まじめなのである。イロニストは自己
19 を超脱していると思いつつ、実は呆然としている。今しがたイロニストは純真素朴にも
20 どったばかりであった。今や、頭がぼうっとし、めまいに襲われ、よろめき、現実と遊び
21 の間で、混乱している。

22 (ウラディミール・ジャンケレヴィッチ『イロニーの精神』「第三章 イロニーの罨」)

23

24 Sは、誰にも通じない皮肉、お洒落な虚偽によって、「孤独な人間」に成り果てた。「遺書」
25 は「笑談」なのだ。ただし、笑いようがない。『吾輩は猫である』や『坊っちゃん』でさえ
26 笑いようがない。何となく変なのだけれど、おかしみの具合が伝わってこない。

27

28 ここにおいても十七世紀と二十世紀は相通するのである。社会学的原因は明白である。
29 十七世紀にあっては諸階層の革命的なすべりにたいする貴族文化の擁護、二十世紀にあ
30 っては大衆 - 文明にたいするエリート - 文化の擁護である。それはかならずしも、当時の
31 貴族文化の擁護者が悪意ある自由思想家たちであり、今日のエリート - 文化の擁護者が
32 (万事に、ことごとくに反対する) 攻撃的な革命家であるという可能性を排除するものでは
33 ない。

34 シェイクスピアの隠喩法は、かけ離れたものの合一という意味で、しばしば観念連合的
35 である。しかしシェイクスピアの作品(ドラマは彼にとって〈引き伸ばされた隠喩〉のご
36 ときのものであった)のなかにはそれ以上のものが開顕している。言語の両義性や多様性に
37 たいする彼の衝迫は、転形期であった当時の時代全体に特有の深い言語的分裂、不確かな
38 ものとなった言語の無垢、ある深刻な懷疑主義スケプティシズムのあらわれである。

39 (G. R. ホッケ『文学におけるマニエリスム』「9. シェイクスピアのデフォルマチオン変形」)

40

41 明治の日本においては、「貴族文化の擁護」に「エリート - 文化の擁護」が加わり、さら
42 に、古代的ないわゆる天皇制の擁護と西洋文化の擁護が加わる。忙しすぎる。

43

44

45

46

47

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3440 「自分を呪うより外に仕方がないのです」
4 3443 「二人の間にどんな用事が起ったのか」

5
6 「覚悟」宣言の直前に異様な緊張感が漂う。

7
8 「信用しないって、特にあなたを信用しないんじゃない。人間全体を信用しないんです」

9 その時生垣の向うで金魚売らしい声が出た。その外には何の聞こえるものもなかった。
10 大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであった。家の中は何時もの通りひっ
11 そりとしていた。私は次の間に奥さんのいる事を知っていた。黙って針仕事か何かしている
12 奥さんの耳に私の話し声が聞こえるという事も知っていた。然し、私は全くそれを忘れて
13 てしまった。

14 「じゃ奥さんも信用なさらないんですか」と先生に聞いた。

15 先生は少し不安な顔をした。そうして直接の答を避けた。

16 「私は私自身さえ信用していないのです。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信
17 用できないようになってるのです。自分を呪うより外に仕方がないのです」

18 「そうむずかしく考えれば、誰だって確かなものはないでしょう」

19 「いや考えたんじゃない。遣ったんです。遣った後で驚ろいたんです。そうして非常に怖
20 くなったんです」

21 私はもう少し先まで同じ道を辿って行きたかった。すると襖の陰で「あなた、あなた」
22 という奥さんの声二度聞こえた。先生は二度目に「何だい」といった。奥さんは「一寸」
23 と先生を次の間へ呼んだ。二人の間にどんな用事が起ったのか、私には解らなかつた。そ
24 れを想像する余裕を与えない程早く先生は又座敷へ帰って来た。

25 「とにかくあまり私を信用しては不可ませんよ。今に後悔するから。そうして自分が欺む
26 かれた返報に、残酷な復讐をするようになるものだから」

27 「そりゃどういう意味ですか」

28 (夏目漱石『こころ』「上 先生と私」十四)

29
30 「信用」は意味不明。「人間全体」にはS自身が含まれるから、無意味。

31 「存外」は変。

32 「忘れてしまった」は〈「忘れて」質問をして「しまった」〉などの不当な略。

33 「私自身さえ信用しない」のなら、その「私自身さえ信用しない」のだから、無意味。

34 Pの「考えれば」と、次のSの「考えたんじゃ」の二つの「考え」は、その対象が異なる。

35 Sは話をすりかえている。

36 「呪う」を読み落としてはならない。「覚悟」宣言は「自分」含む「人間全体」に対する
37 呪言なのだ。「現代」限定でもなからう。

38 「用事」について、語り手Pには「想像する余裕」があるはずだ。「余裕を与えない」意
39 図が「二人」にはあつた。この物語を、作者は隠蔽しながらも部分的に暴露している。

40 「欺むかれた」は被害妄想。常識的には〈買い被って損をした〉などだ。Sは、相手に対
41 する想像力などの欠如を相手のせいに行っている。そのことに、Sは気づかない。作者も同様。

42 「覚悟」宣言でSが「この淋しみ」と「現代」を繋げたのは、静の耳を慮ったからだ。

43

44

45

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3450 『山月記』
4 3451 「我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心と」

5

6 『こころ』のファンは『山月記』のファンかもしれない。「高校教師や中島研究者の中には、
7 高校時代に「山月記」を読んで感動したことをきっかけに現在の職業に就いた者もいる」
8 (佐野幹『「山月記」はなぜ国民教材となったのか』)とか。「国民教材」は業界用語か。

9

10 なぜこんな運命になったかわからぬと、先刻は言ったが、しかし、考えようによれば、
11 思い当たることが全然ないわけでもない。人間であった時、己は努めて人との交わりを避
12 けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それがほとんど羞恥心に近いものであ
13 ることを、人々は知らなかった。もちろん、かつての郷党の鬼才といわれた自分に、自
14 尊心が無かったとはいわない。しかし、それは、臆病な自尊心とでもいうべきものであ
15 った。己は詩によって名を成そうと思いつつ、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わ
16 って切磋琢磨に努めたりすることをしなかった。かといって、また、己は俗物の間に伍する
17 ことも潔しとしなかった。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心のせいである。己
18 の珠にあらざることを惧れるがゆえに、あえて刻苦して磨こうともせず、また、己れの珠
19 なるべきをなせば信ずるがゆえに、碌々として瓦に伍することもできなかった。

(中島敦『山月記』)

20

21
22 「運命になった」は意味不明。語り手の李徴は「虎」になったのだ。虎になった人間を〈人
23 虎〉と書く。「考えように依っては」と、語り手はもぞもぞと始める。

24

陰口がどうしてヒッキー本人の耳に届くのか。妄想だろう。

25

〈「殆ど」～「近い」〉は意味不明。「人々は知らなかった」ということを、なぜ、彼は知
26 っているのか。妄想だろう。「羞恥心に近いもの」の中身は空っぽ。

27

「郷党の鬼才」という評価を、どうやって知ったのか。やはり、妄想だろう。

28

「鬼才といわれた自分」と、「自尊心」と、どういう関係があるのか。

29

「臆病な自尊心」なんて気障な言葉遣いをするのは、人虎だからだろう。

30

「思いながら」の前後が繋がらない。「切磋琢磨」は無用。瑠璃も玻璃も照らせば光る。

31

「かといって」の前後が繋がらない。「俗物の間に伍すること」が簡単に思えるらしい。

32

「共に」は不合理。「臆病な自尊心」のせいで「師」の評価を恐れ、「尊大な羞恥心」のせ
33 いで、「詩友」の評価を恐れたのだろう。「臆病な自尊心」とは〈「自尊心」を装う虚栄心〉

34

だろう。「尊大な羞恥心」は〈「羞恥心」を装う虚栄心〉だろう。

35

『山月記』には、落ちがない。

36

37

『人虎伝』では、永遠に人寰を去って、虎となりきりで終わるように書かれているが、
38 やはり一時的に虎となってもまた再び人間に復するというのが、「精霊憑き」の本来の形
39 により近いものであろう。

40

(内田泉之介・乾一夫『新釈漢文大系 44 唐代伝奇』「人虎傳 (じんこでん)」)

41

42

原典の『人虎伝』自体が尻切れ蜻蛉だったらしい。

43

44

45

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3450 『山月記』
4 3452 人虎伝ブーム

5
6 『山月記』の内部の世界における李徴の容姿は不分明だ。

7
8 天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持ちをわかってくれる者はない。ちょうど、
9 人間だった頃、自己の傷つきやすい内心を誰も理解してくれなかったように。
10 (中島敦『山月記』)

11
12 「天に躍り地に伏して嘆いて」いるから「誰ひとりとして」寄ってこないのだ。「わかっ
13 てくれる者はいない」ということが、どうして本人に知れよう。「わかってくれる者」ほど、
14 近寄りたがらないのではないか。そうした反省ができないから、人虎に成り果てたのだろう。
15 「自己の傷つき易い内心」は意味不明。つまり、こんな言葉は人虎の言葉であり、「誰も
16 理解して」くれないものなのだ。〈「内心を」～「理解して」〉も意味不明。

17
18 中国唐代伝奇「人虎伝（じんこでん）」を素材とし、自己を投影し、強い自意識を持つ
19 芸術家の自嘲（じちょう）と苦悩を描いた作品。
20 (『近現代文学事典』「山月記」)

21
22 「投影」は「物の見え方や解釈の仕方に、心の内面が表現されること」(『広辞苑』「投影」)
23 という意味らしいが、この説明ではよくわからない。ほら、また、「自意識」だ。

24
25 ところが、当時の文学状況の中で『人虎伝』を捉え直せば、「人虎伝ブーム」が起きて
26 いたことがわかる。中島敦は、決して「孤高」の文学者ではなかった。ある意味で、「時
27 代の子」だったのである。
28 (島内景二『中島敦「山月記伝説」の真実』)

29
30 「孤高」を気取れば友だちができるような甘い「時代」が「明治」だろう。この「ブーム」
31 は二十一世紀も国語科業界では「継続中」らしい。いい加減にしないか。

32
33 孤独な群衆とは、高度に工業化の進んだ経済的に豊かな社会、サービス産業の発達した
34 社会に発生する性格類型の1つである。この性格類型をもった人びとは、他人に対して常
35 に友好的であることを要求され、他人から好意を受けることがないと孤独感をもつ。
36 (『心理学辞典』「孤独な群衆」)

37
38 Sも、李徴も、「孤独な群衆」の一人なのだ。彼らは、自分のことを「群衆」よりは上位
39 の選民のように思いたくてならない。「大衆」でさえなければ人虎でもいい。自己欺瞞に失
40 敗したら、自殺や自虐の演技を始める。彼らは孤高を気取るが、実際には孤独に耐えられな
41 い「淋しい人間」だ。ちやほやされたい。本音では群れたがっている。「孤独な人間」は全
42 体主義を準備する。『メフィスト』(サボー監督) 参照。

43
44
45
46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3400 「自由と独立と己れ」の交錯する「現代」
3 3450 『山月記』
4 3453 カニバリズム

5
6 『人虎伝』の真相は、〈李徴はカニバリストになった〉というものだろう。

7
8 未開ノ蠻民ニハ人肉ヲ食フ者往々コレアリ怪シムニ足ラス、支那ノ若キハ夙ニ文明ノ
9 國ト稱シ道德仁義ヲ以テ高ク目標スル者ナリ、而ルニ古來史中人肉ヲ食ヒシコト續マ
10 シテ絶エス、

11 (神田孝平『支那人肉ヲ食フノ説』)

12
13 『狂人日記』(魯迅)の主人公は、周囲の人々をカニバリストと疑う。

14
15 『狂人日記』は文学的フィクション、文学的虚構^{きょこく}であるが、武宣県は全く血塗られた現
16 実である。

17 (鄭義^{ツェンイー}『食人宴席 抹殺された中国現代史』「3章 《人肉宴会》大流行」)

18
19 日本人は、良くも悪くも、中国文化のすさまじさを軽視しがちだ。

20 人肉嗜食には、三種ある。飢えを凌ぐだけの行為と、呪術的な行為と、病的な行為だ。た
21 だし、病的な行為は、呪術的な行為の無自覚な反復だろう。

22
23 きわめて熱心にカニバリズムの風習を守っている人びとでも、ふつうは軽々しく人を
24 食べたりはしない。また、犠牲者の身体のどの部分がカニバリズムの食卓に供されるか
25 については、たいてい厳しい選別がなされ、ほんの数片しか使われないこともある。そ
26 の場合心臓が使われることが多い。こうしたことのすべてが、厳密に儀式化される傾向
27 がある。

28 (フェリペ・フェルナンデス=アルメスト『食べる人類誌 火の発見からファーストフード
29 の蔓延まで』「第二章 食べることの意味——儀式魔術としての食べ物」)

30
31 非常事態の人肉嗜食を大袈裟に扱った『ひかりごけ』(武田泰淳)や『行き行きて、神軍』
32 (原正人監督)などは、鬱陶しい。『野火』(大岡昇平)は、ちょっぴり不条理かもしれない。
33 『ベンガルの虎』(唐十郎)は不条理だろう。『佐川君への手紙』(唐十郎)の主人公は精神
34 を病んでいる。彼は、食べてしまいたいぐらい好きな相手を食べちゃう。

35 だが、李徴は、彼らとは違う。

36 『人虎伝』から、次の三つの異本が構想できる。

- 37
38 I (伝奇) 李徴は魔物などによって虎にされた。ポーモン夫人『美女と野獣』参照。
39 II (猟奇) 李徴は精神を病んでカニバリストになった。『青頭巾』(上田秋成)参照。
40 III (不条理) 李徴は理由もなく虎に変身した。『変身』(カフカ)参照。

41
42 『山月記』は、これらのどれにも属さない。不合理であり、未完成だ。国語科教師は不合
43 理で未完成なのを文学的と勘違いするらしい。

44
45 (付記)『ALIVE 生きてこそ』(マーシャル監督)参照。

46
47
48

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3510 いけない「イゴイスト」
4 3511 つるしあげ

5
6 Sは「イゴイスト」なのか。

7
8 近代知識人のエゴイズムの問題を追究した作品。
9 (『日本国語大辞典』「こころ」)

10
11 「近代」と「知識人」と「エゴイズム」の関係が不明。「エゴイズムの問題」は意味不明。
12 こういう「問題」の使い方は「問題」だ。「追究した」結果、どんな答えが出たのか。
13 「エゴイズム」は〈利己主義〉と同じ意味か。

- 14
15 ① 自己の利害だけを行為の基準とし、社会一般の利害を念頭に置かない考え方。主我主義。
16 自己主義⇔利他主義。
17 ② 人間の利己心から出発して道徳の原理や観念を説明しよとする倫理学の立場。必ずしも
18 ①の意味での利己主義を主張するものではない。
19 (『広辞苑』「利己主義」)

20
21 さらにわからなくなった。

22
23 近代知識人のエゴイズムが自己否定に向う過程を描いた作品。
24 (『近現代文学事典』「こころ」)

25
26 「近代知識人のエゴイズム」は意味不明。〈「エゴイズムが」～「に向う」〉は意味不明。
27 「自己否定」は「自己自身のあり方を否定すること。⇒否定の否定」(『広辞苑』「自己否定」)
28 とされ、『近現代文学事典』は誤用のようだ。ただし、『広辞苑』の説明も意味不明。

29
30 形式論理では「Pでないことはない」のように肯定に戻る。二重否定。
31 (『広辞苑』「否定の否定」)

32
33 日本近代文学研究者は、「自己否定」を〈自己批判〉と混同しているのだろうか。

34
35 個人および政党などが自己の行為、方針、思想をみずから誤謬として反省すること。こ
36 れが政治的意味をもつのはマルクス=レーニン主義の場合である。
37 (『ブリタニカ国際大百科事典』「自己批判」)

38
39 「自白や過誤の告白が強制される場合は、自己批判の本来的な意味が失われ、「つるしあ
40 げ」に近くなる」(『ブリタニカ国際大百科事典』「自己批判」)という。

41 自己批判が済んだら、正しい生き方を始めることができるはずだ。「貧弱な思想家」は自
42 己自身の「つるしあげ」を「自己否定」と呼ぶのかもしれない。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3510 いけない「イゴイスト」
4 3512 エリート

5
6 本文に「エゴイズム」という言葉は出ていない。

7
8 「イゴイストは^{いけな}不可いね。何もしないで生きていようというのは横着な^{りょうけん}了簡だからね。
9 人は自分の有っている才能を出来るだけ働^{ママ}らせなくちゃ^{うそ}嘘だ」
10 私は兄に向かって、自分の使っているイゴイストという言葉の意味が^よ能く解るか^よと聞き
11 返して^{ママ}遣りたかった。

12 (夏目漱石『こころ』「中 両親と私」十五)

13
14 「兄」が「イゴイスト」と疑っているのは、「何もしないで生きていよう」としているS)
15 だ。Pは、〈Sには「才能」がある〉と示唆したらしい。Pの空想するSは「すぐれた資質
16 や技能をもち、社会や組織の指導的立場にある階層・人々」(『広辞苑』「エリート」)だろう。
17 だから、「兄」はSの批判を始めたのだ。「兄」の発言は常識的なものだ。「才能」のあるエ
18 リートは社会貢献をすべきだ。なぜなら、ある人がエリートになれたのは、誰かによって「才
19 能」や知識や技術を与えられたからだ。したがって、エリートは、その誰かに恩返しをしな
20 なくてはならない。その誰かは親だったり神だったりする。近代では、教育機関を創設した「国
21 家社会」だろう。ただし、Sは「現代」の社会を嫌悪しているらしい。

22 「自分の使っている」は不要。「能く解るか」の「能く」は嫌味。「聞き返して」は〈言い
23 返して〉の誤りか。そうではなくて、Pは「兄」の発言を質問と誤解したか。つまり、「不可
24 いね」が〈^{いけな}「不可い」よ「ね」?〉と聞こえたか。結局、Pは聞き返さなかったようだが、
25 その理由は不明。実際にPが聞き返した場合、当然、「兄」は〈一応「解る」よ〉などと答
26 えたろう。その後、「兄」は〈じゃあ、御前こそ「自分の使っているイゴイストの意味が^よ
27 能く解るか」〉と「聞き返して」きたかもしれない。そのとき、Pはどのように対応したろう。
28 語られるPは〈聞き返して^{ママ}遣り」たいよ〉と、頭の中にいるDに訴えたいらしい。Dは〈わ
29 かるよ、その気持ち〉と応じたい。このDを聞き手Qとして設定したのがP文書だ。
30 Pの考えでは、Sは「兄」の考える「イゴイスト」に該当しない。このことは確かだろう。
31 では、Pの意味ではどうなのか。

- 32
33 I Pの考えでは、SはPの意味の「イゴイスト」だ。
34 II Pの考えでは、SはPの意味の「イゴイスト」でもない。

35
36 語り手Pは、どちらを暗示しているのだろう。つまり、語り手Pにとって都合のいい聞き
37 手Qは、どちらを選ぶのだろう。大雑把に考えると、IIだろう。だったら、なぜ、語り手P
38 は、〈Sは「イゴイスト」ではない〉と明言しないのか。いや、語られるPは、なぜ、「兄に
39 向って」このことを明言しなかったのか。「兄」に抗弁することが不道徳だからか。不明。
40 「イゴイスト」のP的意味を『私の個人主義』のN式個人主義と関連付けて説明する人が
41 いる。その場合、〈P式イゴイスト=N式個人主義者〉ということになる。

42 『私の個人主義』そのものが意味不明だから、話がややこしくなるばかりだ。

43
44
45
46

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3510 いけない「イゴイスト」
4 3513 エゴチスト

5
6 〈エゴイズム〉の訳語らしい「自我主義」について確認する。

7
8 実践的には自己とその目的の価値を強調する立場で、自己保存本能の自然の発露であ
9 り、人格性の発展にとって必須の態度である。積極的意味でいわれるときは egotism の語
10 が用いられることがある。

11 (『ブリタニカ国際大百科事典』「自我主義 (egoism)」)

12
13 P的「イゴイスト」の意味は〈エゴチスト〉だろうか。

14
15 フランスの作家スタンダールの用語。自我主義と訳され、倫理上、理論上の利己主義
16 egoism ではなく、作家が自己の肉体的、精神的個性を精密に研究し分析する態度をさす。
17 (『哲学事典』「エゴティスム」)

18
19 中年Sに「綿密に研究し分析する態度」が認められるか。

20
21 しかし、^{ママ}少なくともスタンダールが『エゴチスムの回想』を書いているころには、前記の
22 ような用法は存在しなかったし、スタンダール自身も世間並に「自己についてのみ語る悪
23 癖」、「悪しき自己中心癖」の意で用いていたはずである。

24 (富永明夫「スタンダール『エゴチスムの回想』解題」)

25
26 「遺書」は「自己についてのみ語る悪癖」の産物だろう。

27
28 ^{だれ}誰にも^と解けない^{なぞ}謎を作り出すのが、わたしの大きな^{ゆめ}夢だった。

29 しかし、どんな^{げいじゅつか}芸術家も、^{げいじゅつ}芸術それだけでは満足できないのに、わたしは気づいた。
30 どうぜん、ほかの人に^{みと}認めてほしいと思うものではないか。

31 自分の頭のよさを、ほかの人にわからせたいという、いかにも人間らしいあさはかな^{ねが}願
32 い。正直に言えば、その^{ねが}願いが、わたしにもあったということだ。

33 (アガサ・クリスティー『そして^{だれ}誰もいなくなった』)

34
35 Kの死の^{なぞ}「謎」は解けていない。『話虫干』(小路幸也) 参照。

36
37 深い考えでなされたことも、軽はずみな馬鹿げたことも、反省の時間にはおあつらえ向
38 きである。これらの主人公たちは、刺激的な生活には足を踏み入れず、ただ陰でごまかし
39 をやるだけだ。

40 (エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』「第一部 塵埃」「ものを書くキッチュ」)

41
42 Sは「キッチュ」か? 「キッチュ」に対する好悪などは別問題。

43
44
45
46
47

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
- 3 3520 日本近代個人主義思想の限界その他
- 4 3521 個人主義と利己主義

5
6 さらに、話がややこしくなる。

7
8 前半は「私」という学生の手で間接的に表現、後半は「先生」の遺書という直接的告白
9 体の対照的手法で、近代エゴイズムが必然に自他を傷つけるというテーマを追究、明治の
10 知識人の孤独な内面をあばいた傑作である。

11 (『ブリタニカ国際大百科事典』「こゝろ」)

12
13 「近代エゴイズム」は意味不明。「自他」は変。エゴイストが自分を傷つけるのだろうか。
14 そうだとすると、〈自殺はエゴイズムの極致〉ということになる。マゾか。「明治」は「明治
15 の精神」からだろうが、「明治の精神」は意味不明。「あばいた」は「私の過去を^{あば}計ってもで
16 すか」(上三十一)からだろうが、実際に「あばいた」ことになっているのだろうか。

17
18 罪悪感や孤独感、人間憎悪の念がついに自己否定に至るといふ、個人主義思想の極致を
19 描く。

20 (『大辞泉』「こころ」)

21
22 「自己否定」とは自殺のことだろうか。この辞書では、「自己否定」は「それまでの自己
23 であることをやめること」と説明してあるが、意味不明。「やめること」には自殺も含まれ
24 るか。「個人主義」という言葉は『こころ』に出てこない。「極致」は自殺か。個人主義者は
25 自殺すべきか。Sの自殺の有様はまったく描かれていない。死期や死因すら、不明。

26 『大辞泉』の「個人主義思想」は、すでに挙げた『日本国語大辞典』や『広辞苑』や『ブ
27 リタニカ』などの「エゴイズム」と同じだろうか。

- 28
29 ① 《individualism》国家・社会の権威に対して個人の意義と価値を重視し、その権利と
30 自由を尊重することを主張する立場や理論。⇒全体主義
31 ② 「⇒利己主義」に同じ。

32 (『大辞泉』「個人主義」)

33
34 この辞書は怪しい。

35
36 利己(りこ)主義とは違ふ。⇒全体主義。

37 (『学研 小学国語辞典』「個人主義」)

38
39 『大辞泉』の②は、小学生でも知っておくべきことを知らない人の誤用だろう。
40 では、『日本国語大辞典』と『広辞苑』と『ブリタニカ』と『大辞泉』の『こころ』に関
41 する説明に用いられた「エゴイズム」や「個人主義」などのどれかは誤用なのだろうか。あ
42 るいは、どれも正しいのだろうか。もう、お手上げ。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3520 日本近代個人主義思想の限界その他
4 3522 エゴイズムと私情

5
6 〈個人主義・利己主義・エゴイズム〉といった言葉を、私は使いこなすことができない。
7 Nの研究者や評論家たちは、こうした言葉を自分語にしているのではなかろうか。
8 彼らは同業者の用いる自分語も理解できないはずだ。

9
10 「行人」の発展で、孤独感や人間憎悪の念に救いがたい絶望を感じ、自己否定に駆り立
11 てられる個人主義思想の限界を把握したとされる。

12 (『広辞苑』「こゝろ」)

13
14 「発展」は意味不明。〈「念に」～「感じ」〉は変。「救い」の主語が不明。「人間憎悪」と
15 「絶望」の関係が不明。「自己否定」は意味不明。「個人主義思想の限界」は意味不明。「エ
16 ゴイズムへの頹落、全体主義への転化、大衆社会におけるアパシーの現出といった否定面」
17 (『マイペディア』「個人主義」)のこことか。

18
19 ここにおいて、国家・教会・神・道徳およびそれらに関する諸秩序、それに人間性とい
20 う概念等は実体のない亡霊にすぎないと彼は論断した。そして自らは、頭の中だけに存在
21 するこれら精神の産物に煩わされることなく、自らにとって唯一無二である自分自身を
22 みいだし、これを確固として所有し、この確固たる自分自身をのみ生きると宣言する。徹
23 底した個人主義を説いたこの著作によって、一躍名声を博す。

24 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「シュティルナー」高山守)

25
26 「ここ」および「この著作」は『唯一者とその所有』だ。

27
28 彼の思想は無政府主義者たちに迎えられたほか、ニーチェの「超人」の思想にも影響を
29 与えた。20世紀実存主義の一つの源泉とみなされることもある。

30 (『ブリタニカ国際大百科事典』「シュティルナー」)

31
32 日本人の頭の中では、〈エゴ・イズム／私情・主義／^{わたくし}私する・癖〉などといった考え、
33 いや、考えに至らない和洋中の言葉の雰囲気混交して漂っているのではないか。そして、
34 そのあやふやな状態を〈思考〉と呼びならわしているのではないか。

35
36 ① 自我。我。

37 ② エゴイスティック・エゴイズムの略。

38 (『広辞苑』「エゴ」)

39
40 世間では、〈エゴイズム〉を無根拠にマイナスの価値の事柄と決めている。その「略」で
41 ある〈エゴ②〉を〈エゴ①〉に送り返す。日本語の〈エゴイズム〉の真意は〈いけないエゴ
42 のイズム〉だろうか。いや、意味など、ありはしない。罵詈雑言だろう。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3520 日本近代個人主義思想の限界その他
4 3523 空き巣狙いの個人主義

5
6 高等学校では、次のように教わるようだ。

7
8 ホッブズは一国の主権があいまいなものであれば、内乱が起こり各人の自己保存は危
9 なくなることを当時のイギリスの社会情勢そのものから把握していた。そこでかれは、強
10 大な主権の絶対性を主張したといえよう。このことは、ホッブズを絶対君主や独裁者の擁
11 護者だとする批判を生んだ。しかし、平等な個人の自然権から出発し社会契約を通じて国
12 家を設立するという理論は、国家とはほんらい国民の安全と平和を保持するためにつく
13 られたものであるという主張をその中核とし、国家主権の絶対性も国民ひとりひとりの
14 自然権にもとづくと考えられている。これは近代民主主義の基本原則として、ロックやル
15 ソーに継承されていく。

16 (藤田正勝『理解しやすい倫理』)

17
18 明治初期において、「一国の主権はあいまいなもの」だったろう。昨日勤王、明日は佐幕。
19 「山嵐」は会津出身の不満分子。ちなみに、令和でも、会津戦争は「継続中」らしい。

20
21 美濃部は19世紀ドイツの支配学説にならって主権は法人としての国家に帰属するとい
22 う考え(国家法人説)をとっていた。この考えは、天皇にこそ主権がある(天皇主権説)
23 とする穂積八束(ほづみやつか)・上杉慎吉の憲法学説ともともと対立するものであったが、
24 1930年代半ばまではむしろ公認の支配学説であった。

25 (『日本歴史大事典』「天皇機関説」)

26
27 「日本国憲法下でだれが元首かは必ずしも明確ではない」(『ブリタニカ』「元首」という。
28 「日本国憲法」は前文と第一条で国民主権を定めているが、だったら大統領制にしないと
29 不合理だろう。戦後の日本国の主権も「あいまいなもの」であり、いまだに近代国家のな
30 りすましを続けているわけだ。このことと文豪伝説は、決して無関係ではあるまい。

31
32 一体国家というものが危くなれば誰だって国家の安否を考えないものは一人もない。
33 国が強く戦争の憂^{うれい}が少なく、そうして他から犯^{ママ}される憂がなければいほど、国家的観
34 念は少なくなって然るべき訳で、その空虚を充たすために個人主義が這入ってくるのは
35 理の当然と申すより外に仕方がないのです。

36 (夏目漱石『私の個人主義』)

37
38 「国家というもの」は〈天皇〉が適当か。「危うく」なってからでは手遅れかもしれない。
39 「誰だって」は誇張しすぎ。敗戦すれば国家がなくなると決まっているわけではない。どの
40 ように「安否を考え」るかは、人によりけり。「一人もない」は不当な誇張。

41 「戦争の憂^{うれい}」は意味不明。「国家的観念」は意味不明。「その空虚を充たすために個人主
42 義が這入ってくる」なんて、まるで空き巣狙いだね。「理の当然」は意味不明。

43
44
45
46
47
48

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
- 3 3530 個々人の主義
- 4 3531 「撲殺し合う」

5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

Nは、個人主義と国家主義との対立について、異様なまでに矮小化している。

必竟ずるにこういう事は実際程度問題で、いよいよ戦争が起った時とか、危急存亡の場合とかになれば、考えられる頭の人、——考えなくてはられない人格の修養を積んだ人は、自然そちらへ向いて行くわけで、個人の自由を束縛し個人の活動を切り詰めても、国家のために尽くすようになるのは天然自然とっていいくらいなものです。だからこの二つの主義はいつでも矛盾して、いつでも撲殺し合うなどというような厄介なものでは万々ないと私は信じているのです。

(夏目漱石『私の個人主義』)

「こういう」がどうか、不明。だから、「程度問題」かどうか、不明。「いよいよ」は宙に浮いている。「戦争が」以下は、「一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ」(『教育ニ関スル勅語』)の拙い言い換えだろう。「考えられる頭」は意味不明。〈「教育勅語」を暗誦できる程度の「頭」の持ち主〉と、ちゃんと言えればいい。「考えられる人」で「考えなくてはられない」ことはない「人」は、いるのか、いないのか。〈なくてはられない〉は夏目語。「自然」はNの愛用語で、彼は根拠や論理が貧弱な場合にこれを用いる。「そちら」はどちら。「束縛し」と「切りつめても」の主語が不明。「天然自然とって」はいけないとしたら、どのように言うのか。Nは「教育勅語」を鵜呑みにしてしまい、それが「天然自然」のように感じ、出典すら思い出せないような「頭」になっていたか。

「教育勅語」は、国民に天皇制国家への忠誠を命じるとともに祖先崇拜を強調し、国家神道の事実上の経典となった。

(『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「国家神道」村上重良)

「教育勅語」は経典のない国家神道のための「事実上の経典」になった。言うまでもなからうが、第二次大戦後、「国会で排除・失効確認を決議」(『広辞苑』「教育勅語」)した。

「教育勅語」が「明治の精神」と無縁でないとしたら、「明治の精神」も明治とともに滅びたのではなく、第二次大戦を潜り抜け、昭和から平成、そして令和以降も「継続中」なのに違いない。『こころ』を「再評価する動き」がなくなるのは、そのせいだろう。

「だから」は無効。「この二つの主義」は、「国家主義」と「個人主義」だ。「いつでも」ではないとしても、「矛盾して」いるようで「厄介なもの」になった場合の話をするべきだ。

「主義」が「撲殺し合う」ものか。「万々」は強がり。「信じている」のはNの勝手。

自称個人主義者の言説は、あらゆる個人主義をいけないエゴイズムと同一視する人々、つまり国家主義者や全体主義者の言説との対立においてのみ意味を有する。右でないのが左だ。上でないのが下だ。どちらでもないのは、ないのと一緒に。風見鶏。二股膏薬。のだいこ。

『私の個人主義』におけるN式個人主義と個々人の主義は区別できない。個々人の主義には、当然、個人主義者の撲殺を正当化するような主義も含まれる。

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
- 3 3530 個々人の主義
- 4 3532 民本主義論争

5
6 Nは民本主義の受け売りみたいなことをやりかけて失敗しているようだ。

7
8 1910年代半ば、吉野作造によって精確に定義され主唱された民主主義論。主権の所在
9 には触れず、その運用の民主化を主張、政党内閣制・普通選挙制を根拠づけた。

10 (『広辞苑』「民本主義」)

11
12 ところが、普通選挙法が実現したのと同じ年、一九二五(びっくりふたご)年に、治安維
13 持法も制定された。

14
15 この語は日露戦後にすでに使用されており、とくに『萬朝報(よろずちょうほう)』の
16 記者茅原華山(かやはらかざん)が1912年(明治45)より「貴族主義・官僚主義・軍人
17 政治」の対立概念として同紙上、および翌13年(大正2)自ら創刊した雑誌『第三帝国』
18 で使用した。東京帝国大学の保守的教授井上哲次郎や上杉慎吉(うえすぎしんきち)も、
19 帝王は臣民の福利を重んずべしとの趣旨で、民本主義を唱えている。この語に新しい生命
20 力を吹き込み、一時代を画する思潮を作り出したのは、新進の東大教授吉野作造(さくぞ
21 う)であった。彼は『中央公論』1916年1月号に発表した「憲政の本義を説いて其(そ
22 の)有終の美を済(な)すの途(みち)を論ず」において、欧米の政治概念「デモクラシ
23 ー」(の意味内容)から、主権在民を意味する「民主主義」は君主国たる日本には適用で
24 きぬとして排除し、政治の目的は民衆の利福にあり、政策の決定は民衆の意向に従うべし
25 との意味だけを残して、「民本主義」と名づけた。

26 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「民本主義」松尾尊兌)

27
28 『私の個人主義』は、『こころ』の連載が終わった年、一九一四年(大正3)の講演だ。
29 個人と社会のバランスを論じる前に、言葉の意味を確定しなければならない。

30
31 吉野作造の民本主義論が雑誌『中央公論』の1916年1月号に掲載されたことを契機に
32 引き起こされた民本主義論争の過程で、山川均(ひとし)らの社会主義者が、吉野の主張は
33 人民主権論抜きの不徹底なデモクラシー論だと批判した。また上杉慎吉、井上哲次郎、内
34 田良平らの国家主義者は、人民の利益幸福の実現を目指すわが国固有の仁政論的な民本
35 主義を対峙(たいじ)させることによって、民意尊重を核とする吉野らの民本主義の反国体的
36 な危険性を糾弾し、これを否定しようとした。

37 (『日本歴史大事典』「民本主義」栄沢幸二)

38
39 私が不愉快なのは、民本主義論争の総括が教科書的になされていないように思われるこ
40 とだ。山川らと井上らのどちらかに軍配をあげたいわけではないし、吉野に同情しているの
41 でもない。論争が尻切れ蜻蛉で終わっているらしいことを危ぶむ。論争に加われそうもない
42 Nの『私の個人主義』が重んじられすぎていることを、もっと危ぶむ。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
- 3 3530 個々人の主義
- 4 3533 ポピュリズム

5
6 社会的な事柄に関して論じるとき、意味が共有されていない言葉を用いる人は怪しい。

7
8 近代国家の政治原理としては、主権は国民にある（国民主権主義）、政治は国民が選出
9 した代表者からなる会議体（議会）の制定した法律によって運営される（法の支配）、国民
10 の権利・自由は最大限に保障され（人権保障）、そのためには民主的政治制度（代議制・
11 権力分立）の確立を必要とする、などがあげられる。

12 (『日本大百科全書 (ニッポニカ)』「近代国家」田中浩)

13
14 Nの用いる語句の意味は、しばしば、私が知っているつもりの意味では理解できない。そ
15 れが百年前の意味か、専門語の意味か、夏目語の意味か、そんなことさえわからない。

16
17 また 20 世紀の民主主義は極度に参政権を拡大し、また直接民主主義的制度をも採用し
18 たが、それは大衆社会状況がそのまま政治過程に浸透することを許したものであり、事実
19 ファシズムはマス・デモクラシーを母体として出現したのである。

20 (『ブリタニカ国際大百科事典』「民主主義」)

21
22 かつて国際政治学者として知られていた人物が、〈年収三百万円以下の人間には選挙権は
23 与えるべきではない〉という趣旨の発言をしたことがある。ただし、〈三百万〉は私の記憶
24 違いかもしれない。後に、その人物は東京都知事になり、〈セコい〉となじられて辞職した。
25 セコい人の後で都知事になりたがった自称アウトサイダーの鳥ナントカさんも〈納税者に
26 は選挙権がある〉という趣旨の発言をした。この人は、セコいどころか、無知。

27 「ファシズムの母体」となるような思潮を指して、俗に〈ポピュリズム〉という。

28 俗に、大衆に迎合するような政治姿勢をいう。

29 (『日本国語大辞典』「ポピュリズム」)

30
31
32 〈裁判員制度はポピュリズム〉などという人がいる。だが、量刑を決めさせるような裁判
33 員制度は、大衆迎合どころか、その逆の素人いじめだ。

34
35 ジッド、バレリー、プルーストラによって知的難解度を強めていた文学を民衆の手に返
36 そうとするもので、民衆をあたたかで誠実な目でとらえようと試みたが、人間の卑小面
37 のみを描こうとする傾向があり、その点をコミュニスト作家から批判された。

38 (『ブリタニカ国際大百科事典』「ポピュリズム」)

39
40 「知的難解度」がどんなに上昇しようと、趣味の範囲内なら、構わない。だが、俗語や自
41 分語などの応酬が日常的になった社会は、もう、終わりだろう。バベルの塔だ。

42 日本語の終わりを、Nは準備した。あるいは、前世代から引きついで広めた。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3540 「現代」は意味不明
4 3541 現代あるいは近代

5
6 「自由と独立と己れに^み充ちた現代」は、二十一世紀から見たら〈近代〉だろうか。

7
8 ① 今の時代。例現代人。

9 ② 歴史(れきし)の上で時代のくぎり方の一つ。ふつう、日本では明治維新(めいじい
10 しん)から今までの時期をいう。

11 (『学研 小学国語辞典』「現代」)

12
13 Sの言う「現代」は、歴史用語②であると同時に、俗語①でもあるようだ。

14
15 ① ちかごろの世の中。

16 ② 歴史(れきし)上の時代のわけ方の一つ。ふつう、日本では明治(めいじ)時代からあ
17 と、西洋では一九世紀からあとをさす。

18 (『学研 小学国語辞典』「近代」)

19
20 「ふつう」の小学生にとって、〈現代〉と〈近代〉は同じ意味だ。中学生にとっては、〈現
21 代〉は「歴史時代区分の一つで、特に近代と区別して使う語」(『広辞苑』「現代」)だろう。

22
23 日本史では明治維新から太平洋戦争の終結までとするのが通説。

24 (『広辞苑』「近代」)

25
26 『こころ』の内部の世界における「現代」と『広辞苑』の「近代」は違う。「明治維新か
27 ら」ではあろうが、P文書で語られるSにとっての「現代」は「今まで」つまり明治四十年
28 頃までだ。この語を用いたときのSは、明治の終わりを知らない。ただし、「遺書」の語り
29 手SやP文書の語り手Pや『こころ』の読者は、明治が終ったことを知っている。

30 高校生にとって、〈現代〉は〈近代後期〉か。しかし、広い意味での近代はまだ終わって
31 いないはずだから、〈後期〉とは言えない。その一方で、〈近代は終わった〉とも言える。

32
33 1980年代の世界的な思潮を概括する言葉。建築用語として使われたのが発端。モダニ
34 ズム(とりわけ国際様式建築)に顕著な〈単一性〉〈普遍性〉への志向に対する、〈多様性〉
35 〈歴史性〉を主張する傾向。一定の様式や主義を指す言葉ではないため、単に〈ポスト・
36 モダン〉とも称される。

37 (『百科事典マイペディア』「ポスト・モダニズム」)

38
39 「近代主義を超えようとする傾向」(『広辞苑』「ポスト・モダン」)に共通性がなくても、
40 狭い意味での近代社会が終わったことは、誰でも実感しているはずだ。その終わりは、言う
41 までもなく、インターネットの普及による電脳社会の始まりだ。AIの人格と匿名のネット
42 住民の区別ができなくなったとき、近代は完全に終わることだろう。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
- 2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
- 3 3540 「現代」は意味不明
- 4 3542 近代精神

5
6 暗記するのは簡単かもしれないが、理解するのは困難だ。

7
8 結局、(1) 人間主義、(2) 科学的合理主義、(3) 人格の自律、この三つが近代精神
9 の核心である。

10 (『哲学事典』「近代精神」)

11
12 結局、こんな総括は、私には理解できない。『こころ』の読者には理解できるのだろうか。

13
14 このような科学の暴力から人間を解放し、人間性を擁護することに現代ヒューマニズ
15 ムの最大の問題があるといっただいであるが、この問題の解決に有力な根拠を提供す
16 るような思想も、またそれに向かって働く有効な運動もまだ十分に形づくられていない
17 というのが偽らざる現状であろう。

18 (『哲学事典』「ヒューマニズム」)

19
20 この事典の「現状」は昭和四六年のもの。

21
22 自律的人格と科学的法則認識との二つが、近代的合理主義をかたちづくる両極である。

23 (『哲学事典』「近代的合理主義」)

24
25 「この二つ」は矛盾するように思える。

26
27 本来的な自己が立てる法則に自己が従うのであるから自律的意志は自由である。人間
28 はしかし意志が感性に触発されもする有限的理性者であるから、もっぱら理性のみに規
29 定される純粹意志、自律的意志は、実現さるべく課せられた理念にとどまる。

30 (『哲学事典』「自律」)

31
32 この事典では「近代精神」の限界が宣告されている。だから、Sの「覚悟」は、あたかも、
33 昭和の「現状」を予知したものに誤読できてしまう。

34
35 (なお、たとえば、日本などの後発諸国では先進技術などの導入による産業化が優先さ
36 れ、外面的な文物や制度の導入・模倣がなされたが、古い共同体的諸関係や価値体系が温
37 存されたため、政治・社会の近代化は不徹底に終わるか、形骸(けいがい)化するに留ま
38 り、産業の近代化が政治・社会の近代化に先行した)

39 (『日本大百科全書(ニッポニカ)』「近代化」濱嶋朗)

40
41 Sのいう「現代」とは、「近代化は不徹底に終わるか、形骸(けいがい)化する」しかな
42 い時代のことだろう。この「現代」は、二十一世紀も「継続中」だろう。

43
44
45
46
47
48
49

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3540 「現代」は意味不明
4 3543 「母のない男」
5

6 Sは、Pの「兄」が指摘したような〈いけない「イゴイスト」〉だったのか。だったら、
7 Pの「兄」の見解は正しく、PはSを買い被っていたことになる。

8

9

10

11

12

13

14

15

16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

現代の社会は孤立した人間の集合体に過ぎなかった。大地は自然に続いているけれども、その上に家を建てたら、^{いよ}忽ち^{たちま}切れ切れになってしまった。家の中にいる人間もまた切れ切れになってしまった。文明は我等をして孤立せしむるものだと、代助は解釈した。

代助と接近していた時分の平岡は、人に泣いて^{もろ}貰う事を喜^{ママ}ぶ人であった。今でもそうかも知れない。が、^{ちっ}些ともそんな顔をしないから、^{わか}解らない。否、^{いな}力めて、人の同情を^{しりぞ}斥ける様に振舞っている。孤立しても世は渡ってみせるといふ我慢か、又はこれが現代社会に本来の^{めんもく}面目だと云う悟りか、^{どっち}何方かに帰着する。

(夏目漱石『それから』八)

「家の中にいる人間」は、どうして「切れ切れになってしまった」のだろう。個室を作ったからかな。いや、話は逆だろう。代助の「家の中にいる人間が切れ切れになってしまった」のが原因で、彼には「現代の社会は孤立した人間の集合体」に思えるようになったのだろう。

Sは、代助の想像する平岡に似ている。ただし、Sの場合、「^{どっち}何方か」ではなく、〈何方も〉だろう。この「悟り」は皮肉で、真意は〈生悟り〉だ。Sの「覚悟」はどうだろう。この言葉をSに奉ったのはPだが、Pに皮肉のつもりはなかろう。作者の皮肉かもしれない。Sの場合、「この淋しみ」を耐えられないものにしてしまったのは、「家の中」の「ひっそり」のせいだろう。つまり、静のせいだ。近代人が共有しているのかもしれない孤立感とSに固有の育ちの悪さが原因の「この淋しみ」を、静は慰撫すべきだった。静にその力がなかったのか。そうではない。その力を発揮することができなかったのだ。なぜか。Sがその力を抑制しているからだ。なぜ、抑制するのか。Kの死に対する後ろめたさか何かのせいだ。

こうした物語を作者は暗示している。ただし、虚偽の暗示だ。

中年Sには、〈自分は静に愛されている〉という実感がない。つまり、被愛感情がない。ところが、〈静はSを愛する〉という物語を疑いたくない。ジレンマだ。

青年Sは被愛妄想的気分^に酔うこともあった。だが、疑いもした。ただし、自分の感覚を疑うのではなく、静の「技巧」を疑った。この疑いを排除するためにKを導入した。不合理な試みだ。Kを排除することはできた。しかし、その結果、Sは自分の精神の半分を失った。Kとは、被愛妄想の世界に安住することのできるS自身の象徴だったのだ。

〈XがYを愛する〉という物語があるとしよう。Sは、〈YをKに置き換えるとすぐにSに置き換えよう〉と企んだ。また、同時に、Xが静になることを望んだ。そのSは、「自叙伝」の主人公Sだ。最初からYにSが入るのなら、Xには「母」が入ったはずだ。

しかし、〈「母」はSを愛する〉という物語は、成り立たない。Sも、Kと同様、「母のない男」だったからだ。いや、Sこそが「母のない男」だったのだ。Sの「自叙伝」の根底をなすはずの〈愛される「資格」のないS〉の物語を、作者は隠蔽しようとした。ただし、それを断片的に暴露した。こうした矛盾のせいで、『こころ』は意味不明になった。

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3550 「義務」と「権利」
4 3551 「個人主義の淋しさ」
5

6 Nの考え方は、しばしば、混乱した。誤った前提から出発し、袋小路に入る。普通の人なら、前提を疑うものだ。しかし、Nは疑わない。むしろ、袋小路を思想の深さか何かに見せかけようと頑張る。軽薄才子のスタイルだ。そのことに気づかない人々も軽薄才子だ。

7
8
9 袋小路とは、たとえば、「そこが個人主義の淋しさです」（『私の個人主義』）といった宣言の「そこ」だ。この袋小路に入るようになった前提は、次のような戯言だ。

10
11
12 元来をいうなら、義務の附着しておらない権力というものが世の中にあるはずがないのです。私がこうやって、高い壇の上からあなた方を見下して、一時間なり二時間なり
13
14 私のいう事を静肅に聴いて頂^マたく権利を保留する以上、私の方でも貴方方を静肅にさせるだけの説を述べなければ済まないはずだと思います。

15
16 (夏目漱石『私の個人主義』)

17
18 「義務」と「権力」の対比は不可解。次の文では「権利」が出てくる。「権利」の本来の意味は「権力と利益」（『日本国語大辞典』「権利」）だ。近代日本語の「権利」は転用語で、
19
20 “right”の訳語だ。「権力」を英訳すれば“power”だろう。“right”には〈正義〉という
21
22 意味があるが、“power”にはない。そのことを、Nは軽視していないか。

23 「保留」は〈保有〉の間違いだろうが、〈行使〉が適当。「はず」は「義務」か。

24 〈権利〉と〈義務〉は一対一対応しない。〈自然権〉に対応する義務があるか。

25 「義務」についても同様。

26 「孤立義務（=旧憲法下の、権利と対立しない、納税義務・兵役義務の類）」
27 (『類語例解辞典』515-20【対立（たいりつ）／鼎立（ていりつ）／確執（かくしつ）】）
28

29 Nは、誤った俗説を前提としたため、袋小路に入った。二種の「権利」の意味の混同がし
30
31 くじりの原因かもしれない。こうした混同は「明治の精神」の淵源かもしれない。

32
33 ふつう、人Aが人Bに権利をもてば、BはAに義務をもつことを意味する。だが、この
34
35 関係はつねに成立ちはしない。

36 (『現代哲学事典』「権利と義務」杖下隆英)

37 Nは、講演会における講師と聴衆という特殊な関係を、人間関係の全般に適用しようと企
38
39 み、混乱してしまった。会場の出入りが自由であれば、つまり、聴衆に退場の「権利」があ
40
41 れば、講師が「済まない」と思う「義務」や何かは生じないない「はず」なのだ。

42 彼は、不平等な関係を「元来」として設定してしまった。上下関係以外の人間関係、いわ
43
44 ゆる自由で対等な人間関係について、誤った印象を抱いている。自他を自分の偏見や謬見の
45
46 枠に閉じ込めてから、その枠内にいる自分に厳しくし、他人に優しくしてやっても、他人は
47
48 喜ぶまい。その程度のことさえ、Nには想像できない。夏目宗徒にも想像できない。

- 1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3550 「義務」と「権利」
4 3552 「追窮する勇氣」

5
6 「権利」という言葉は、『こころ』においてブラックボックスのように使われている。

7
8 然しこれはただ思い出した^{ついで}序に書いただけで、実はどうでも構わない点です。ただ其
9 所にどうでも可くない事が一つあったのです。茶の間か、さもなければ御嬢さんの^{へや}室で、
10 突然男の声が聞こえるのです。その声が又私の客と違って、^{すこ}頗ぶる低いのです。だから何
11 を話しているのかまるで分らないのです。そうして分らなければ分らない程、私の神経に
12 一種の^{こうふん}昂奮を与えるのです。私は坐っていて変にいらいらし出します。私はあれは親類な
13 のだろうか、それとも^{ただ}唯の知り合いなのだろうかとまず考えて^{ママ}見ます。坐っていてそ
14 んな事の知れよう^{はず}筈がありません。そうかと云って、^た起って行って障子を開けて見る訳には
15 猶行きません。私の神経は震えるというよりも、大きな波動を打って私を苦しめます。
16 私は客の帰った後で、きっと忘れずにその人の名を聞きました。御嬢さんや奥さんの返事
17 は、又極めて簡単でした。私は物足りない顔を二人に見せながら、物足りるまで追窮する
18 勇氣を^も有っていませんでした。権利は無^も論有っていませんでした。

19 (夏目漱石『こころ』「下 先生と遺書」十六)

20
21 「これ」は、この少し後にも出ている「私の客」のこと。「これ」は、「どうでも構わない
22 点」ではない。「実は」「これ」のせいで「どうでも^よ可くない事」が起きたのだ。

23 「茶の間」には静の母がいるのだろう。「室で」は〈^{へや}室〉から〉が適當。「男の声」は幻
24 聴だ。語り手Sは真相を^{かく}隠蔽している。作者は^{かく}隠蔽工作に加担している。だから、読者も加
25 担せざるを得ない。

26 「客と」は〈^{かく}客〉の声「と」の不当な略。「男」は「私の客と違って」いた。「私の客」
27 は実在したが、「男」は実在しなかったのだ。「^{すこ}頗ぶる低いの」は幻聴だからだろう。

28 「何を話しているのか」想像できたはずだ。だから、落ち付かなかった。

29 「分らなければ分らない程」は意味不明。「一種の^{こうふん}昂奮」は意味不明。「^{こうふん}昂奮を与える」は
30 意味不明。「与える」の主語はDだろう。

31 「変にいらいら」は意味不明。

32 「障子を開け」なくても、「障子」に近づくだけでも、言葉が聞こえたかもしれない。な
33 ぜ、近づかなかったのか。〈「男」は実在しない〉と知っていたからだ。

34 〈「私の神経は」～「私を苦しめます」〉は意味不明。

35 「御嬢さんや奥さんの返事」の実例が、私には想像できない。

36 「権利」を得る方法はなかったのか。「権利」が意味不明だから、「いなかったのしょう」
37 と結んでしまったのだろう。

38 「勇氣」がなかったのは、「権利」がなかったからだ。「権利」のない「勇氣」は蛮勇だ。
39 Sが蛮勇をふるって静母子を拷問したとしよう。そのとき、彼女たちは何を語ったろう。

40 Sの「権利」に対応する静母子の「義務」があるとすれば、それはどんなことか。不明。
41 「義務」の内容が不明だから、Sに「権利」がなかったのかもしれない。

42 青年Sと静母子は「権利」の意味を共有できたろうか。

43
44
45

1 3000 窮屈な「貧弱な思想家」
2 3500 日本近代知識人のエゴイズム
3 3550 「義務」と「権利」
4 3553 『権利のための闘争』

5
6 大東亜戦争中のスローガンで「権利は捨てても義務は捨てるな」というのがあったそうだ。

7
8 　ただもう一つ御注意までに申し上げておきたいのは、国家的道徳というものは個人的
9 道徳に比べると、ずっと段の低いもののように見える事です。

10 (夏目漱石『私の個人主義』)

11
12 「御注意」が必要になったのは、「一体国家というものが危うくなれば誰だって国家の安
13 否を考えないものは一人もいない」と、無根拠に言い切ってしまったからだ。

14
15 　この謬説と対立する私の説はこうである。人格そのものに挑戦する無礼な不法、権利を
16 無視し人格を侮蔑するようなしかたでの権利侵害に対して抵抗することは、義務である。
17 それは、まず、権利者の自分自身に対する義務である。——それは自己を倫理的存在とし
18 て保存せよという命令に従うことにほかならないから。それは、また、国家共同体に対す
19 る義務である、——それは法が実現されるために必要なのだから。

20
21 権利のための闘争は、権利者の自分自身に対する義務である。

22 　自己の生存を主張することは、生きとし生けるものの最高の法則である。この法則は、
23 あらゆる生きものの自己保存本能として示されている。しかし、人間にとっては、肉体的
24 な生存ばかりでなく、倫理的なるものとして生存することも重要であり、そのための条件
25 の一つが権利を主張することなのである。

26 (ルドルフ・フォン・イェーリング『権利のための闘争』)

27
28 「この謬説」は「国家の安否を考えないものはいない」といった類の意見だ。

29
30 　しかしわれわれ国家社会主義者はまだ先に進まなければならない。つまり、もし領土拡
31 張ができぬとすればある大民族が没落せねばならぬように思われる場合、領土に対する
32 権利は義務と変りうる。

33 (アドルフ・ヒトラー『わが闘争』「第14章 東方調整か東方政策か」)

34
35 私は、イェーリングとヒトラーを比べ、私の読者に選択を迫っているのではない。

36 「笑談」としてさえ「意義」のない「思想」は邪魔なのだ。

37
38 　そうです。笑ってください。あなたには笑う義務がおありだということも真実です。だ
39 って、美しい歯をお持ちだもの。

40 (モーリス・ルブラン+ J E T 『怪盗紳士アルセーヌ・ルパン八点鐘』)

41
42 みんなも笑ってる？

43
44 (第一部 終)

45